明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十年八月五日發行（毎月一回五日發行）

女學世界



第七巻
第十一號

博文館發行

三越呉服店洋服部 調製の洋服（其特色は如何）

▲三越調製洋服の特色は？
（一）其柄合の嶄新なると
（二）其召工合の宜しきと
（三）其代價の低廉なると
に在り。其理由はいかに？

▲御客樣の便宜を圖るに出づるは勿論！
（一）洋服地を英國より直接輸入すると
（二）倫敦より招聘の裁方の從事すると
（三）非常なる大々的勉強を以てすると
に由る。試に一着を御新調遊ばしませ！

最新式寫眞撮影

手札形四枚一組一圓●キャビネ形四枚一組二圓以上

普通○白金○プロマイド○白金タイプ○カーボン種々調製

夏季必携

舶來化粧品

旅行用具一式

香水、香油、石鹸、白粉、紙白粉、歯磨きを始め避暑御旅行に必要なる化粧箱、鞄、空氣枕、洗濯袋、毛布、帽子等種々取揃へ置申候間澤山御注文被下度本願上候

地方よりの御注文は小包郵便にて御送付可申上御注文案内書は御一報次第早速御進呈可申上候

東京日本橋

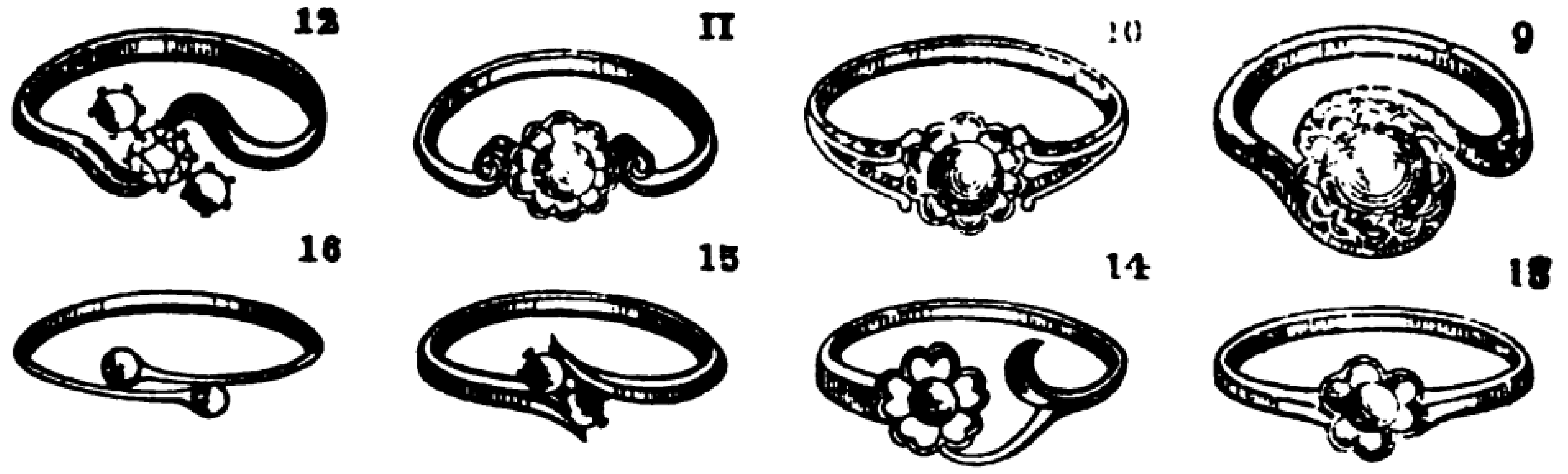
三越呉服店

振替貯金口座番號三〇〇番

女學世界

第七巻 第拾壹號

目次



東京勧業博覧會出品受賞

壹等賞牌　裝身具頭飾品

壹等賞牌　美術館出品女神彫像

貳等賞牌　同　獅子濱圖銀製小箱

三等賞牌　同　胡蝶舞圖銀製小箱

振替貯金口座　第九二九三番

東京市京橋區南傳馬町二丁目

大西白牡丹

特　電話本局三十番

眞珠入指輪

○第九號	眞珠一個入	特二百圓	甲百五十圓	乙一百圓
○第十號	眞珠一個入	特一百圓	甲五十圓	乙三十五圓
○第十一號	眞珠一個入	甲三十圓	乙二十五圓	丙二十圓
○第十二號	眞珠及エメラルド入	甲二十圓	乙十五圓	
○第十三號	眞珠一個入	甲十八圓	乙十五圓	丙十三圓
○第十四號	眞珠一個入	甲十五圓	乙十二圓	丙十圓
○第十五號	眞珠二個入	甲十二圓	乙十圓	丙八圓
○第十六號	眞珠二個入	甲十二圓	乙十圓	丙八圓

（いの一）

ヘヤロール



今回忝くも**高貴令鳳の御用命**を蒙りし**束髪前髪じん**

○一大注意　**ヘヤロール**は今や歐米に流行しつゝある束髪前髪じんなり、從來の毛製品は彼の忌むべき癩病患者又は肺病患者の遺髪の交りある憂ひありて衛生上恐るべきは勿論、常に欝陶しく頭部に痒みを起し果ては禿げる心配等ありて知らず〳〵一生の不幸を來す恐あり。

○本品の特長　**ヘヤロール**は細微なる金線にて製し軽きこと鳥羽の如く空氣の流通よければフケを生ぜず伸縮自在なれば大小の前髪になづみ　腦病又頭痛　の方には衛生上最有益の新輸入品です。

○類似の他品　**ヘヤロール**に僞し近頃針金のみにて製したる粗品あれど、本品は外部を優美なる絲網にて覆ひあれば毛を損じ又はスベリ出す憂ひなく最も上品の容姿を装ふべし。

○時季は來れり　今や酷暑の候、頭腦の清涼を欲し衛生を重ぜらるゝの御婦人方は一度本品を用ひて　幸　に滿足を　得玉　はらんことを　希　ふ。

●定價一個三十八錢（送料八錢）●説明書は往復ハガキにて申込あれ



輸入元　東京々橋區鎗屋町一　日加商店　振替貯金八六六九

特約店　東京日本橋區橘町四　大阪東區南久寶寺町　御園おしろい本舗　婦人小間物問屋　丸見屋商店　小栗小三郎



○季節向新柄取揃有之候○

袴乃親玉

卸部 (み)

東京日本橋長谷川町
美濃磯本店
（電話浪花二一八五九番）

本郷五丁目 美濃磯支店（電話下谷一四一五番）
淺草區諏訪町 美濃磯支店
日本橋區佐内町 美濃磯支店
深川區高橋際 美濃磯支店
神田區小川町 美濃磯支店
芝區新櫻田町 小田商店
牛込區神樂坂 伊澤商店
四谷傳馬町一丁目 伊澤支店

●圖書目錄
御入用の方 御申越次第直ちに呈送仕候
東京日本橋本町 博文館

◎衛生無害 御試驗濟 東京本町三 玉屋支店
衣服洗淨 玉川 一名シャボンイラズ
手もあれず、さゝくれもできません

高價なる手術又傳授料を貪る山師的に迷ふ勿れ

輕便自用
新案美顏器

夏季の化粧は是に限る 大流行の美容具
顏の美しくなる器械

本器は近來上流社會及花柳界に於て大流行せる最新式美顏具にして發賣以來各新聞紙及實驗者の賞贊を博せる事は爰に喋々を要せず使用法頗る簡易輕便にして婦女子兒童と雖も隨意に即席に應用し得て如何ほど色黑き醜き人にても忽ちに艶美白色驚くべき佳麗の美顏に變化す所謂烏を鷺に變ずとは本器の効能ならん論より證據一度試用せば奏効の奇絶瞬速なる實に驚くの外なし

器械 美顏コップ壹 美顏ロール壹組 壹圓貳拾錢 送料拾貳錢
附屬 化粧ボーター、ホワイ 美顏クリーム 美顏 五拾錢 代金引換廿八錢
本器には使用方法 美顏術秘傳書 無代添呈

製造專賣元 大阪東區農人橋壹丁目 錦花堂

女(いの三)


カメリヤ洗粉
カメリヤは色を白くし
艶をよくする最新最良の洗粉なり
カメリヤは優美なる香氣を有し一度之れを用ゆれば芳香永く身邊に薫りて自から心氣爽快ならしむ
殊に貴紳淑女の高等化粧料として大に社會に高評を博せらるゝ本那唯一の洗粉也
定價
大瓶 廿五錢
瓶入 十二錢
袋入 五錢
小袋 三錢
ライオン齒磨
發賣元
本舗
東京神田
小林富次郎

(いの刃)



女(ろの二)

女（ろの四）

梧桐



河崎蘭香筆

香水界の覇王

佛國製大高評

◎本品は上流社會に理想的香水として好評を博す



◎フランス交際社會は**ケーバ**香水の高尚なる香を愛す

小瓶二十五錢　大瓶一圓

東京日本橋區橘町貳丁目

化粧品輸出入商　竹間商店

電話浪花一六一四番

女(はの一)

女(はの二)

糸左近先生著

續素人藥物學

發行元 東京日本橋青物町三十 振貯口座九六六九六 敬文館

賣捌所 東京神田鍛冶町 朝香屋

◉總ふりがな附新式美本正價金六拾錢送料六錢◉

(目次大要)利尿劑▲魔睡鎭痙劑▲結核劑▲肺結核の七療法▲生殖器劑▲寄生物驅除劑▲變質劑▲雜劑▲癩病療法▲飲酒法(附錄)毛生藥の調合▲白髮染の藥▲毛を拔く藥▲白粉、石鹼の鑑定及製造法▲化粧水▲色を白くする藥▲日に燒けぬ藥▲齒磨粉の製法▲人工溫泉▲香袋の製法▲屠蘇の製法(此の他いろ〳〵)

◎本書中の癩病療法、肺結核の七療法、飲酒法等は萬人の讀まざるべからざるものなり

◎本書の附錄は何人を問はず必讀を要するものなり

正篇 三版

素人藥物學

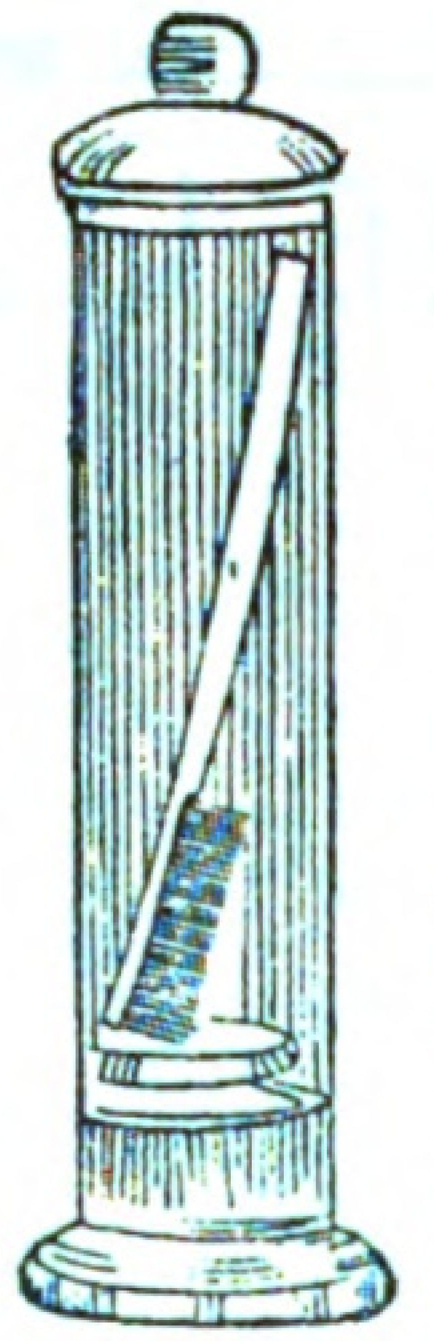
◉總ふりがな圖入▲正價六拾錢送料六錢

(目次大要)「總論」▲藥の由來▲藥の配合▲藥と年齡▲連服の注意▲天秤と分量▲調合法と器物「各論」▲健胃劑▲皮膚病藥▲强壯劑▲解熱劑▲防腐劑▲收斂劑▲下劑▲雜劑(其他)

◎本書卷末には字引を附し藥物專用の文字を註釋せり

專賣特許

齒楊枝消毒器



消毒器一個	金六拾錢
志村楊枝一本	金參拾錢
消毒藥一瓶	金參拾錢
小包用木箱	金六錢
送料	金拾錢

肺病患者は必ず用ひ賜へ、衞生家にも又必要のもの、美麗のガラス製ゆゑ化粧臺上の裝飾となる、尙ほ女學世界本號志村氏の談を參照せられよ

販賣所 東京日本橋吳服町 志村醫院內

東京京橋銀座 資生堂

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりしが所洋行中なりし醫學博士令夫人よりの奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀 河村愛子



女(はの三)


THE GEM
衛生家必携
懐中良藥
ゼム
ゼム一粒の馥郁なる香氣と愛すべき美味とは一度用で終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渴を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを治して神效あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價（七十五粒入十錢百六十粒入廿錢四百卅粒入五十錢
九百粒入一圓 容器入ゼム二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支 舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地
賣藥化粧品店にあり

女（はの四）

涼風



一條成美筆

女(にの一)

(二の二)

江見水蔭君著　織田東禹君畫　(近刊)

地底探檢記

全一冊菊判洋裝
口繪寫眞版四頁
挿畫十數個
正價金四十錢
郵稅金六錢

文壇の驍將たる著者は、他面に於て學術界の奴隷たるを辭せず。自ら大蠻勇を揮ひて、前人未知の地底探檢を行ひ、三千年前の太古遺跡に先史時代の住民が保留したる石器土器等を採集し、以て人類學の研究に好箇の參考物を提供せり。其暗黑界より取出したる發掘品の內には、人骨あり、鯨骨あり、海獸の牙あり、鹿の骨あり、美麗なる裝飾品あり、鋭利なる武器あり、驚くべき大土器あり、疑はしき有髯土偶あり。其遺物に就ては、數々坪井博士の高見を仰ぎ、學說大略定まれども、其人骨に至ては足立博士の研究に委ねて、未だ發表の期に達する能はず。本書は其地底大發掘の奇絕怪絕なる有樣を直寫したる一大雄篇にして、一方探檢實記として見るの他に、考古的旅行者の案內記として迎ふるに足りぬべし。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

常に清新の記事を滿載せるは本誌の大特色也

避暑地の友

婦人世界

銷夏の伴侶

八月 一日發行 毎月一回 二巻 九號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊分郵税共九十錢 十二冊一圓七十五錢

◎逆境より成功したる婦人の實歷談……

◎少女歌劇 あげ羽姫(いほへ子)

◎感心なる主婦(伊藤君子)

◎小兒下痢手當(加藤博士)

◎子供に多き鼻咽腔病……ドクトル佐藤敏夫

◎私の感心せる女學生(菱沼安子)

◎婦人日常生活法を讀む(鳩山春子 跡見花蹊)

○○見よ新工風の大文字○○

◎私は常に愉快に生活して居ります……嘉悅孝子

◎女は如何に男子の心を觀察すべきか……村井弦齋

◎我が娘を旅行さしたる實驗談……子爵夫人 加納鎰子

◎避暑地の生活に依りて得たる利益……井上光子

◎獨身婦人の摸範 跡見花蹊刀自面影

◎緜蟲病全治實驗(高峯雪子)

●蓮を詠じたる古來の名歌

◎弦齋夫人料理談

△番茶は如何に煎じ出すか……

△素麵は如何にゆでるか……

△白玉は如何に製するか……

△避暑地の料理は如何にするか

△口繪◎公爵三條公美氏令夫人◎學習院女學部卒業生◎名家の令孃◎新婚寫眞◎秋の七くさ(花蹊)◎夕涼み◎田園の月(彩色畫)▽

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社(郵便振替貯金口座參貳六番) 賣捌 全國書店

（にの四）

東京勸業博覽會

名譽銀牌受領

▲山葉オルガン（金拾八圓ヨリ金參百五拾圓迄）

壹等賞牌受領

▲山葉ピアノ（金參百參拾圓ヨリ金壹千參百圓迄）

壹等賞牌受領

▲鈴木ヴアイオリン（金貳圓ヨリ金百廿圓迄弓、箱其他附屬品各種）

山葉風琴、山葉洋琴、鈴木ヴアイオリン
西洋樂器、和洋音樂書大販賣所

東京市京橋區竹川町十三番地
合名會社 共益商社樂器店
電話新橋五二九、電信略號キヨ
振替貯金口座 千五百八十番



盛夏



福田麥僊筆

熊の浦



ダイヤモンド眞珠入指環



皇后陛下博覽會行啓の御砌ダイヤモンド眞珠入の裝身具御買上を蒙りしは深く弊店の光榮とするところなり

貴金屬製、寶石入指環及裝身具
貴金屬製、美術品各種
金銀製、花瓶、茶器
袋物及携帶品各種

東京勸業博覽會
一等賞牌（貴金屬、寶石入裝身具）
一等賞牌（美術携帶品）
其他二等賞牌以下七個受領

東京市日本橋區若松町

貴金屬彫刻品
婦人用裝飾品
寶石美術袋物
商 嘉 丸嘉

特 電話浪花七六八番

定價表御入用の節は郵劵貳錢相添へ御申越次第進呈

（ほの一）

水彩畫界の新光明

●丸山晩霞先生著述

水彩畫法

女性と趣味

▲新刊發賣▼

菊版總クロース製
繼合金銀箔刷表裝
頗裝麗本文四百頁
口畫彩色石版寫眞
版數十頁……

…彩色畫八葉…本文項目…百四十五項細別無數定價金貳圓郵稅八錢

畫家の見たる自然界は如何に活きた生命と、限りなき趣味に富めるか。眞に自然の美觀と秘密とを闡明する者は只畫家獨りこれを能くす。本書は實に畫家の見たる宇宙の森羅萬象なり而かも本書は現時水彩畫の大家として錚々の名を擅にする丸山晩霞先生が狂熱的感興と半生の心血とを傾注して執筆せられたる曠世の大著にして、或は先生が佛國留學中の與修により、多年の研究工夫により得たる總ての材料と知識とを以て、趣味を喑傳し水彩畫の描法を最も懇篤に說述せる無類の寶典なり。殊に女性と其趣味に就て燃犀なる觀察を試み、女性の爲めに趣味を說く處最も精到を極めたり、加ふるに美麗なる無數の挿繪を以てしたれば錦上添花の觀あり　されば斯道に志す人は勿論、家庭の讀物として一本を座右に備へられん事を薦む

發行所 東京小石川 日本葉書會　發賣元 東京本町 博文館

（ほの二）

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を(登)强壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、）苦味劑の如き一時おさゑるムチスカシ的姑息式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーテル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全に消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 美容料

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を悅ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は普製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

血塊流下

通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢著金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四四六番）

女（ほの三）

皇后陛下
東宮妃殿下
御料（ごれう）

御料
御園白粉（みそのおしろい）
無鉛

長谷部仲彦氏發明
完全無鉛白粉（かんぜんむえんおしろい）

ねり製 御園白粉　壜入金廿錢。金三十五錢。金七十五錢　特製金五十錢。金一圓。金三圓　樂屋用固煉製金五十錢

水製 御園白粉　壜入金二十錢

こな製 御園白粉　紙包金十錢　壜入金五十錢

洋風化粧クレーム 御園の蕾（つぼみ）　特製金二十錢。金五十錢　濃化粧專用錫入金十錢

高等化粧水 御園とき水（みづ）　壜入金十五錢　大壜金五十錢

御顔ふきこな香粉 御園なでしこ　紙包金十錢

濃厚化粧水 御園四季の花（しきのはな）　壜入金廿錢　大壜金五十錢

高等香水油 御園香油（かうゆ）　壜入金五十錢

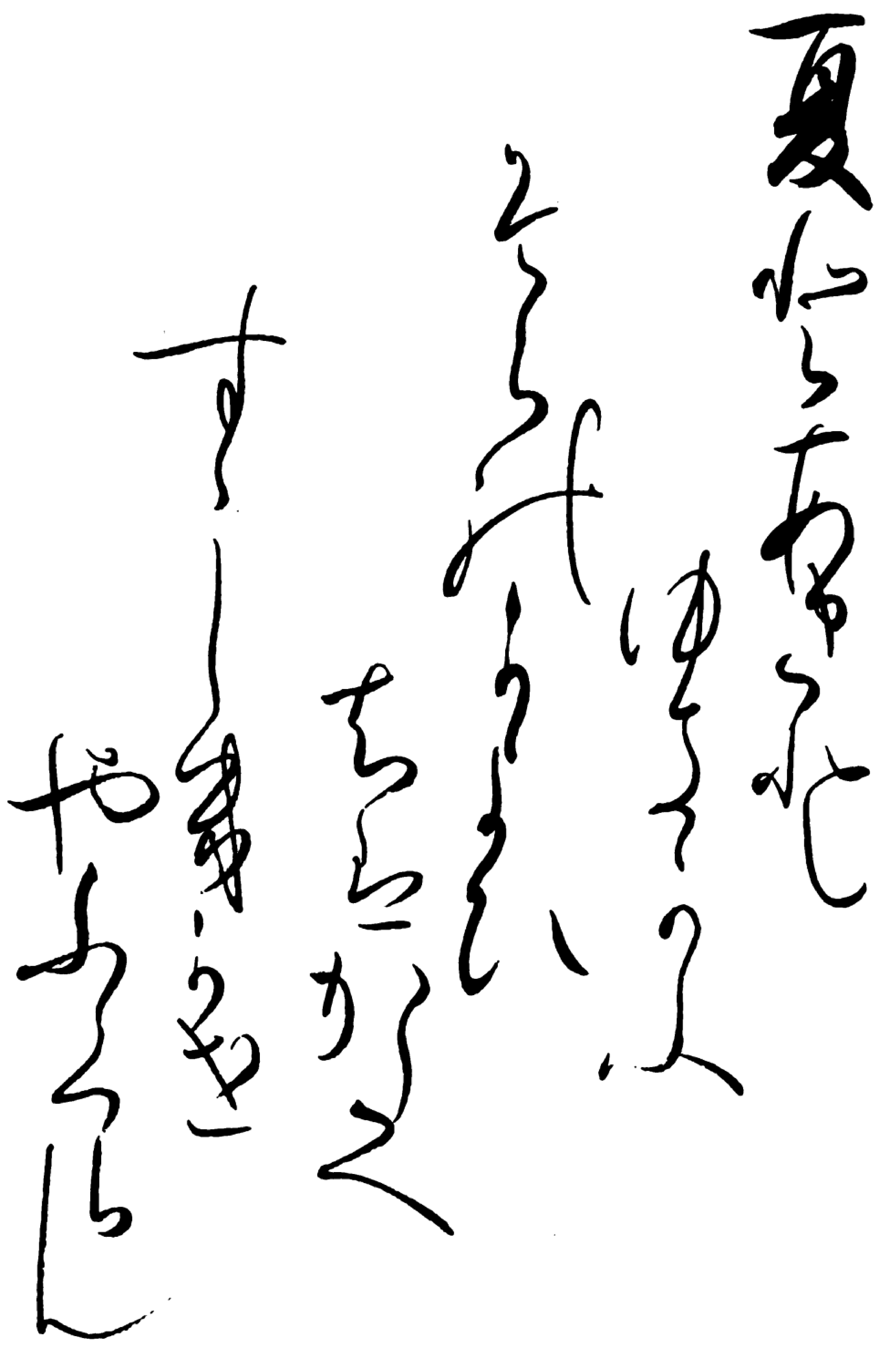
高等香水 御園香水（かうすい）　壜入金三圓　別器入金五圓

高等はみがき 御園歯磨（はみがき）　紙包金廿錢　硝子器入金五十錢

製造元　東京芝　胡蝶園

發賣元　東京日本橋區本町四丁目　丸見屋　電話浪花長四四八

（ほの四）



小野鵞堂筆

をちこちに てらさる
こゝろつから
まくら
よものあらしの
月こそはれさに

於東京勸業博覽會

一等賞牌受領

各女學校御用
美術造花材料
シホン
附屬品並ニ
造花器械類一式

東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話（長）浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番

（切取線）

●營業目錄御入用なれば此切取線を添へ御申越被下度候（女學世界第十一號）●

縣　　郡　　町村

女（への一）

大阪高等醫學校長兼病院長 醫學博士佐多愛彦序

元大阪高等醫學校小兒科醫長心得 長濱宗佶著

本書益好評にして既に三版を發行す

増訂三版

小兒養育の心得

全壹册

正價金八拾錢　郵税金八錢郵券代用一割增

小兒の健康は家庭の最大幸福なり本書は著者が多年の經驗と研究により衛生的育兒法の一般を懇切叮嚀に説明したるものなれば何れの家庭にも缺くべからざる良書なり

本書は暑中の進物として最も適當なるものなり

本書は結婚の祝物として最も適當なるものなり

本書は出產の祝物として最も適當なるものなり

發賣所　東京日本橋區通三丁目　丸善株式會社

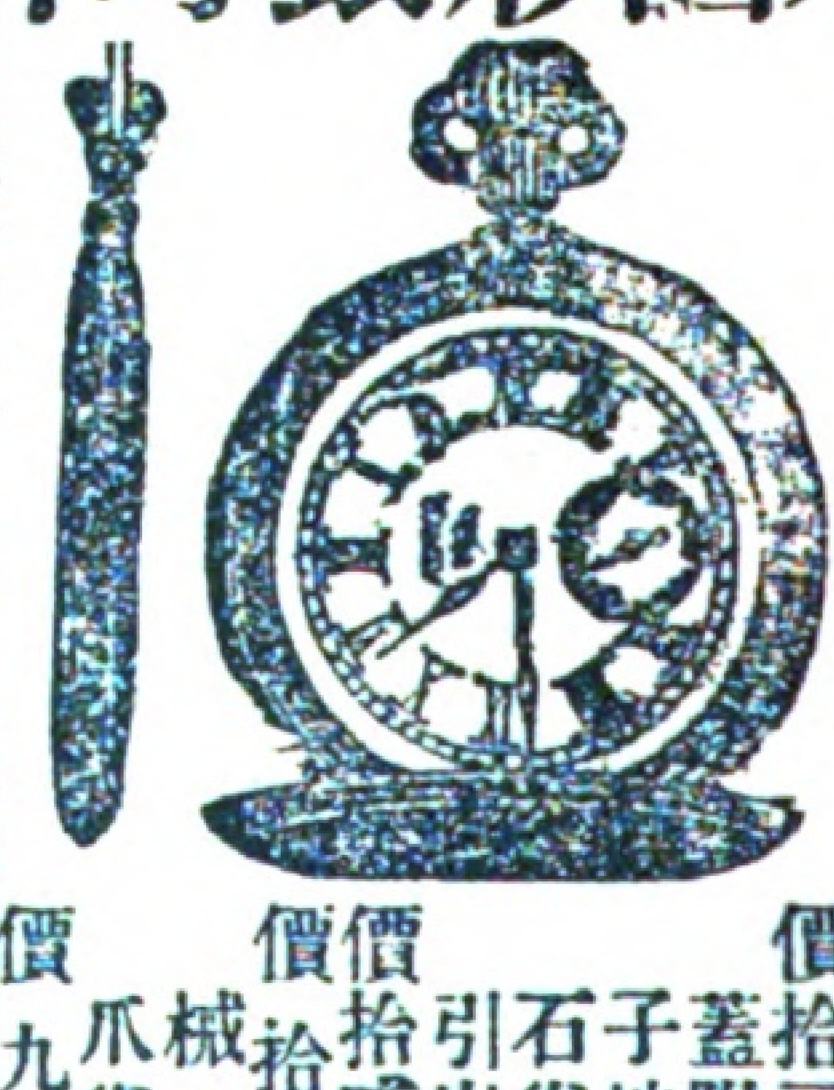
全　大阪東區博勞町四丁目　丸善株式會社支社

●全國有名の書肆に販賣す

優美高尚極薄手形

米國形銀時計

本品は小店特約東洋一手販賣の時計にして價は頗る廉價なるも機械の精確なると形狀の優美高尚にして而も側の銀質等總て米國ウオールサム製に遜色なき良品なり



價拾三圓半　銀側兩蓋中蓋附16 17 18形機械金梨子地寶石入二枚車別爪石卷上向アンクル龍頭引出針廻し

價拾貳圓半　右同品乙號

價拾圓半　銀側兩蓋機械ニッケル惣寶石入別爪卷上向アンクル

價九圓半　右同品乙號鐵針

極薄手形　太文字臺、淸、韓參拾錢

注意　◎保險三十ヶ年　◎送料内地拾錢　◎代金引替は卅錢前金　○振替爲替口座百七十三番

注意　大景品附此廣告を切拔き御注文書同封の御方には鍍磁石、一切の附屬を添へ景品として進呈す

東京銀座壹　伊勢伊時計店

男女　ちゞれ　くせ毛　赤毛は何程の難毛も直に根治黑變し良き艶の出る奇術を郵券封入申込の方に無料教授習て美髮にして差上げます

東京本郷區丸山福山町　岩阪澄子

女(への三)


於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN
ヒゲタ印醤油
宮内省御用達
千葉縣
田中玄蕃醸造
銚子港


造花及半製品
造
袋具材料卸小賣
造花裝飾用達
花
東京市
九段坂
吉住商店
營業目錄は御申越次第御送付可仕候

（その四）

朝晴



桂の影

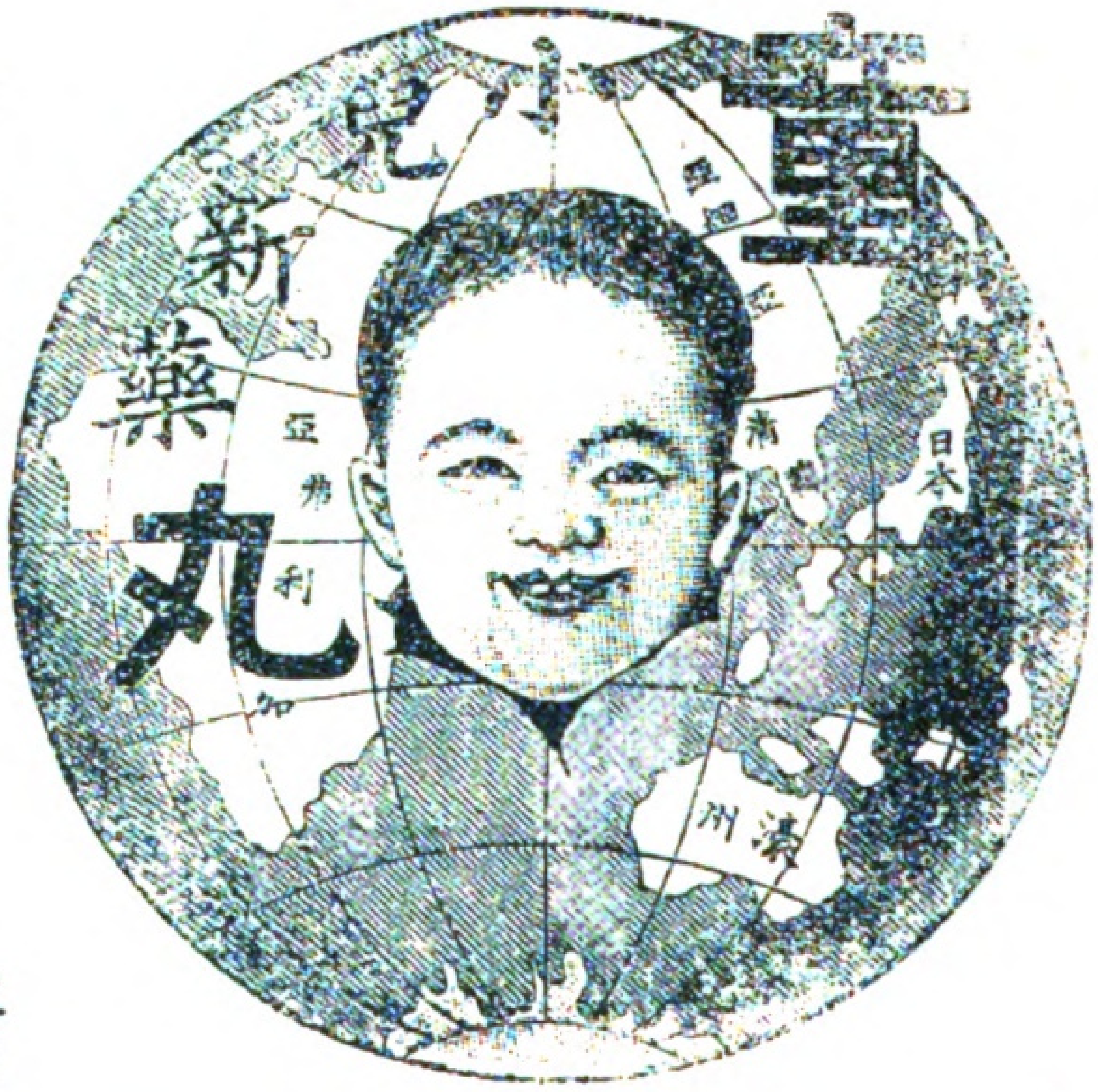


東京博覧會一等賞

山崎朝雲氏作

小兒新藥童丸生る

小兒科専門醫學博士
瀬川昌耆先生方劑



●童丸は健童強兒の源泉なり
●童丸は二十世紀の育兒法に適す
●童丸は幼兒の生命也二の慈母也

効能

●小兒失氣●吐乳病●五疳驚風
●腸加答兒●小兒食欲不進又は飲過
●小兒吐氣●腸痛中毒
●小兒虫氣一切又は熱さましによし

定價

拾粒入	金五錢	八拾粒入	金參拾錢
廿二粒入	金拾錢	百四十粒入	金五拾錢
五拾粒入	金二拾錢	三百粒入	金壹圓

●童丸は有名藥店にあり若し無くば發賣元へ御注文あれ

發賣元

東京市日本橋區通四丁目七
振替貯金口座第一六八〇番
津村順天堂

大阪市堺筋大寶寺町南入
振替貯金口座第三一六二番
津村順天堂

(その一)

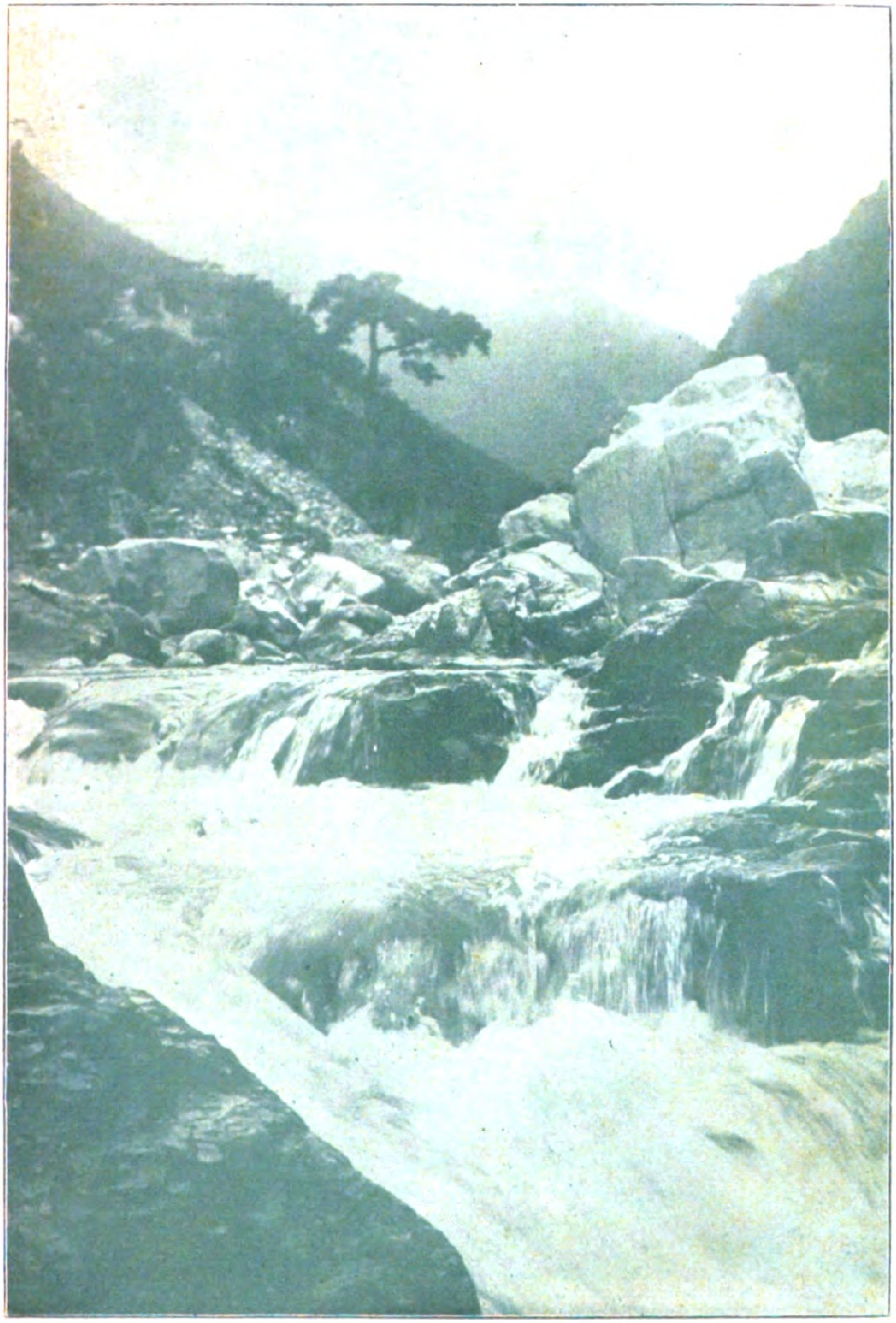
女（その三）

夏の漁村



長崎大村の漁村

白　　瀬



大阪芳崎芳翠氏寄贈

幼年畫報　第二巻第十一號　定期増刊

八月廿日發行　全一册　定價十錢　郵税一錢

巖谷小波作　桐谷洗鱗畫



(一太郎)十五夜のお月様、鏡のやうなお月様、早く出ていらつしやい、風もなけりや雲もない、お團子あげませう、お芋もめし上れ、おともの兎、大勢つれて十五夜のお月様、早く出ていらつしやい。

(つき)太郎さんや太郎さんや　今度は此方へ來ておくれ、月の都はよい所、兎も居れば餅もある、銀の臼。金の杵、夫れもおみやに上げませう、はあやくいらつしやい、迎ひの兎、今行きますよ。

附　きりぐす……兎の出世。

發行元　東京日本橋本町　博文館

(ちの二)

女(ちの三)

此券御添
御注文（要券）の方に一割引

本品ハ宮内省御買上ノ光榮ヲ辱ス

於東京勸業博覽會名譽褒賞受領

美顔ト日ノ出クリーム
ノ毛髪ト日ノ出クリーム煉香油

大西白牡丹を初め其他信用ある化粧品店には必ず日の出クリームを販賣され又内外の高尚なる令孃紳士は必ず本品を愛用せらる如何に本品が善良にして功能の顯著なる證明するに足る本品は美顔料と煉香油の二種あり

二十世紀美顔化粧
ケーバ洗紛

本品ハ最モ皮膚ノ衛生ニ適スル、ミルク、エッグ其他ガ－ドーソープ等特殊ノ原料チ主要トシ精製シタル品ニシテにきび、そばかす、しもやけ等チ全治シ色チ白ク皮膚チ艶麗ナラシムル特長チ有スル之レ藥學博士バント氏ノ證明スル所ナリ

瓶入 廿五錢
袋 三錢

夏季衛生的唯一品
香水香油
日ノ出ブリランチン
定價
大壹圓 小卅錢

美顔料
日ノ出クリーム
定價
貳圓 壹圓 五十錢 廿五錢 十五錢

煉香油
日ノ出クリーム
水香油
日ノ出オイル
付レモ
一圓 五十錢 廿五錢 十五錢

代理店
名古屋末廣町 村瀬谷三郎
大阪東區博勞町 小林支店

發賣元
東京日本橋區村松町 合資會社 日の出商會
電話浪花三八二一番
振替貯金七〇五七番

女（ちの四）

名流小照



三井守之助氏夫人



三井源右衛門氏夫人五十子



三井得右衛門氏夫人銕子

瑞典式體操（女子高等師範學校の體操）

第二　首と胸の運動



これは首の位置を正しく脊柱の屈曲を矯め胸隔を廣め肺の働を強くする目的の體操なり

第三　上肢の運動



これは第二の運動を今一層强めたるものなり

大懸賞募集

此の**才媛文集**發行以來**女流文學の鼓吹**となり**模範**となり女學生は勿論苟も志ある人は男女を論せず各**一本を手**にせざるなき**盛況**を來し弊社同人の**光榮**之より大なるはなし今や其の第二編**第一集**の發行に際し**大**に面目を**一新し大懸賞**原稿を募集し**大々的發展**を期せんとす希くは續々御投稿あらんことを

原稿 來九月卅日締切

賞與 天（各正金參圓） 地（各書籍券貳圓） 人（各書籍券一圓） 各部一名

秀逸（女子文章作法、文集 西洋傑婦傳の中壹册） 各部十名

來十一月三日發刊

明治才媛文集

第二編 第一集

- 論説、叙事文（馬塲孤蝶君選）
- 抒情文、消息文（鹽井雨江君選）
- 小説、日記（島崎藤村君選）
- 御伽説、短文（中村勁林君選）
- 短歌、今樣（尾上柴舟君選）
- 新躰詩（蒲原有明君選）

各章必其種類別を明記し必明治才媛文集原稿と表記すべし日記は必日記躰たるべし今回は專ら旅行又は歸省の途上家庭又は歸省中其地方にて得たる記事を主とす

女（りの一）

世界唯一 痳病消渇の根治新藥

(りんめつ)
痳滅

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力顯ろ峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して痳病消渇の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず醫て根底根治するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効より有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵劵代用貳割增しの事

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新舘藥房

色白特効 ペーアス石鹼

此石鹼は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹼特有の神効なり且つ此石鹼は香氣馥る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

輸入一手專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新舘藥房

世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまづ いぼは拾日 目に必らず美麗に除去

すること保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて美質を完ふせよ來館者へ天然の美質は山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし、實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各壹劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵劵代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

梅毒根治新劑

本劑(※名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の ばい毒 根治特効 新藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひろかさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて誓って根治することを確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ 藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢 特別製分參圓六拾錢着金次第送藥す郵便切手代用貳割增しの事

以上貳藥 專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新舘藥房

眞正極秘 粋珍書案内

望の人郵劵四錢送れ直に送呈すべし披閲忽ち愉絕快絕眞に粋士必讀の珍書案内

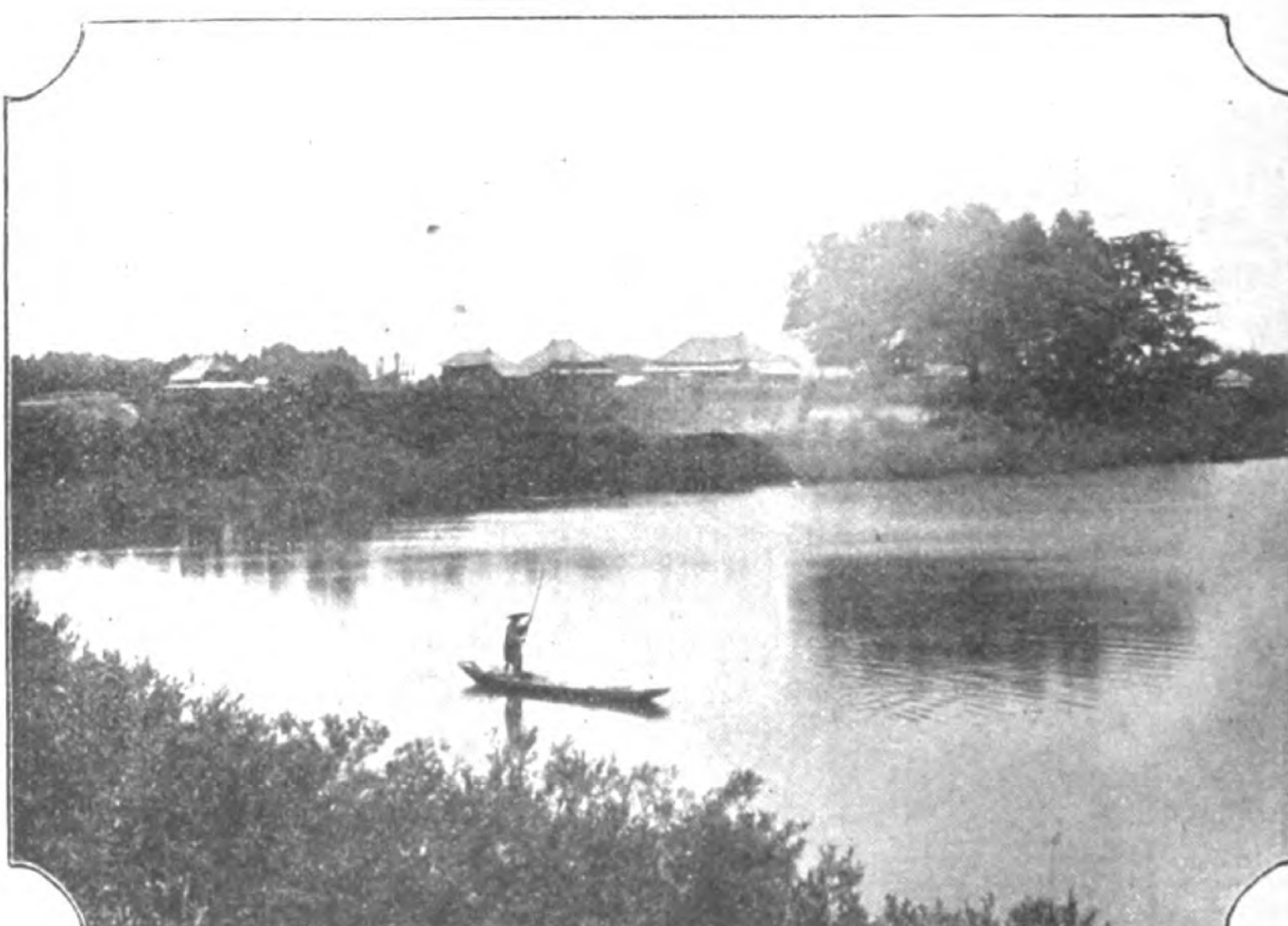
申込所 東京市下谷區西黑門町廿番地 東雲堂書店

女(りの三)

夏の暮色



韓國鎮南浦港頭の暮色



下野赤麻沼湖畔

湖畔

女（その一）

第參號八月一日發行

(その二)

● 毎月一回一日發行

洋装菊判紙數約二百頁
正價拾錢　郵稅壹錢五厘

鐵道滊船 旅行案內

我が戰勝帝國民は、今や松翠柳緑の樂天地に、探勝遊覧の日もまた足らざらんとす。本誌は此等旅客が陸海交通の機關を遺憾なく利用せんが爲に、今後毎月發刊せらる。其の體裁には最も新機軸を出して、携帶に便にし、且つ必要なる鐵道又は航路の發着時間は、一見忽ち見出し得べく、また其等の鐵道の沿道案內は、最新最正の資料に因て最も確實明晰に之を編纂す。統計家の伊東祐穀氏は時間表の編製に從ひ、旅行家の名家坪谷水哉、其他の諸氏は、案內記に筆を執り、皆な多年實地の經驗に依て成る直ちに是れ總ての旅客が時間を誤らず、經費を省き、最も迅速に目的を達する爲に唯一無二の案內記なり。

從來同種類の雜誌あり冀くは **博文館發行** の旅行案內に注意を乞ふ。



發兌元　東京本町　博文館



女（その三）

男女兩用毛髮用煉香油

ビユーテーオイル



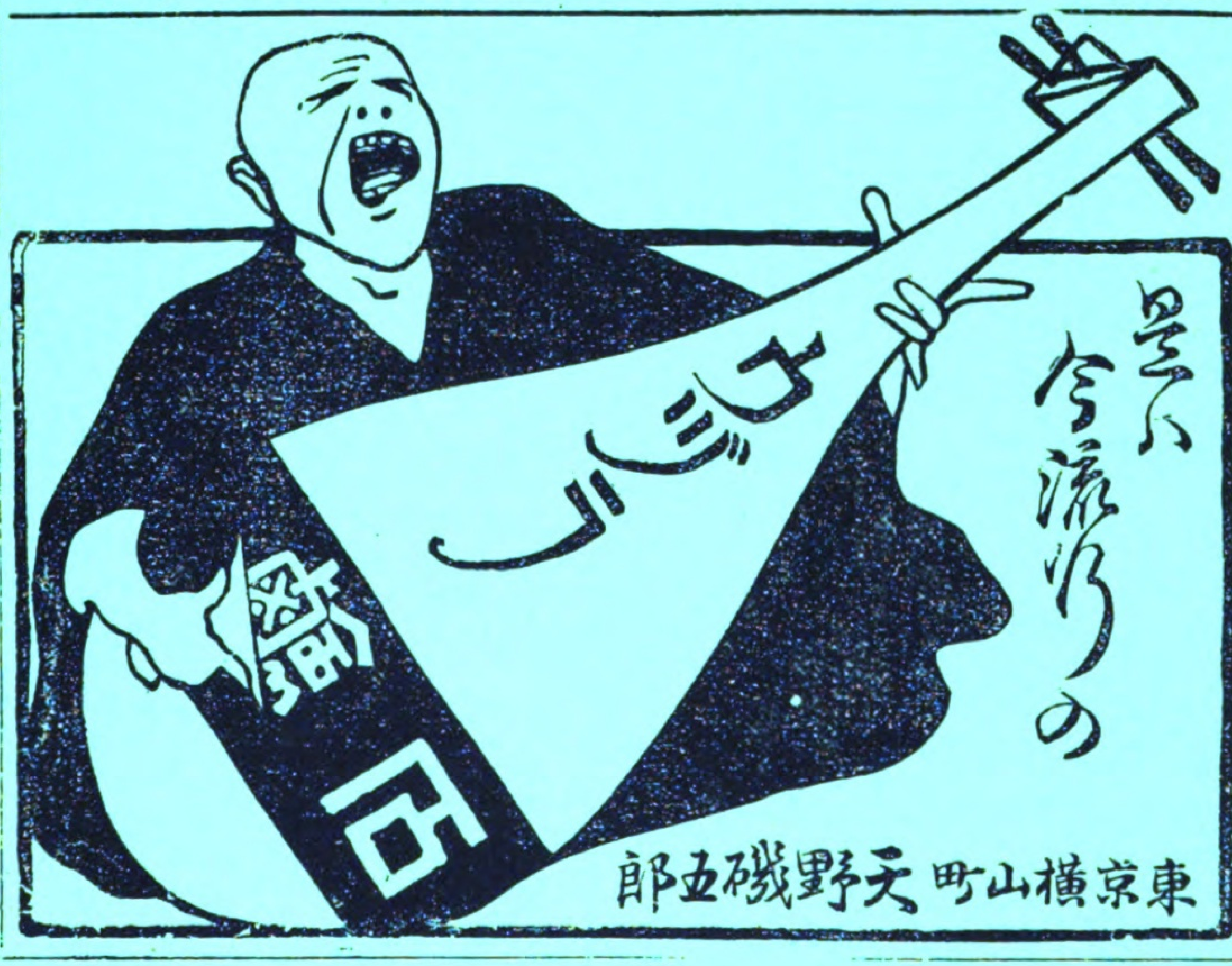
大瓶四十五錢
送料十　錢

近頃化粧と云ふ事が進歩したのにも拘はらず毛髮油は更に改良が出來ないので舶來の油を用ゆる事が盛んになつたが舶來の香油は西洋人に適當する樣に出來て居るので永く使ふ中には毛が赤くなるとか又は折れる樣になる事が有るので種々研究して日本人の毛髮に適當なる椿油に含める毛髮の發育と光澤を助くる主成分を採り之れに高尚なる芳香と油の通油性を去るべき藥品とを配合して日本人男女兩用の練香油を製出し之れをビユーテーオイルと名付けて發賣せり

井筒油本舗　井筒屋香油店
東京日本橋區蠣殼町水天宮前

發賣元　象印齒磨本舗　安藤井筒堂

見本御入用の方は女學世界愛讀者に限り郵券四十五錢を御送附になれば特に送料を要せずして一個御送り可申候



(ちの四)

佐々木伯爵家の結婚披露會




内務省御検査済完全無鉛
バイオレツト匂入
新花王
ねりおしろい
東京横山町二丁目
脇田製
定價（一個）参拾銭　同（一個）貳拾銭


外用
玉霜散
藥價
五貼分十銭
十一貼廿銭
十七貼卅銭
廿五貼五十銭
六十二貼一圓
全國到る處の藥店にあり
吾人の忌むべき嫌ふべき交際社會の障害病たる「わきが」は玉霜散にて速に全治すべし
わきが
いんきん
たむし
大奇薬
痛い、かゆい、と口慣に少しも忘るゝ間なき「いんきん」田虫も又此玉霜散にて治療す其効の瞬速なる雪に熱湯を注ぐよりも尚早し
發賣
東京神田鍛冶町大木合名會社
東京兩國米澤町大木口哲本店
若し無きときは發賣元へ

女（その一）

（その二）

少年世界 第拾參卷第拾壹號 定期增刊



八月十五日發行
全一册洋裝菊判
定價金十錢
郵税一錢五厘

時はこれ九夏三伏の炎暑に際し、諸君は休暇三旬の暘を得たり、以て海に浴すべく又山に登るも快なり、此時本誌は休暇の人の伴侶たらしめんが爲に夏の樂み一篇を出せり、これ表紙口繪より本文に至る、悉く皆消暑の好材料、以て讀むべく以て試すべし、詳くは左記目次の一斑に依つて內容の眞價を知らるべし。

◎表紙（海水浴）——岡野榮筆——◎避暑十二景——寫眞版
◎口繪（登山）——上原古年筆——◎休暇新聞——同上
◎お伽口演 龍の卵——巖谷小波作 武内桂舟畫
◎休暇中の仕事◎新式活動寫眞◎休暇日記◎登山記◎茶話會◎釣魚の秘訣◎演奏會◎少年用ボート製法◎天幕旅行◎水棲の昆蟲◎碁石の魔術◎野外撮映◎西洋影げ畫◎父母の家、以下數十項

本町 博文館

侯爵夫人 鍋島榮子題詠
學習院女子部長 下田歌子題詠
高等女子實修學校長 山脇房子序文
巖谷小波 沼田笠峰
竹貫直人 木村小舟 合編



全一冊 三六版特製
金模様タロース表紙
紙數約六百頁
口繪十枚挿畫四百餘個

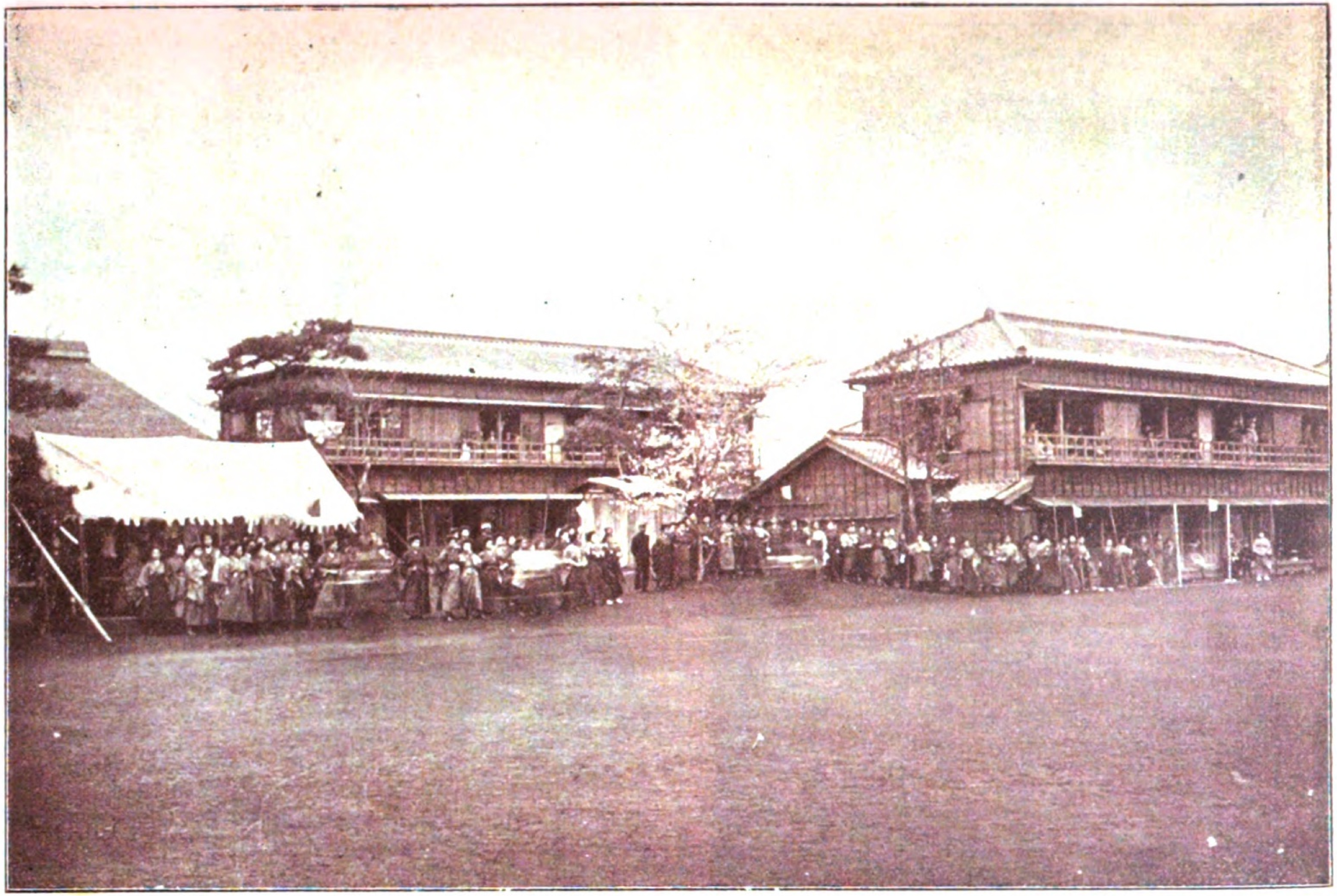
近刊

少女諸君、諸君がお待ち兼の明治少女節用は今度いよ〳〵美装して誕生致しました、御覽なさい先づ口畫には、東宮妃殿下、各内親王殿下の御尊影及び、本邦女子敎育大家の肖像を掲げ、極彩色石版には、日本國旗章、外國旗章、女子の勳章、明治時代頭髪の種類、日本女子服裝變遷圖、女子の用具等、日常必須の材を撰み、又本文には少女訓、日本歷史、外國歷史、日本地理、外國地理、動植鑛物、物理化學、天文地文、算術英語、音樂國文、茶の湯挿花、裁縫編物、衛生料理、刺繡、禮法、體操遊戲、農業等苟くも日本女子の心得ふべき學科は一も洩さず、加ふるに巻頭には少女立志談、少女お伽噺等を掲げて、一層其の趣味を深からしめ、別科には考物、笑話、福引、紋形、手毬歌、吉凶占ひ、秘傳、採集法、小鳥、金魚の飼養、少女年中行事等約三十餘題趣味豐富なるものを集め、記述面白く筆法平易、挿畫美に、印刷製本又善美を盡し、少女諸君の無二の玉手函としました、諸君は宜しく一日も速かに此書を手にして、一は學業の枝折とし、一は娛樂の伴侶とし給はんことを希望致します。

東京 博文館 本町

（ろの三）

女子大學の新寮舍



名家の令孃



子爵池田仲誠氏令孃民子



伊集院兼知氏令孃



郵船會社支配人春田源之丞氏令孃



福島濱藏氏令孃

女(なの一)

新刊

土方伯爵序

醫師 黑澤源七君篇

育兒鑑

親と教育者の爲

菊判美本 定價金六拾錢 郵稅金八錢

萬事に緻密なる日本人の獨り育兒にのみ放任なるは如何とは泰西人士の常に怪で止まざる所是實に國民體力の消長に關する一大問題にして此問題を說明して通俗平易然かも學術的なるは本書の特色なり家庭の師友として又家庭兒童衞生家敎育家の伴侶として座右に缺くべからざる必讀の書なり

新刊

雄島濱太郎著

短篇小說集

四六判美本 定價金五拾五錢 郵稅金六錢

本集收むる所は「夏やすみ」「心の花」「聯隊副官」「夜見世」等の著者が最も心血を注ぎたる得意の作物のみにして淸新掬すべきもの十篇なり附錄に「月の歌」「つくゞくほうし」の詩篇あり皆痛快を極め讀者をして盛夏涼を催うし感興切にして卷を措く能はざらしむ

東京市本鄉區弓町 **昭文堂** 振替貯金口座第七六七四番

女(その二)

毎卷醫學專門大家講述

家庭衛生講話

毎卷洋裝菊判美本＝＝紙數各約百六十頁
口繪寫眞版數多挿入

醫學博士 三輪德寛先生述

（第一編）

一般救急法

正價參拾五錢 郵税金六錢

此書は三輪博士が素人にわかり易く親切丁寧に講述せられたるものであつて書中には家庭にて身體に急な變常の起つた場合に醫師の來るのを待つ暇なく臨機に處置すべき方法が一切網羅して載せてある假令へば急に卒倒した場合創を受けた場合痛の起つた場合毒な物を食べた場合水に溺れた場合火傷をした場合毒虫に螫された場合などにどう云ふ處置をするがよいかと云ふことを述べてあるのであるから一般の家庭幷に殊に旅行家工場の事務員學校敎師警官航海者消防夫などに甚必要な心得である、毎戸一本を備へて不時の急に應ずる用意とせられんことを希望するのである。

醫學博士 森林太郎先生述

（第二編）

衛生學大意

正價參拾五錢 郵税六錢 既刊發行

緒論＝衛生學の意義○衛生學の沿革
（一）土地の事＝地中の空氣○地中の水○外三項
（二）下水の事＝眞の下水○下水の排泄場所
（三）埋葬の事＝風葬○水葬○埋葬○屍骸の木乃伊化○外九項
（四）上水＝水道○水の消費量○水の善惡○外五項
（五）都會の事＝建築物と人口と○東京の建築物と人口と○外六項
（六）家屋の事＝燈火○窓○燈火の變遷○外十八項
（七）空氣の事＝空氣の成分○窒素○酸素○酸化○外六項
（八）氣象の事＝地球の溫○地上の溫の差○外十八項
（九）衣服の事＝溫の調節○體溫の放散○衣服の效用○外九項
（十）營養の事＝所謂滋養品○食の作用○食素の區別○外廿五項

（續刊）第三編

藥物の大要

醫學博士 林春雄先生著

女（その三）

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館



女學世界

第七卷第拾壹號

八月五日發行

△双葉

澤村胡夷

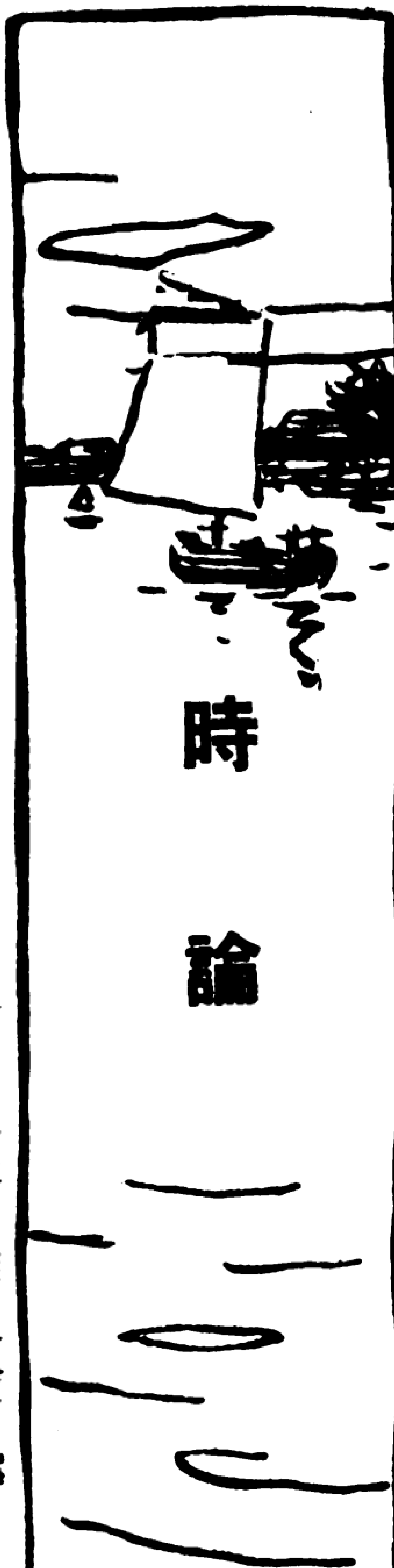
聳てる青葉銀杏の物蔭に、双葉、芽生ゆ。耀かに漏
る光浴びて濕地の水氣吸げつゝ。

落葉積む森の端に幼樹こそ芽生え出でけれ。 高空の
光に向ひ、柔かき翅を廣げて——

闢けたり。こゝに樹の生は風に醉ひ、雨に霎れ滅の
衣、身にぞ纏ひて樂しげに樹立に伍しつ。

わが位、土に限られ、中空に双葉、延びて時を踏み、
育つ太幹、地に、かくて實在定めけれ。

双の葉を莖に委ねて眠より醒めし森蔭さあれ、また夢
に倚れて闢けたり。こゝに樹の生は。



結婚に就ての考慮

明治女學校學監　福迫龜太郎

結婚に關しては色々問題が起つて來るが、就中最も愼重に考慮すべきものは女子の獨立問題であらう。女子の獨立と云ふ事に就ては今日は二樣の意義を有つてゐる。其の一は後日良人に死別れた時に女が獨りで生活する事の能るやうに豫め何か仕事を覺えて置くと云ふ事と、今一つは初めより仕事を求めて女子が獨身生活を爲やうと云ふ事である。で先づ第一のものに就て言へば、餘程資產を有する者で無い限りは良人が死ぬと同時に一家は忽ち糊口に窮する譯だから、其の用心として女子が何か仕事を覺えて置くと云ふ事は強ち惡い事ゝは言はないが、又一方から考へると、女子に其の決心があるならば良人の死んだ後に於て自分と尙ほ其他に子供の一人や二人を養ふ位の事は左程困難しい事でもあるまい、恁う云ふ事の爲に女子が特更に自活の道を講じて置くと云ふ事は餘りに早計の嫌があるのみならず、或は之れが爲に却て美しい女子の特質を毀損しはしないかと云ふ恐れがある。――が此點は結婚問題とはやゝ緣が遠いから、今之を詳說する事を避けて、玆には第二の意義に於ける獨立即ち女子の獨身と云ふ事に就て卑見を述べ、次で結婚に關する他の諸問題に說き及ぼさうと思ふ。

△排婚の風潮

近來若き婦人特に女學生などの間に於ては、獨身で一生を送らうと云ふ思想が餘程高まつて來てるので人が早くお嫁に行けと勸めれば『お嫁になんかにや行つて遣らない』など〻殆んど眼中男子無しと云ふ見幕でゐる者が往々あるが、これは實に遺憾な次第である。若い中こそは其樣なことを言つても居られやうが、何時迄も其れで通されるものではない。そして女子には結婚の時機といふものが大切で、愚圖々々して廿四五歳を過ぎて了ふと、もはや結婚の機を逸して、今度は嫁に行きたくても何處にも貰つて與れる者が無いことになる。其の結果は如何かと言ふと、即ち例の煩悶に終るので、其の一生は迚も圓滿であらう筈が無い。勿論多數の婦人の中には或る特別な事情の爲に終生獨身の決心を固めて其れで滿足してゐる人があるかも知れぬが、其れは極々例外の話であるから、女子の獨身と云ふことは餘程愼重に考へなければならぬと思ふ。

△女子は女子なり

今日女子の獨立とか獨身とかと云ふことの中には、女子が男子と競爭する意味を含んでゐるが、之れが抑々誤りである。男子も女子も共に同じく人間であるとは言ひ乍ら、女子は男子の末製品と云ふ譯でも無いから到底男は男で女は女で無ければならない。即ち男は男として女は女として夫れで互に完全なものであるので女子が男子の眞似が能ぬからとて、恥辱でも無ければ、又夫れが能るからとて譽む可き事でも無い。否寧ろ能るのは悲しいことであるかも知れぬ。で我輩は常に言つてゐる、婦人は男子とは全然異つたもので、恰度柔軟い革のやうに伸びたり縮んだりして彈力性に富んでゐるところに婦人の價値があるのだと。即ち婦人の價値は彼の盤石の下から生える若芽のやうなところにあるので、婦人の强味は其の弱いところにある。弱いけれ共强いのである。此の道理が解かるならば何も男子と競爭すべき譯は無からうと思ふ。世には男女同權と

か何とか言つて頻りと女子の勢力範圍を擴むるとに力めてゐる者もあるが、右のやうな立場からして見ると其れが果して女子を尊敬することか如何かはまづ疑問と言はなければならぬ。

△自活は容易なり

世の父兄達や女學生等が女子の職業と云ふことに就て間違つた考を懐いてゐることも亦獨身思想を鼓吹したる大原因となつてゐる。即ち世の父兄にしろ學生にしろ女子が技藝なり學術なりを修めて學校の教師となり或は其他の職業に就いて自活して行く事を以て女子が主婦となつて一家を濟めて行く事よりも寧ろ困難で從つて又名譽なこ　ゝ考へてゐるかも知れぬが之れは大なる誤解であらう。繪畫や英語や國語を修めて學校の教師になる事などは、高等女學校を卒業して四五年も勉強したら何人にも出來得ることで、それで獨りで暮して行くのは誠に造作の無いことだ。所が一家を濟めて行くと云ふことは却々其樣は參らない。大きな家を引受けて之を支配して行くことは一方ならぬ苦勞である。或は貧しき家を興すとか乃至は傾きかけた家庭を挽回すると云ふことも亦却々の骨折である。特に色々感情の入り組んだ家庭を引受け其の間に立つて能く其の調和を計つて行くには非凡な技量が無ければならぬ其の困難なることは到底之を繪畫や英語を修めて學校の教師になるなどゝは較べられたもので無い。去れば女子として果して孰れの途を撰ぶが眞の名譽であるか、敢て明言するに及ぶまい。

△自由結婚の可否

以上女子の獨立と云ふ事に就て所見を述べたが、次に結婚の方法に就て少しく所見を述べて見やう。彼の自由結婚である。自由結婚と云ふことは動もすると誤解を招くが、其の眞の意味は嫁になる者と婿になる者とが、結婚前に互に相愛し、互に心を知り合ひ、そして父母の認諾を受けて結婚をすると云ふとであらう。之れは從來餘り無かつた例で、彼の戀女房と云ふのが

略々之れに當つてゐやう。所で愈う云ふ結婚法が果して好いか如何かと云ふとになると、或る一派の人々は彼の自由戀愛説に基いて殆んど理想的の結婚法として之を主張してゐる。我輩なども曾ては「愛無くして豈に結婚あらんや」と云ふ考を有つてゐたので、矢張り自由結婚こそ道理に適つたものと主張した。併し乍ら今日に至つて考へて見ると自由結婚は決して最良の結婚法とは言へないと思ふ。

戀愛は自由だとか何だとか、其樣云ふ理窟は兎に角として主として實際上から言ふのであるが、一體人間は二十歲前後から三十歲位迄の間と云ふものは却々相手が解るもので無い。男にも女が解らねば、女にも又男が解るものぢやない。特に女は嫁入前は男の愛を牽きつけるところの強い力を有つたもので、或る意味に於てはそれが即ち虛僞の凝固であるかも知れない。そして愛は盲目と來てゐるから、互に戀ひ慕ふてゐる間は、男の方にも女が好く見えれば、女の方にも亦男が好く見える、そういふ眼で見るのであるから痘痕な顏も或は滑かに見えるであらう。何程自重するの何のと言つて居ても戀愛の性質として愈う云ふ事情は必ずあるに違ひ無い。斯かる無我夢中の間に於て、意氣が投合したの滑つたのと言つて結婚するのが即ち所謂自由結婚であらう。

斯の如くにして結婚を爲し夫となり妻となつていよいよ人生生活の首途に這入つた曉は如何かと言ふに生活の事は詩のやうなものでは無い。思つた程には趣味が無い、寧ろ事務的でそして俗的である。夫婦になつたら定めし毎日樂しいことと思ふて居たのに、いざ自由になつた曉には一向樂しいとが無い。そこで是迄の不自由が却て詩的で樂しかつたのだといよいよ夢が醒めて見ると、男は以前の好男子で無ければ、女も又以前の美婦人では無い。互の缺點は遠慮無く目に着いて來る。さて愈うなると是迄の反動で、其の愛情の次第に薄らぐは固よりのことで、遂に二人を相乖離せしむるの悲運を招くに至るは自由結婚の常徑である。素より之れには多少の例外はあらうけれ共、所謂自由結婚

なるものは決して青年の想像するが如くに理想的のものでは無いのである。そこで戀愛の問題と結婚問題とは別々に考へる方がよいと思ふ。

△在來の結婚法

然らば我國在來の結婚法はどうかといふのに、當人同志の父母なり他人なりが見立てゝ、當人の意向を確め、雙方の親達が宜しいと言へば其れで結婚をさせるので自由結婚の如くに結婚前に互に愛し互に知り合ふことは無いが、我輩は、之を彼れに較ぶれば、より鞏固でより理想的であることを信じて疑はない。或は之を壓制なりと非難する人があるかも知れぬが、壓制は眞に例外の話で、此の結婚法とても決して當事者の意思を無視するものでは無い。而して此結婚法は父母、媒酌人等の世故に通じ經驗に富みたる者が、雙方の氣質、職業、其他色々の點を見立てゝ、これならば行末長く夫婦として最も適當であらうと考へ合せたものを娶合はすのであるから、彼の思想の不確實なる者が盲目的に作用く自由結婚とは違つて、餘程堅實な夫婦が出來るわけである。蓋し初めの中こそは善いのか惡いのか互に一向解らずに暮して居やうが、やゝ歳を重ねて夫婦なるものゝ意義を眞に會得するやうになれば成程と合點の行くのは實際の話であつて決して私一己の私言では無い。さうする間には愛情も段々增して來る、軈て子供が生れる、家事はいよ／＼複雜になる、即ち色々の緣故で結び附かつて玆に切つても切れない固い夫婦が出來るので、自由結婚の其れとは恰度反對の傾向を示してゐる。斯樣にして出來た夫婦は先づ間違は無からうと思ふ。戀愛は神聖なり、結婚は自由なりなど言へば、如何にも詩的で美しく聞えるが、其の實、眞に空想に過ぎないので、此の長い一生を考へるならば、決して之れに與みすることは能きないのである。

△舅姑の存在と夫の同情

次に婚約の際に娘を持つた父兄達の第一に聞きたがる事は、先方の家に舅姑や小舅姑が居るか如何か、そ

して又其舅姑は如何なる氣質の人であるかと云ふことであるが、今日は女學生自身の考に於ても矢張り成る丈け其樣云ふ者の居ない所で新夫新婦が相携へて自由自在に樂しく世帶を持ちたいと云ふやうな傾向が見えてゐる。人情として固に無理からぬことであるかも知れぬが、我輩は之れに就ても大に疑を懷くのである。一體若夫婦がポッチリ二人で世帶を持つてゐるのを側から見るとさも樂しさうに見えるが、其實決して其樣で無い。他に制裁者が無いとすれば互に我儘の出るのは當然の話で、我儘放題を言つて居て其れで愉快であらう筈は無い。眞の樂みは實に不自由の中にある。之を思ふと、嫁の爲に取れば、矢張り家に舅姑なり小舅姑なりがあつて、折々其等の者に虐められた方が好いので、一方で虐められゝば他方に於て夫の同情が增して來るのみならず、家に一人でも虐めるものがあればそれだけ、其人は人情の曲折を解して結局我身の修養に益する處がある者である。虐めるものがあるから厭ぢやといふ樣な我儘者ではこの複雜せる社會に將來家を成して行く事は困難といはねばならぬ、夫たる者も假令表面は如何であらうが裏面に於て之を保護する地位に立つことは勿論である。之れこそ眞の樂みであらう。單純に人情から考へて見ても此の方が得策であるだから我輩は常に人に向つて寧ろ舅姑小舅姑のある家を選んで嫁に遣れ嫁に行けと勸めてゐるのみならず、特に嫁に行く者に對しては夫に事へるよりも先方の舅姑小舅姑に事へる積りで行きなさいと言つてゐる。是れ取りも直さず深厚なる夫の同情を得て永久のホームを形成る最良の手段であらう。

△舅姑と家事教育

所が今日の有樣を見るに、女學生上りの人々の中には、學校で學んだ講義を其の儘受繼いで「一家は夫婦本位なり」とか何とか妙な理窟をこね廻はしてやゝもすると舅姑などを疎外しやうとするものがあるが、まことに言語同斷の次第である。舅姑なるものは其樣輕々しく排斥すべきものでも無ければ、又排斥し得

らるべきものでも無い。今夫婦間の愛とか同情とかと云ふ事を他所にして考へて見ても此等の者は是非居て呉れ無ければならないものだ。今日の若い婦人は讀書算術、裁縫、料理等家事に關する學科を一通り學校で學んだから其れで足れりとしてゐるかも知れぬが、學校で學んだ事などは固に淺薄なもので、之を其儘實地に應用しやうと云ふのは迚も能きない相談である。其の上に尙は五年なり十年なり姑などに實地に就て虐められ敎育せられて其で初めて學んだ事が活きるのだ。此の點から考へると舅姑などは亦一種の敎育家として珍重すべきものであらうと思ふ。

△予の經驗

自分の如きは實は若夫婦きりで世帶を持つた方であるから、自然困難をした經驗も有つてゐる。女房が產をした時などは特に甚く困つたので、二人で何れ丈まごついたか知れない。で醫者だ看護婦だ產婆だと云つて騷いでゐる中に、やがて子供が生れる、諸方から貰物がある、所が之れには如何して返禮をしたらよいか分らない。事柄は何でもあるまいが、何しろ一方には本職があるから之れに面じても滅多な事は出來ないので、邪慳でも何でもよいから恁う云ふ時に姑などがあつて呉れたらと熟々其の必要を感じたのである。之れはたゞ一例に過ぎないが、其外に菜の漬け方とか澤庵の壓石の置き工合とか云ふ事は些細な事のやうで其實困難しい、舅姑などが居ないと恁う云ふ類の難問が簇々と湧いて來る。去れば苟くも一家の主婦と爲らうとするには、矢張り最初は舅姑などに依て色々の方面から實地に就て敎育せらるゝのが最も至當な順序であり且つ最も得策であらうと考へる。

△妻の內助

終りに尙ほ妻の內助に就て一言しやう。世間には、內助するには、政治家の妻君ならば選擧運動に奔走するとか、實業家の妻君ならば夫の取引上に立入ると云ふやうに積極的に夫の仕事を手傳はなければならぬも

のゝやうに思つてゐる人が往々あるが、之れは大きな間違である。斯の如きは所謂出しやばると云ふもので決して內助とは言はれない。眞の內助はたゞ夫の仕事を內部から妨害せぬと即ち夫に對して成るべく自由に活動し得る基礎を與へることで無ければならないのである。或は余輩の言を目して東洋流の頑固な所說なりと貶す人があるかも知れぬが、此の東洋流は決して惡くは無いと思ふ。今假りに夫が政治家なりとして見れば、其の駈引には色々錯雜したる事情があつて、時には輿論に反抗して政府に與すべき場合もあれば、或は四面楚歌の裡に立つて萬人に對抗すべき場合も起るので、其の行動は常識を以ては却々判斷の能ないことがある。此際如何に其の事情に通じたりとは言へ比較的其事に暗かるべき妻君が、無暗に夫の仕事に關與はると云ふことは、却て夫の勇氣を挫折せしめ、其の判斷を誤らしむるのみで、何等內助の効が無い。多くの場合に於ては徒らに夫の行動を妨害したに過ぎない結果に終る。或は夫が實業家であり乃至は宗敎家、敎育家の如き極めて平和な事業に從事する者であるにしても、斯かる事情は必ずあらうが、妻が夫の仕事に立入ることの不可なることは孰れも同一であらうと思ふ。

△內助の實質

婦人の生命は頭にあらず胸にあり、智よりも情が大切である。去れば家庭に在て子供を養育し、夫に對して厚き同情を表し、其他味善き食物を調理し、或は室內を掃除する等、要するに家庭の慰藉者、一家全體の調和者を以て任ずるが婦人の天職であるので、此の天職を全うするのが即ち唯一の內助の手段であらうと思ふ。たゞ之を全うするに就ては色々困難が起つて來るが、之を詮ずれば多くは財政問題に歸着するのであるから、妻たる者は堅く奢侈を警めて一家經濟の圓滑を期すべきことは勿論である。所が今日の有樣を見ると、世の妻君達は自家の財政を顧みずして自分や子供の身に着飾ることは非常なもので、夫の費用も一方で無い。從て其の爲に夫の活動が何れ丈妨げられてゐるか知

れないのである。特に妻君達の一種の虛榮心から無心の子供に格別欲がりもしない美服を着飾らせて自ら喜んでゐるに至つては、實に沙汰の限りと言はなければならぬ。一體子供と云ふものは着物が美いとか粗いとかと云ふ事は些しも念頭に置いて居ないから、如何に美しい着物を着せても全くお構ひ無しで、其儘で土を捏ねる、角力を取る、忽ちの中に之を汚して仕舞ふ。子供は實に活動的だから、雨が降れば裸足になつてバサバサ遣つて見たい。着物の汚れるのは當然の話であらう。所が母親は側から之を見て居て氣が氣で無い。若しや着物を汚しはせぬかと一刻も之を見放す事が能きないのである。否たゞ母親のみとは限らない、幼稚園や小學校などに於ても、教師が着物を汚させぬやうに注意してゐる事は母親の夫れにも劣らない。之れは實に困つた事で、其の爲に子供の活動の自由を殆んど全く束縛するやうな譯だから子供に美服を着せると云ふ事は、大いに考へなければならぬと思ふ。英國や亞米利加邊では、餘程身分の高い富裕な人でも、其の子供にはお粗末な而も強い地質の着物を着せて、角力を取らうが砂ッ原で寢轉ばうが一向差支のないやうにして置くと云ふ。以て參考とすべきであらう。

猶結婚に關する問題は右にて盡したものとは言へぬ餘は又更めて述ぶる事としやう。

△女子事務員と郵便局

日本でも此頃女子の事務員を採用の範圍が擴張されたが、英國では郵便局だけでも二十萬の全員中、現に五萬餘名は女子の事務員で、尙ほ年々に增加してゆくので、追々男子は自己の職業、自己の地位を奪はれつつある傾向がある、而して實際此等の事務は、男子よりも女子の方が遙かに優等であるとは、當局者一般の評判であるさうな。同國の一雜誌は此のことを記して、或ひは近き將來に、郵便局は其現業事務のすべてを、專ら女子にのみ掌らしむるに至りはすまいかと言つて居る。

女子を不良者にする寄宿舍の改良

傘　瀬　子

女子の寄宿舍？、勿論女子のみに限られたものであるが、私の改良意見を卒直に言ふと、女子寄宿舍は女子のみでは可けない。今日の女子寄宿舍の弊害は、皆それを組成する所の主要分子に男子を缺いてゐる所から起るので、之を除去し救濟するには、必ず男子を加へなければならぬといふのに在ります。

御承知の如く大抵の女子寄宿舍では、所謂家庭組織が採用してあつて、或は五人、或は七人、一家を成したる體裁にして、年層のもの、若しくは上級のものを主婦と定め、他は皆姉妹であつて、業務はすべて分擔し、若しくは交替に受け持ち、家庭豫習を毎日繰り返してゐることになつてゐる。唯不思議なのは、一家に主婦のみあつて、主人なきことである。これは世間の實際の家庭と大に違ふ所であります。併し私は之を咎めるのでは無い。

此制度は我邦では以前の明治女學校等が初めてであつたらうと思ひます。孰れ英國あたりの寄宿舍制度に倣つたものでせう。斯様に一寄宿舍の内が幾つにも分れて、各個々の家族を作り、別々の家庭を營んで、他日世間に出る時の準備をするのは洵に結構なことではあるが、それが果して正しき準備となつてゐるが、果して豫期通りの結果を收め得るか、それらは甚だ疑問であると思ふ。といふは必ずしも飯の焚きやうや、副食物の拵へやうや、掃除の上手下手を論ずるのでは無い男子の全くゐない家庭で育つた婦人が、精神上常經の發育を害せられ、常に何等かの不足と誅求とに襲はれつゝ更に社交對人の關係にまで至つて、屢々缺點を現はすことを憂ふるのである。

併し寄宿舍の家庭組織に、一人宛の男子を主人として入れよといふことは、殆ど不可能の提供である。これは我輩とても勸めるのでは無い。が爰に一ッの行ひ得べきの救濟策がある。それは寄宿舍々監に夫婦者を用ゐることである。今日の舍監といへば多く獨身の大

婆さんにあらざれば中婆さん若くば他教員に比して何か劣れる所のある。三十ミスそして其經歴はと聞けば永らく苦勞辛酸を重ねて來たものとか、夫に生別死別して寡居の生活を守つて來たものとか、或特別の事情の爲に婚期を失したものとか、中には監獄の女囚取締を勤めて來たことがあるとか云ふたぐひのものもある要するに人事の悲慘、寧ろ對男子事件の不如意の爲に其溫柔性、優美質を傷つけたものはあるが、却つて人生の順境に生ひ立ちて、素直なる、圓滿なる性格を持ち續けて來たものは、至つて乏しい。これで彼等第一の缺點は冷酷(ふにんじよう)である。偏狹(やかましや)である。苛察(こまかしい)である。同情がありさうで、其實嫉妬憎厭を掩ひ蔽してゐるものがある。何うしてこれが青春妙齡の女學生を誤らず導いて行くことが出來ましせう。殊に舍監といふ位置は、何れの學校に在つても甚だ尊ばれぬもので、隨つて學問見識のある者で、之に從つてゐるは極めて稀である。よしや偶々あつても某々の他先生に比べて——女生徒は直ちに比較を取る——劣るか、さもなくば德川式の系統を蹈んで、到底今の世の人の子に當て嵌めるには餘りに舊い。此點に於いても青春の女子は服しないことになる。既に境遇から來た缺點の爲に生徒を正しく導くに足らず、學問見識は勿論生徒を服せしむること能はずとすれば、其處に感化のあらう筈はない。信任のあらう譯はない。けれども其中最も重しとするは、第一の德に關するものである。

尙は私の論旨について例を設けて言ふならば、男子に見棄てられたやうな經歴のある婦人でみると、男子に對する正當の觀察が出來ない。監獄で女囚を扱つたやうな婦人でみると、生徒を罪人視する嫌がある。婦人は男子と違つて先入主が強いだけに、複雜な問題が生じた場合には、思慮が足らず、よい判斷が下されずして、動もすれば先入主で定めて仕舞ふ。さうしてそれが大抵肯綮を失してゐる。これは世の中全體を視ず人間の半分——即ち女子——のみを視てゐるからのことである。隨つて男子に對する婦人の態度心得等も臨

張わからぬものとなる。全く婦人は婦人だけのものになつて、男子との交渉は次第に懸け離れて仕舞ふ。諸種の弊害はこゝより生ずるのである、世の中の事は關繋的に男女の兩面を見なければ、決して解決のつくものでない。婦人問題でも婦人だけで解決することは覺束ない、それで世間の多くの婦人が偏狹になり眼偏り、妬み、恨み、間違つた見解に落ちつき、獨り斷めになつて他を顧みずなる、といふやうな弊害は、皆男子を知らず、男子と交らずゐる所から來るのである。之を救ふは夫婦者を舍監として入れることである。今一ツの策は。

此方法を擴げて、寄宿舍を數個に分かち、教職員の夫婦者――成るべく學識高く、信任厚きものがよい。即ち校長教頭を筆頭として――寄宿舍に住み込ませるのである。これは必ず好い結果があると信ずる。女生徒は彼等夫婦者に依りて『妻』てふ者を學び『母』てふ者を知り、舅姑に對する『嫁』てふ者を知ると同時に、其人の夫即ち男子を知るの便利がある。啻に男子を知るのみならず、男子の社交を窺ふ機會がある。斯うして平生に於て、男子を研究して置けば、他日世間に出る時の素養も出來てゐるものと謂ふべきであらう。

最近の新聞紙の報道によれば、三重縣の女子師範學校では、生徒と舍監（勿論老婦人）との間に紛紜を生じて、生徒數名は休業して。それに關聯して舍監は井戸に身を投じて死なむとしたといふことである。今其原因事情は詳しく知る所でないが、之も恐く同性――即ち女子と女子と――の確執であるから容易に解決がつかぬので、若し一方異性――男子――であつたならば、そんなことは豈夫あるまいと思ふ。まして水に赴いて死せむとするが如き、時代染みた醜態は演じなくて濟んだとも思ふ。兎角、女の舍監では心細い。事の解決に窮んで一刀兩斷の快が無い。唯其紛糾に惑うて徒らに人を恨み身を嘆き、生徒が言ふことを聽かぬとて悔し涙に暮れたとて、それは何の益にも立たない。泣いたり、笑つたり、怒つたり、叱つたりの感情ばかりの沙汰では生徒は愈々服しない、私は何うあつても女子寄宿舍に男子を入れる工風をして、女舍監の缺くる所を男子の特長に依つて補ひ行き、生徒をして亦男子を研究するの機會を與ずしては、到底永遠に女子教育の好成蹟を擧るとは難しいと斷言するものである。



外交官夫人の月旦

マスター、オブ、アーツ　山下彌七郎

栗野駐佛大使夫人

△巴里の光景　佛京巴里の賑は、晝ではなくて夜である、電燈日の如く、珍品花に似たり。陶器あり、呉服物あり、器械あり、小間物あり、新を競ひ、異を衒ふて人をして眼を眩せしめる。是等の物品こそ、實に佛國今日の收入を得しむる源であつて、又佛國が、黄金國として、肩を英米に比ぶる所以である。而も世界婦人の服裝や化粧法は、巴里を以て本とするは、夙に世人の知る所である。

△金の外交官　此間にある日本外交官の手腕は、亦目覺しく派手やかでなければならぬ。佛國大使栗野愼一郎氏夫妻、名士クレマンソーに宜しく、巴里市民に宜しく、佛國民に宜しく、此間の呼吸を解して餘蘊がありません。大使は着實にして物に動じない。紳士の好標本である。外交の適任者である。之に處して親しみを媒介するは、夫人其人の手腕に待たねばなりません。

△子供のなき家庭　栗野夫妻には子供衆はあれど、何れも日本に殘して、佛國には、夫婦二人きりです。二人は巴里を去る、凡そ十五哩の避暑地なるメーリンス、ラヒットに住し、時機を外さずして、アベニユーホークなる大使館に入り、電光石火の樣な手腕を揮つて居られます、私は昨年週遊の節、大使の別墅に一夕の歡待を受けました。

△日本料理が好き　栗野夫妻は謂はれました。日本人は日本料理でなくては叶はぬと、栗野家では一日に一遍必ず日本料理を用ゐること〻せられ、一種言ふべからざる日本家庭が、巴里の眞中に出現されてあります。栗野氏の家庭には、日本料理人を伴れて來られて、日本料理の山海の珍味を調理して居ます。

△夫人の愛嬌　夫人は落着いた中に、言ふべからざる

愛嬌を蘊み、默せる人を語らせ、多辯の人を默せしめる。この呼吸は、夫人獨得の才きでせう。夫人は今四十餘りの智慧盛り日佛外交の衝に當る栗野氏の配偶としては、先づ言分はないでせう。

△夫人の交際振　夫人は佛蘭西語の外に、英獨の二語に通せられ、其交際振に一種高尚なる所ありとの世評ですが、それは佛蘭西式の華美と言はんより、寧ろ日本式の奥床しい女禮式による爲です。一體に日本女禮式の優美で高尚なのは、社交的なる佛人の頗る眼を惹く所です。

△巴里の觀物　序で乍ら、巴里の觀物を記せば、セーブルの陶器場、シャンゼルザエーの美術館、博覽會紀念アレントルの橋、ワーセーユの奈翁の宮殿、同じく凱旋門、リクサンブルの美術館エッヘルの塔などですが、殊に旅人に言外の趣味を感ぜしめ、注意を惹くのは宏壯比ひなき奈翁の宮殿と凱旋門とです、宮殿の規模の宏壯なるは言ふに及ばず、凱旋門は英獨各國の模範

懸賞繪さがし第一



この女學生が見てゐる本は何でせう、裏から見たら知れやうが表からは何だか分りませんね

となつて居ます。そして世界の公園と言はれた巴里市中を點綴したる大厦高樓は、多くは、英米諸邦の富豪の別莊に外ありません。さはれ、この裏面にはしだらない淫風鄙俗が包まれて居ます。

井上駐獨大使夫人

△獨逸の外交　獨逸が外交上非常に大事な地位にあることは、今更申すまでもないが、今婦人諸君に向つて諄々と說き起す要もありますまいから、直に本題に移ります。兎も角、内治外交兩つ乍ら、列國の眼を凝むる獨逸に在つて、日獨兩國の間を斡旋する井上大使夫妻の働き振こそ、殊に勇しけれと言ねばなりません。

△大使の遣口　此間に處する井上大使の遣口は、機警巧妙と言はんよりは、寧ろ進退度に適ふと言ふ遣口です。彼の外交の特色は、その遣り過ぎない所に在ります。その態度といひ、その所作といひ、その言語といひ、頗る中庸を得て居ることは、内外人の等しく認むる所です。

△夫人の風評　獨逸人は曰ふ、井上大使の遣口は、主として夫人の方より來る、夫人の客を待つや、相手の意中を洞察して、思ふが儘にやりこなす、所謂殺活其手に在りといふ方でせう。私は昨年長谷場純孝氏と共に、一日維納市に西（源四郎）代理公使の饗應に預り始めて井上夫人に見えました。所が、饗應中電報もて伯林なる井上大使を、夫人が呼寄せられるに會ひました。そこで、西公使を始め、一座即ち起つて、井上夫人と共に、大使を停車場に迎へて、一ホテルに入りました。

△酒宴中の夫人　そこで、井上大使も亦私共を招じて一夕の饗應をされたが、時に大使の夫人、杯盤の間に淸姿を現はして、酒を强ひ、料理を進め、菓子をもてなし、小說、演劇其他客の好むまに〳〵款談し、其坐作進退の機轉ある殆んど人をして應接に遑なからしめた。その動作といひ、その言語といひ、その愛嬌といひ、如何にも溫厚篤實、柔和婉轉に過ぐる處ろは流石は交際界一流の夫人と深く感じました。

△夫人の堪能　夫人は元勳井上馨伯の令孃年已に四十を超え、その切味よき言語は老伯に似てゐます。獨逸語は言ふに及ばず、佛語、英語に通じ愛孃をば英國に遊學させて、語學文學等を專ら修めさせて居られる。

一條公爵夫人

先程歸朝された佛國大使館附海軍中佐一條實輝公爵は其職掌柄武官に相違なけれど、其の行動は自ら外交的風度を帶びてあれば暫くこゝに記すことゝします。氏は實に日露戰役中は、種々國家の爲に奔走し、或時は恐しき日探とまで歌はれました。

懸賞繪さがし　第二



この姉さんはお客樣と、對話して居ますよ、どんなお客樣でせう、男でせうか、女でせうか、まア當てごらんなさいよ。

△公爵の風評　公爵は門閥柄、洒々たる貴公子です、而も彼れの特色は、その平民的なる所に存する、彼は居常、柔和、謙遜高ぶらず、驕らず、近寄り易く犯し難し、彼は中肉中脊にして、優美の氣、眉宇の間に溢れて居る。

△餘裕ある外交官　公爵は以上の性格を以て、佛國の交際社會に一異彩を放ちて居ます。彼は餘財ある外交家として、單に俸給に衣食する貧乏外交家と大にその選を異にして居ます。外交家として俸給に衣食する苦しさは其外形の華美なるに反比例をして

居ます。而も彼が、この仲間に入らぬのは稀有の天幸です。公爵の世評の好いのは、久松伯爵と難兄弟です。

△夫人の人爲　公爵夫人は、確か細川侯爵家より入輿せられたと存じます、矢張品位の高尙なる中に、平民的のところがあり、常に交際社會に花を咲して居ます子供二人を伴れて居られた。長は十七八歳の姫御前、次は未だ幼稚です。

△家庭の雇人　一條家には日本人の家從が居ましたその他は、料理人、乳母、女中、看護婦何れも佛國人です。日本人來る時は、自ら日本料理を供したりなど接待方が却々巧妙です。

△夫婦の間柄　一條公爵夫妻は、何れも佛語に巧に、英語獨語をも解する。夫婦仲の宜しきは、他所の見る目も羨しいほどで毎年暑中には、夫婦相携へて自動車に乘り、又は汽船に乘りて、英獨の諸國に遊びます。時には片々のみの事もあるが、巴里の豪富某氏はいつも公爵に同伴してゐます。

△趣味ある家庭　夫人は音樂好きで、嚠喨たる淸音自ら家庭の天國を謳歌して居ます。私が公爵家に優遇されたのは、僅に二回ですが、趣味ある家庭として私の週遊中尤も感服した家庭の一つです公爵は年四十二三夫人は三十餘りと思ひます。

山田領事夫人

私は先づ佛蘭西を巡遊したのですが、かの絹の産地を以て名高いリヲンに居られる山田領事夫人の優遇に預りました。この夫人は、日本料理の技に秀でられ、曾ては日本で、皇后陛下に謁見仰付られたこともありますが、實にその手腕は素晴らしいものです。又音樂の如きも、妙を得て居られまして、日米佛蘭西等兩つ乍らお遣りになります。その交際の趣味に於いては、佛蘭西の華美な所と、日本の質朴な所とが、錯綜して實に美しいものです。

本野公使夫人

露京駐剳の本野公使夫人は、佛語に巧妙であつて、

外交上幷に社交上の秘訣を自得せらるるといふ評判です、巴里駐剳時代から、最も腕のある外交官夫人と稱されて居ますが私はまだ直接お目に懸つた事はムいません。

飯島領事夫人

それからオデッサに於ける飯島領事夫人ですが、同夫人は、横濱の六角といふ醫師の姪に當らるゝ方ですが、丁度私の妻と同窓の間柄で、殊に面白い談があつたのであります。語學は、獨逸、露西亞、英語等に精通せられ、ハキ〳〵されて居るのは、夫人の特色で、交際場裡に、却々幅が利いて居ます。

西代理公使夫人

次に墺國ウヰンナに往きましたが、當時は代理公使として、西源四郎氏が居られました。同夫人は伊藤侯令孃で、極平易な方ですが、その無邪氣な所に特色を持たれ、氣を八方に配らるゝことに抜目がない、外交上の所謂錯綜主義を尙ばれてあるやうです。

日下部代理公使夫人

丁度其の時、伊太利の羅馬府では、大山綱介公使の代理として、日下部三九郎氏が居られました。日下部夫人は有名な煙草屋江副廉造氏の令孃です。夫人は殊に佛蘭西語が巧みである。滯留當時に、伊太利の大官を招待されたことがありますが、却々交際の仕振がお上手でした。總じて日本婦人の特色が、矢張その禮儀正しい優美な所にあるので、歐米では何れもそこに趣味を持ち又自然光彩を放つわけになつて居ます。

荒川公使夫人

メキシコ公使荒川夫人は、英國育ちの方だけあつて如何にも洒々たる所が見えます、夫人はもと鹿兒島出身で、樺山伯の姻戚でありますが、何處までも、老伯に似た所が見えます。その坐作、進退は打解けたる様で而も犯し難き威嚴を保つて居られる所などは、殊に

此夫人の立派な所でせう。

宮岡參事官夫人

それから北米に渡りましたが、米國大使館參事官宮岡恒次郎氏の夫人は、麻布東洋英和學校の出身で、メソジスト敎會の信徒ですが、語學は英獨佛に通じ、交際のお上手なことは、世評に高い所です。夫人は決して人を厭かせない。默つて居る人に物を言はする。笑はない人を、自ら笑はせるので、一般に交際社會の美花だと言はれて居ます。

清水領事夫人

こゝに各國領事の中で、特に異彩を放て居るのは、シカゴ領事淸水精三郎氏の夫人であります。同夫人の生地は、一寸記臆に浮びませんが、一地方の師範學校から出て、女子高等師範學校專科を卒業せられたといふことを、後から聞き及びました。夫人の家庭は、何となく敎育的な所があります。毎月一回夫人の宅に開催せらるゝ、日本人談話會に於ても、シカゴ大學に在る日本人が多數を占めて居りますが、集り來る方々は殆ど悉く牧師なり、神學者なりで、談話の間、自ら眞面目な所、嚴めしい所が見えて居ります。私も初めは一種の感に打たれましたが、同夫人が師範學校の出身にして、且つ宗敎篤信者なることを聞いて、成程と思ひました。

●**貴婦人の交際振**　我國貴婦人のそれに就て新歸朝某ドクトル夫人評して曰く。

▲交際場裏に立つて天晴交際家とか活動婦人とか言はれる婦人方でも失禮ながら歐洲の下女にも及ばぬ樣に見受けます。

▲先日も或る婦人會に出席して一入感じました。人の話をして居る人を斷りもなしに引張つて行つたり一人坊ちの者を構ひつけなかつたり、淸國婦人などは見るも氣の毒な程繼子扱ひをしられて居ました云々と。

▲全く斯ういふ弊はまだ多少我貴婦人界にあるやうです。

時の問題

矛盾せる時代

佐治實然

大河が海に注ぐ處には必ず渦卷が起る、蒼海が河尻を壓する處には必ず荒波が立ち起る。今は恰度この河の水と海との嚙合ふ時代である、或者はこの激浪中に捲き込まれ、或者は溺れて浮ぶ瀨がない、即ち新しい思潮と舊い道德との衝突の時代である、だから凡ての問題が未だ明かに解決されないのも強ち無理ならぬ事である。乍併這の衝突はやがて幾多の矛盾を現出して來る事を知らねばならぬ。

一例をいへば東鄕大將の日常生活が至極質素であるのを見て、成程この質素と謙遜とがあつてこそ眞の偉人であると賞讃する處の人が、更に又成金黨なるものが一擲千金の豪奢を極むる有樣を睹ては、嗟成功はしたいものだとひどく羨むやうな情を起す、恁く矛盾してゐる觀念は單に個人の上ばかりでなく社會一般即ち時代其者の矛盾である、即ち資產のない者は汗膏を絞つて働いて居ても年中貧乏してゐるが、資本家と稱する人々は懷手をして居て財產が殖えて行く、そこで其反動が平民主義となり、社會主義となり、或は簡易生活の唱導となつて各方面に聲を高め出したのである。而も一として解決された問題はない、此衝突せる新舊二つの思潮が家庭に入つては結婚問題となり、親子別居問題となり、自由戀愛說となり、更に轉じては青年男女の精神上の煩悶、即ち病的狀態を齎らしたのである。畢竟是等は時代の副產物であるから『時』が來れば自ら解決を告げるのであるが、私は先づ彼の煩悶者と厭世者流に對する忠告として左の十ケ條を提供しやうと思ふ。

（一）政府は大に殖民政策に重きを置き、年々增加する人口、殊に青年男女を海外に移して各自安全に生活せしめ得る方針を取る事。

（二）父兄の任にある者は青年男女をして餘り文學的

教育に熱心せしめざるやう説諭すべし又青年男女は各自に高等教育の處世上に効能少き理を了り、中學程度を卒業後直に生産的の序幕を開くべし。

(三)なるべく虚僞浮薄の都會生活を避けて、誠實質素なる田園の趣味を味ふやう精神の修養を怠らぬ事。

(四)富豪を羨まず、豪傑を尊敬せず彼等は寧ろ人世の幸福を不平均ならしむるものなり、而して青年男女は將來恒産ある紳士となり淑女となり獨立自營の生計を立て、富豪及び豪傑と對峙し決して彼等の軍門に降らざる事を理想とす可し。

(五)維新變亂の際機會に乘じて、或る地位と利益とを僥倖したるものにて徒らに獸慾に耽る事を知るのみなる醜漢を排斥すべし。

(六)哲學を學ばゞよろしく其原理を究めたる後、心機を轉じて樂天に返るべし。

(七)卑猥淺薄なる小説類を避け、大哲人、大宗教家大詩人の手に成れる高尙なる文書を讀む事。

(八)男子は三十歳、女子は廿五歳に至るまで克己心(戀情を制する)を養ひ、其報酬として正道を踐める結婚を爲し自然の性情を滿足せしむべし。

(九)青年男女は、よろしく今日の學校を以て單に智識を賣るの商店とのみ心得べし、故に學校の教場に入らば勉めて靜肅を守り可成多くの智識を買ふて歸るべし、而して心身を修養し立身の基礎を定めんには別に思考すべし即ち學者と町人とを問はず總て世故に鍛錬なる人を師と仰ぐべし。

(十)學問を以て萬能力なりと迷信する勿れ、又、政治家や法律家等を高尙なる職業と誤解する莫れ、人生の目的は地位の高下よりも人格の完全なるに在り。

親子別居問題

これも亦新舊思想の衝突から起つて來る問題で、これまでの家族制がよいか別居制が良いかとはしば〱

論題に上る事であるが、私は今日の場合、親子各々別居した方が両者の為により幸福であらうと思ふ。

今日は何事も過渡の時代に有るので家庭の組織の如きも家族よりして追々個人制に移りつゝありとは言ひ乍らそれでもまだ『人』よりも『家』を本位として、親子兄弟は必ず一家の中に團つて居なければならぬ者としてゐる所へ各人の思想が又過渡の時代にあるから茲に新舊思想の衝突を起して多くの波瀾が生じて來る。東京でもさうであるが地方へ行くと猶更それが甚だしい。即ち一家の中に隱居夫婦



があり、戸主の夫婦があり若夫婦があり、其又弟の夫婦があるなど夫婦が三組も四組も同棲して居て、毎日何かしら葛藤を起してゐる。そして姑は嫁を苛め、嫁はそれを良人に訴へ、良人は親を恨み兄弟の嫁同士が互に嫉み合ふと云ふ始末であるので、尚ほ其上鬼千疋の小姑でもあつた日にはそれこそ、一家は修羅場である、各々が恁那不快な思をして、互に仇敵同士の如く睨み合ひ乍らも猶且つ一緒に團つて居なくばならぬとは随分愚な話であるが、其處が即ち舊道德の餘弊を覺り得ぬから起る事である、否覺り得

たからとても其束縛を脱するだけの勇氣がない。親子が別居をしては義理上に濟まぬとか外聞が惡からうとか、先祖の位牌に對して申譯がないとかとくだらぬ習慣に羈束せられて自ら苦んで居るのである。それも家を別にする程の資力がないものなら格別、充分財産が有り餘つて居ながらも尙ほ右の如き家庭を固守する者の多いのは畢竟一般の思想が進歩せぬからであらう。

尤もこれは塲合の問題で、私が若し米國の如く個人主義の極端なる國に生れて、それに伴ふ幾多の弊害を認めたならば、或は家族制を主張するかも知れぬが要は唯だ時世の必要に應じて立論するので、今日の有樣で見ると、家族制度の爲に個人としての幸福が殆んど犧牲に供されて居るから斯くは言ふのである。

元來一個の家庭に二組の夫婦があるのは恰も一個の國家に二人の君主がある樣なもので、其の爲に葛藤や波瀾の起るのは素より當然の事であらう然れ共今別居を實行せんとするに就ては尙ほ一つ考ふべき事がある我邦現今の家庭に於ては槪ね若夫婦より、老夫婦の方が多くの勢力を占めてゐる、親父は伜よりも、姑は嫁よりも、常に二段も三段も上に在つて指揮者の地位を占めて居るから、新夫婦は始終頭が上らない、實に不快な話ではないか。と云ふのも結局早婚の結果であるので、息子が漸く二十二か三で衣食住一切を父母に仰いで、まだ却々獨立自活の資格も得て居らぬ中に、早くも妻を娶るからで、謂はば親がゝりの身分だから、其妻なるものが姑に苛められたり奉公人扱ひされたりするのは當然の事であらう。されば此の不快極る家族制を廢して、安全なる別居制を實行せんとするには、先づ從來の結婚制度から改正しなければならぬと思ふ。

男女の獨立と結婚の時期

年々生存競爭の度が激しくなつた結果、今では女が十六七、男が廿二三位で結婚をする者は甚だ稀であるが、それで有福な家になると息子が道樂をし出さぬ中にとか、娘に萬一の間違がない中にとかいふ見解から

親達が子の結婚を取急ぐ者がなかく／＼ある。だから他日イザと云ふ場合になると全く獨立をなし得ぬ人も無い、是等は單に本人の不幸のみでなく、延ては子孫の不幸である、蓋し男女共一たび結婚すれば親となるの準備が要る、人の親となるには三人や五人の子女を養育するとも能きねばならぬし、自分達が年を老つても悴や娘共の厄介にならぬ位の準備も要らう、恁う云ふと**は廿二三の青年は、望まれないのである。**



廿二三位で結婚する男子は多少父兄の補助を仰いで居るか、或は獨立が出來たにしても、僅か三十圓ソコソコの月收であらうから、妻の外に子供の一人も育て丶行くのは却々の重荷でソレ以上我子の學資金とか養老金の貯蓄などは思も寄らぬ事である。

さらば男女とも幾歳位の年配に結婚するのが最も理想的家庭を作るに適するやと云ふに、私は女子は三十歳位、男**子は四十歳まで各々獨身であつて欲しいと思ふ。それ**

までの間は婦人などは、女敎員なり看護婦なり、裁縫なりそれ〲身に適ふ職業を以て自活を爲し、其中から月々二圓、三圓づゝを貯へて行けば、十年の後には三百餘圓の貯金が出來るし、又男子は平均廿三歳位で一定の學校を卒業して、三四十圓位の月給にあり附くものと假定すれば、其中から毎月十圓乃至十五圓を積立てゝ行けば四十歳までには約三千圓の貯金が出來るわけだから、そこで始めて結婚をするも決して遲くはないと思ふ、斯くすれば子女を立派に敎育するヿが能る上に、老後と雖も亦た我子の厄介にならずして立派に獨立の生涯を送る事が出來るのである。

晩婚と理想的家庭

凡て家庭に不和が絶えないとか、或は生活難を嘆ずるとか云ふのは右の準備も無くて餘りに結婚を急いだからである。即ち父となり母となるだけの準備の出來ぬ中に——換言ふれば子供を充分に養育して行くだけの貯蓄も出來ぬ中に、結婚したからである。これでは全で泥棒を捉へてから繩を綯ふやうなものである。そ一層適切に云へば、軍資金の遣繰も附かぬ中に戰爭を開始するやうなもので苦しいのは當然の結果である。

そこで男子が四十歳、女子が三十歳と云へば頗る晩婚のやうに聞えるが、其實は決して晩婚ではない、之を今日の生活狀態に照しても、生存競爭の度合に徴しても、將又歐米各國の實狀に問ふて見ても、文明の度によつて婚姻の晩れるのは固に已むを得ざるの勢となつて來てゐるのである。

元來二十歳前後で結婚をするといふ風習の作られたのは、早く子供を設けて、早く其子を大人にして、而して自分達は早く其子女に頼つて樂隱居をしたいと云ふ處から起つたのであるが、恁那舊慣は追々廢るのみならず、益々子供には相當の敎育を施して一人前の人間にしてやればそれで父母たる任務は了るので、其子女に報恩を俟つなどは根本から間違つた考である。老後の準備さへ出來て居れば、父母が五六十歳の老齡で

あるのに其の闘子が十四五歳の若年であつても一向差支えはないのである。

或は結婚の時期が晩れて子供のない爲に、其家が斷絶するとか、自分達が折角働いて金を貯蓄しても讓る者がなくては詰らないとか云ふ者もあらうが、私は現在の國情からして說を立てるが相當の財產があり敎育があつて、而して子供のないといふ樣な夫婦が今日の日本に殖えて來たら、それこそ國家の幸福であらうと思ふ。現今の日本では年々五六十萬も人口が增殖するのであるから、晩婚の爲に小供が少くなつても敢て憂ふるところはない。若し相續者に困つた場合には、七人も八人も小兒があつて其を持餘して居る家庭も澤山あるから、爾那處から一人なり二人なりの子を貰ひ受て之に善良なる敎育を施し、而して家系を續がせる事にしたら、寧ろ立派な理想的の家庭を作り得られるであらうと信ずる。

未亡人問題

女子再婚の可否は一言で盡すことが能る。曰く『場合と、年齡と、事情とにあり。』單にこれだけでは解りかねるなら、モ少し詳しく說明しやう。

例へば二十歲代で夫に死別れ、子供もなければ遺產もなく、里方へ歸つても邪魔物扱ひにされるとか、ヨシ邪魔物扱にされぬまでも里方が貧乏で困難を來す場合には、良緣のあり次第再婚しても決して耻づ可き事ではない。次に三十代になつて良人に別れた寡婦は、既に子供の二三人もあつて、多少の遺產もあるといふ身分なら、自ら手內職なり何なり身に適ふた仕事をして小供の成人するのを樂むが宜しい。然し遺產も何もなく、女の細腕では到底小供を養育し兼ると云ふ場合には巳むを得ぬから其小供だけ一時里方なり親戚なりへ預けて、自分は相當の職業を求めるとか、或は裁縫奉公してなりと、幾干かづゝ貯金をして子供を滿足に育てるのが至當の道である。之は一寸困難のやうにも思はれるが、併し連子をして再婚をしたり、或は繼子のある處へ嫁いて繼母と呼ばれるのと比べて見れば遙

に幸福であらう。

又日露戰役以來、軍人の未亡人なるものが澤山に出來た、十八九歳から二十歳以上、三十歳以下のものが最も多い、何れも女子としては盛りの年配であるから中には既に再婚をして幸福な家庭を作つて居る人もあらうし、或は可惜黒髪を切落して寂しく亡夫の菩提を弔ふて居る貞婦もあるだらう、けれども概して見ると再婚をした婦人が多いとの事である、之を道德上から言へば再婚は無論譽めたことでない。出來得る事なら扶助料を以て寡婦を立て通すか、若くば遺子の成育を娯んで孤獨を守るべきであるが、然し情ないことには今日の有樣で見ると生活難といふものが、倫理問題以上道德以上の大勢力を有して居る。そこで私は、寡婦は必ずしも再婚を避けよとは云はぬが、兎に角境遇と事情とに顧みて、人の嗤笑を招かぬやうに何れなり決したが宜しいと思ふ、要するに之は難問題でも何でもなく、普通の常識を以て判斷すれば直ちに解決なし得る事である。

▲高等教育の生める子供

高等教育を受けたる婦人の生める子供は、概して不健全にして、發育不充分なりとの説に對して、紐育ヴザー大學の一教授は、自説を事實上より説明せんが爲め、高等教育を受けたる婦人の子女三百人の寫眞を蒐集したり、其結果は果して前説の誤謬たる事を立證し得て餘ありといふべく、何れも發育といひ容貌といひ決して普通の子女に比して遜色なきのみならず、尚ほ十中八九は優れたる體格と容貌を有する事を發見して、之れを公表し、且つ高等教育の女子に及ぼす好感化としてコーセットの緊縮度を減じ、骨牌戯に耽溺せず、過度の舞踏を爲す事無き等、母として體育の上に、も常に愼重なる注意を怠らざるが爲め、身心共に壯健にして其子女撫育の如きも自ら他に異なる點多し、以て女子に高等教育を授くるは母としての體質を害するものに非ずとなり。

▲非婦人倶樂部

米國ウ井リアムポート市に於ける婦人の倶樂部熱は、昨今其頂點に達せり、一婦人にして數個の婦人倶樂部に屬し、家政は勿論子女の教育すらも放擲して家を外に狂奔するを見て、直接被害者たる夫連は、密に申し合せ過般同地の五大婦人倶樂部大會の當日、二百名の男子悉く女裝して市街を練り歩き、各倶樂部に至りて日頃各自の細君等の演ずる厭らしき所作を眞似て、婦人連を嘲笑し、行列は次第に膨大となり、非常の滑稽を演ぜしが、妻君連にして尚反省する處無に於ては、更に一層激烈なる方法に依て反抗運動を開始すべしと。



主婦の熟讀すべき警策的文字

新説 化粧神聖論

ドクトル杉山源作氏述

婦人記者

△造物の眞意は美的なり
△裝飾の義務
△日本老婦人の銷沈
△裝飾は淫靡にあらず
△處女時代の不滿足
△融通の利かぬ貞女
△夫婦の遊女事
△打擲された情婦

婦人の志操堅固と云ふ事は素より大切であるに相違ないが、烈女式を態度の上に丸出しにされては興が醒めて了ふので、むづかしい注文ですが凛烈な意志を深く包み、何處までも優美溫雅な風姿を維持して貫いたいのです。私が以前榎本さんの家に居つた頃、常に國事に奔走する某女史が訪問された事が在つた。榎本さんが私に應接しろと云ふので應接間へ入つて見ると、暖室爐の正面に突立つて居る後向の老婦人が。股火を試みて居るのには先づ一驚を喫したのです。それで來意は、朝鮮の養蠶業を奬勵したいから、農商務省から然るべき技師を派遣して欲いと云ふのでしたが、其來意を述べるに贊同を乞ふと云ふしをらしい風は微塵もなく、民間の一婦人でさへ此通り國事に盡力して居るのだから、當局者が技師を派遣する位は當然であると言はぬばかりの權幕、實に恐れ入つたものだ、婦人の社會的事業は結構であるが、某老女史を見本にされては婦人の天職たる愛と美とを滅却されて了ひはせぬかと心配で堪らない、未だ〳〵彼女が敎育家でないのが幸

ひであると感じた事がありました。幸にして日本の婦人は温雅優美と云ふ點に富で如何にも女らしいのは喜ばしいが、此温雅優美を形に現はす裝飾の仕方に就ては聊か遺憾があるやうに思はれます。畢竟婦人方が裝飾なるものを神聖視するよりも、幾分か淫靡と誤解する傾がある所爲ではあるまいか、私は少しく婦人の裝飾に付て述べたいと思ひます。

▲裝飾の義務

造物主は世界萬物を盡く美的に造つたのであるから、萬物の長たる人類が天賦の美を粗末にしてはならぬ次第でせう。何時も美しい月や花を吾人に見せて呉れる造物主に對しては、吾人も出來得る限り裝飾に注意して之に報いなければならぬ、實に裝飾は人間の義務と斷言しても差支へないと思ひます。特に婦人は美の化身に造られてあるのだから、此賜物を大切に保存しなければ濟まぬ次第ではありませんか。單に男子の愛を買ふ目的で醜業婦然と化粧をする婦人は無論卑むべきであるが、化粧に熱心なる總ての婦人を淫靡なりと擯斥するのも大間違ひでありませう。どうも日本の婦人方は化粧の本旨を誤つて居るために甚だしく化粧する者と、全然放擲する者と混合して一般に不平均な觀があるかと思ひます。而して化粧の勢力が藝娼妓の社會に集注して居り、外人の目に映する日本婦人の美も貴婦人より却つて彼等に集注して居るのは實に情ない次第じやアありませんか。藝娼妓の化粧は素より則るべきではありませんが、一般良家婦人の裝飾化粧を最少し引立つやうに爲て欲い、つまり最少し巧にやつて貰ひたいと思ふのです。衣服に付ても色調の引立ぬ割に案外金が掛つて居る、云はゞ詰らぬ處に金を捨て居るやうです。社會の制裁に拘泥し過て自から工夫し撰擇する事を忘れ、無益な心配をして居る處が泰西の婦人とは餘程違ふかと思ひます。

▲誤れる衣服の撰び方

西洋婦人が衣服を撰ぶには時と場合とを考へます。

例令ば電燈映ゆき夜會に着るのは如何なる色が引立であらうか。部屋着なれば吾が家の壁は何色であるから何色の衣服が調和するであらうか或は緑蔭の公園を散歩する時には赤色が尤も美に見るであらうと云ふ風に周圍の色調から考を起します、又帽子なぞも自分の顔色が少し蒼いから帽の裏へ赤い切を着けて反射させ、肉色を活潑に見せやうとか、總て自己を中心として工夫するのですが、日本婦人は反物を手に取て是では自分に似合はぬであらうか、是では派手過て笑はれやすまいか、これは今流行ぬから何だか可笑しいやうだなぞと、無意義な事に氣を採み、他人の思はくを兼ねて撰むのです。西洋婦人の撰み方では大層贅澤のやうに思はれるが、其實日本婦人の方が倍も高い品を着て居る、畢竟日本婦人は色調の如何は置て品質の贅澤なのを驕る傾があるから、下らなく金が掛る譯でせう。私は先達も山の手の小學女生徒と下町の小學女生徒との服装を比較して見たが、番町邊の女生徒は廉價な切地を用ゐて如何にも高尚優美に造つて居る、下町の女生徒は贅澤な切地を用ゐて居る割合に氣品が乏しく見える、山の手と下町とは思想に新舊の差があるから自然生徒の服装に其差が現はれて居るので、新智識の價値を熟々感じたのであります。



妹「姉さん御覧なさい、この子はまあ眞ッ暗なお庭に向って何をして居るのでせう?」
姉「さあ何をしてるんでせうね、まア向ふの暗い處を氣をつけてごらん、何か居りはしませんかね。」

懸賞繪さがし　第三

▲日本老婦人の銷沈

西洋の老婦人に比べて日本の老婦人の疲憊して居るのは實に慨歎に堪へません。是は舊來の習慣や、社會の事情も違ふから致方がないとは申しながら、追々改良して貰いたいと思ふのです、此疲憊の原因を裏面から申すと、子女を甘やかし過ぎて自身を等閑に致し、どうせ年寄だから最早世間に用はないと捨鉢になり、食物の滋養も子女に一歩を讓り萬事閉口隱退して意氣銷沈して了ふのにありませう。外部の裝飾に就てもどうせ年取て汚く爲つたのだから、最早何だつて構やしない、若い者さへ奇麗にすれば宜いとか、或は少し奇麗に粧いたいと思つても、世間で年寄の癖に色氣があると評判されるのが厭なのでくすんで了ふと云ふ風です。實に日本の老婦人は自から暗い穴へもぐり込んで樂しかりし青春の夢を追想し、世を果敢なんで終る憐れな境遇と申すべきでせう。身を捨て子女を奉り過れば子女の爲にも必らず善い結果はありませんし、未だ手足の利く身體で世の働を捨てるのは自身が疲憊する許りでなく國家に對して濟まぬ次第、私は毫も利益を認めないのです。又裝飾に就て世間の評を恐れると云ふのは、即ち裝飾を淫服と混同するからで、裝飾を若い婦人にばかり必要だと云ふのは、丁度裝飾は男子の愛を買ふためと云ふのと同じ理窟、誠に卑しい觀念ではありませんか、天然の美が助けて居る若い婦人より、天然の美を失ふた老婦人の方が一層裝飾に注意して凋落の容貌風姿を補ひ、以て造化の旨意に報いなければなりますまい、日本の老婦人方は何卒子女の教育外に費やす無益の甘やかし費用を節して自分の滋養衛生に注意し、體力を壯んにして家事や社會の爲に働き、何時迄も若い壯な意氣で推通し、裝飾も出來得る限り盛にやつて貰いたい、斯うすれば自身が快活に暮せる許でなく家庭の和合上非常の利益があるに相違ありません。

▲處女の贅澤

處女時代には家政教育と技藝教育が第一で、裝飾は淡白清潔を保つて居れば澤山であるのに、日本處女の裝飾に至つては實に贅澤の限りを盡し、何一つ親の手

助けをせぬ小娘に身分不相應の帯を占させ、大した髪飾を頂かせ人中へ出して母親が得々と誇つて居る、小娘自身も追々増長して未だ指環の宜いのが欲しい、時計も欲しいと甘へ出す。母親は自己を節し苦心惨憺して小娘を滿足させ、賣物だから花を飾らねばならないと理窟を付けて居る、いやはや沙汰の限りじやアありませんか。賣物に花を飾ると云ふのは男子の目を瞞着させるやうなもので、旨く良い處へ娘を遣て了へば夫れが幸福の終局、あとは尻喰觀音と云ふ無責任の親には驚き入る、斯樣賣物を買ひ入れた男子こそ災難、實家で贅澤癖が着いて居るから、亭主の仕向が萬端不滿足でぷり〳〵する、始末にいけぬ代物が多いのです。日本婦人は結婚前を全盛期として總ての滿足を此時期に集注させて居る。而して結婚してから年月を經るに從ひ追々此滿足が減却するが、西洋では之れが反對にいつて居るので、家庭が自然快樂に保てるのです。

▲處女時代の不滿足は愉快の元素

西洋では處女に不滿足を與へて置くのが、結婚後を愉快ならしむる元素であると致してあります。處女時代に衣服髪飾等を極質素に抑制されて居るから、結婚後良人が少しの物でも買て呉れゝば非常に有難く嬉しく感じて大切に保存するのです。西洋婦人の許へ參ると、是は旅行中の良人から贈つた繪葉書ですなんてよく見せられる事がありますが、吾々が見ては詰らぬ些細の物迄左も大事さうに秘藏して居る所を見ますと、如何に滿足しつゝあるかゞ分ります。日本の處女のやうに滿足を結婚前に濟して了ふと、他日良人から少しやそつとの物を貰つたつて、親の半分にも追付ず、萬事親の有難味ばかりを思ひ出して、始終不愉快不滿足に堪へない。こゝ等の原因が餘程夫婦の交情に關係を及ぼすやうであらうと思はれます。短い處女時代に不滿足を堪へさせて、永遠を愉快に暮させると云ふ事を、世の親御達に宜しく慮つて貰いたいのです。

▲融通の利かぬ貞女

貞女の貴い事は素より云ふまでもないが、世間には往々間違つた融通の利かぬ貞女がある、是は良人も彼自身も大苦痛を感ずるものです。尤も良人の性格に依て一概には言はれぬが、唯だ家事を忠實に働き良人を主君のやうに奉つてるだけでは家庭に面白味は無い、のみならず斯る細君は自己が苦痛を堪へて居る爲に幾分か恩にかけて居る氣味がある、良人が呑氣な事でも言ふと、私は年中此通り眞黒になつて働いて居るのに餘り郎君は呑氣だと言はぬばかりの權幕でムッとなる、良人は何だか拍子拔がして面白くないから、外へ出て思はぬ場所へぶらりと足を向けると、如何にも親切に歡迎される、彼の手管とは百も承知しながらツイ惡い心持はしないで氣晴しをすると云ふ工合になるのが抑も家庭紊亂の基となるのです。夫れで私は少しく無理な注文かも知れぬが。

細君は眞直に腕を延ばす事を勉むると同時に場合に依て此腕を後へも横へも曲げる機轉を心掛て貰いたいのです。

外に出でゝ生存競爭場裡に働く男子が家庭で氣晴しする際には、内で孜々働いて居る婦人の想像に及ばぬ調子はづれの言行が往々あるでせうが、此處は充分男子に同情を持て慰藉の術を講じて貰ひたい。一寸立入た例ですが、良人の留守には眞黒になつて家事を働いて居ても歸宅の頃は顔の鍋墨でも落すとか、寢衣や夜具はビショ付いた垢だらけのを用ゐないやうにするとか云ふ注意も肝要だらうと思ひます。

▲夫婦の遊女事

私の郷里に延次郎と云ふ小農があつて、共白髮の夫婦仲睦しく、正直によく働いて息子を確乎した人間に育て擧げ、近所で褒め者になつて居ましたが、此延次郎と云ふのは餘程面白い男で、平常よく働く骨休に時時家内で遊女事（卑俗の言葉を以て遠慮なく言へば女郎屋事）と云ふのをやる。若い内から老年まで之を實行して居たのですが、其日には女房に今日は女郎事を爲やうじやアないかと云て小清洒した着物を着かへ小

酒盛を遣るので、女房も其日には野仕事の汚衣を脱ぎ奇麗な着物にかへ、髪も結ひ顔も洗つてうつすりと化粧を施こし清々と食膳に向ひ、何はなくとも快く酌みかはし、家事を忘れた浮世噺や、新婚當時に遡つた睦言に陶然と打くつろいで相樂しむのでした。之は近所でも評判で夫婦が身奇麗にする日は、ソラ今日は延さんの女郎事だと兒供まで噂するやうでしたが、今日考へて見ると餘程趣味のある方法だと思ひます。女郎事と云ふ名目は如何にも鄙猥ではあるが、慰藉を家庭で充分に實行して夫婦の情交を永遠に固める遣方は誠に價ある事でせう。

懸賞繪さがし　第四



おや、これは蜘蛛の巣に桐の葉がひつかゝつてる處ろですれ、夏の終ですから何かそこに止まつてゐるかも知れませんれ。

▲郞君は何故に妾を打たれしぞ

私の家で永く代診に使つて居た某が先達て結婚式を擧げた時私の友人が一場の演說を試みた。其演說に曰く「僕は偶然思ひ付た過去のののろけ話を以て今日の祝辭に代へませう。恥を言はねば道理が分らぬが、僕は外國に居た時親しんだ外國婦人が在つた。或時何かムシヤクシャと癇癪の起つた矢先、其婦人が氣の利かぬ事をやつたホンの詰らんいきさつで、彼の横面を打擲りました。すると彼女は一時間

程默してホロ〳〵と落涙して居た後、「郎君が最前妾を打たのは全く一時の疳癪のためであるか、或は妾に愛想が盡て打擲されたのか、何卒御胸を打明て下さい」と悄然と尋ねられたので、僕も聊か閉口して「ツリヤア無論疳癪紛れでやつたのだ」と答へた處「夫れならば誠に嬉しい、愛想が盡て打れたのなら、悲しい極であるけれど、一時の疳が鎮まる爲なら如何程打れても厭ひません」と言て頸に抱付れた時は實に可憐に堪へなくなつて自分の粗暴を悔る熱涙が湧き出たのでした。今日其婦人は念頭に無が、其塲合の感情は終生忘れる事が出來ないのです。俗曲を持出すのは甚だ失禮ですが、彼のおこま才三の淨瑠璃で「打て御腹が癒るなら思ふ存分ぶたさんせ」と言つたおこまの文句も是と同じ心術でせう。何れも鄙猥の分子を含んで直接のモデルとは無論ならないが、神聖の細君は此趣味を移したら誠に立派なものと考へます。良人に打擲されれば直にムシャブリ付くのは最劣等であるが、縦令抵抗せずとも内心憤怨煩悶して厭世的に考へ込むより、衷情より出でし前の如き處置は大に良人の心を和らぐるものでせう。是は僕が新婚の花嫁に向つて豫め希望する所である」と結んだ私は頗ぶる興味ある演說と傾聽したのでした。

杉山ドクトルは今回新たに神田區淡路町一丁目に胃腸病専門病院を開きたる人なり氏は本年四十六歳にして去る十九年大學を出で十四年前夫人秀子(卅五)と共に南洋に渡り木曜島、ジャワ、スマトラ等普く歴遊して醫術の傍ら眞珠の採取法なども傳へ歸朝後獨逸に赴きてロストック大學其他に學び昨年二月露の捕虜となりし濱口東郷兩少佐等のカンプローマン號にて送還さるゝに當り船中に一人の醫師なきを氣の毒に思ひ其船に便乘して懇に勞りたるなど興味多き歴史に富めるが氏の胃腸病に關する意見は他の醫者と大に異なる處ありて頗る嶄新奇拔のものなりといふ。

家庭文藝

避暑の一日

平塚白百合

あかつき深う目覺たればやり戸自らくりて欄によれば朝霧ふかく立こえて折々きこゆるはね釣瓶の音、近き森さへ見えわかずたゞはてもなき霧の海にあやうく掛る月一痕いはん方なくをかしきに何處にてか日ぐらしのすゞしき音して啼立しが興深うかの扇ならでもと撥もとさしまねき給ひけん折もかくやとばかり徐ろそのかみ忍ひ出でしが語らふ人もなき此處かゝるをり人のなつかしさも一しほにて。

生垣のほとり盥に水うけて雙掌に掬びあぐればハラ／＼と朝顔の花ゆらぎて美し水は手の中に。

よべ水やりつ數し蕾は大方開らきたれどまだ幼きは夢路よりかへらず傘の穗さきに似たるが可愛し。

露にうるほふ畦道を藁草履はきて草わけゆけば足元よりたつ虫の騒がしう、ゆるうゆくは平家がにおちつきたるはにくうあれど華成し屋島の浦忍ばれてゆくへ見送れば螢草のしげみと、葉のさゆらぐのみあとにして、

近き山の裾やゝ見えそめて蓮さく音すえならぬ香みちゝてちりの世に住われからそうとましと歎きぬ。

花は紅白水に低う高う廣き葉に露の玉受けて、なよなよと泥にそみず香ひたるが床しうハラリ散りし花片を手にうけてそと口づけぬ我もこれに似よとばかり。

足音におどろけば海水着の令孃二三人聲高にさゞめきて行すぎぬ。

海にはゆかでわざと道かへて小川のほとりに竹垣低き藁家一軒のきにかみ鳴干棹にかけられて撫子けし芙蓉朝がほの露にほこりて笑めるがいひ知ずうつくし。

一しきり蟬のころやがてはたゞ足もとをゆく小川のせせらぎしづけき響してちよろ／＼とそこの玉藻も見え透きて小魚の腹の白きなどいひしれず淸きに草履ぬぎすてそと足ひたし見ればしびるゝばかりの冷やかさ夜

のとばりは名殘りなうあけぬ。

かろきたもとをまかせつゝ下駄片手に井の端にゆけばかけひより落つる水のひやしたる瓜にあたりて寄べくもあらずしばしうきつしづみつうたれたる瓜の一つが苦しくやありけんあふるゝ水とまろび出でぬ。

今朝は數もふえ給ひぬはや近々にいえたまはんぞと乳母の、げに朝飯のうまき事よ。

昨日乳母と危き山の崖より取し白百合は文机の一輪ざしはにほひぬ何をがな友の許に便せんと筆とれば。

大磯より

いふはなめげなれど世にろうたき君がしばしの別れとは申せたゞわすれがたくて御あたりの事忍ばれ申候淸き渚の岩のほとり河原撫子などつみ給ひて浪路のはてはるぐ\と眺めたまはん御まなざしたゞなつかしくて。御病すこしは、怠らせ給ひてか此方は例のたゞ衣裝くらべにて候。

右かへし

こなたとてさしたる變りもなし御あたり如何と事につけ思ひやられ候折からの御文嬉しとばかり繰返しまゐらせ候げにうつしゑばかりにては事たらず候かな並びし百合に何をかさゝやきたまへる片頰の御ゑくぼ衣重げなる御かたのあたりつばさなきをあやしと存せられ候例の馬子にも衣裳とか振袖のをかしきが御許に候はゞみるめなき海女がうらぶれ姿御かくしあれな。

書くりたれどこれぞと思ふものもなしさしたる百合のうつむけること花瓶とれば水すこしへりたりさし加へつ。

あぐみたるまゝ背戸に出づればくろき男子のいとあつう頭さげて魚掬ひにゆかせ給はずやといふに乳母に帽子とらせて其儘同じ群にと。

新米の香のゆらぐ田のあせ西瓜のいたう並べる畑赤紫の芋畑など右と左に折て松林透して見ゆる白帆など眼も向けず。

水に入りて彼方此方掬まはるをそれこゝに否かしこにと、すごに滿てたる小魚重らかに汗ぬぐひながら歸れば乳母は驚きたるおもゝちしていたくもおそき御か

へりかないづくにかまかり給ひけんといふとこゝよとすご見すればお色のくろうなり給んにと高う笑ひぬ。

ひるつかた冷瓜すこし味あふ程もなう優子の君より珍かなる西瓜さがしあて候ひぬ必ず君の御口にも合ひ候はん御諸共にと手もつけずまち居り候。

いつもながら柔しき君が御なさけかな。

返り事まゐらせんももどかしく直に優子の君の御許へと。

都の友のうはさに枝より花はさきていつはつべしとも見えざるに西瓜ははや商うのこる方なくなりぬいざこれより海に入りたまはずやとはや立たせたまふにはれも御あとよりと。

タオルもたせて乳母と兩人通ひ馴れたるあせ道づたひゆきかふ人に面見らるゝがはづかしう帽子眞深に頂きてそなれ松の下を足早に、優子の君は水の中より招きたまふにいそぎ入ればかなた此方に見えかくれする帽子のかげしばしば岸邊に近ふひたりながら左手にかすむ洲の崎やほとり近き鷹の島ゆられながらに打まもりつゝ鏡の如き水の面にまかせたりしが忽ち大武岬のはなより黒煙長くたな引て汽船は次第に近づけり。

はれたる空にひゞき渡る氣笛二度三度と見ればはしけは岸をはなれたり。

優子の君はいそがしげに君よ露子の君の來給はんはあの船にてはおはさずやとのたまふにさても忘れ侍りしよとその儘手に手を取て港の方へひたすらに。

はしけは岸につきたり汽笛はなりて船は出でゆきぬ美しき人男女商人などつぎ〱に船をあとに車はしらせ、こは高に物などさゝめく船人露子の君は後に、やう〱輕き物などはこびまつれば船より降りたまひ小道具人にまかせつもる話もあとや先き絽縮緬の單衣にオリープの日傘うつくしき君と海水着に帽子一ッのわれら二人肩もすれんばかりに語りゆく嬉しさ病の身も何處にか忘られて。

かさ〱と松の茂りに盲縞の筒袖に赤きたすき帶にかへて縮たるが白き手拭もて黒髪のふさ〱と處に似ず色しろし熊手かく手の忙はしく。

さこそは心やすからぬ塵こそみねば病みもせまじとうらやまれぬ知らぬがほの二人無意識にものがたる。夕刻には二人にて御座けがしまつればとかたう約束とゝのへて露子の君は別莊に二人も各々わが家へと。

蟬は梢にたか鳴してなか〳〵暮んともせぬ日の恨めしくまき水などして素足のまゝに、かしこく廻るに一日ごとに色まさりゆく夏草堤いとふくよかに萩もはや花を見すらん尾花も招きそむらんと嬉しう生垣の朝がほの花かぞへつゝ足すゝぎて居間にもとれば母君より父上を初めまつり妹弟まで連立ちて明日一番との事露子の君の來たまひてだに嬉しきをまして父上母上なつかしの妹弟などうれしからざらん夕げもこゝろようしたゝめて優子の君さそひまつればあまりにおそきおこしなれば庭にいでたまへりとの事に案内たのむ程の事もなく、直に打つれて露子の君のおもとへと。

　蘭燈細う輝かせて露子の君はまたせたまへり何とてもなけれど、風月の松風處がらをかしうとかくに手のさしいだされて。

今しも月は伊豫すだれ透してほのめけば草むらよりすだく虫のこゑいざなひがほにすだくにふとさそはれて柴の折戸音せぬ程引あけて三人は家をいでぬ。

傾きかゝりし賤が家ともしは淡くのきにさける夕がほの白きが見えて稻田の上をとびかふ螢のかげ時々ほのめけるを團扇もて追へばかいくゞりてなか〳〵捉へられず漸々うちおとしたるよと見れば何ものか月に光れる口惜。

　さゞめきながら畷道つたひゆけば軈で海の邊りにいでぬ。

　清明の風徐ろに海の面を見たり。のたり〳〵と打よする浪のひゞき、松の下かけ白き衣見えてゆかしき薫の匂ひ身にしむばかりいひしれぬ美妙の思ひ胸に湧きそゞろ悠久高雅の念にうたれてしばし立どまりつ。

　洋々たる海の面を眺むれば船足ゆるき帆船一隻汀をはなれてうかび出でぬ梶の音ギリ、とわけゆくあとに月くだけてのこる一すじ艫聲かすけく欸乃のどかにつたはれて漁家の燈火二つ三つ水にひらめく。



家庭の銷夏法

佐治實然

すべて物には活動時期と靜止時期とがあつて草木の如き植物でさへ、春から夏へかけては成長し秋から冬へかけては休息するといふ工合に、萬物悉く動の後には靜がある。人間もそれと同じく年が年中さう時計の器械のやうに、働きづめにして居られるものではない。イヤ其器械ですら、時々油を差したり修繕を施したり爲なければ狂ひを生ずる様なものであるから、働いた後には必ず休息が伴はねばならぬ。畢竟この休む間は他日大に活動すべき精力を蓄養して居るので、決して無意味なものではない。況んや盛夏三旬の間は、一年中の安息日と稱して、西洋では富めるものも貧しいものも一般にそれ相當の骨休めをする。されば我國でも其骨休めすら出來ぬほど多忙で、生活難に追はれてゐる人達は已を得ぬ事であるが、然もない限りは身分相應の銷夏法を講じて、疲れた心身を養ふて鋭氣を恢復しなければならない。

△夏期の娯樂

大磯や鎌倉、乃至は日光、箱根邊へ避暑して贅澤な眞似をするばかりが銷夏法ではない。態々そんな遠いところへ出掛て行つて、過分な金を費つて冷遇されずとも、銘々の家で何人にも出來る樂な銷夏法はいくらでもある。まづ婦人の側から云へば、音樂もよければ繪畫もよい、又茶の湯、生花のやうなものから詩や歌をつくつて娯むのも妙である。けれども是等は不斷の趣味であつて、好な人もあれば不得手な人もあらうから、一般にといふ譯には行かないから、其邊は各自の随意にしたがよい。又夏期の讀物に就て彼是喧ましく云ふ人もあるが、私は夏だからとて別に特殊の讀物が出來

る譯ではなし、随つて平常との區別を立てる必要はないからうと思ふ。餘り屑の凝るものでなく不健全でない限りは、如何なる書を讀むも随意であるが、たゞ昨今濫出さるゝ小說類だけは避けたがよろしい。家庭小說なぞと銘が打つてあつても、其内容を見ると若い子女達に讀ませるのは如何かと思はれるのが多いから、之はいつそ家庭に入れぬとした方が間違がない。

次に家庭園藝と稱して近來一部の婦人間に植物を培養する事が流行して來たが、これは頗る高尙で且つ自然的の樂で、婦人の樂としては至極結構なものに相違ない。けれども都會生活をして居る人で、僅に五坪や六坪の空地がある位の家では到底完全な栽培が出來るわけのものでない、のみならず又非常に手數のかゝる事であるから、まづ普通中流以下の家庭には適さぬものと見なければならぬ。殊に夏一ヶ月や二ヶ月の間では猶更のとである。さらば如何なる娛樂を以て夏を銷すべきやと云ふに、私は一般の女子に最も適するものは手藝、即ち手細工物であると思ふ。造花も可し、編物も好し、一本の針とレース糸とを持てばそれが雜て窓掛になる。絹糸と編鉤とを持てば直ぐ肱突が出來る、銀貨入れが出來るといふ樣に、趣味がある上に實用にもなる。けれども人によつては、編物は根氣が詰ると云ふ。如何にも根が詰るだらう。側目もふらずにちつと坐つてする仕事だから、長い間には興味も盡きてツイ欠伸が出る。それでは銷夏法にならない。そこで私は同じ手細工の中でも、根が詰らず且つ多少運動にもなる糊物細工を女子にお勸め申す。

△娛樂的の細工物

糊物細工と云へば一寸經師屋の眞似事をするのである。それとて別に面倒な事ではなく、何人にも出來る竹行李を貼つたり澁紙を作ッたりするのである。而して其澁紙を何にするのかと云へば、夏分は大抵の家で疊の上へ澁紙、或は油團と稱するものを敷く、即ちそれに用ゐてもよければ又女子が裁縫時に是非なくてはならぬ敷紙にしてもよい、其他用ゐる處は幾程でもある。

中には爾那物買つたつて多寡が知れたものぢやないかと云ふ人もあるか知らぬが、それでは全でお話しにならぬ、元々金儲けや人に頼まれてやる仕事ではなし、どうせ遊び半分で行るのだから責任もなければ日限もない。之を普通の仕事と思つてやつては面白くないから、出來たらよし、出來なければ又來年といふ樣に、極く暢氣に構へてやつてこそ其處に興味もあらうと云ふもので、務めと考へては銷夏法にはならぬ。



この女は何を考へてゐるでせう？」つくれんとして物思ひに沈んでゐる處ろは、懸賞小説の挿畫に適當ですなア。

懸賞繪さがし

第五

そこで澁紙の製法は、敢て詳しく説明するまでもなく、糊と刷毛と紙とがあればよろしい、其紙も新に買はなくとも家にある反古紙で充分間に合ふ。天氣のよい日に、張つては乾かし乾かしては張り、それに澁を刷いて五日もかゝれば樂に一枚は仕上がる、又多少繪心のある者なら、澁を塗る前に好みの模樣を描いて油圖を製るのも妙である。

前にものべた如く、荒物屋で購へば價は些かなものだが、それと是とは趣きが違ふ、自分が手づから拵つ

た物が五年も十年も役に立つと思へば這個に一種の愉快が伴ふ、加之腦を使ふ仕事でもなければ骨の折れるものでもなし、唯だ糊と刷毛さへあれば、十五六の少女でも六十歳餘の隱居さんでも、誰にでも出來る平民的の娯樂仕事である。殊に女學生などが夏季休暇の歸省中、夏座敷の涼しい處でやるには適當の仕事で、一二ケ月も居る間に澁紙の二三枚も作つておけば、自分が再び上京した後でも、阿母さんがそれに手織の衣服を包んで、小包を送つてくれるとか、或は栗や柿が實れば其容物の上被にして寄越すとか、何彼につけ用に立つと共に、其間の情趣は實に金で購はれぬものがあるに相違ない。

尚ほ此外にも澤山の銷夏法はあるだらうけれど、趣味と實益と運動と、かう三つ兼ねたものは一寸類がなからうと思ふ。（衛生筆記）

家の修飾法

今西桃里子

三、客室は如何に修飾すべきか

客室は賓客を招ずる所であるから奥ゆかしうて禮儀に叶つた修飾法が必要である。蓋し應接室は大體西洋流の構造が最も都合がよいのであるが之れに反し客室は疊敷とし、床の間、違棚などを設ける、即ち日本風がよいと思ふのである。或は習慣の勢かは知らぬが客室の西洋式は何んとなう心が落ちつかぬような氣がする。やはり日本風の方が奥床かしくて穩である。元來客室の修飾は究屈でないように而も禮儀を缺いてはならぬ、彼の贋筆の幅物や鍍金の床置などは用ゐぬよう心すべきである。生花は最も妙である。座蒲團も清潔でふつくりとしたものを用ゐ茶道具なども拭き清めて置くのがよい。また前栽の眺めよろしく、室内には寫眞帖繪端書などの高尚な品を備へて客を慰めねばならぬ。之れを要するに客室は從來なし來りし修飾法が

今日も猶適當であると思ふ。

四、小兒室は如何に設くべきか

元來家は子供のものでなければならぬと思ふ。余は子供主義、子供本位の家庭を希望して已まないのである。彼の燕が軒に堅い土藏を造るのも蜂が樹間に美しい巣を營むのもいづれも我が子のためではないか。之れと同じく可愛い子供のためには十分の設備をしてやらねばならぬと思ふ。建具などに美を盡し骨董に高價を拂ふなどは子供には何んの役にもたゝぬ。それでこんなことは後廻しにして先づ子供室の設備をすることが一家の本意ではないかと思ふ。さればこの子供室を如何に設くべきか、こゝもまた疊敷とし其上に室一杯の段通を敷くのがよいと思ふ。雨の日など此所で坐り角力などしても差閊のないように床も二重張にし室内はすべてが質素で而も丈夫にするといふ心得が必要である。さて床の間には世界地圖などを揭げ、また長押には英雄や豪傑の肖像をかゝげて置きたい者である。それから動植物の標本、圖畫、或は教育的の玩具など一わたり備へつけたい。すべてこの室内の掃除や器具の整理は子供ら自身に任せて父母はあまり干渉してはならぬ。何んとなれば之れ彼等に獨立自治の精神を養ふことの最有効なる方法であるからである。之れを要するに子供室の修飾は教育的でなければならぬと云ふのである。

五、庭園は如何に造るべきか

日本の庭園は一種高雅幽妙の特色があつて常に外人の賞賛するところであるが、あまり幽妙に過ぎて快活でない。樹木なども常綠樹が主であるから庭の變化に乏しい、何時もお定まりの庭である。即ち活動的でない。今少し氣候の變遷、四季の移りかはりを庭の面に現はれると云ふようにありたいと思ふのである。そこでまた本邦の庭は老人向であつて小供には解せられない。殊に茶庭式の如きは高雅すぎて猶更子供には趣味も何もわからぬ。前述の如く家は可愛い我が子のためのものであるなれば子女のためにもそれ相當の庭を築いてやれば面白いと思ふのである。そこで先づ庭は可

成廣く快活に其前面には花壇を設け草花や灌木を培養し、また一座の草庭があつて茲には鞦韆の如き運動の器具を配し次に花樹落葉樹などよろしく最後に常綠樹を植ゑ並べて奥深かるようにしつらひたいものである。落葉樹を窓近ふ植ゑる如きは夏は綠蔭を作りて暑さを防ぎ冬は葉が落ちて日光を導くから暖でよいけれども之れに反し中庭などに常綠樹を所狹きまで植ゑ並ぶることは一家を陰鬱ならしめて却りて衞生上よろしくなからうと思ふ。

それから若し家の周圍に空地があるならば蔬菜や果樹の栽培をしたいと思ふ。このとは一家を美化する上からもまた生計の上からも利益があるし、また子供をして樂しき我が家と歌はしめることが出來る。妹がめでしすみれの色こそあせつれ、姉のたけにもまさる芙蓉の園にまたも撫子の花が咲いて母のめぐみの露しかく甘いちゝの實の枝もたわゝになるなど家庭の愛を深からしめるものは我が庭であると思ふ。



故三輪田勢以子夫人

鈴子手記

温容玉の如く、清操雪の如き三輪田元道氏夫人は、未だ三十路に足らぬ御身を以て病魔の襲ふ所となり、偕老を契りし最愛の良人、萌え出る若草と樂しみし幼き二人の愛兒、師と仰ぎ母と慕ひし姑御を殘して、去る六月八日湘南の療養地に永眠に就かれました、記者は限りなき弔意を表し、且敬慕すべき夫人の平生を伺ひたいと存じ、元道氏を御尋ね致しました、其日は梅雨過の長降り未だ止まず、御庭の紫陽花色稍あせて、首垂れし桔梗と主なきを相歎つが如く、途切れ〳〵の雨蛙の聲、飛石に落つる雨滴の音、皆斷腸の媒ならぬはなきに、仄暗き應接間に凋然と記者を迎へられし元道氏に對しては萬感狹き胸を衝いて何と申上やうも

御座いませんでした。氏は夫人の御永眠當時より俄かに發熱して痲疹に罹られ、未だ本當に御肥立にならぬ内に令孃が傳染されし由にて、隣室には咳嗽入つてむづかる令孃を賺しなだむる眞佐子刀自の御聲も漏れ聞えました。氏が亡夫人に就いての御話を一二紹介致しませう。

▲笑顔は死に瀕するまで

私の妻は始終笑顔を以て人に接して居まして、母は勿論下婢に至るまで妻の怒つた顔を一遍も見た事は無いと言て居ました。併し時として子女訓誨の爲め微憤する事が無いでもありませんが、それは私以外に誰も知るものは無かつたのです。今度病床に就てからも大患とは自覺して居たのでせうが、矢張平生と少しも變らず、醫師や看護婦に向つても『私は妊娠中に肋膜炎に罹り、出產後七十日目に生兒を失ひ、又此度肋膜炎に侵され重ね〲の災厄で身體も疲れましたから、思ひの外病氣も永引き、皆さんに御厄介をかけて御氣の毒で御座います』なぞと申す態度に毫も悲哀の氣振が見えず、莞爾〲と致し乍ら物語つて居ました。病が革まつた頃、兒供を連れて療養地鎌倉へ介抱に來つて居た母は學校の方を永く明け兼ねるので一先づ歸京しようと致したのは死ぬ前々日でしたが、妻が『私は最早別に苦痛も無くなりましたから、東京の宅へ歸つて見たいと思ひます』なぞと申し、例の通り笑顔を湛へて居ましたので、母は如何しても死ぬ病人とは思はれぬ、あの通り晴々しい顔付であるから必ず大丈夫であると信じて歸京した位でした。妻は嗣地獸當師の學校にも、明治女學校にも居ましたから佛敎も基督敎も聽ては居ますが、何れにも拘泥する事はなく、爲に儒敎主義の母とも信仰上の衝突がなかつた位、極淡白の方で信仰の力で死を諦らめると云ふのでは無かつたのでせう。唯平常清い濁りなき性質であつたから死期を自覺しながら毫も煩悶がなかつたものと見えます。

▲子に對する愛の熱度

妻は彼様に無頓着無神經の様でありながら、却々感情的の婦人でありました。就中子に對する愛情は實に

深かつたもので、爲に比較的子供には怒つた事もあり、療養中も子供の事は時々噂も致し、死期が近いてからも、『郎君が子供を可愛がつて下さるから私は毫も心配が御座いません』と言ひ續けて居り、又心臓痲痺を起して精神が少し錯亂した際に、蒲團の高くなつた場所を擦つてよし子さん、大人敷なさいとか、元也はもつと此方へ寄りなさいとか言つて居ました。三歳の弟の方は特に妻が愛して居たのです。妻が病臥してから母も忙しい乍ら世話をして呉ますし、下婢も六人居て不自由もありませんけれども、細かい世話は私が自分でするのが好ですから、夜半の尿などに至るまで人手を賴まず總ての面倒を見てやるので、子供が非常に私を慕つて居ました。亡後は尙更附纏ひ、授業に教場へ出る事の外は跡を追ふて困る位になりましたが、亡妻の心を思ひ遣つては出來る限り自分が世話を爲たいと云ふ考へです。近頃は長女の髪結ふ事まで自分で遣て居ます。

▲潔　癖

妻は服飾を飾つて人と交際したいと云ふ風は毫も在りませんでしたが、此學校が是迄になるに就ては矢張私共と一緒に勞働したのですから、奉公人のやうではあるが、近來盆暮に衣服料として五十圓位づゝ遣りました。妻は悉く之を貯金して置たので、亡後に調べましたら二拾圓だけ使つてありました。此家へ來てから日本髪に一度も結た事はなく、又白粉を一度も搽けた事はありませんでしたが、身のまわりを極清潔に保つ方で、病臥しても髪を結ぶ事は一日も怠りません、追々危篤になつてからは看護婦に毎日束ねさせて居ました。

▲嗜　好

性情や嗜好の點に於て夫婦は似た者より、似ぬ者の方が却つて都合の宜い場合があると思ひます。一寸した例が食物でも私は油濃い物が好きで、妻は淡泊の物を好んだので、共に食卓に向つた時、皿にある料理の中殘した物を互に食べ合へば丁度よいと云つた樣な風でした。それから妻は音樂が非常に好きで鎌倉に療養

中、望に依てヴワイオリンを送つてやりましたら大喜びで始終彈いて居り、死ぬる少し前にも仰臥し乍ら彈きましたが、最早彈く力も失せて微かに音曲が分る位でした。私は元來音樂には極無趣味な方でしたが、妻の嗜好に染れて少しづゝ耳を傾け出し、音樂會なぞへ往て見る氣にもなつたので、女子教育上少からぬ參考となつた次第です。庭に草花を培養する趣味なぞは、母も私も妻と一致して居ました。



▲常識の教師

私は凝り性で、以前は讀書なぞも夜深しする程與に乘るのでしたが、『餘り夜深しばかりなさると御身體に障りませうから、成る可く早く御寢なすつて朝早く讀書なされたら宜いでせう』と妻に屢々忠告されて追々此癖が直り御陰で腦も惡くせずに濟みました。又私は如何なる事でも克己でやり通す性質で、煙草は極好で飮だすと續けざまにやる方でしたから、衞生を害すると思つて斷然禁煙しました處、妻が『少しづゝは召上つたつて宜いでせう』と勸めたり、又私の家庭では日本酒を用ゐぬ事に定てありますが、旅行した際などには『少し位召上つたら如何です』と勸めたりしました。斯樣風で萬事私の偏した性情を程よく融和して呉れましたので、私を常識の人間に導いて呉れた樣なものでした。

▲忘る可からざる遺訓

病中は土曜から日曜へかけて尋ねてやりましたが、

私の往やうが少し遲いと電話で催促いたし、水曜日位には必ず葉書を寄越して待ち兼て居ると云ふ風でした。其最後の葉書の中に『私の留守中は何卒例の癇癪を起しなさらぬやう願ひます云々』と書て寄越したのです。私は直ぐとなほるが一寸人に怒り付るのが癖で、例之ば教員が遲刻でもすると、教員の分として遲刻しては生徒に示しが出來ませんと突然ガミ〳〵遣、生徒にも其通り何樣も輕卒に鳴付る癖があつて、自身では左程惡い事とは感せず、怒るのは正道であると信じて居る位でしたが、妻は非常に氣に掛けて居たと見え、此葉書の文句を遺訓として死にました。私は此遺訓を終生忘れまいと感じて居るのです。

▲講義の標準

一寸可笑い樣ですが、私は從來生徒に向つて話すにも文章を書くにも、暗に妻を標準にして居ました。前に申す通り妻は始終笑顏を以て迎へたのが餘程家庭に益したと感じた所から、婦人には是が必要であると云ふ持論となり、一點の濁りなき性質を快く感じた所より矢張婦德の講義中に載せ、別段勝れた點もなく目立た行動も無いけれども、常識の圓滿に發達して居る妻が尤もよく家族を愉快ならしめた實驗より是も話題となると云ふ工合でした。他に向つては決して妻の事を話すのではないが、私の腦裡には何時も妻が標準になつて居たのです。

▲永別後の感

グランド將軍は亡妻の墓前に涕泣したと云ふ風に、西洋の詩人や豪傑は亡妻を慕ふ事を文章や行爲で遠慮なく世に現はして居ますが、東洋の風習特に武士氣質では何か耻辱のやうに思ふて勉めて此追慕を隱蔽して居ます。併し偶には正直に感情を發表する人もあつて、伊東仁齋の詩文中などにも亡妻を懷ふ作を見たと思ひます。一體これは充分に言ひ現はして差支へないのみならず、人生の美事に違ひありません。私も此頃幾分か厭世的になつて何を書ても其方へ引着けられて了ふので、新體詩や和歌なぞ悲觀的のものが多く出來る、一寸筆を持と不知々々跡から〳〵幾つでも浮み出し、

大層歌よみになつたと云ふのは、正直に申せば忘るゝ暇がないためで在りませう。左様ですなア子を失ふたのと妻に別れたのとの悲は、境遇にも依り又平生夫婦の情交に依て大に異りませうが、一般に悲哀の程度は同じ位でも性質が異ふだらうと思ひます。私は妻の死ぬる前に幼兒を失つたので、二つの感じを味ひ何れとも云ひ兼ますが、子供より妻の方には氣の毒と云ふ追懷が多いのです。尤も妻に對しては家庭に於ける煩悶も與へず、病中も心殘りなく大切にしてやつたから遺憾は無いのですが此校を斯く盛にするまでに他から一錢の助も乞はぬかはり、私共は實に非常の勞苦を嘗たので、妻も嫁してより吾々母子



と刻苦を共にして內助に勉め、時としては私が跣足の儘で食事もする、妻は茶を飲加減にして持て來ると云ふやうな百姓的生活も暫らく續けて、奥様風もせず、交際にも出歩かず、彼の天性上別に苦痛もなからうが、若盛に燻つて居た事や、近來與へた衣服費も自から節して貯蓄せる心術や、熱愛する二人の幼兒に多大の心殘りが在つたらうなどと云ふ、他から考へると詰らぬ事柄も皆氣の毒の追懷となるのです。妻の亡骸は舊來所有の墓地へ假に埋葬して置きましたが、何だか共同的の場所へ置くのが氣の毒で、割合高價の金を拂つても新たに墓地を買ふ心になつたのは、吾ながら愚痴に陷つたのでせう。過日も或る遠

方の知人が繁務の中をわざ〱墓參に上京された時なぞは、不思議涙があふれ出た樣な次第で、何時も妻の遺物を見る度に如何しても落涙を禁じられません。斯樣に悲觀的になつて居る爲に例の癇癖が時々起るのですが、其度に妻の遺訓を思ひ出して直に抑制して居るのです。

▲新婚と永別の紀念地

妻は廣島在住の軍人、森豊の長女で、明治十三年に生れ（私は明治六年生れ）政子と呼んだのですが、私の家へ來てから母と同名で不都合なのでせい子と呼びかへたのです。妻は品性が同胞中一番高尙溫和であつた爲か、親に尤も愛せられ又尊敬されて居ました。明治三十四年に丁度私も媒酌人も名古屋で落合た都合上同地で、結婚式を擧げたので、今日まで名古屋を二人の紀念地として懷しく感せられ、妻と共に旅行の際は必らず名古屋に一泊する事に定て居ました。今まで深き紀念地であつた丈け爾後は決して彼地を踏むまいと思ふ程悲しき名古屋となりました。又永別の地となつた鎌倉も其通り、今迄毎年家族一同避暑に參つた土地ですが、爾來足踏するのも厭になつたのです。

▲初婚と再婚

私は元から婦人が再婚せぬのを貴いと感ずると共に、男子も事情の許す限り再婚せぬ方が可いと云ふ主義なのです。西洋で再婚が行はれて居るのは、再婚婦人が割合社交や家政整理に熟練して居る便宜上もあり又日本のやうに複雜な家政制度でないから都合宜く行くのでせうが、日本では遺子を愛すると共に、同棲する親兄弟にも前妻同樣氣に入らなければならぬと云ふ點もあつて却々困難であります。縱令此困難もなく世故に長けて居る者としても、それは便宜上の問題で互に初婚の如き愛情は如何しても得られぬのでしやう。初婚は互に世故には缺點が多くとも愛情の印象は深く腦裡に刻まれてあるから、方便の意味を含む再婚とは霄壤の差があらうと思ひます。

▲母堂の落膽

世間では母と妻との間が如何であらうとかの噂もあ

つた相ですが、母が理性の人であるから或は他から左樣見えたかも知れません、併し母が理性であるために、妻は母を敬慕し、母は實子の如く愛して調和が極宜かつたので、今回母は非常に落膽したのであります。母は哀別と共に善後策に就ても心配して居るので、私が子供等に附纏はれて公務を妨げられる事や、女學生を預る私しに妻なきは信用上大いに不都合である事より考へると、如何しても後繼者を迎ゆる必要はあるけれども、實子の如くあつた妻と同じ樣な後繼者を得る事の難いのみならず、私の苦痛も充分推察して居ますから餘程煩悶して居る樣子で誠に氣の毒に堪えません。



▲近作の和歌

私が近作の和歌は

亡き妻の、植し草花、咲きにけり、
折りて手向ん、その奥城に。

のこる子の、行く末のみを、夢みつゝ、
失せしわが妻、われは忘れじ。

父君よ、手をかせと言ひて眠るなり、
母なき子等は、あはれなりけり。

腸を斷たる思ぞ、知られける、
妻逝き子疾む、さみたれの頃。

修學時代の感想

（首相の令嬢と語る）

雪子

昨年毛利家より西園寺家に養子に行かれた八郎氏と華燭の典を擧げられた新子夫人、今は玉の樣な男子を設けられて愛らしき若き母君となられましたお邸宅は芝城山町のいと閑靜なる所にあり、御夫婦の仲睦まじう、家庭は長閑で和氣靄々たり、數人の女中にかしづかれ給ひぬ、さあれ夫人は深窓に育ちて箸より外重いものを取らないなどいふ古流のお姫さま風はなく、當時のあらゆる新教育を受けられ、學科としては佛語、英語をはじめ、洋琴や、洋畫を修め、女子大學を卒業され、快活にして愛嬌あり、聊も高ぶらぬ方です。

夫人の就學

首相なる父君にはたつた一人のお子樣、げに掌中の玉と愛で給ふべき頃膝下を離れて學の庭に通ひ早くも外國語の修業に心を傾けられました佛英和學校に入學されたのは、おかつぱさんの時でありました、始の程は暫し、年寄の附添が居ましたが間もなく寄宿舍に起臥されるやうになりました。

學校生活

此の學校は外國婦人監督して子供に最も親切ですが兎に角學校の規則として起床就床の時間等が嚴しうございますから、家庭で甘かされて、育つた人が寄宿するは何より辛いのであります、然るに夫人は五歳で父君に辭ひ、寄宿に居りて、他の生徒の如く、日夜學校規則を守りて入られました、外出の規則は一週一度しかも日曜には駿河臺又は大森大磯の邸宅に歸りて父君に面語さるゝを例となされました。

「昔の事を思出しますと、實に可笑しうございますよ、昔私の形見が今でも學校の柱に殘つて居りますと、當時の先生方に笑はれますよ」と夫人は微笑された、「其れは又どんなお形見でございます」とお尋ね申せば「或る時私は家に歸りたくて〳〵何う致しても辛抱が出來ません、先生方が種々とすかして下さいましたが、

誰が何と仰つても耳に入りません、たゞもう、家に歸り度いと思ふ一念に驅られまして、迎ひの者の來るのが待ち遠うなのでとう〳〵杜をかぢつたんでございます、その跡が今でも杜に殘つて居りますから、學校に行つて見ます節にはそれがからかはれる種となつて居りますと申されました。



夫人の利發

夫人は元來利發の性質ですから佛語、英語は同時に學び、日本學科は小學敎育より該校の高等女學科までをお修になり、上達の速で入らせられるには敎師方も餘程感じて居られたさうで厶います。十六歳の夏佛語、英語と高等女學科とを卒業され、續で女子大學に入學して、猶も外國語を深く修んとの熱心より佛英和學校へ特別敎授を受けつゝ通つて入られました。

夫人は今年二十歳ですが、首相なる父君が早くから敎育の道に熱心せられし爲に讀書を嗜み、特に佛蘭西の文學書を數多貯へて入らせられます、記者もよき折と本箱の中から數册を拜借致しました。

夫人は身の丈も高い方で可成肉づきもよくて入られますか俏身な姿で『餘り私は丈夫な方でもありません』と申されました、御髪は束髪で長閑な空に笑顔をあぐる花の顔ばせ、高貴の家柄にお生れに成つた方

にも係らず、人に對するには誠に謙遜な方です。
佛英和學校は華族、平民、外國人の子女、雜種兒等の入交りの學校で、結局生徒は一般に平民的であります、夫人は其當時該校にたつた一人の公卿のお姫さまでありましたが、よく他生徒等と親しく交際を結ばれて、華族振る所とては露だに見せず、寧ろ容易く人々の近つくのを悦んで居られましたから、食事も他の生徒等と同樣に、西洋料理を用ゐ、たゞお好みの折に偶に日本料理にされる位のもの、生徒日常の練習として掃除する時は一緒になつて活潑に掃除されました。
「老人から昔の話を聞きますと、華族の婦人は實に想像も出來んほど窮屈なものと思ひます、庭を運動致すにも家に居る時にも外出の時にも必ずお供が付くと言つたやうにまことに柔和なものでしたから其の擧動が自然不活潑で、又左樣でありませんと華族らしくもないと云ふやうな譏を受けましたとか、聞くさへ私はぞつと致して參ります其樣な時に私は生れませんで幸福と存じて居ります」

書籍と洋琴

「書物は一寸入用の物ばかりを此處に持つて參りましたが大抵のものは大磯に置いてあります、洋琴も側に置きたいと思ひますが、邸宅が定つてからにしやうと思ひまして矢張大磯に置いてあります」「旦那樣は音樂をお好みですか」とお尋ね申せば「否へ、餘り好きません、私が洋琴を彈でますと兎や角う批評ばかり致して居りますよ」

遊獵

「良人は獵の期節が參りますと銃を肩に、獵犬を連れて遊獵に出かけます、之れが何よりの樂しみだと申して居ります……ハイ、鴨、鶉、雉、兎等を取つて參りますが、家では餘り戴きませんで皆他家へ上げてしまいます、自分も食くよりは取る方が面白いんです、……私は鴫、鶉は甘味く戴きますが、兎や雉は些と香があるやうに思はれまして餘り好みません」

首相の多忙

「父は官舍に居りまして、暇がございます時は駿河臺

の邸宅に歸ります、却々其の暇がありません。或日私は父に會はなければならない用事が出來まして朝早く參りました所が、もう客來で會はれずに歸りました、晩は必ず邸宅に居られると申ますから、次の日には夕刻參りました所が、御用でお歸りが遲くなると申され又會はれずに歸りましたで明日は乾度お歸りと申ますから、翌日又其時刻迄に參りましたが又々議會でお辨當をお取りになつてお歸りないとの報で、三日續いて會はれませんでした。……父は餘り體が丈夫ではありませんが總理になつて忙しくなりましてからは却て平常よりも丈夫になつたやうです」

父君の御嗜好

「ハイ、父は忙はしい間にも文學特に俳句が大好きで熱心に致して居ります、壯年の時は長年佛蘭西に遊學いたしました、佛語の書物なども度々繙いて居ります、私も數多佛語の書物を貰ひました。」

首相の御年は五十九歲と承り記者は「お若く見上ぐるは失禮と申ますが、私はお寫眞を拜見致し、御父君樣は四十五六位にお出遊ばすと存じました」と申ました所が、夫人はほゝ笑まれて「大層若く御覽になりましたね、今度父に會ひましたらばさう申ますよ」と仰せられました。

良人の精勤

「良人は毎日橫濱の正金銀行に勤めて居ります、宅からは八時に出かけます、時々新橋から父の方へ廻つて歸る事もございます、今年の暑中休暇ですか、私は何處へも參りますまいと存じて居ります、銀行では、一週間の休暇を各自好きな時に取つて休むさうですが、八郞は獵が大好きですから、今度の暑中は休まずにその代に獵時になつたらば休暇を貰ふやうにすると話して居ります。

御主人は數年間獨逸に留學され、至極平民的なお方で入らつしやるさうです。

（完）

○季節料理

龜井まき子

魚肉でも、野菜でも、種類を多く用ゐずに、いろ〳〵變つた風味に拵らへるやうにと、献立を致しますから、其お積りで御覧下さい、又斯様に少い品数で、變つた種類の物を、拵らへるのが、時節から家庭で、お試しになるに、適當であらうと、考へます。

献立

一椀盛　吉野海老　さき松茸　糸白瓜　口そぎ柚
一酢の物　そぎ鮑　海打白瓜　背びらき海老　せん生姜　甘酢かけ
一口取　鮑鹽むし　海老瓜ずし　さい形玉子
一丼　月見なぼろ
一香の物　白瓜印籠づけ
一菓子　割氷かけ　せん切金玉糖

△椀盛の汁の製法は煮出しを鍋に入れて同時に凡五人前の汁（即四合五勺位の分量）ならば鹽を茶匙（咖啡匙の事をいふ）に二杯入れ煮立ちましたら水を五勺程入れ又煮立ちましたら醤油を凡二勺少し餘も入れて直に鍋を卸さなければ味が變ります。

一よし野海老　は海老（さえまき海老か車海老をよしとす）を頭から尾に串をさして鹽煤でとし尾を殘して頭及皮をむき腹を眞直に切りて背腸をぬき葛粉を兩面にふつてよくたゝき沸湯にてざつとゆでゝ水を切つて椀にもるのです。

一さき松茸　は此頃は八月頭に走りの松茸が出ますから一品走りものを使ふ爲に入れたのです、これは松茸を鹽水につけて一時間もたちましたら皮をよく摩りとりまして石突を切り手にてさき一寸餅網でやき椀にもるのです。

一糸白瓜　は白瓜を長さ一寸位にきり皮をむき横にむき廻して核の所迄をむき止りとしてくる〳〵とまき夫を竪に薄く切りて鹽をふりそき卅分もたちましたら沸

湯でざつと茹て笊へあげ水氣をきつて椀に盛のです。
一口そぎ柚　は柚をよく水洗ひして皮をへぎとり椀盛の中へ入れるのです。
此四品を椀にもり前の汁をかけてもり出すのです。
△甘酢のこしらへ方は白味醂を煮立て例へば一合の味醂ならば五勺に煮詰め卸し際に鹽を少し（例へば一合の味醂を煮詰めた時は鹽が茶匙に一杯の割）入れてさましてをき升、さめ切つたら其中へ酢を凡三勺位もさしてよくかき廻してをくのです。
一そぎ鮑　は鮑の貝殻から肉をとりよく水洗ひして大根で鮑の廻りをよく叩き凡卅分許もたつとどろりと軟かくなり升夫から腸をとり廻りを又切りとりて出來る丈薄くへぎとり鹽をふつて卅分もをき夫から沸湯でざつとゆでゝ笊にとり水氣をきつてをくのです。
一薄打白瓜　は白瓜の皮をむき竪に二つに切りて核をよくすくひとり、薄く切て鹽をふり一時間も經たゝましたらよく水洗ひして堅く絞り酢をかけてをくのです。
一背びらき海老　海老を鹽茹として尾を殘して頭と皮とをとり背から二つに切つて背腸を拔てをくのです。
一せん生姜　生姜の皮をむきせんにきり水にはなしてをくのです。
此そぎ鮑と薄打白瓜と海老とを皿へもつて上へせん生姜をのせ甘酢をかけてもり出すのです。

△口取

一鮑の鹽むし　は鮑をよく水洗ひして貝殻から肉を剝がし徑五寸位の鮑三個に水一升五合鹽一合位で四時間も煮るのですそうしますと箸でちぎれるやうになり升からよく微温湯で洗つて腸をとり又廻りをもぎりとりて薄く刺身のやうに切つて皿へもるのです。
一賽形玉子　は海老の頭尾皮をとり背腸もぬきましてよくたゝき擂鉢に入れてよくすり、玉子一個を入れてすり又一個を入れてすりまして夫から裏漉しをして此中へ又玉子を入れてよくかきまはし煮切（味醂を煮つめたるものなり）と濃き煮出しと醬油をませ玉子燒鍋に油をしきて火の上へかけ、燒たる中へ入れ上に火皿（火皿とは火を入れる亞鉛製の淺き箱なり普通の家にはなき道具なれば此の代りとしてブリキ製の塵取を用

ゆ）に熾りたる火をのせ上火をつよく下火を弱くしてやき又やき上りたらば爼板にとり此燒たる玉子の厚さと同じ位にさい形にきり皿に數よくならべてもるのです此海老の肉と玉子の分量は海老をたゝきたる分量が茶呑茶碗に一杯ならば玉子が十個煮切が同し茶呑茶碗に三分の一煮出しが半杯醬油が同し茶呑茶碗に三分の一位でよろしう御座います。

一海老瓜ずし　は海老の頭から尾にかけ串を通し鹽を入れたる沸湯にて茹で串をぬき尾を殘して頭と皮をむき腹を裂いて背腸をぬき鹽酢に少しつけてをきます又白瓜の皮をむき核をぬいて細かに切つて鹽酢につけてをき升のと又白瓜の皮をむいて卸して鹽酢につけてをきましたのと兩方の酢氣をよくしぼりてませ合せ適宜に握りて上へ鹽酢につけた海老をのせて前の二品と一所に皿へ都合よくならべてもるのです。

△丼

一月見をぼろ　は海老の頭尾及皮をとり背腸もぬきてよくたゝき味淋と醬油と半々に入れたのを煮立てゝ其中へ入れざつと煮て又細かくたゝいてをくのですそれから殘つた煮汁の中へ其分量と同し位に煮出しをさしよく煮立ちましたら葛を少し溶して煮汁をかき廻しながら葛を入れるのです之をたゝいた海老の上へかけ又別に沸湯へ鹽を少し入れた中へ玉子を割つて入れ白味の色が替つたら直に網杓子ですくつて前の煮た海老に葛のかゝつた上にのせ丼にもつて出すのです。

△香の物

一白瓜印籠漬　白瓜の上下をきりとりて中へ箸をさしよく核を抉り取りて中へ鹽をふり二時間程押石をのせてをくのです又靑紫蘇の葉を二時間許り鹽につけて水があがりましたら堅く絞つて前に漬てをいた白瓜の中へつめて又鹽をふつて押石をしますと十時間程たち升と水がすつかり揚り升から押石をとつて輕く押石をして夫から適宜にきつて皿へもるのです。

△菓子

一せん金玉糖　は角天を凡四時間も水につけて別に鍋の中へ水を入れて火にかけるのです此分量は角天一本水二合五勺の割です、此角天がよく溶けましたら砂糖二百目(但し角天一本についての分量)を入れ砂糖がとけましたら裏漉をして又鍋に入れて煮つめて夫から四角なもらない箱に入れてさましかたくなりましたら此箱から靜に爼板の上にあげごく／＼細く引まして皿にもり削り氷をかけて出すので御座い升。

最も興味ある—夏の室内遊戯

夕凪舎

西洋風の遊技で既に日本の家庭に入つて、可なり流行してゐるものには、卓球がある。けれどもピンポンは、まだ中以下一般の家庭に採用せしむるには、費用稍多きに過ぐるといふ缺點と、九尺二間の間取には、ちと場所塞げになるといふ嫌がある。さうして起つて行るといふ遊技が、坐居するやうに建てられた家屋に適しないのと、坐居するやうに出來た衣服にふさはぬといふ非難もあらう。こゝで紹介しやうと思ふ投扇戯（一名扇落し）は、我邦で發明せられて、一時は却々流行したこともあるが、今では人々忘れて、かの聞香或は楊弓などゝいふ遊戯と共に、一部好事者の間に殘つてゐるだけで、殆ど全く廢つたと言つてもよい。併し投扇戯は爾早く捨るべきものでは無い、また坐居的家屋と衣服とが存在する限り、行はれ得るのみならず、隨分洋服を着て玉突臺の上でも卓の上にても、又は長椅子の上でも、容易く行はれる遊技で充分の興味と運動の效能とは、決してピンポン、ビリヤードにも劣らぬ長所を持つてゐるものである。

投扇戯の始まりは安永二年のことであつて、南蠻や和蘭から學んだといふでもなく、又支那朝鮮から敎はつたといふでもなく、浪華の投東散人其扇といふ人が『水無月の炎暑に堪へかね、晝寢の夢覺めて、席上に殘せる木枕の上に、胡蝶一ッ羽を休む。其扇傍に在りし扇を取つて、彼の蝶に投げ打てば、扇は枕の上に止まり、胡蝶は遙に飛び去りぬ。そのさま久しき手練なりとも、斯くはあらじと、我ながらいみじき事に覺えて、今一度と扇を取つて幾十返りか之を投ぐるといへども、枕の前後左右に落ちて枕上にとゞまらず。之より投壺の遊を思ひよりて、通寶十二字を懷紙に包み、枕の上に置いて、扇を彼に投げ、勝負を爭ひぬ。』とある。右の文中、投壺といふは、支那上流社會の遊技で二人が一つの壺に對して坐し、各三本の矢を投げ入れ

て、其點數によつて勝敗を定むる法である。即ち其扇は實際に會得したものぞ、投壺の事を知つてゐたので、それに依つて更に一ッの法式にあらはし、彼の貴族のみの娛樂なるに反して、此は上下貴賤何人にても樂み得らるゝといふ工夫に仕組んだものである。扇と蝶(的玉)と枕(的臺)とさへあれば――さうしてそれが極めて整へ易くもあれば――何處でも何時でも、又對手なくとも、自由に樂むことが出來るので。新案發表の安永二三年は最も流行を極め、江戸は辻々に見世を構へて、賭をして爭ふたので、遂に停止の命に逢ひ、嘉永二年三たび流行したといふことである。其後維新となつて、十年の亂も平ぎ、諸方に蜩起した暴動一揆も鎭まつた十二三年の時分?又々流行り出したが然も間もなく衰へて、何人の之が復興を策するものもなく、今日に至つたのである。爾來種々なる遊戯が泰西諸邦から輸入せられ、又本邦固有のもの、殊に武道に關するものが遊技として復活したのも尠くない。即ち擊劍、大弓、槍術、長刀、最近には蹴鞠の如きものもある。

然もまだ投扇戯を說くものぞ無きは、甚だ不思議である。

それはさておき、此遊技の特色といふは、道具準備が至つて簡單であつて、且つ如何なる家にても整へ易く、それにも似合はず遊技其者に變化が饒で、隨つて興味が多いといふ利益があるのである。殊に其演技のさまが、優にやさしく、如何にも雅であつて、それが爲に最も婦女子には適當してゐることゝ覺えるのである。又偶々對手がなくとも、單獨で出來るといふことも、此遊技の特色の一つに數へられるであらう。先づ準備として、

○投扇戯を行ふに何を要するか。

扇

これは普通のもの、十軒骨でも十二軒骨でもよい。但し平骨、中啓のたぐひはよくない。

蝶(的玉のこと)

書式に從へば、文錢十二字を銀紙に包んで、玉簾の水引で結び、蝶の形にするのであるが、略儀何にても蝶に模れぱよい。

枕（的臺のこと）

名の通り、打つ切りの木枕でよいのであるが、今はそんなものもあるまいから、何か似たものを代用する。

投席（敷物）

これは必ずしも無くてもよいのであるが、二人向つて競技する時には用ゐた方がよからう。それも是非にといふのでは無い。巾二尺左右の長さ八尺位のもの。

○何うして行ふか。

單獨の時は多く言ふまでもないが、對手があつて競技する時には、長き投席の中央に枕を据ゑ、枕の上に蝶を置き、二人投席の兩端に坐し、迭みに扇を披いて、輕く要のところを拇指と人差指とにてつまみ、蝶を狙つて投げるのである。舊式の作法を云へば、双方、枕より四扇身或は三扇身隔てゝ、先手は一禮して始めるのである。其番數は普通一席が十番、或は五番と定めてあるが、之も即席申合次第に依る。

○何うして優劣を定めるか。

要打で落した蝶の方向と、扇夫自身の状態と、二者が枕に對する位置と、又投席を脱したる等の事由によつて、それ〳〵優劣の點數を附けるのである。舊式には源氏五十四帖に因んだ名目や、或は表十組、裏十二組といッて、百人一首の歌の句から取ッたものや、いろ〳〵點數の目安があッて、扇、蝶、枕、三者の關係狀態を呼ぶに、或は白妙といひ、或は高砂といひ、勝敗を判つのである。之が實に變化の妙を極めて、然も一定の型に入るから面白い。此味は單獨の場合にても覗はれるのである。今一二の例を說明するならば——

表十組に屬する白妙といふは、二十五點と定めてあッて、最もむつかしい型であるが、之は蝶が向ふに落ちて、投げた扇が其儘枕の上に止まッたもの。瀧川といふは、過料二點引としてあッて、之は扇が枕の胴以下を突いたときで、枕は扇の骨に倒れ、蝶は地紙に載ッたものである。又裏十二組に屬する高砂といふは、三十點で、之は最も上出來としてあッて、枕の上に扇が載ッて、其上に蝶が止まッたもの。嵐といふは、過料三點引で、枕を倒し蝶も扇も共に撥ね飛びたるもの。

（總じて枕を倒すは無様であるから過料とする。其他扇が遠き彼方に逃し去るといふも拙の極であらう。）

斯様な目安の附方で、偏にきれい、いゝ、あざやかといふ出來榮を貴ぶ。之を判するには、行司が一人入用であるが、小人數ならば、無くてもよい。又座客多數で、人が剩ッたらば一人を扇蝶の拾取役、一人を點數を書き留める記錄掛としてもよからう。目安の型も其席で取り定めてもよい。成るたけ複雜を避ける趣意ならば、むつかしい出來榮二ッ三ッに或高點を附け、無様なもの二ッ三ッに過料を課し、其他は適宜に過大過小ならざる中間點を作ッて置いたらばよからう。さうして十回一席、十二回一席といふやうなことも、其塲の憲法に從ふことにしたらばよからう。がそれも試みに行ふ時には何うでもよい。又單獨で行る時も然うである。

先づ定法儀式のあるものと思はず、讀者諸子手ん手に行ッて御覽なさい。啻に夏向の遊技として扇を使ふのであるから、涼しい心地のするのみならず、其變化の妙に隨分身を入れて、遊ぶことの出來る遊技と信じます。お客につれ〲の多い避暑地などでは無論の事、家庭でも三四人集つてやれば頗る興味があります。私は最も此遊技に興味を持つもので、若し讀者諸子の中から尙詳しく語れとの注文が出ましたらば、更に答へる折もありましやう。

最後に表十組裏十二組の點數目安表を、參考の爲に爰に示しますから、讀者諸子は之に倣ッて新憲法を作られたらばよからうと思ひます。

表十組

白妙	二十五點	春の野	二十點
千鳥	二十四點	橋立	十三點
筑波根	十二點	富士	十一點
秋風	八點	龍田川	七點
散花	三點	瀧川	過料二點引

裏十二組

高砂	三十點	小篠	二十二點
假寐	二十一點	山櫻	十九點
沖の石	十八點	小倉山	十五點
軒端	十二點	有明	十點
玉の緒	九點	我庵	五點
手枕	二點	嵐	過料三點引

尙は源氏五十四帖のもありますが、それは略します。すべて是等の內容を悉く說明すると宜しいが、それが無くとも各自に定めて勝手に弄ぶ時には無用となりますから、今回は申しません。



消夏漫筆 運命の話

十八世紀の翁

今こゝに一つお話の例を惹く、まづ或る處ろに若い男が放蕩をする、すると金に詰まるやがて借金をするそれから段々嘘を吐く、ついには諸方に不義理が累なる、親には勘當される、親類や朋友には見放される、誰も助け手が無くなる、トゞのつまりが女と心中をする、まづこれは自業自得といふもの、即ち自分の蒔いた種を、自分みづから刈り收める、尙ほ詳しく言へば自分の性質の缺點――其性質の缺點は自分のものであらうが、又遺傳のものであらうが、それを今問はずに――より來た災厄で、畢竟はみづからが招いた結果に外ならぬわけである。所謂自業自得といふ一言で以てよく説明が出來るのである。併し乍らこの若い男の對手となつた女はどうするだらう、未だそれでは説明が出來ぬではないか、例へば親が旗下で、其頃は何不自由なく暮らしてゐたが、明治となッて諸事改革、公債ばかりぢや喰へないから商法を始める、忽ち磨ッて仕舞ふ、昨日の大旦那が今日は役場の小使とまで零落する、それから母親が病氣になる、愈々困る、娘一人はあるが深窓で育てあげて水仕事さへも出來ない急場の窮策で仕方なく女郎に賣飛される。賣られてそれが件んの若い男と馴染を重ねたといふわけ、つひ心中の相談が纏まつた、して見るとこの女は決して自業自得ぢやあるまい。自業自得では何うも説明されかねる。そこで人間は之を『運命』と名づけた。蓋し後の場合、娘は其結果の到來に、何事も關係して居らぬのであるのみならず親の急場を救はうとしただけの善行もあれば、男に馴染を重ねさせるだけの實意もあり、心中を俱にするだけの好意も盡くしてゐるわけである。死ぬるが人生の本願とすれば、それでもよからうが、人間

普通の眼、あいや、人生の目的から見ると、此女の最後は悲惨なものに違ひない。斯ういふものを「運命」とはいふのである。

此思想は人類のいつ時分から生じたものか。極めて古いには違ひはないが、蓋し人間の天變地異を怖れ、又萬有自然の威力を稱賛したのち、漸くにして人間社會の複雑である事を知り、人事の不如意なる事を味ひ爰に初めて萬有を支配する處ろの大自然力がある如く人事の運行にも亦一種の自然を超越した大偉力（即ち運命）のあるを想ひ、人間はこの大魔力の前には如何ともする事の出來ぬのであつた事を悟るに至ッたのである。併し此思想發生當時に在ッては、勿論幼稚單純なもので、かの今も西洋の詩に見る（我星）とか、（我星に感謝す）とかいふ表情は、運命を星の管するものと見て、それに祝福を祈り、感謝を捧げた時代のものである。

星と運命説とは、なか〳〵縁が深い。星に關する研究の早く進んでゐる國では、亦早く運命に關する話が多いやうである。支那、印度、波斯、亞拉比亞、（日本は水蒸氣の多い國で空の星がよく見へないから隨つて星に關する話も少いが）其他では東洋一般に乾いた空氣を有ッゐる國で空の星のよく望まれる所ほど星に關する話も多く、亦隨ッて運命に關する話も多い、それから西洋では希臘を第一とする、今日でも西洋一般に人間が生まれると直ぐ運命の星が附く（即ちMy Starと呼び得るもの）とか、子供には「Fay」といふ子供神が一一附いてゐる」とか、いふ思想は、此希臘時代から來たもので、人は皆此星の下に在ッて働き、此星に護られ又支配せられ、死ぬる時には星と共に天外に墜つる。即ち人一人死ぬると、天上の星が一ッ影を潜めるといふのである。これが希臘人の思想で、今も西洋の時（小兒の歌）に多く其意味が認められるのである。

我邦にも人が死ぬると、星が一ッ顯はれると說く例へば西郷翁が死んだといふ時には、西郷星といふが顯はれたと說いたものだ。西洋のは反對で死んだ時に隱れるので、生まれた時に顯はれるのだ。基督

が生れた時、天に一ッの星が顯はれた、それを波斯の博士が尋ねて來るといッた例でもわかる。孰ちらにしても、星と運命とを聯絡させやうとした點は同じである。

本來希臘人は非常に星に興味を有ッたもので、かのツオイス始め、ヘラ、アポロ、ポセイドンなどゝいふ幾多の神々は、皆星にかたどられたもので、それがオリンプスの山に鎮座ましまして、皆それ〲の役目を持ッて、先づツオイスは諸神の主宰、ヘラは婚姻出産のことを掌る、といふたぐひのもので、直接には神々の使命を定めたものであるが、間接にはそれが悉く人間の運命に關繫を有たぬものは無いのである。少しく説明的に言を費すならば、アポロの寵を受くる者は其掌る所の音樂詩歌の達人ともせられ、アフロヂテの惠に與かる者は其掌る所の戀愛の成功者とせられた其他



アシ子は	智慧、技術、科學、防戰等
ポセイドンは	海原、暴風、地震等
ヘフイスタスは	火、工業、製作等

アレスは　攻戰、殺戮等
デミイチイルは　豐饒、拓殖等
バツコスは　酒、歡樂等
ヘルミイズ　通信、使者、牧人等

以上すべて希臘名で記したが、此最終のヘルミイズは羅馬ではマアキユリイと呼ぶ。讀者の中には、目下芝公園で開會中なる郵便博覽會で、此「使神」の塑像をマアキユリイの名で見られた方もあらう。

又キユピツトといふ神は、羽根が生へてゐる、始終弓矢を携へて、自在に天空を翔け巡り、春青の男女を見ては其心臟を附け狙ふ。若し射中てられたならば最後其男女は戀に陷るので。運命已むなしとしてある。

それで運命思想は、西洋では先づ希臘が根源であらう。尤も北歐の神話などを探ると、こゝにも運命思想の發生を窺ふことが出來るが、それはまづ別として

此人類の心理上の類似は、東西の何處にもあつたもので、支那、印度、波斯、亞拉比亞皆それ〲其痕跡をとゞめてゐる。即ち支那に孔子の『天命』說、印度に釋迦の『前世の因果』『宿世の業因』の說、波斯にはゾロアスタの光明神、闇黑神の人間の上に支配權を有つことを敎へたもの亞拉比亞には『神與へ神取りたまふ』のあきらめを說いた敎、彼是考へ合はせると、運命思想は人類の發達初期に生じたものと見へる。

但し運命に抗する思想は、餘程新しいもので、基督敎が起原を成してゐると思ふ。これは基督及び其弟子達が、當時非常の迫害を蒙つた結果、其迫害に依つて誘ひ起こされた憤激の情が、遂に運命抗拒といふ思想を形つたものであらう。それで此宗敎ほど運命抗拒の思想の強いものはない。此宗敎の擴まる以前と以後とに於いて、此思想の勢力の差違は甚しいものがある。

我邦では太古はさて置き、儒敎や佛敎（陰陽道）の養成した所ろから降つては陰陽道から出た星占、九星又近頃の幹支術、淘宮術なども、皆此思想の關繫する所である。彼の平安朝時代の即ち人間が懦弱淫靡に流れて神經過敏になつた時代に最も運命思想は盛んであつた。かの有名な阿部晴明が出たそれから鎌倉時代か

ら室町時代に入つて更に甚しかつたが、戰國時代は人間の威力を絕大に發揮した時代で人間以外の超自然力などの蔓ることを許さなかつたやうである。尋で德川時代に及び、泰平が續くやうになつては、身體の懦弱と神經の過敏とが相待つて前述の如き九星陰陽に關する諸種の迷信も復活して來たわけである。近松門左衞門の如きは、『おさん茂兵衞戀八封柱曆』に於いて、最も面白く此運命を描いてゐる。恐らく我邦の運命文學の隨一であらうと思ふから、一寸梗概を揭げて見やう。即ちおさんといふさる大家の女主人があつて其家の手代茂兵衞なるものがたまといふ下女の許へ毎夜の如く忍び行くのを知つてゐる然もたまは曾て茂兵衞に從はない、却つて主人以春といふもの〻寵を受けつ〻あつたが主婦のおさんはそれを誡しむる爲めにたまの臥床と己の臥床とを取り替へて息んだのである、さりとは知らぬ茂兵衞は例の如く忍び來て、たま



懸賞繪さがし第六

と思ひておさんを犯して出たのであるおさんは疾から諦めて、愕然として心荒れたが、忽ち斯うなるからには捨鉢であると、茂兵衛をそゝのかし、俄に道行をきめこむに至つた。これは豫期以外、人意以上である。作者も「二人に不義の錯はなけれども、因果のめぐり合はせゆゑ」云々と歌うてゐる。不義の錯はないといふは、つまり自覺の結果でないから二人に責任はないといふので。然も因果のめぐり合はせなれば仕方がないと、即ち運命といふものに歸して説明してゐるのである。こゝに又沙翁の脚本これが亦近松のより一層適切に運命の説明をしてゐる。こゝにロメオといふものジユリエツトといふもの兩人は先代以來の敵同士の家に生まれた一人息子一人娘である。それが或機會に一目相見てから互に敵同士の家であることを知らずして愛するに至つた、後には種々の反間が入り、障害が這入つても、二人は遂に寺院に走りて結婚の式を擧げたのである、するとつまらぬ事の行違ひからロメオは死んだものと傳へられてジユリエツトは煩悶して毒を仰ぐ、逃れ走せにロメオが來て見るとジユリエツトは直に墓に葬られてある。ロメオは墓を發いて見るすると毒は一種の麻睡劑で、時間が經つと甦生するのである。それを知らぬロメオはこれまでと思つて女の唇に殘る毒の餘滴を嘗めて自刺して死ぬる。やがて女は甦つたが最早萬事は去れり。女は亦刀を加へて斃れる。といふ悲劇で徹頭徹尾『運命』の手に飜弄せられてゐる所を寫したものである。敵同士の家柄で愛し合つたのも運命なれば、事の行違ひも運命で、最期の悲慘も又運命である。作者も此劇の序詞に運命の語を用ゐて此意を洩らしてゐる。

近頃評判になつてゐる國木田獨歩の『運命論者』其想は近松とは聯絡なく、寧ろ獨、佛あたりから來たものであるが、人間が測り知る事の出來ぬ運命、然も悲慘な運命を描いてある。

さうして是等の運命思想はいつまで續くであらうか。否々、人間が神經的になつて心の弱んだ時、迷信の盛んな時、夢幻を喜ぶ時、神秘に憧憬る時、必ず此思想が頭を上げて來るのであらう。

（完）



誠の勝ちし實例

まさ子

はしがき

此に記す主人公は、輕跳浮薄の人にしておのが綺緻を鼻にかけ、到る處に身を誤り、墮落極りなかりしが、病を得て身の自由を失ひし折、たまく～誠ある人の言葉、身に泌みて、良心に恥ぢ、飜然悔悟し、終に誠の女子となりて、美德を萌かんとするもの、幸ひに世の若き人々の、心の誡めともならば記者の滿足この上もなし（まさ子）。

わが庵は、その昔、大阪にて貧民窟の一つに數へられし阿波座のほとりなりけり、今は市の擴張されたれば眞中となりて、以前程の貧民窟にはあらざれども尙幾多昔の名殘を止めたれば、その汚きを、盖し想像の外ならん。

わが父は大工を營ませれらて、一時は棟梁株の羽振りもよく、人にも持て囃されて居たまひしかど、ある失敗のため挫折して、妾が物心覺えし時には、他に[illegible]はれ給ふこともありしこそ痛々しき。

妾は幼き時より、ふみ讀み書くことを嫌ひて、學びやにある間も惡戯多く、先生のお叱責も度々受くるところより、尙登校の可厭になりて、或は病と僞り、或はヌケ遊びして其日々々を過しぬれば、最初よりよき成績のあがらう筈もなく、尋常すら卒業せで止めけるは、今となりて何ばう口惜しき事なりし。愚なる妾は二葉より斯くぞ。

妾が家庭は、妾を頭に弟妹四人あり、都合七人の家族なれば、父君の時折子供を厄介視せらるゝも無理ならず、斯る中に、妾が誠の女なれば、父母を扶けて弟妹の敎育に盡さればならぬ筈なるに、盡すなぞとは偖て置きて、弟妹よりも餘計遊びたき念の限りなく、父君より嚴しきお叱責にも逢ひぬれど、何日もながらと馬耳東風、尙も氣儘の止度なければ、これではならずと父母の相談し給ひて、忘れもせざりし妾が、十二歳の春、船場なる或る舊家に子守奉公にと追ひやられぬ。始め奉公と聞きては、何となく地獄に行くらん心地して、荷の一擧一動、偖は言葉の使ひ樣さへ、家風に合はれば、嚴しきお叱責あるものと、世にも恐ろしき物に數へしが、偖來て見れば案に相違して、人の拂底より主家にても大目に見らるゝ處から、思ひし程の物ならず、それにてもわが家に居る樣の事夢無ければ、始め二三日辛き悲しき暗涙に、夜着の袖、濡らせしこともありぬれど四日五日と馴るゝに從ひて、つらき思ひもうす霞、晴れて嬉しき春なれば、氣もおのづから、のびやかになりて、洒落事さへ言ひ出て人笑はせるとさへありぬ。

斯くなれば、自づとわが儘の出て、子を守すと言ふよりは妾が遊ぶこ

と多くなりゆけば、主人も何日しか、うとみ給ひて半歳經つやたゝずにお暇出さるゝこととなりぬ。これを手始めに其後幾度か奉公先を變ぬれど皆半歳と續かざれば、父母もほと〱持て餘し給ひ、今度は奉公を止めて、內職を習ひにやられしは、妾が十五歳の時なりき。然れど斯る氣儘に育ちし妾、何とて內職などの續くべき、それも暫しにて止め。亦もや奉公にゆく身とはなりぬ。

さるほどに、妾が內職を習ひに行きし其家に、いたく妾を愛せられし君のありけり。時に觸れ折に觸れ、それとはなし言ひよられども、この君少しく醜くき面形なりければ、妾が口より言ふも可笑しき事ながら、妾は人より少しく貌かたち勝れしものから、淺猿しくも此上なき誇りとして、この年頃より男選みする性質の只さへ、この君の醜きを嫌ひ居る折柄、什麼に溫優しく、物事親切にせらるればとて、何とて妾の諾ふべき空吹く風とも思はで過しけるが、此家をも辭して奉公に出でし身を倘も慕はれ給ふらし、今こそ思へば誠ある君よ。

うたてなや、妾は何とて斯く惡なるものとは成り果てけむ。この年より早くも仇し男と道ならぬ契りを結びて月日を夢と暮すうち、人の知られて首尾惡しと見るや、直ちに外に寄居虫の、いと輕々しくも契りて捨てし男の數二人三人となりては、流石に大阪に居るも首尾惡しと、最後の仇し男と共に手に手を取て、大和路さして走りしは、妾が十八歳の時なりけり。

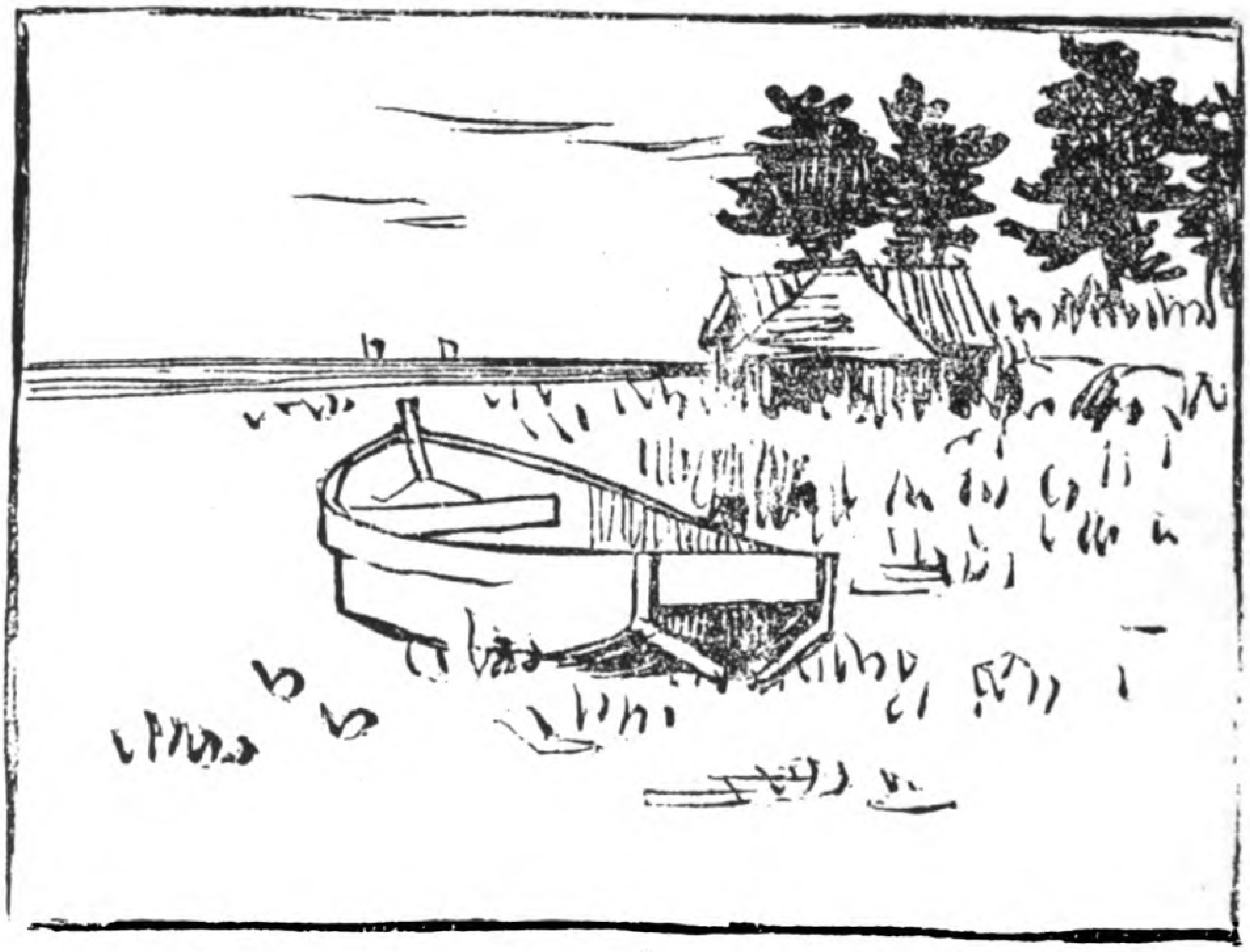
男を木の葉よりも輕く、貞操を何物共辨へぬ妾は、大和までは來しものの、男の意氣地なきを見破りて、これも暫しにて捨つ、さりとて大阪に歸るともならざれば芳野なる旅館兼料理店に人を求められつゝあるを幸ひ、其處に足を止めて、半年ばかりも過しける程に、時分こそよからんと、始めて故郷に居所を明しぬ、兎も角歸れの便りもあらんかとて。けれどもさることは無りき。

父母は妾が通知を見て太くも怒り給ひけむ、其方のことなどは我子とも思ひ居らず、最早離籍までせし今日なれば、如何なる行爲なりと勝手にせよ、夢わが軒前にも立寄るなと思ひ掛なき御叱り、これには流石の、いたづらものゝ妾も困じ果て、離籍までせられし程のお怒りなれば、土に額づきて詫びたればとて、許し給ふべき事もなし兎やせん角やせんと思ひ惑ひて、一夜を過せば、今日も東天うらゝかに南岳にうすき霞を縫ひこめて、得ならぬ景色とゝのひぬれど、さすがに秋なればにや、何となし淋し味を覺えつゝある折柄、門口に嬉しや伯母君の妾を尋れ給ふの聲聞へぬ。地獄に佛か?。さらずば夢か?。夢なれば何時までも覺めざらまほし。

伯母君の言ひ給ふらく、其方が家出してより克造(わが父)の怒り一方ならず、斯く親を親とも思はぬものならば、乃公も子とは思はずと、人の諫め止むるも聞かばこそ、直ちに離籍の手續までしたりしかど、流石に親なればにや、朝夕、そなたの事言ひ起らぬ事なしとかや、と言ふとに一昨日の夜、暫くの無沙汰を詫びんと訪ひ寄れば、折柄克造は留守にてお仙さん(わが母)一人なりしが、私の顏を見るや其方よりの手紙

を示されて、いたづらもの〻居所が知れましたと計り泣て言ばるゝに、それは何よりの事なれば、お泣きなさる事でなし、いたづらせしは惡るけれど、彼女とても人なれば、私等が不心得を呉々も諭せば、よも聞分ぬともあるまじ、されば貴女よりも克造に賴みて呼戾す樣取り計らつては如何にと言へは、否、お詫聞くべき良人ならずそれ故困つて居りまする、と世にも哀れなお物語、エヽこれ程の親を見捨てあの罰當りめがと私も心に思ひぬれど、お仙さん私に少しの所存あれば、これは私にお任せなされ、イヽエ何卒お捨置をとの給へど捨置くべき事ならずと斯く多忙の中を來りし譯、其方も同じ人なれば、よも私が好意を無にはすまじ、疾く歸りてこれ迄の不孝を詫びよと。花も實もある御言葉、嬉しくも嬉しき心地してお禮は悔悟の淚なりけり。

伯母君に連られて歸りし時の父の怒りは恐ろしかりき、若し此塲合に母君と伯母君の無かりせば、妾は今生存居るとは難からん。斯くて漸く家事の手傳をする身とはなりぬ。さりながら父上の離籍までせられしは、平常のお氣質に似もやらずと、夫となく樣子を探りて見るに、何やら離籍せられしとは嘘らしく、誠は父上の妾が手紙を見られし折、恰も伯母上の來給ひたるを幸ひ、事情を語られて、親しく賴まれしものらしゝ、あゝ只らしゝと語りしばかりにて、妾が胸に再び惡心の惡魔が良心に勝しこそ耻かしき。



こゝに奇なる現象はありけり、そはさきに妾が内職習ひに行きし折、いたく妾を愛せられし君の、今は妾が家に度度訪ひよらるゝとなり。什麼にしてこの君と馴染になり給ひしと、父に問へば唯仕事先にてと、簡短に答へられしが、又何か思ひ出したる如く、卿はあの男を好むか如何にと……。この刹那妾が胸は轟きぬ過日より、それと思

ひし事の誤りなきとよ。かの君に相知りて知られて並に三と年を過し今日、曾かの君の妾を慕われて父にそれとは明されけむ。オヽ執念き男可厭な男。と妾はこれより蛇蝎の如く思ひぬ。

さるほどに父君は什麼なることを諾われけむ。或る時母君の妾を招かれて言ひ給ふらく、卿も今は妙齢なり嫁入盛りなれば今にして身の振り方を附けずんば、後日にして悔あらん、幸ひ兩親の眼に適ひし男あれば、卿も夫を定めては什麼にとつア、父母はかの君を妾が夫と最早心に定め給ひしが、情け無き事になりてけり。今直ぐとて可否の答へも出來難けれど暫しの猶豫をと乞ひて其夜は床に就ども寢もやらず、それからそれと思ひ惑らせば、好まぬ節の多けれど、妾は今迄、いたづらして父母に御心配かけし果なれば、今かの君を嫌へばとて、何の顏ありて否やの我儘を言ひ得べき、泣きに泣きて悶えに悶えて、決せしとは、彼の君の妻となることなりけり。

父君の安堵、母君の喜び、口には言ひ給われど顏に表はれて、何を嬉しと喜かしく、吉日の定め、衣裳など其は赤貧だけの仕度ありて何やら急がしきものなり、かの君とて同じく、準備なさ〳〵怠りなかりしが、什麼なる惡魔に魅入れ給ひけむ、婚禮の四日前、祝融の災に罹られて、財産の全部を失なわせられ再び起す能はざるに至られたり。悲しの事よ。父君の驚き母君の嘆き、彼の君の落膽は譬ふるに物無かりき、父君あらゆる言辭を以て、かの君を慰め給へども什麼せん、妾が家に財産の無き事を。

其場合妾はこれ幸ひ此の緣談の破れんとを祈りしが、仇ならで彼の君は志を立て遠方へ旅立れぬ、一度二度はお音信もありしかど、其後絕て音信の無かりしを幸ひとして一年程の後、親の許しも待で又もや仇し男と契を結びしかど、父君も今は咎め給わで、こゝに晴ての夫婦とはなりぬ。されどこの夫は天性猛惡の氣質なれば馴るゝに從ひて暴擧のいよ〳〵多く發見さるゝに、妾とても負ぬ氣の下に居らぬものから日每夜每の爭ひ繁く、われから好し夫なれど、今は愛想も盡き果て、二年の後にはふり捨て歸りてけり。

妾が二十一歳の春は猶ほ斯の如き光景なれば、父母もさぞや困じ給ひしとならむ、妾も親の手前、近所の手前、今更に耻かしく、うつら〳〵と暮して何日とはなしに病ある身とはなりぬ。二十二歳の夏には床に就きて又起てぬ身とはなりけり。父君もいたく心配し給ひて、醫藥も利かぬこの上は、神信心に依るの外なしとて、日常信じ給へる生駒山へ、と妾が爲に參拜せられしぞ有難き。

その歸るさのとなり、父君の中之島なる公園地に來られし折、一度は妾が夫と擬せし彼の君の、ベンチに休らひ給ふに、父君も彼の君も驚き給ひて、日常の不沙汰を詫び合ひて、希望の全くなり今は可なりの財產を作りし事など話されて後、妾が身の上を問わせ給ふに父君も返辭に困じ給ひて、妾が不身持を殘る隅なく語られけるに、そは我も薄々と聞けり、然れど〳〵、五年以前の我心と今の我心少しも變る事なければお福樣(妾が名)にも時折遊びに來て給れよと、の給ひし御聲さへ只なら

ざりしとかや。

歸りて父の斯くと語り給ふに、昔しよのぶの摑み根の千筋の縺れそと解けて、心は涼げになりにけるよ其時に。

アヽ惡かりき、妾は愚なりき。斯程まで妾を愛み給へる君を、今日までは、つれなくあたりて、憂き人の中に數へしは、妾の足らざりしとよ。思へば恐ろしき限りなりけり。

昨日までつれなく過せし人ながら今日は是非に賴みてよと、先づ母君を驚かせしに、父君も頻りに首肯き給ひて、かの君に人を賴みて申込まれけるに、かの君も直に諾ひ給ひて話は難なく纏まりぬ、此より妾が病も拭ふが如く快く一點の光明を見出して嬉しき妾は病何日しか忘れ果てぬ。身の幸福を夢みて。

斯くして妾はかの君の妻とはなりぬ。今は夫の君として朝夕かしづき參らすに、の給ふ事一々道理のみにて無學なる妾を、徐々に光るみに導びかるゝ嬉しさよ。ふみ書く事も數へら



れたり、女の道も數へられたり女の嗜み、女の心得何くれとなく數へらるゝに今更過し昔の妾耻かしや。思へば十五歲の折、この君に慕われし其時に、御心に背かざりせば妾はあれ程の墮落は……否墮落とてはせざりしならむ。何ぼう口惜しき事してけり。

女の道を敎はりし今ならば斯る穢れし身を淸き〳〵この君に捧げ參すことの罪は知れじに、知らでこそ、厚面ましきを言へてけり、さりながら今となりては只この後、今迄の罪の幾分を償わん爲に、慈善に身を委れて一生を終るに外なからん、妾は斯と心に誓ひぬ。

渴を止める法

如何にしても咽喉の渴きの止ぬ事ありかゝる時は拘橼酸に白砂糖を交ぜ水一合位容れ一日四五回に飮むべし分量は拘橼酸三匁位に白砂糖五匁位にて宜し

吃　逆

色々の法があるが藥を用ゆるなれば重炭酸曹達と酒石酸を別々に水に浴解き混合して飮むべしラムネも頁し

韓國の衣食住

左は大藏省鑑定官坂口武之助氏が韓國旅行中の觀察談なりとて東洋時報に揭げられし一節なり。

朝鮮人は日本人に比して體格杯は餘程强健である。ちよと見た所で日本人よりも大きい、それから勞働にも耐へる、力も强い、是れなどは餘程疑問である。日本人よりも衛生も進んで居ない所の人民で身體が大きいとか强いとか云ふとは如何にも妙に考へられる。それで行つて段々疑問を起して見た、なぜ朝鮮人は衛生も何も構はず食物も惡いに拘らず身體が强健であるかと段々研究をした結果、それはナチユラルセレクション即ち自然淘汰を受けて居るといふとで、弱い者は小さい中に死んで仕舞つて、强い者ばかり殘つて居るのである、それが段々重つて今は强い者だけ跡に殘つて居るといふ說である。若しさうであるならば餘り衛生を重んじて肺病患者の子孫などを遺すといふとは良いとでないかも知れぬ。今一ツは斯う云ふ關係がありはせぬかと思はれる、即ち女の衣類なども關係があらうと思ふ、韓國婦人の衣服は衛生的で且つ腰を締めない、胸の邊に帶をして居つて下はパッと西洋人の洋袴見たやうになつて居る。日本見たやうに姙娠の折に腹帶何かも締めない、自由に放任して居る、それ故に胎兒の發達なども日本に比して私は良いのではないかと考へる。それから又男子の衣服も餘程進步して居ると考へられる、なぜなれば兎も角洋服に能く似て勞働に堪へるやうに出來て居つて、上は筒袖になつて居り、下は洋袴に稍々似た所の服である。それ故日本の服よりも勞働がし易い、それに經濟と云ふやうな點から見ても朝鮮人の服は日本人の服より經濟的である。色が純白であるから老幼男女を問はず誰れにでも應用が出來るやうに出來て居る、それから白いからして色が剝げると云ふとはない、洗へば洗ふ程綺麗になる。日本人の着物はさうでない、諸君の着て御居でになるのでも洗濯する程剝げて仕舞つて着られなくなる。朝鮮人の服はそれと反對である。それから朝鮮人の洗濯屋と

云ふのが面白い、先づ苛性曹達液に浸してそれを川端に持つて行つて石の上に上げて棒で打つて居る、朝鮮人の女などは外に仕事はないから暇さへあれば洗濯ばかりして居る、それで日本人の着物見たやうに染めた着物ならば直ぐ剝げて仕舞ふ、所が朝鮮人の着物は洗ふ程益々白くなるのですからさういふ點に於ては餘程衞生的であると私は考へる。それから家屋はどうであるかと云へば、是れは日本から見れば餘程劣つて居る。何にせよ木と泥とで造つてあるのですが重に泥で造つてある、木が少い所でありますから木を使用してある部分が極めて少ない。其上に天井が非常に低いが、又一面から見れば氣候の關係上低く造らなければならぬかも知れない、さうして御聞きになつて居る通り床の下に火を焚くやうになつて居る。即ち温突を焚いて居る、これは家を建築する時に家の下に溝を通して、石を築いて傍を泥で埋めて、三條若くは四條の溝を床下に拵へる、其上に泥の厚さ一尺位塗る、其泥が即ち床になつて居る、其上に天井の高さが約一間二三尺位あるのは高い方で、大概普通の家は私共が立つて頭の上が五六寸すく位の家である。それから室の間取の仕方は多く一間の大さが四枚敷位、それを一間と唱へて居る。それから其の上に一間半と云ふのがある。是れが六疊敷ばかりある。それでおかしいとは私が京城に居た時に友人の紹介で日本人の宿に行つた、其處の家が矢張り朝鮮家屋である。それで緣に上つて、室は何處かと聞くと窓を明けた、入口は何處かと聞くと此處ですと云ふ、即ち窓から部屋に飛び込むので實に滑稽です。それに窓を締めてあるから内が薄暗い、それから此部屋はどういふ家かと云ふと私の這入つて居る宿即ち私の這入つて居る部屋は朝鮮の陸軍大臣の居間であると云ふ。此家が朝鮮では先づ最も大きい家である、これは陸軍大臣の私宅を借受けて旅籠屋を開いたのです。それで六枚敷が一番廣い部屋で、内には押入もなければ何にも無い、唯周圍は壁である。下は油紙で貼つてあるだけです。それから寢床などはどうするのだらうと云つて聞いて見ると、夜具は部屋から持出

して或一定の場所即ち物置に置くのです、其處に總て家財が置いてある。部屋の中には何にも無い、今御話する通り貴人の家には物置などもあるけれ共、普通の者の家には何にも無いさうです。それでは家財はどうするかと聞いて見ると、家財は朝鮮の家には何にも無いのである。斯う云ふとおかしいが、先づ中流以下の人は家財は何にも持たないのだ。家財が無くては困るではないか、着る物の着換はどうするかといふと、着換一枚すら無いのである。唯家財としてあるものは鍋、釜、それに食器としてサバルと云ふ大きい青銅で拵へた椀が三つ四つだけ、外に家財は何にも無いのである、それで着換はしないのかと聞くと、普通は着換はしない、着て居る丈だ。それでは動産は何にも無いかといふと、動産は何にも無い。不動産は家と畑がある丈、極くシンプルである。泥棒が這入つても自分一人飛出て逃げれば宜いので、取る物は何も無い。でも何か動産が無ければならない筈だと段々聞いて見ると、中流以上の家には少し位はあるといふ事だ。

△夏の趣味

今月は一年中一番暑い盛りの月である、勿論大暑節は、少し過ぎて朝夕は幾分づゝ涼しさを覺ゆるやうであるが、それも僅かな間のみで、金を溶かし、石を爍くような暑さの魔神は猶も去らないで、矢張り皆さまを苦しめつゝあるのです。

併し乍ら人間は何でも趣味を以て見ると苦しい事も苦しくは感じない、つまり物の研究に凝ると氣が其の方に奪はれて寒暑を覺へぬと同じ事で、何でも相手の物に注意力を注ぐと外の事が一向に苦痛にならないですから暑い寒いといふのは閑人のいふ事で、苟くも心に何等かの趣味を持つてゐる人は決して寒さ暑さを言はない筈である、そこで私共は今此の炎熱の候を利用して自然に對する趣味を養はうとおもふのであります。

今此の盛夏に當つて、朝寢をして御覧なさい、乾度赫々たる太陽に襲はれて暑苦しさは元より、終日心が弛んで氣が疲れて、何事も仕事を滿足に果すことは出來ません、ですから朝は日光に先立つて庭の竹樹の露を拂つたならば愉快はどんなでせう。

世界の新聞

△新婚旅行用の汽車

英國のミッドランド鐵道會社では、今回新に新婚旅行用列車といふのをしつらえ、一等客車を一室々々に仕切り、新夫婦獨占で旅行の出來るやうにした結果、今迄人目を憚りながら、窮屈に乘車して居た花嫁花婿は、何よりのことにして、爾來新婚旅行者は、悉くこの鐵道を利用するやうになつたので、會社の利益は頓に増大したとやら。

△百五十萬弗の湯殿

豪奢の限りを盡すとは能くいふことであるが、贅澤には際限の無いもので、米國華盛頓府の富豪ムーア夫人が目下新築さして居る湯殿といふは　渾ての搆造を天然の巖窟に模り、上から鐘乳石を垂下して是れを柱に擬し、浴槽は薔薇色の貝づくめで、周圍の壁には水草を植え、流場は苔色の陶器で敷きつめたもので、其費用は雜と百五十萬弗(我が約三百萬圓)ださうな。

△面白い貯金のすゝめ

此程紐育の一銀行が、小學生徒に贈つた日記帳には、別に何等の廣告的文字も記されて居なかつたが、唯その卷末の一頁に「貯金のすゝめ」と題して、「人若紀元元年に一片(我が四錢)を年五分の利息で貯金するとせば、千九百年には75,762,626,113,125,000,000,000,000,000,000,000磅に達する」云々と書いてあつたとか、面白い貯金の勸誘法である。

△六歳の老婆

支那の老子といふ人は、生れながらで白髮老顔、恰も翁のやうであつたので、名をもその通りつけたのださうなが、米國のミチアポリス、といふ所には、六歳で白髮の生へた、そして視力も歩行も七十前後の人のやうなアンダーソンといふ女が居るとやら、でこの女は生れたてから六十位な老婆のやうで、醫師の診察でも確かにそれだけ發達して居たとの事である。

△强制結婚法の勵行

米國アイオワ州フォートドッジ市では、男女とも滿

二十五歳に達して、疾病其他特別の事故無き限り、獨身で居ることは許され無い法律が設けられてあるが、此の法律は他國人と雖も其市に來り居住する限りは執行さるゝので、四十五歳以上になれば不問に附せらるるが、それ迄に違反した者は二十圓以上二百圓以下の罰金刑に處せられ尚ほ六十日以内に强制結婚をさせることになつて居る、處で恁くとも知らず此の地に來住した者が、ドシ／＼此の勵行を受くるので、驚いて匇匇に逃出したものもあるさうな。

△一生睡眠を知らぬ魚

動物學者の説によると、鮭と鱒と金魚とは一生睡眠を知らずに終る魚ださうだ。

△懸賞の婦人座右銘

紐育の女學雜誌が懸賞で募集した婦人座右銘の、第一等に當選したのを見ると、女權擴張の米國には寧ろ奇異に思はるゝ程のものだ、今試に其大略を記すと――曰く、料理法を知らざるは女にあらず。曰く、ボタンをかゝると己れの衣服の洗濯を他人の手に委ぬるは、自らの意氣地無きを示すもの也。曰く、パンの燒法は必ず學び置かざる可らず。曰く、一弗は百仙なることを忘れず、一家の主婦となりたらば、良人の收入と其出費との過不足無きやう常に計算を怠る勿れ。曰く、負債をしつゝ流行物を購ふは寧ろ恥辱なり。曰く、「健全は美人」なることを忘れて、强て肺病患者の眞似をなす可らず。曰く、日用品の小買ものに一仙二仙を値切て、麝香や香水に一弗二弗を吝まざるは計算の迂なる者と言はざる可らず。曰く、裸一貫と雖ども、勤勉なる男子は、百萬の富ある怠惰者に比して貴きを知れ。曰く、音樂よりも美術よりも乃至文學よりも、パンのより大切なるを忘るな。曰く「然り」と「否」とを正直に答へ、男子をして其反語なるや否やに惑はしむ可らず。曰く、車馬よりも歩行の利益多きを忘るゝ勿れ。曰く、結婚は金錢と體裁とよりなすべきものにあらずして、對人方の眞價を知りて後行ふべきものたり。云々とあるのだ。

觀察

魔翁の人情觀

秋霜

▲女子と愛情

愛情は男子に取りては、半分のものであるが、女子に在りては、其の全身を形成すとは、古今東西を通じて、動かない眞理である、即ち男子は女子と異つて、決して愛を一生の事業、若しくは自己の生命とするものではない、之に反して女性は子供の時は人形を愛し、娘となつては、母親を愛し、一人前の女となれば、良人を愛し、母となれば子供を愛し、偖て此の世を去る時は、愛する孫に取り巻かれ、多大の滿足と、幸福を感じつゝ、逝くのである、實に愛は、女性に取りては、生れて死ぬまでの事業であると言はねばならぬ。

▲男女と戀

兎に角男性の眞の戀と云ふ者は、實際後にも先にも、一度しかないのが普通である、之に反して女性の戀は、決して初戀に限るものではない、寡婦の再嫁して、第二の良人に捧ぐる愛の濃かさが、最初の良人に優るも、劣らぬ實例は世間には幾らもある、是れは何も善惡の沙汰ではなく、（道德上の問題でなく）先天的に男女兩性の性情の違ひより起り來る處ろの現象である、故に世間に幾多の失戀の爲め、若しくは最愛の良人を失ふたるが爲めと稱して胸に癒し難き大創を被り、悲觀、厭世、幽鬱、煩悶等の捕虜となつて、惱んで居る婦人は此の點に於て一考して見なければならぬ、併し斯う云ふたからとて、何も婦人が浮氣であるといふ譯は毛頭もない、これは婦人の特性と言はねばならぬもので、決して浮氣とか、道德上の缺陷を云々するものではない、故にその言を曲解して浮氣奬勵の辭と認めてはならぬ。

▲戀愛の二種

戀愛其物の實質については、男女間に何等の差違はないが、併し戀愛其物の動機については、男性と女性との間には、大なる相違がある、一體男子は、一たび思ひ込めば、一心不亂に其の戀しく慕はしくなるものであるが、女子は之に反し、自分の方より慕ふと云ふより、寧ろ男より、慕はれるのが、嬉しく感ずるものであつて、其の爲めに、遂に其の男に許すと云ふのが、多いやうである。

▲女と虛榮心

女性は特に虛榮の強いものであるから總じての女性は、美男よりも名高い男子若しくは、腕のある男子を戀するのは、古今東西異りはない、昔しから英雄が、艷福に富むのは此の理である、有名なるミラボーは、滿面菊石を以て剝まれた、名代の醜男であるが、其の女に慕はれたことは、非常なものである、絕大の美人淀君は虛榮の一心から、親爺に等しき豐太閤に嫁いだ、兎に角女は其の職業の何たるを問はず、一技一藝に秀でた男子ならば悉な愛慕を寄せる資格あるものとしてある、是れは勿論、女性の天性として、自分に立ち優る男子を慕ふのであらうが、今一つ名高き人に慕はれると云ふことが、女性に取りて、無上の快樂、幸福を感ずるに由るからである、此の道理から推して見ても、男の上に立たんとする、女子の失敗するは、當然であると思はれる。

▲容貌と愛情

男女間の愛情は、容貌の美醜と大關係のあるのは、疑ふことの出來ぬ事實である、此人ならではと、互に深く相愛して居る仲でも、若し男か女か、何れか一方が、疱瘡にでも罹つて、其の容貌が酷く醜くゝなつたと云ふ場合に、兩人の間の愛情か果して少しも、變ることなきを得るやは、頗る疑問である、是れについて西洋に面白い芝居がある、夫れは斯うです、情人が戰

爭に行つて、居る留守中に、許嫁の美人が、疱瘡に罹つて、菊石だらけになり、鏡に向つて、變り果てた我姿に呆れ返り、斯くても、情人の心は能く變ることなきやと、愁嘆場の最中へ、情人は目出度く凱旋して歸つて來て、兩手を差し伸べて、美人を抱かうとするを、美人は顏をヴェールにて隱しマア〱控へてとて、焦せる情人を制しながら、夫れより委しく我が姿の變れることを物語ると、情人は變る姿に、何に我か心の變るべきやと誓ひ、其處で美人は安心してヴェール（顏隱し）を外し、初めて其の顏を見せる、すると情人は跪いて我か戀しき意中の人よ、御身を愛する心に變りはなしといひて、幕を落すと云ふが、大畧の筋であるが、此の芝居は大繁昌で、大變評判か善いと云ふことだが、狂言であればこそ、姿は變つても、愛に變りはなしと、云ふのであるが、是れが事實問題であつたなら、果して此の情人のやうに行くであらうか頗る疑問である、



現に妻君の頭髪に、白髪が生えたからといつて、愛想をつかした良人があり、又た良人の頭が禿げたからとて、愛想をつかした妻君もある、是れは極端の例で、随分輕薄の極ではあるが、兎に角容貌風采は、男女間の愛情に大關係のあるのは、爭ふべからざる事實であるから、女性諸君は、此點に注意せねばならぬ。

▲愛と嫉妬

愛と嫉妬との關係は、多くの文人や心理學者に依りて、幾度か繰り返された問題で、嫉妬は愛の半面なり、嫉妬する程でなければ、眞の戀でないとは、近時人の能く口にする所であるが、夫れは成る程嫉妬と云ふ根底が、戀愛の爲めに増大せらるゝは、隱れもない事實である、併し能く考へて見ると、嫉妬は、特に戀愛の爲めに、起るものでもない、嫉妬は、單に戀愛に關はるゝ許りでなく、友人間にも、兄弟間にも、乃至人生の各方面に顯はれるものである、即ち良人に對して、嫉妬する細君、妻に對して、嫉妬する良人は、夫婦となつて、始めて嫉妬の起つたのではなく、斯様の人は、幼少の時から自分に對する愛情の薄厚を感じ、兄弟姉妹に對しても、嫉む人で、友人間に於ても亦た其の通りである、即ち自分よりも厚遇され、尊敬される人があれば、其人を嫉むのである。

▲厄介なる男子

嫉妬について、思ひ出たのは、世の中には多くの男性からチヤホヤさるゝ婦人でなければ、想を懸くるに足らずと思ふ人がある、のみならず更に一歩を進めて、自分の妻が、他の男子から彼れ是れ評判されて、それに對して自分が嫉妬を感ずる程にならねば、滿足する氣にならず、夫れ迄は自分の妻は何れだけの、縹緻や美點があるかに氣が付かないと云ふ人物がある、これは隨分厄介な男と言わねばならぬ、斯う云ふ場合に起る滿足と云ふ心は、果して愛情と言ふことであるや否や甚だ怪しいものである、我輩は寧ろ一種の虚榮心、自負心と云ふものに過ぎないと思ふ、何故かと云へば、

恰も自分の飼へる犬猫が、世間から、褒め囃されて、嬉しくて堪まらず、其處で其の猫を、大事にして可愛がると少しも變る所がないからである、又た世間には引手數多の婦人でなければ、妻に持つ甲斐はなひと思ふ男がある、斯の種の男は女性を一の懸賞品と心得て、他人と競爭して賞品を取らんとするやうなもので、惡く言へば、自分に鑑定の見識もないのに、羅市に出て、骨董物を買ふのと同じ料見何の定見もなく、何の認識もなく只だ他人の競るに任せて、其上〳〵と高價を入れると同樣で、甚だしい商賈根性、又甚だしい投機的の狀態ではあるまいかと思はれる。



▲男子の研究

「男子は果して如何なる婦人を求むるか、」之れ女性の日夜、神經を惱しつゝある問題で而も未だ滿天下の女子が、解き得ざる謎である、然らば此の謎を解くには、何うしたら可いか、夫れは第一番に、男子の性情を研究するのが、肝腎である、總じて今の婦人は、（昔の婦人も同樣）未だ能く男子の性情を了解しては居ぬやうである、元來男子と云ふ者は、決して婦人が普通考へて居るやうな、無雜作な者ではない、總じて男子は、單に容貌が美であると云ふ理由を以て、婦人と結婚する者ではない、然ればと云つて、勿論美衣を着けて居るとか、巧みに笑ひ、巧みに話し、頓智や、才氣や、愛想よき交際振りやを希望するものではない。

即ち脂粉や、香水や、乃至巧妙なる會話や、美貌やは、勿論男子を樂しましむる者には相違ないが、それが強ち男子をして結婚を望ましむる者ではないと云ふことを知らねばならぬ、然らば男子をして、結婚を望ましむる婦人は、如何なる婦人であるかと云ふに、夫れは天眞流露して、飾らず、僞らず、而も優しくて我儘ならぬ婦人であると言はねばならぬ、彼のハキ〳〵とあまりに要領を得過ぎ鋭利なる舌と、刻深なる機智とに富む婦人は、種々の夜會や、宴會に引張り凧にされて、男子に好まるゝに相違ない、併し男子をして婚を求めしむることは、困難である、夫れから男子が厭がる婦人といふは、ピリ〳〵と鋭く働く舌を持つ婦人、惡辣なる辯を有する婦人である、其の次ぎに厭がられる婦人は、尊大ぶる婦人であると知らねばならぬ。

▲女子を罵る男子

世間には好く男子の惡口を云ふ婦人があるが、男子の惡口を云ふ婦人は、十中の九まで、平生男子に冷遇されて居る婦人である、之に反して若し男子が、女子に冷遇せらるゝ時は正面から女子を惡口せずして寧ろ側面からそつと誑るものである、即ち『私は惡い女に係り合ひました、實に酷い目に逢ひましたなど、溢し

て辛棒して居る者である、けれども平生女子を惡口する男子は、大抵女子を虐待しつゝある男子である、と知らねばならぬ、要するに、婦人を賞讃するを知らず、若しくは尊敬することを知らざる男子は、多く其の天性に大なる缺陷のある者で、寧ろ彼等は心理上の不具者である、又た世間を見渡すに、婦人を惡口する男子は、概して自分の母を愛する事を知らない、不孝者であるのみならず、又自分の兄弟や友人とも親交を保つことの、出來ない男子であるかも知れぬ、兎に角女子を惡口する男子は、大抵弱い者虐めをするひねくれた男子らしいやうである。

▲男子を罵る婦人

男子を惡口する婦人は、男子から冷遇された女、且つ男子について苦い經驗を持つて居る婦人であツて彼等が社會に失敗したことを廣告してゐるものである、換言すれば、男子の注目を惹くべき女子特有の愛嬌を持て居らぬ事を自白してゐるものである、夫れから又た既に結婚した女子で、盛んに男子の執拗、邪慳を主張する婦人は、必ず執拗邪慳の良人を持つてゐる婦人である。

又た男子には、眞正の愛情と、親切とがないと、溢してゐる婦人は、必ず以前に男性の愛に失敗し、且つ其の感情を男子に玩弄された婦人である、兎に角圓滿十人並の美人や又は善良なる良人を持つてゐる、婦人は、大抵男子を賞讃する樣である、最後に今茲に一人の女性があつて、單に其父に對して口を極めて賞讃する事ありとすれば、其の女は極めて善良なる父を持つと共に、一方には又た極めて冷淡なる良人を持つて居るものなることを證據立つるのである。





避暑土產　閑人閑話

孱顏子

（一）

樓の下は崖で、崖の下は百尺もあつて、水が淙々と流れてゐる、日中の炎天に夕立雲が下り重つて眼前の山々が一面に影げると雨滴を含んだ涼風が山の頂上を掠めて吹き込んで樓上の日覆を捲くりあげる、午睡してゐる客も忽ち枕を蹴つて跳ね起り、ア丶夕立も夢ではなかつたといふ顔付、自分も睡氣ざましに一浴を試みて來やうと手拭を提げて浴塲へ行くと相變らずの浴好が多くて湯壺が混み合ふてゐる、一週間も居て、一ケ月以上も滯在したほどの効能を見て歸へらうなど丶いふ勘定の高い連中が勉强して湯に這入るけれどもこれは大變な間違ひです、入浴は汽車で走るやうに時間を急いではいけない悠くりしてゐればこそ保養の功能もあるのです。と斯う申す私なども其の勘定高い仲間かも知れませんが、これでも毎年避暑に參つてよく溫泉の效能を知つてゐます、何でも一と夏ゆつくりと浴に這入ると其年の冬からかけて翌年の春まで風を引かない、それから、冬季寒さを感ずる程度が少い。

是等がまア第一眼に見へた効能でせうか、ですから避暑にせよ、溫泉行にせよ、十分の効能を見やうといふには暇も潰さねばならぬ、冗金も費はねばならぬ、平生心掛て居ても一寸なか〳〵實行する事の出來ないのが例です、富める人は富める人で暇がない、貧人は貧人で矢張金に乏しい、いつそ身に何かの病氣でもあれば、其の病氣といふのが土臺となつて暇も出來れば金の算段もつく、どうしても無病健全であれば、自然馬鹿らしくおもへるのが避暑行の金と暇です、さアその馬鹿らしいと思ふ中で三週間なり一と月なりの休暇と金を拵らへて十分保養に出掛けやうといふのはまづ世の中で一寸俗事を蟬脫した人と言はねばならぬ、

其の蟬脫した人間の中には勿論金滿家の樂隱居もあれば、商家の令孃もある、侍女をつれた華族の老君もあれば、權家の若息子少し家事に遠かつてゐる豪商の細君などもある、是等のお客樣はいづれも此樓の上客で一と座敷に二三人のお隨伴がついてゐて、一と廻りの保養に百圓の金は缺さず費ふて行く人達であるから宿でも下へは置かぬ、一寸の外出の折も、亭主を始め內儀も息子も小娘も女中も下婢も掃除番も、料理番までも人數に加はつて皆なが頭を下げてお辭儀をする、人間も斯ういふ工合に待遇されるとまづ俗情に於て本望、大願成就したものである、どこへ行つても金は遣晴のするものだ。金の威光もこれ程利けば十分であると思はねばならぬ、乍併退いて考へて見るとイヤとつくりと見渡した處ろ、此の人達が其の燦爛たる華美な衣服や、光る指環や、華麗な持物やを差引いての仕合はと見るに、まづ顏の色が蒼白で、身體が痩削で、擧動が不活潑で、どことなく懶げで、言ひ知らぬ苦痛があつて、何



なや、氷屋に腰かけて何か食べて居ますよ、姉さんの着物は何でせう、
中形ですかね隨分粋な柄ですわねえ

懸賞繪さがし　第七

か知らぬ不快がつきまとふてゐる樣である。溫泉場へ來て一と月の滯在中でおもしろ、お可笑哂ひ興じたのは、物珍らしい最初の一日か二日で跡の二十八九日といふものは矢張りつまらぬのが常である。

　山や水の靈氣に感じ、風景の美に打たれて、そゞろ仙境のやうに感じたのも僅かに一日か二日で後は矢張り依然たる俗境に歸する、風土の變つた珍らしさや、口に新たな料理や、眼に爽やかな風色や、乃至は金の威光の心地よい待遇や、是等のおもしろ味も矢張り一日か二日で後は同じく依然たる平凡に歸する、して見れば金の力も矢張り無限なものではないらしい。而かも身に病あるに於てをやです。

　斯う思ふて見ると、萬人に羨まるゝほどの結構づくめの身分も左程羨艷するにも當らない、幸福なのは一段下つたお客の中にあるやうです、其の人々は左程贅澤にもしてゐませんが、第一健康に申分がない稍と三年目に一度慰みに出られる位な身分ですから、避暑を生命の洗濯として、思ふ存分に遊んで暮らし、遊んで樂しむのでせう、併し三百六十五日塵埃の中に働いて居る人が偶に斯樣な樂天地に來て天然の風景に耳目を洗はせれば如何に樂しい事であらうとおもはれるけれども、働らく人は一生働らく人で夏が來ても避暑しやうでなく暑いからといつて、家を離れて暮らすといふ樣な事は出來ない、つまり、遊ぶ人は年中遊んで暮らし、働らく人は又年中働き通して暮すといふ樣な工合に出來て居るのであります。

　さて私も每年暑を避けて此地へ參りますが每年大抵同じ樣な事をして日を消して居ます、去年は鮎を釣る呼吸を習ふて大分巧者になりました、一昨年は轆轤細工に就て特別な智識を獲ました、其前の年は將棊の名人に出會ふて、これも修行の功で妙手を覺へる、まア閑散に日を暮らした樣でも心掛て居れば何か知ら一つ宛は覺へますが、今年は何として日を暮したものでせうか、昨夜隣座敷で講釋師を招いたので面白く天一坊の譚を聴きました、一昨夜は宿の亭主が御邪魔に參つて其身の出世ばなしをして聞かせた、其前夜某財產家

の隠居が、自慢話の苦心談を聞かされた、一體温泉場へ來た間といふものは、俗界の人々が一寸世間へ遠ざかつた氣持になるもので、割合に捌けた話をするだけ自然興味が深い殊に避暑は人間の身の古手帳を土用干にした形ちで、銘々の心の裡にも過去の棚卸しがして見られる、昔しの出來事を思ひ出して其の反古紙に裏打をして見るほどの餘裕は避暑位でなければ見へない故にこういふ時にこそ人々の身の上の秘密も聞き出されるのであるから成功、不成功にも拘はらず、一々聞いて見たらば嘸ぞ興味があらう、昨夜宿の亭主



の話には二階に居らるゝお客の中には大分經歴に富んだ方がある、十年前大道で熊の膏を賣つて居た人で今は本所邊の製薬會社の社長をして居る人がある、此の人などは隨分變つた事をして來た人で田舍廻りの書家をして三十年筆一本で浮世を渡つた人も居るそうだ、又三圓の資本で高利貸を始めて、今では五十萬圓以上の家作を持つて居る人もある、先刻此の前を通つて行かれたお孃さんがありましたらう、彼の人のお父さんも元は土方や米搗をした人だといふが、私共にはどうしても見へ

ません、それは數年來の金の威光で身に德がついて居るから中々凡人の眼では、素性を看破る事は出來ませんが、浴を召す時、そつと伺つて見ると成程肩上に瘤が入つて昔勞働した印が歷々と見へますなどと追從のやうにいふたが、其の男などもどうやら惡運の强そうな連中です、よし〳〵おれには尺八といふ一藝がある、每晚欄干に凭つて吹き出すと樓上樓下の客が段々近づいて來て耳を澄まして賞翫する今晚から此の尺八で以て客に近づいて段々と人間の秘密を聞き出してやらうと、そこで自分は一管を携へ庭前の築山に向ひ、徐ろに吹き出し始めたのである。

〔二〕

其日の晚方であつた、私は尺八を手にして勾欄に凭つて頻りに嘯いて居ると、軈て年の頃六十近い白髮の老人が傍近く寄つて來た、よく見ると眼こそ妙に陷沒んでゐるが、色の白い鼻筋の透つた、顏に長味のある何處となく高尙な人物である、そして拂子でも持つて來て其儘顋の下へくつ着けた樣な純白な髯が一倍その人品を高くして見せるのであつた、白地の浴衣に少し古びた縮緬の兵古帶をして凝と立つてゐる所ろは如何にも優雅で華族か有德人の隱居といふ格である。ハヽアこれが例の書家先生であるなと私は直ぐ睨りました。

イヤ御風流な事でいらつしやる、同じ唇頭を押つけて吹くのですが、下手がやると何故か一向に音が出ません、貴所なぞは中々にお上手だ、爾いふ藝が御在なさると、これで中々お樂しみです、拙者などはつまらぬ文人で厶いますがね。

といつて一寸挨拶をしたが其容子を伺ふと何處となく仙骨がありそうで、そして又俗物向に出來て居る處もあるらしい、面痩がして何となく鶴の姿があるとでも言ひたいが、又よく吟味して見ると多少は塵の臭ひもする樣である。併し書に隱れ、風流に隱れる處の隱遁者には相違あるまい。

貴君の御職業は何ですかと尋ねられたから、私は無職業風來物ですと答へると老人は不審な顏をして暫

時私の方を見詰めてゐましたが、軈て其の拂子然たる自髯を撫でながら。

イヤ人間は何か一藝に達したいものですな、お恥かしい話ぢやが拙者は書をかきます る、書といふても一向に我流で、何を習ふたかとお尋ねになると羲之の法帖が拙者の手本ぢやけれど、當節では羲之の眞蹟を得やうといふには中々難い、世間で書家らしい顔をしても皆な古人の眞似事で、銘々の器用で大抵魔胡化してしまふのが多いのです、まア貴所の前ですが實家と唐様で書く三代目とか申しまして本統の書家になるには家を



マア眠れえ　ハイカラ女史よ、籐椅子に凭かゝつて、電氣扇なんか洒落てゐるわれえ

懸賞繪さがし　第八

賣り、屋敷を賣り一度は何にも賣り拂つて丸の裸體になるまで遣らねば上達をして名人といふ處には參りませんこれは、強ち書家に限らず、音曲、遊技、琴、三味線、碁でも將棊でも、何でも一藝に抽んでやうといふにはまづ一と廉の身代を潰して親兄弟の異見を散々に喰て見なくては、手は上らないものです、拙者などは幼少の折から芥紙のやうな手習双紙で習ふたのですから迚も抽した事は出來ません、雜紙よりかも白紙、白紙よりかも、奉書や生絹の方がずつと上手になります、古の名人の言ひ

殘した言葉に芥紙に千帖習ふよりか、紙十枚書いた方がよいと申しました、それは何故かと申すのに、第一製作品の氣象が違ひます、呼吸が懸つて居ります、隨つて書でも畵でも書いたものに精神が籠つてゐて、活き働らいて居ます。それを不斷粗末なものばかりに書きつけた習慣があると、偶に立派な物に向つた時に第一氣怯れがして筆が萎けてしまひます。

そこで碁や、將棊を强くさせやうとするにはどうしても金を賭けねばならぬ、戯に遣つてはどうしても進歩は遲い、だから、相場をするにも金を擲つて見なければ本統の事は判らぬ、眞劍なものを賭けてやると中々强くなります。

一例を申すと私の知人、これも唐様で書く三代目の主人でしたか、十反あまりの田地を賣つてそれで紙を買ひ込んで來た、どうするのかと思ふと十圓に二本といふ唐墨を毎日一本づゝ磨らせて其紙へ無暗と手習をやり出した、さア手はあまり巧くはないが、立派なものに書かせると筆が活きて居て素晴らしい趣がある

まづ所謂この臺閣の氣品といふものでせうな、拙者などはそんな藝當眞似様にも眞似られないから、まづ體のよい筆耕人で、高が田舍の有福人に呼ばれて唐紙へ謹んで書くといふ位な事です、成程、これは實に眞理です、私も近頃そんな事を感じて居ます。

老人は話頭を轉じて一體温泉場といふ所ろは何處でも俗なものです、が、いや、俗でなくては人が集らず又長くも居ないですが、拙者の商賣も矢張俗でなうては立行ません、考へて見ると風流でも隱者でも何でも當節は皆商賣ですな、何ば文人だと申しても獨りで高く棲つてゐる譯には參りません、そこで據なくつまらぬ追従でも云つて大家廻りの表具屋をせなければならぬが拙者は一向に其世渡りが下手で法螺を吹く事もようせねば心にもない輕薄をいふ事が出來ない、一體田舍の田地持金持といふ者は、小作人からは納める物が一合でも不足したら中々承知しないものですが、狡猾な商人が、應擧だの、探幽だのといつて得體の知れない物を持つて來て甘く嵌こむと虫喰表装のいかさま物

に百圓でも二百圓でも惜氣なく出して仕舞ふといふ風なものですね、ハヽヽ。

【三】

書家先生が頻りと氣焔を吐てゐるところへ老先生如何ですなと縁側に立つて呼ぶのがあるから、ハツト思つて顧いて見ると是れも齡の六十餘りの有難らしい老人である、時計の金鎖をふつさりと濱縮緬のスゴキ帶に巻つけて燦々と光つて澤のある。しかも肥つて脂ぎつた下頭を撫でながら莞爾莞爾てとして居る。



ヤ噂をすれば影とやら、富澤さん、唯今貴所の御噂をしてゐたところです、今日は思ひ掛ない大白雨で一段と凉しくなつて誠によい心持です、まア、どうぞ此室に

御這入んなさい、この先生は、いつぞや貴所が御噂をなさつた、彼の尺八の先生です、サア御遠慮には及びません、どうか御這入下さい。

富澤老人は會釋をしながら這入て來た、自分は豫て書家先生から聞いた事がある、その富澤といふのは親孝行から身代を作り上げた奇特の老人であると思ふものから少からず、尊敬の意を表してゐると、富澤老人笑ひながら。

イヤ貴所達は唯今俺の事を親孝行だと申されたやうだが、それは大きに話が違ひまする、何も俺が親へ直接に孝行をしたといふのでは厶いません親孝行の當人は別にちやんとしてあるのです、俺は其者に關係をして少々工面をよくした者ぢやが、兎角其人物に感服してゐるから一寸こゝで其心掛の一端をお話しやう。

其者の職業は植木屋で俺の近所に住んで居る者です一人の母親を養ふてこれが大變に孝道を盡してゐるけれども、世間には誰あつて彼れを知るものはない、又偶々其當人を知るものがあつても誰一人として彼男を孝行者として見認るものはない、それで當人は眞正正銘の孝行者であるこれは誠に不思議な譯であるが、元來世間では親孝行にせよ何にせよ、兎角驗著しい事實が顯はれて來なければ世人が感心しない、譬へば邪慳な繼母かなんぞに仕へて恐ろしく虐待されるとか、又は貧苦の裡で骨身を碎いて働らくとか、親の爲には疵のない嫁でも追ひ出して仕舞つたとか、又は恥を忍んで娼妓になつたとか、寒中雪の上に寐たとか、夏、素ッ裸で蚊に喰はれるとか、指を切り落すとか、生爪を剝がすとか、兎角常人の識で測られぬ業をして見せないでは、世間で大騷ぎを遣らないものだから、むかしから孝女孝子の出產地は大抵貧民窟と極つてゐる、十二三な小娘が母の大病を看護する傍ら納豆を賣つてあるくとか、小學校をやめて蛤蜊を擔いてまわるとか事實の如何に拘はらず親孝行にはこういふ行がなくてはならぬ。

然るにこの植木屋は先代から多少の財産を持ち傳へて居るから、蛤蜊納豆を賣りあるくの必要なきのみか、

其母親が生母であるから邪慳な事はない、故に折角この男に孝心はあつても月前の燈で少しも特色を發揮しないのです。

乍併其の孝德は、なか〱侮り難いもので、或日所用あつて俺が尋ねて行くと恰度今他から歸つた所で、草鞋を穿いた儘こゝに立つて居ると、其母親は手桶に水を提げて來る、息子は泥足を緣先へ投げ出した儘母親に洗はせ樣とするから俺は大いに不審を起し屈强な男が、老たる母親に足を投げ出して洗はせるといふ事はこれは大なる不孝の所業であると認定した、それから夕飯の塲合となつたが、矢張前同樣、息子は粗食でもよかりそうなものを、是れも御馳走を己れの膳碗にのみ盛りつけて、十二分に食し母は隅の方で誠に粗末な膳碗で食を戴いてゐた、これはいよ〱不審な次第と思ひ段々と譯を聞尋ねて見ると、これが眞の親孝行の所爲である、其故は、何でも親の意に背かない事をするのが孝行であるといふ事に陷つたのであるが、貴所達は如何思召すのですか、イヤそれは兎に角俺がこの孝行者に就ておもしろい仕事を經畵した事があります、これは却々の珍事ですと富澤老人は聞き居る我等の顏を見て一段得意になつた。



（次號完結）



文園

秋のおとづれ

桐一葉

夏雲尙ほ天の一方に殘りて、團扇の寵未だ衰へず。池邊を飛びかふ蜻蛉の羽輕く、蟬はまだけさの秋を知らぬ顏なり。されど一葉落ちて天下の秋を知る土用牛に秋風はおとづるゝものぞかし。

萩、桔梗、女郎花、瞿麥、尾花、刈萱、藤袴、われもかう、釣鐘草など千くさの花は野邊を彩り、籬邊の朝顏夕顏は今盛りに開く。

柿も蜜柑も楓も尙ほ靑く、稻妻は夜の闇を照して、早稻の花、やう〳〵に咲く。唯散りそめし桐の一葉の隙もる三日月の影のみは、秋をことわり顏なれど、秋はまだ淺し。

靑山緣水のほとりには、さすがに秋立つことが早ければにや避暑の客は匆々に歸裝を理めて都門へ急げど都はなほ炎塵立ち迷ひて氷賣の聲、ちまたに高し。

稻妻の雲を離れぬ月夜かな　子規

蟬はまだ知らぬ顏なりけさの秋　蘆庵

散りそめし桐の一葉にひま見せて秋なことわる三日月の影

みそぎせしあと川柳一葉散り二葉流れて秋風ぞ吹く

植物採取に誘ふ

七草の名のみは知れど萩より外は實物を知らぬ身の文に書き、歌に詠み出で候はそこなるわざよと每に思ひ居侍りしに東京高等師範學校へ入學中の兄先日より歸省致し居り、明日は近郊へ植物採取に出掛け候はむ

との事に、よきをりと存じ、私も隨行を頼み申候。あなた樣も御同行の思召おはさずや御意を得たくて一筆しめしまゐらせ候かしこ。

虫の音

星まつりも濟み、盂蘭盆も過ぎて後は、一日一日に新涼を催し、晝稍々短く、夕日の影弱し。蟬、蜻蛉、蠅、蚊の全盛時代は既に過ぎ去りて、松虫、鈴虫、轡虫、いとゞ、こほろぎ、きりぎりすの世となり、露けき野邊にも、

もう秋草の頃なんですか？百花園あたりよ、この姉さん何を見て居るのでせう、桔梗、をみなめし、尾花、刈萱、藤袴、まあ當てごらん。



八重葎しげれる垣根にも、清みたる濁りたる聲とりどりに秋告げ顔なり。軒の燕は辭し去りて初雁の音はやがて天邊に聞ゆ。岐阜提燈も青簾も、葭障子も取りはづされ、蚊帳はおしこめられ團扇は遠けられ書窓には燈火ほの見えて咿唔の聲聞ゆ。各學校も此の頃よりぞ始まる。

秋風の心うごきぬ縄すだれ　風蕾

秋風に初雁が音ぞ聞ゆなる誰が玉づさをかけてきつらん　友則

はぎの葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるゝ初なりけれ

きのふこそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く

懸賞繪さがし　第九

會讀を催す

秋風涼しく燈火親しむべき頃と相成申候　月を掠めて飛ぶ雁がね垣根にすだく蟲の聲々、人も書讀めと促し顏に候へば明夜より私方にて徒然草の會談を催さんとて某様の御同意を得候あなた様にも御仲間入の思召おはさずや御近隣の秋月様へも御加入御勸め下され候はゝ御往き返りのよき御道伴れかと存じ候かしこ。

良夜

月は一つなれども看る人の境遇と感情とはさまぐ＼なり。高樓傑閣の上、珠簾を掲げ金樽を倒して此の良夜を賞するもあり。瀟洒たる茅齋、燭を屏け燈を移し閑に香を焚きて松影を席に延くもあり。夜もすがら池をめぐりて淸光に浴するもあり。或は狹斜の巷、紅樓の上、銀燭晝の如く、簪珥、縱横、酒酣に興涌きて、月をよそなるもあらん。或は父も母も子らも皆縁先きに端居して枝豆を摘み團子を食ひ、看る月のそれの如く圓滿なる家庭もあらん。仰で淸光を望み俯して故郷を懷ひ、轉た客衣の冷やかなるを歎ずる學生もあらん。片山里の賤が屋に老翁老媼對座して、遊子の身の上を語るもあらん。船を湖上に泛べて長烟一空皓月千里の淸景を賞するもあらん。四顧渺茫たる大洋の中、舷頭に起ちて浪より出でゝ浪に入る壯觀に快哉を叫ぶもあらん。遠征の軍人は槊を横へ詩を賦して、家郷の遠征を憶ふを顧みず。閨中の少婦は、羽うちかはし飛ぶ雁が、只秋を帶び來りて書を帶びざるを恨む。人異れば境遇同じからず、境遇同じからざれは情隨て異なれり。

古人旣に此の如く、今人も亦然り。されども月には古今なく淸光には二樣なし。樂しといふも哀といふも喜ぶも歎くも、畢竟己が心の明暗何如にありて、天上の月は毫も關せず。

名月や池をめぐりて夜もすがら　芭蕉
三井寺の門叩かばやけふの月　同
名月やたゝみの上に松の影　其角
乘りながら森はませて月見哉　去來
名月や杉をはなれて松の上　得中
人に近く飛ぶ鵜あり今日の月　桃隣
名月や我妻のせて渡し守　古白

名月やさても色々の影法師　　種美

名月や都大路の馬くるま　　子規

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月

月見ればちゞに物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど

歎けとて月やは物をおもはするかこち顔なるわが涙かな　　西行

月見に招く

只今の天氣摸樣によれば今宵は明月ならむと存じ候酒宴開くべき身にも候はず詩作り歌よむ風流も知らねば琴、月琴、笛など、おもひ思ひ奏でゝ人並みに此良夜を賞せばやと星閒樣御招き申上候間、あなた樣にもヴァイオリン御携へ遊ばし夕景より御越しのほど願はほしう候御もてなしとして御茶菓子と例の枝豆との用意だけはこれあり候かしこ。

懸賞繪さがし第十

「美いちやんごらん、まア男女の散歩でせうが、男が何か囁くと女は只うなづいてゐるといふ風體ですれ、それで二人の間にどんな意味が成立つてゐるのでせう？



秋の夜

春の夜は月と花とにあこがれて心落つかず夏の夜は暑さと蚊とに攻められて仕事手につかず、偶ま燈下に立ち寄れば名もなき小蟲、幾百となく群り來て防がんに由なく、時としては金龜蟲など勢よく飛び來て、咄嗟に燈火を奪ふことあり。到底靜座するに堪へず。冬の夜はまた餘りに寒くて、筆とる手も針もつ指も自由

ならず、ともすれば姮娥に近づき易し。唯秋の夜こそ氣澄み心靜まり夜業せんには、またなき好時節なれ。

澄みわたれる月啼きかはす雁、蟲の音遠近に響く砧の聲をかぶせて秋の夜の舞臺はいと陰氣なれば懷郷の涙に客衣を沾し、悲秋の情に腸を斷つ人も多かるべけれど、そは情にもろき人の己が心からの招くことにて忠實なる主婦は、今ぞとて授衣の計に餘念なく深更までも針もつ手を休めず。熱心なる學生は、暑中のおこたりを埋め合はさんとて、燈下に書を繙く。

一領の衣、半ば縫ひ了り一卷の書將に讀み果てんとし、さぞ夜や更けぬらんと、柱時計を見上ぐれば、まだ九時過ぎしばかりなり。夏ならましかば、日暮れてまだ間もなき頃なるをと思ひつゝ、一碗の澁茶に氣を取り直し燈かきたてゝ尚も衣縫ふ手を運び、書讀む聲を續くるに、一月の事は一夜にはかどり、一年の事は一月にかたづく心地す。昔しの人は一年の計は春に在りといひたれど、われは思ふ學力の進み、女工のはかゆくは春よりも夏よりも冬よりも秋の夜に在りと。

長安の佗に泣しふ侘きぬた　紫香

つはものを悪霊の泣かする長夜哉　松宇

子鼠の梯の桐つたふ夜寒かな　鐵雲郎

按摩笛片側町の夜寒かな　矢天

きり／＼すいたくななきそ秋の夜の長きおもひはわれぞまされる　忠房

秋の夜は長いものとはまんまるな月見ぬ人のこゝろかも、ふけて待てどもこぬ人の音づるものは鐘ばかり、數ふる指のれつおきつ草の葉におく白露のわしや顯らされて居るわいな　俗謠

秋夜故郷を懷ふ

人間到る所に青山あり。一樹の陰一河の流、親しき友も乏しからぬを、何とてわが故郷のなつかしきにや山はさまでに秀麗なるにあらず、水はさまでに清冽なるにもあらず、他に勝れて畜產の肥美なるにもあらず唯是れ尋常一樣の田舍、竹籬茅舍の山村なるに、夢魂常に其の間を離れざるは何故ぞ、おゝそれよ、そこには慈愛ある父母ましませばなり。溫き家庭あればなり。

春は花咲き鳥歌ひて四邊の光景陽氣なればにや、懷郷の情は切ならず、子規啼きわたる頃、故郷の事思ひ

出さぬにはあらねど、堪へがたきまでにはあらず。秋風身にしみて初雁の來る頃よりぞ日に日に魂は故郷の空に飛ぶ。されど晝間はまだしも堪へ得べし。夜更け人定れる時こそ一しほなれ。されどそれも尚忍ぶべしさまでの事もあるまじと思ひてなほざりにしたる、風邪のとみに癒えず、頭痛烈しくて堪へがたければ、賣薬など服用し夜着かづきて早く寢んとする夜など、生憎や秋雨蕭々として客窓を打ち、洋燈の油將に竭きんとして室内陰暗、天井にはホヤの影おぼろに映る。かかる夜こそ思はじとすれど、故郷の事はつぎ〳〵に眼前に浮び出でゝ断腸の思に堪へざるなれ。

わが書窓の前なる芭蕉葉は、はや破れつらん、萩も散り果てぬらん。垣根の秋海棠は今年も、しほらしく咲き出でしか、花壇の菊、できばへいかにか。石燈籠の傍なる桂花は、今を盛と香ふべき。紅葉も今は見頃ならん。さるにても母上今頃はいかにましまさん。尚ほ燈下に針を運ばせたまはんか、今しも父上と共にわが身の上を語らひたまはんか、さきつ日御消息ありてすぐに返事まゐらしゝより、はや半月を經ぬるに、音信の絶えたるは、何か異變にてもあらざりしにやなど思へば、眼はます〳〵冴えて幾たびか寢返りすれど眠られず。折しも一聲の雁が音は天邊に聞え、遠寺の鐘は陰に響きて枕頭に落つ。あまりに喉の渇くにぞ、枕邊の土瓶を探りて揺り試むるに悲しや一滴二滴、唇だにも濕ふすに足らず。あゝ家に在らましかば厚き介抱を受けんものをと思へどかひなし。かゝる感情は遠遊の人ならでは解し能ふまじ。

かくて長き夜を煩悶の中に明したる翌朝、嬉しき郵便の一聲、到着しつる小包の中に、冬着か、柿か、はた栗か、病もうち忘れて起き直り、手早く封おし開く此の時の嬉しさも亦遠遊の人ならでは解し能ふまじ。

野わき

風伯は龍田姫が萩桔梗女郎花、なでしこなど、さまざまに秋の野を彩るを嫉く思ふにや、はた龍田姫の手腕を[illegible]に發揮せしめて、春にも劣らぬ秋の錦を織ら

しめんとの準備にや、秋まだ淺き時に、暴威を振ひて炎塵を一掃す。早きは八月の末、遲きは九月の十日前後。

雲脚忙はしく西へ西へと急ぐにぞ、さては大あれよと眉顰むるは、たゞ農夫漁人のみならで、たれも皆無事なれかしと祈るかひもなく、天候ます〳〵險惡、交番所に暴風雨の兆ありなど揭げらる。雨戸の締りやいかに、垣塀の支へやいかに、彼もとり入れよ、是も片付よと警戒怠りなき處に雨はぼつ〳〵と降り來ぬ。やがて烈しく降り來ぬ。雨のみならば、作物にさまで障りもあるまじなど、慰めあふ中に、竹の梢、刻々に騷騷しく、はては天地も崩れんばかりの音して吹き荒むにぞ、戸鳴り柱きしめきて、家は今にも倒れんとす。折柄めき〳〵と一きは烈しき音したるは何の樹の折れたるにや、がら〳〵と雷の落ちたらんやうなる響したるは、屋根瓦のめくれたるにやなどいひて、人は皆生きたる顏色なく、唯燈下に集りて茫然たる中に、年老いたるは佛名唱ふるもあり。「これでもか、これでもか」といはぬばかりに暴れたる風伯も、思ひの外に、人の度胸の弱くて、利欲の念も名譽の情も捨てゝ殊勝げなるに滿足やしけん。漸くに鳴りを靜めて何れの空にか飛び去れるにぞ、人は皆始めて胸撫でおろして吐息つく。

朝戸開きて庭の面を見れば、塀倒れ瓦落ち、柿の大枝折れたるまゝ屋上に横はり、芭蕉は破れて裏打のかひもなく朝顏の垣は根こし飛んで隣家の井上に在り、落葉滿地、足踏み入れん處もなく輝々たる朝暾は此の荒涼なる光景の上を照す。蟬や蜘蛛や蜻蜓や、はた鈴蟲松蟲や、いかに前夜を過しゝならんと、尋ぬれども影なく、聞へども音なし。

猪も共に吹かるゝ野分かな　芭蕉
吹き飛ばす石は淺間の野分哉　同
野分して盥に雨を聞く夜哉　同
秋風や藪も畑も不破の關　同
千丈の瀧ふき散す野分かな　嵐雪
牛部屋も野分のあとの月夜哉　得中
火をふせて馬にすそする野分哉　桃雨
中空を雲のかけ行く野分かな　同
寺あれて釣鐘のこる野分かな　子規

手負猪秋に息つく野わけかな　碧梧桐

南天や野分のあしたはらり〱　古白

暴風を見舞ふ

ことしは無事なれと祈りしかひもなく近年に稀なる昨夜の暴風雨各地ともにさぞ被害も多く候はむ、私方などは住み古したる家の事とて一時はいかに相成候はむかと生きたる心地もこれなく候ひしが、先々家も倒れで相すみやつと胸撫でおろし申候、御宅は新しき御普請に候へば御損害はあるまじと存じ候へども、御主人様御旅行中の由に候へば、さぞ御心細くおはしつ



らむと御察し申上候とりあへず御見舞まで草々。

秋の風味

占守のはて高砂島のきはみはいざ知らず、氣候溫和にて暑きも人を熱殺せず、寒きも人を凍死せしめざるわが本土は四季をり〱の魚鳥蔬菜に事缺かぬ中にも秋の風味は一しほなり。

夏の暑さに四肢五體たるみて食慾も減じ、物や思ふと人の問ふまで夏痩したる身も、涼風のたちそめては、全身俄に肥りたらんやうにて、元氣も日に日に恢復し、そかしきまで

に食慾も進む。まづ嬉しきは市に出づる松茸。牛肉と煮て食べんも、飯に入れて炊がんも、燒きて二杯酢かけんも、いづれか口にかなはざるべき。初夏の筍と對して田家の風味の大關なるべし。初茸、しめぢ茸、松露なども皆とりどりに佳し。

貧しき厨に、鱸魚さては鴫、鶉などは及びなけれど、新鮮なる鰯は日に日に膳に上る。價貴からねばこそ、人は、皆賤しみもすなれ。煮附けんも、鹽燒きにせんも、ぬたとせんも、酢に浸さんも、皆佳し。野人の枯腸を肥すに之に勝る美味やあるべき。

山には栗落ちて、燒きても茹ても食ふべく、野には豆實り芋肥え、柿は熟して色は紅玉の如く味は梨にも林檎にもまさる。蜜柑もやがて八百屋の店頭を飾るべく、こゝの衢かしこの辻に燒芋の香り高し。ことにことしの新米炊ぎたるは口に辷り込むやうにて箸おく時を知らず。

暑中のなぐさみ
懸賞繪さがし
十題

本誌飛駒の中に繪さがしが十題仕組で御座いますから、何誰でも隨意に當てごらんなさい、十題とも殘らず當つた方には**先着三十名**を限りて左の賞品を呈上ます、解答の〆切は**八月十五日**です

毎一名につき

賞品は博文館發行圖書切符　金參圓宛

一解當は封書の事

一解當は第一より第十まで一が何、二が何と一ツ一ツ其名稱を舉ぐる事



女代診（十二）

糸左近

バセドー氏病

近頃本病に就いて、質問せらるゝ方の多いのみならず、本病は男子に稀有で、殆んど婦人病と言つても可い位であるから、今回は之を掲げたのである、本病者は勿論其他の方も之に罹らぬ豫防ともなれば、是非々々御熟讀ありたいものだ。

〔原因〕——●●遺傳は大いに關係がある、即ち罹れる者の中には其父母或は祖父母等にも罹つた者があるとか、又は姉妹共に罹るとかの如きは何れの醫師も往々實驗する所である、又間接遺傳とでも命名す可き者もある。それは神經病例へば癲癇、歇私的里乃至は精神病の如き系統のある家族に發するとの有るを云ふ、余の實驗したる中には父は癲癇持で姉は本病だと唧つ本病者もあつたし、又一人で歇私的里兼本病と云ふ二病倶發者も有つた、之から考へて見ても本病と神經病とは少なからぬ關係がある。次に遺傳は無くても精神興奮から特發することがある、例へば非常に怒るとか或は悲しむとか或は驚くとかといふ如き場合に卒然本病に罹つたり又は斯の如き事が屢々あると何時の間にか本病になるやうなものだ、或る夫人は其の良人が藝者上りの妾を蓄へ己れは出て行けがしに取扱はるゝ所から、或は憤怒し或は悲哀し、花爲に樂しからず、月爲に面白からず暮してる中に或夜熟々思ふやう斯る處に嫉妬の炎を燃しつゝ居らんよりは寧そ獨立して活花の師匠にでもなり、清く洒然と此世を送らう、さうぢや〳〵と思案を定め、今の中に逃げ出んものと豫て大切にしてる櫛笄及び寶石の指輪など取揃へんとすれば、こはそも如何に、其等の品は影だにも無い、思はず畜生ッと齒嚙をしたが之より此樣になりましたとは、先月の第一日曜に診察を乞ひに來られた某女の自白である、次は身體の震盪からもなる、例へば高き處より落ちて大いに尻餅舂くとか或は腦を打つとかといふ樣な時に、

本病に罹つた例は珍らしく無い。次は生殖器の疾病が誘ふこともある、殊に過房又は手淫の爲に侵さるゝは男女何れにも其例がある、劣情は身を削るの刄なりとは實に金言だ、之に就いて滔々述べたい事も有れど專門雜誌ならねば殘念ながら此位にしておく。以上述べたる事を約言すれは、バセドー氏病は十五歳から三十歳位までの婦人に多い病で、遺傳的神經的精神的生殖器病的等に發する者だと覺えておいても差支は無い、若夫れ小兒老人に有つたら破格中の破格である。

〔病狀〕――本病には三つの主なる徵候がある、之は(1)脈の速くなる事(2)頸の腫れる事(3)眼球の突出 即ち出目になることとである。其中最も早く現はるゝは速脈で、從來一分時に七十乃至八十を搏つた者が急に九十乃至百二十も搏ち、甚しきは百五十にも至ることがある、けれども此の數は何時も同じことでは無くて、一定の時間だけ多くなり、其他は大いに減じ、睡眠時などは殆んど平常に同じいやうなこともある、但し人に依ては間斷無く速いのもある、斯樣に脈が速くなると同時に心臟の鼓動が高まり、從つて患者は呼吸苦しく其重いのになると、心臟部に劇しい痛みを發し、其の痛みが肩胛部にまでも影響し悶え苦しむものである。(2)頸の腫れるのは、其の頸部なる甲狀腺の腫れるので、大抵は心臟の鼓動が高まつてから、較遲れて發生するが通常である、併し數多の患者中には全く腫れぬのも有つたり、又は腫れても甚だ僅かで一寸氣の附かぬ位なのもあることを知つて居らねばならぬ。(3)眼球突出は大抵兩眼なれども、時としては甲眼が乙眼よりも著るしく突出して兩方不揃となることもある、又患者に依ては兩方共更に突出せぬのもある。又甚しく突出するのになると、元一笑千金と形容されたる優しい美人でも何だか物を見詰るやうな一種特異の恐ろしい目附になつて、上下の眼瞼を合されぬこと程左樣に大きく出ることがある。又患者に依ては面白い目附をするのがある、即ち通常の人ならば、上を見ても下を見ても眼球の轉ずると共に上眼瞼の運動するものなるに、其人は球の動くのみで眼瞼の之に伴はぬことがある。之

を醫道ではグレーフヱ氏の症候と名づけてゐる、而して之を發するは本病に罹るや否や現はるゝもので、他病には決して無い徴候なれば、之を見たら直にバセドー氏病で御座候とキッパリ斷定することを得、診斷上大いに價値あれど生憎な事には本病者に悉く有る徴候では無い、繰返して言へば、グレーフヱ氏の症候あれば必ずバセドー氏病なれど、バセドー氏病者には必ずしもグレーフヱ氏の症候あるものでは無い、又或る患者に至つては斜視になるのもあるし、眼炎を發するのもある。又或時は大いに突出し、或時は殆んど常態に復り、嬉しや治つたかと思へばオヤ〳〵又出たかな、と云ふやうに、出沒測られざる的もある。

偖右にて正式の徴候を述べたが、此の三つは必ずしも並存する譯では無くて(2)(3)の中一つ或は二つ共に缺くこともあるし、又甚だ幽かに現はるゝのもある、又此の三主徴候の外に變體の病狀を現はすのもある、今之を列記すれば一種の震顫を發し、時としては全身を顫はせたり、時としては僅に手足を顫はすに止るのもある、其の强弱も時に依て異り少しく顫はせて止むこともあれば却々强く顫はせて、而も容易に止まぬこともある、其他頭痛を訴へたり、眩暈がしたり、顏が紅くなつたり、熱感があつたり、汗の分泌が盛んになつたりする。又呼吸器消化器にも影響し咳嗽が出たり、嘔吐を發したり、又稀には皮膚に白斑を生じたり、四肢が壞疽るやうな恐ろしい徴候を來すのもある。概して一般の患者は貧血して肉の瘦せるは免れぬ所、而して月經は遂に閉止し、次第



次第に衰へて危險の狀態に陷るものである。終りに臨んで特筆大書す可きは本病者の多數は思考力が衰へて加ふるに不眠症になり精神は何時も不安を感じ、左程でも無い事に激し易く、忽ちに怒り忽ちに悲しみ、或は笑ひ或は泣く樣、外の見る目も實に憐れなものである。

〔經過〕――本病は大抵極めて長い月日を惱み數年數十年の久しきに亘るものである、雖然稀には速に發して速かに冥土の客となる樣な急性なのも無いでは無い。又中には一年の中に治つたり發つたり變化極り無きのもあるし、或は一時癒つて全治し、其より數年間も何事なく暮してる揚句又々再發するのもある。又其全治するまでには頗る長い光陰を費して、遂に全く發らず目出度〱の結果を見るのもある。若し數年惱んで治らぬ者に至つては骨瘦せ肉落ち恰かも幽靈然たる凄い容貌で此世を終るものである、要するに容易く死ぬのは少いけれど、立派に全治するのも亦少い、又奇妙なのは重いやうに有つても全治することが有るし、輕いやうでも遂に面白からぬ結果を見るのも有つて、如何なる名醫も其の豫後に就いては何とも斷言し難い所の不思議な病だ。

〔豫防法〕――父母祖父母等に本病又は神經病に罹つた系統の有る人は言ふに及ばず、さうで無くても本病の原因となる可き事柄を避け、殊に精神を快活にして此世を送るが何よりの豫防法だ、快活にする方法は別に無い、唯身體を運動させるの一事に籠つてゐる、能く運動する者は能く食する事も出來、從つて睡眠も充分に爲すを得、心は何時も若やかで、凡ての仕事が着着進んで行くものだ、余は昨年偏頭痛を患へ、色々服藥もしたが、心身常に不愉快で有る所より、之ではならぬ須らく運動すべしだ、と氣を勵まし柔術の稽古を始めたれば、此頃では精神大いに活潑になつて、十七八歲の妙齡に逆戾りしたやうだ、煩悶に沈む人、悲觀に陷る者は、唯々運動を勵行して本病のみならず凡ての疾病を豫防せられたいものだ、斯の如くにしても尙本病に侵されたらば、否侵されつゝある人は左の療法

を參考せられたいものである。

〔療法〕——療法も亦豫防と同じく、第一に精神安慰法を講せねばならぬ、浴る程藥を服んでも精神を齷齪と感じてるやうでは何の役にも立たぬ、然れど豫防法の精神安慰と異なる點は運動の出來ぬ一事だ、即ち豫防には運動をして精神を快活にせねばならぬけれど、本病になつたら可成身體を安靜にして、山間或は海濱の風景佳き場所に轉地し、松の音波の聲でも聽きながら音樂でも奏して病を美化させて了ふ策を取るが何より可からう、次に冷水療法も却々効がある、殊に雨浴とて四月の本誌にも書いた通り、高き處へ水を充したる桶を擧げ如露仕掛で雨の如く水滴を降らし、之を身體に注いで洗ふのは最も宜い、某患者は色々と治療を受けたが、何分にも効の無い所から、此の雨浴療法を一日に三度宛實行したれば、病狀大いに緩解して遂に全く平癒した者もある。次に食餌療法も亦前二者に讓らぬ大切な事で第一に牛乳を多量に取り、飯の副食物としては淡泊とした酢の物、及び蛋白に富める鷄卵及び牡蠣の如き物は至極宜い、而して本病には飲食物何に限らず冷たくして用ゐるが肝要だ、故に唯の冷水さへも効を呈する位である、之に反して脂肪多き肉類や酒類及び茶咖啡などは嚴禁し、殊に熱い物は何に限らず用ゐてはならぬ。次に電氣療法も是非行らねばならぬ。其の方法は平流電氣を頸部に通ずるのだ、患者に依ると此の療法を試みると同時に脈搏緩かになつて苦痛も立地に除れた



と告ぐる者さへもある、併し此の療法は他の補助法なるのみならず、一時苦痛を免るゝ位に過ぎぬ、根治的の療法では勿論無い、ウキクールー氏は感傳電氣を甲狀腺腫に應用する方が最も宜いと述べてゐらるゝけれど、此方は果して然るや疑はし。次は藥物療法である、藥物療法は同じくバセドー氏病でも其症に依て其處方を異にせねばならぬ、之は素人方に說いた所で、其の匙加減が了らぬのみならず、過つて用ゐれば頓でも無い、失敗を招くと有れば五六の處方を掲げておくものの、醫師監督の上ならでは夢々應用してはなりませぬ

(一)還元鐵 〇・二 亞砒酸 〇・〇〇一五 甘草末適宜
右三丸と爲し食後一丸宛

說明ー之は貧血者に與へるので、而も亞砒酸は漸次増量の方針を取らねばならぬ。

(二)實芰苔利斯葉浸(〇・五)一〇〇・〇 苦味丁幾二・〇
單舍一〇・〇
右一日三回分服

說明ー之は心臓の鼓動甚だしきを鎭める目的では有るが、餘り効無きのみならず實芰苔利斯は畜積作用とて連服すれば中毒を起すものなれば醫師と雖も本病には用ゐぬを可とす。

(三)沃度加留謨〇・五 苦味丁幾 二・〇 單舍 八・〇
水 一〇〇・〇
右一日三回分服

說明ー之は甲狀腺の腫れてる者に與ふるのであるが余は寸効無きものと信ず。

(四)3%沃度軟膏
右眼瞼部に塗擦

說明ー勿論眼瞼の突出を防ぐ爲ではあるが同じく効は無い、氣休に塗ける位なものだ。

(五)莨菪丁幾 一・五 安知必林 二・〇 單舍 八・〇
水 一〇〇・〇
右一日三回分服

說明ー之は鎭静の目的であるが、幾分効を奏するやうである。

(六)麥角浸(一・五)一〇〇・〇 苦味丁幾二・〇 單舍

八・〇
右一日三回分服

説明ー之は血管の收縮を促し、脈搏を鎮靜し間接に眼球の突出を防ぐ目的を以て用ゐらる、其の用方が上手であると、却々効を奏することがある。

右の外消化器の障害が有つたら、相當の藥品を與へねばならぬ、斯の如くにしても、百方効無き最後の手段としては、甲狀腺の一部を摘出する法もある、之に就いて泰西の醫師中には其の偉効を唱へてゐる人も有れど、多くは摘出と同時に永眠する者も多いとのことである。

之にてバセドー氏病の全體を素人方に對しては頗る詳しく述べた積りである、能々御熟覽の上返す〳〵も精神を爽快にする方法を講じ身體を强健に保たれんことを望むと同時に、婚姻は人生の一大事なれば斯る神經病の系統ある家へ嫁がぬやう能々御撰定ありたいものだと未婚の御婦人方に一片の老婆心を捧げておきます。　（完）

豫告ー本月は「色々の頭痛」と題して有益な面白い衛生談を述べる積りであります又小兒に普通なる各種の疾病なども述べますから、何人も是非々々讀んで頂きたいものである。

季節衛生

▲我家の海水浴ー 前號にも述べた通り、海水は人體に効有るものとは言ひながら誰も彼も海水浴に行けるものでは無い、富有に委せて、ヤレ大磯だ、ヤレ鎌倉だと、贅を盡せば何うにでもなるけれど、我等の如き貧乏人は何か一策を講せねばならぬ、是に於て我家の海水浴といふ重寶な事がある、之ならば信州の山奧でゝも滿洲の野原でゝも行ふことが出來るのみならず、夏と言はず冬と言はず、降つても照つても浴らるるのである、ドレ一つ御紹介申さゃなるまい。

抑々海水は一種の鹹泉即ち鹽類泉と看做す可きもので、水百瓦中には食鹽二瓦半乃至三瓦の鹽類を含み、而も其の主成分は格魯兒那篤僧謨即ち食鹽で其他には

格魯兒麻偘涅叟謨硫酸曹達沃度等を含んでるとは言ひながら殆んど其の痕跡が有ると言つても可い位だ、然れば一石の水に食鹽二升五合を入れたる割合の風呂で一家內悉く浴れば其効力に於て何ぞ彼の海水に劣らんやだ、而して其の溫度も自由自在にすることが出來る、即ち夏ならば其儘で宜いし、冬になつて冷浴に堪へられぬ者は沸して攝氏三十八九度になせば、老人小兒何人でも差支無い、斯く入浴して上つたら更に淸水で洗ひ、乾いたるタオルで拭き取る可き一事は、天然の海水浴をした時と同一である、故に今現に天然の海水浴をして居らるゝ紳士淑女も、夏だけ海水浴を爲せば年中効力の永續するもので無いから、秋になつても冬になつても、盆も正月も此の人工的のを行つて頂きたいものである。

▲我家の溫泉━━海水は其の成分を考へて殆んど同一の効力ある物が出來るけれども、處々の溫泉例へば熱海で候の、箱根で御座るの、或は有馬伊香保草津などの如くに、何れのも人工に沸すことを得るかと言ふに之は海水よりも尙一層容易なる事で、疾病治療の目的に向つては寧ろ夫等よりも優つたのが出來る、併し往々色々な効能を述べたてたる湯屋の藥湯は大抵有害無効のもの多ければ今爰に眞正のを記して御傳授申さう。偖て全身浴は少くも一石、十分に言へば二石の水を要するものだ、故に余は二石と假定して其中に入る可き藥品を掲げ、次に一々其の應用す可き疾病に就いて聊か述べませう。

(1)鐵泉＝精製硫酸鐵　五〇・〇　食鹽　六〇・〇　重曹　九〇・〇

(2)沃度泉＝沃剝　二〇・〇　沃度　一〇・〇

(3)硫黃泉＝硫化加僧謨　一〇〇・〇

(4)曹達泉＝炭酸曹達　三〇〇・〇

(5)亞兒加里泉＝粗製剝篤亞斯　一〇〇・〇　乃至　五〇〇・〇

(6)昇汞泉＝昇汞　二・〇乃至一〇・〇を酒精五・〇に入れ續いて水二〇〇・〇を注いで溶解させ、之を浴湯中に投ずるのである。

(7)鞣酸泉＝槲の皮、楡の皮、或は栗の皮を五百瓦程一時間も煎じて之を浴湯中に投ずるか、左無くば、鞣酸五〇・〇を買來つて水二〇〇・〇に溶かし之を入れても宜い。

右の外諸々の温泉分析表を見て、其の割合に藥を混すれば、熱海、箱根何處でも御注文通りに出來る譯だ。

乃で以上の人工浴が如何なる疾病に有効なるかを説明すれば(I)は婦人生殖器の慢性病、貧血、子宮病後、重病後の恢復期、膀胱加答兒等に應用し(2)は、梅毒、腺病、神經病、肋膜炎後等に可い(3)は僂麻質病慢性痛風、疥癬、癜瘋、梅毒、横痃、子宮加太兒、月經不調、痔疾等には頗る効がある。(4)は胃病者、慢性腸加太兒、喘息、神經病等の人に幾分宜い。(5)は脂肪過多症、常習便秘、心臟病、骨諸病等の病に多少有効である。(6)は皮膚病殊に寄生物的の皮膚病に持て來いだ(7)は汗の分泌過多、皮膚等より滲出物の斷えざる症及び腋臭には甚だ効力を奏するものである。凡て温泉なり海水浴なりは男よりも婦人の方に効あるもので、輕微の子宮加答兒、膣加答兒、陰唇炎等は藥用せざるも浴療のみで全快する程であるから、縦ひ藥物を入れざるも常平生に冷水浴温浴を實行してる人は生殖器病に罹り難いのみならず、身體一般に健康なものである、尚一言す可きは婦人が生殖器病に罹り、藥湯を應用せんとする場合には、舟の如き桶を製して此の中に仰臥或は横臥しながら、浴みするが宜い、之を俗に寢風呂と云ふ。併し右の藥湯なり天



然の溫泉なりは何れも病的に行ふので、健康者には朝の冷水摩擦と、晩の腰湯で澤山だ。

▲一生の運命を占ふ法——我は一生涯健康で經てられうか、後々の運命が宜からうか、女ならば夫に見捨てられはせぬだらうか、男ならば妻が貞節を盡すだらうか等、其他我身に關する事を何でも占つて試る方法がある、乃で其の占方が却々面白い。先づ朝起き出でゝ金盥に淸水を盛り、食鹽を一握入れ、之に手拭を浸し、兩肌抜いて其の手拭を搾り、搾つては身體を摩擦し、幾度も之を反復したる後、上半身だけ濟んだら爰に兩肌斂めて今度は下半身に移り、下半身も亦同じく拭ひ終つたら我は生涯健康で、此世を送られる的に相違無い、後々の運命も必ず惡くは無い、夫にも乾度見捨てられぬ、其他何事も成功の人間だと判斷するのだ、然るに今日は餘り寒いから止さうとか、或は朝寢した爲に時間が必迫して來たから止めるとかといふ樣に、之が實行出來ぬ時は健康長命は迚も覺束無い、其他何事も不成功な人間だと歸めて當の無い幸福を願はぬのです。次に晩にも晩餐が終つてから一釜の湯を沸し、之を大盥に移して水を混せ攝氏四十度位の湯加減にし、衣服を褰つて腰以下を温めること約十分時間、然る後乾いたタオルで拭ひ直ちに寢るのです、之も毎日行はれたら福壽圓滿疑ひ無く、行はれぬ時は萬事平凡なりと判斷するのである、此の二つを以て占へば東洋の易道も、西洋の豫言法も更に窺ふの必要は無い、今や盛夏の候、此時にすら冷水摩擦に怖ぢてるやうでは、迚も冬に行はれう筈は無い、斯の如く容易に得らるゝ廉價な水で、無病長壽の基を開かるゝに、之を毎日連續出來ぬに至つては薄志弱行と謂はうか、怠け者と謂はうか、兎に角萬事成功出來ぬ人と判斷しても決して不當ではありますまい、從來實行してゐらるゝ御方は尚今後連續するやう又從來爲されぬ婦人方は此の暑い時を利用して長へに續けられんことを、國家の爲め切に希望致します。

衛生顧問

婦人科の部

無月經に就いて 問 私事本年二十一歳になりますが、未だ嘗て月經を見ませぬ、それで身體は誠に丈夫で唯始終腰が鈍くてなりませぬ、如何致したら宜しいでせうか。（大阪の濱歌子）

答 身體一般に丈夫で有つても、子宮卵巣其他生殖器の發育が未發達であるとか、或は何れかゞ先天的に缺損してゐるとかの如きは勿論無月經である、又何等の故障無く身體も頗る强壯で無月經なのもある、斯の如き人で、其を顧はずに結婚し遂に數人の子を產み始めて月經を見たといふやうな例は古今東西の書物にも澤山例がある、然れば貴女のは何れに當るか兎に角親しく專門名醫の診察を受け、然る後何とか處置せねばなりませぬ。

月經と月經帶 問 月經の際、子宮綿と申す綿を用ひ候はゞ、衛生上宜しく候や、御敎へ下され度願上候。（紀伊の若葉女）

答 其の綿を用ゐるに就いて、清淨綿で有れば宜い譯であるが、深く詰れば出血を妨げたり、膣部に炎症を起したりして害あるし、淺く詰れば經血の洩出る憂あつて、運動歩行も自由ならず、是に於て何うしても月經帶の必要がある、西洋の婦人は皆月經に就いて、非常な衛生思想を抱いて居れど、我國の婦人は何れも不完全極まる事をしてゐる、中には不潔な綿や塵紙を深く入れて終日取替へぬ者さへもある、それかあらぬか我國の婦人は十中八九は多少の白帶下があるやうだ、故に子宮綿を用ゐなさるは至極宜けれども之と同時に月經帶を使はれたいものだ、月經帶は恰かも越中犢鼻褌の如く、丁字形の物で有るが、一度丈買ひ求めて、其の製法を覺え、次よりは自己作のを用ゐ玉へよ。

四十六歳の無月經 問 母四十六歳は二三年前より月經不順に相成り有つたり無つたりしてゐますが、氣分には少しも變られど、何か療法有りますまいか、御敎へ下され。（待野母子）

答 我國の婦人は月經が始まつてから、平均三十年間續くが普通である、而して月經の始まりは大抵十五六歳であるから、四十五六歳になれば最早無月經になる可き年齡であつて、病的では無い、斯の如く無月經になる可き時が來ると、不順になつて、或は今月有るかと思へば來月無く、行きつ戻りつの姿で、遂に一切見ぬやうになる、然れば母上も矢張斯る時が來たのでせう、月經が無いやうになると、精力も大分衰へるものであるから、孝道に篤き貴女よ益々大切にして心身を勞せられぬやう誠心を盡されよ。

サックの可否 問 博文館發行の家庭衛生叢書中にサックを用ゐよとて、サックの効能を述べてありますが、衛生上如何なものでせうか。（上州のＳＫ生）

答 右數者は甚だ有益な本ではあるが、此の一事丈は贊成しませぬ。斯る不自然な物や不自然な行爲は甚だ宜しからずと確信す。

▲（[illegible]の不幸なる妻女）に答ふ＝右の次第であるから、斷然用ゐられぬことを乞ふ。

▲（兵庫縣のなげき女）に答ふ＝別に心配な事は無いと思ひます。

（姙娠の補助藥）問 不姙娠の原因は嘗て本誌で知りましたが、何か藥用して姙娠することは出來ますまいか。（大阪のＫＨ女）

答 時々賣藥の効能書では見ますけれど、一藥を服めば原因の如何に拘らず誰でも姙娠疑ひ無しといふやうな神秘的の藥は現世紀では恐らく無いと信じます、惑はぬが何より肝要である。

（血族結婚の惡しき理由）問 血族結婚は何故に惡しきや、其の理由を學理的に御示し下され度願ひ上げ候（淡路の濱千鳥）

答 如何なる身體でも其の身體相應に弱點即ち缺點の無い者は無い、而して血族は互に同一の缺點を遺傳してゐるものである、然るに血族結婚をすれば生まるゝ子は其の缺點益々重複して或は虚弱 或は白痴或は聾啞盲目等の不具者を出すこと尠く無い、論より證據、東京盲啞學校の聾啞生徒中血族結婚間に生れたる者は二割強あつて、其血族關係を調べると、叔父姪、從兄弟姉妹、再從兄弟姉妹、遠き血族になるとの事だ、滿天下の貴女紳士よ、之を讀めば思ひ半に過ぐるであらう。

（貝類と姙娠）問 貝類を食すれば子無き者姙娠すと、果して然る道理の有るものに候や、承はりたし。（阿波の鳴門女）

答 ホーツクと云ふ人は貝類は多く燐を含んでゐるが故に、生殖慾を進めるものだと述べてゐるけれど、之とても信じられず、況んや之を食すれば姙娠するの効力有りと云ふ一事は恐らく何かの誤傳であらう、余は未だ確たる事を知れば他日改めて其の信否を發表しませう。

▲（大阪の一人娘）に答ふ＝診察せぬ事なれど、差支無しと思ひます。

（乳房の小なるを治す法）問 私は最早臨月に迫り居り候が、乳房甚だ小さく心配罷在候、大きくする方法を御教へ下され度し。（四日市の田舍娘）

答 生れぬ中は何とも致方が無い、生れてから尚小さくて哺乳し難いやうな場合には從つて乳汁の分泌も少いのが通例で有るから、乳房を刺戟して或は哺乳器を用ゐたり、或は芥子泥を塗つたりして、其の發育を促すと同時に滋養の飲食物を取ること肝要である。

▲（熊谷の五月雨女）に答ふ＝小なるを大きくするは衞生上の問題なれど、大なるを小にするは自然の道に違へば斯る望を夢起してはなりませぬ。

（月經不順兼白帶下）問 身體は健全、發育して居りますにも似ず、月經不順に白帶下あり、且つ便秘症で、出産しましてから、時々痛みを感じ、入浴すれば快よくなりますが、矢張子宮病の一種でありませうか、及び其の善後策に就いて教へ玉はりたし。（神田の君子）等

答 季節衞生の章に述べたる浴治法試みらるれば、大いに治るでせう。
藥物買入等の爲に事面倒ならば責めては一生の運命占法を實行して見

玉へ、それも面倒なら自業自得で、一生涯薄弱で世を送る運命と諦められよ。

〔白帯下の療法〕問　結婚後白帯下時々有つて悪臭甚しく御座候間、簡単なる塗擦薬を御教示下され度願ひ上候。（長野の片田舎女）

答　矢張季節衛生の章に述べたる浴治法を實行して傍ら單寧酸明礬各一瓦を温湯百瓦に溶し脱脂綿を浸しては之を挿入して見られよ、併し此の薬を塗けるに就いては御地の醫師に御相談ある可しと、呉々も申し上げておきます、醫師に相談は恥かしい、冷水浴は厭だ、毎晩の腰湯は面倒臭い、運動は慵い、暑い時は避暑に行きたい、寒い時は炬燵へ首ッ丈入れたい、藥を用ゐるなら一寸一服で數年の病瞬く中に治るので無くば用ゐる氣にならぬと言はるゝに至つては、神ならで斯る方法を知る由も無い。

〔人工妊娠法〕問　聞く所に依れば人工的に妊娠せしむる方法ありとか果して然るや是非々々御教示を乞ふ。（京都の閨帽り婦）

答　シムスを云へる獨逸の醫師は注射器を用ゐて子宮頸管狹窄の婦人に妊娠せしめたといふことで有るが、實際に行はれ難い説である。



内科の部

〔氣管支加答兒の療法〕問　妾は氣管支加答兒にて色々療治も盡しましたが更に効見えず候、療法及び養生法等御示し下され度御願ひ申します。（伊豫松山心配女）

答　氣管支加答兒にも急性、慢性、腐敗性、纖維性など有つて一概に之と申されぬけれど今假りに貴女のを慢性氣管支加答兒として其の攝生法等を聊か述べて見ませう第一に氣候の暖い海岸に轉居し温浴蒸氣浴等を實行せねばなりませぬ、蒸氣浴とは俗に申す蒸風呂の事で湯氣を受けつゝ身體を摩擦するので、頗る發汗して浴後仲々爽快を感ずるものだ、食物も消化の宜い滋養品を撰ぶ可きは勿論であるが、殊に牛乳療法とて牛乳を一日に五合も用ゐ御手紙中に一合と有つたが一合では効力甚少い、運動としては樹林或は濱邊を徜徉散歩する位で可い、藥用として蒸氣吸入器を用ゐて二%食鹽水を一日に七八回も吸入して貰ひたい、若し又分泌物の餘り多量なる

時は的列美底淸三瓦位を熱湯中に注ぎ、其の蒸氣を吸入すれば可い、それから又頸部丈の冷水摩擦を屢々實行し胸部は濕布繃帶しておくが肝要だ、内服藥としては、左に一二の處方を書いておくが、御地の醫師と能々御相談ありたいものだ。

吐根浸（〇・三）一〇〇・〇　老水 四・〇　單舍 八・〇

右一日四回分服

攝涅瓦浸（四・〇）一〇〇・〇　硇砂加茴香精 一・〇　單舍 八・〇

右一日三回分服

咳嗽劇しく爲に眠られぬやうな時は、

パラールデロツト 三・〇　護謨漿 二五・〇　單舍 五・〇

右臨臥に頓服

腦貧血の治療法　問　原因は腦貧血ださうですが、四年前より逆上甚しく動氣高ぶり精神鬱々し、物覺え惡しく候、是等の養生法等を知らせて頂きたく候（静月三ノ宮脈病女）

答　是血或は痔疾の如き出血の場所が有りませぬか、若し有つたら早速に其方を治療せせればならぬ、次に下痢病では有りませぬか、若しさうだつたら、之も直に其の方の手當をしてかゝるが肝要です、次に授乳してゐらるゝならば、子供の爲には可哀さうですけれど、斷然飲ましめぬが宜い、身體は常に平臥し、滋養の食品を取り良好の葡萄酒を適度に飲むことも必要である、内服藥としては、左の如き鐵劑が宜い、尙御地醫師の診察を受けらるべし。

沃度鐵含利別 六・〇　苦味丁幾 二・〇　水 一〇〇・〇

右一日三回食後分服

或は又

還元鐵 〇・二　鹽酸規尼涅 〇・一　甘草末 適宜

右九丸と爲し、一日三回食後三丸宛。

小兒の消化不良　問　三歳の女子、消化不良にて一日二三回の下痢あり、硝蒼及蘗膏を與へて宜敷や、又其の分量を承りたし。（伊勢國一自由ヒポクラニース）

答　唯單に消化不良と言はれた丈で、病狀に就いては下痢の二字有の外何等の事も述べて無い故に果して蘗膏が適するか否やも確答するを得ず斯の如き漠を摑むやうな問を發せらるゝは、失禮ながら不深切かと思ひます、直接に醫師の治療を乞ふのでさへ眞に病氣を治し度思へば纔數千言を費すものなるに、手紙の上で唯僅かに下痢の二字で判斷させようとは、御無理では有りませぬか、併し果して蘗膏硝蒼が適當とすれば一回量蘗膏〇・二　硝蒼〇・三　位で宜しいでせう。

問　私の夫年齢三十二歳、職業は小學校長、住地は一方に山を控へ、前に湖水あり。身體の經歷は父は卒中にて五十五歳を以て此の世を去り、母六十二歳は今尙健全　兄は二人何れも壯健に候、本人は幼少の頃より、左したる病氣も無つたけれど、快活ならぬ質で有つたとの事、私が嫁いだのは四年前でありますが、常に讀書をのみ事とし、飲酒も喫煙もなさず、唯時々菓子類を食せる位に候、然るに一昨年赤痢を患へ、

治療を受けた所、三週間にして平癒し、其後食慾の進むがまゝに、以前よりも大食致したのが原因となつたのでありませう。現在の病狀は其の初め即ち昨年の春頃より何となう倦み易く、好む讀書も致さず唯臥轉んで、少し頭痛がすると申して居りましたが、次第／＼に食慾は減り、上腹は重く張り、其の上吐氣を催し、おくびは出る、げつぷは出る、時々腹痛も有る、精神は益々鬱々し、便は秘結し、舌の上は黄色を帶びたる苔がある、夜は眠り難い事も有つて、身體は幾分痩せ候、けれども今尙學校の奉職は續け居り候、右の次第にて村の御醫者は酸性消化不良症との御診斷色々治療も致しますれど、何分病は退歩せず、何卒之が豫防法及び治療を御教示玉はりたく、夫に代りて切に願上候。（諏訪湖邊の稹植女）

答 詳しく病狀を述べて有つて、而も一句の贅文字が無く、一々醫師の參考になる、文章も亦簡潔手跡も亦楷書で丁寧に書いてあるから、更に讀みづらく無く、讀み終ると同時に御夫妻の容貌が有々と目に見ゆるやうで、親しく診察したやうに了解致され候、左候へば可成詳しく御答へ申しませう。

▲**消化不良の養生法**＝第一に飲食物の攝生であるが、患者に向つて、消化し難き物を避け、消化し易き滋養食物を取れ」との訓戒は何れの醫師も言ふけれど、此の一言は如何なる胃病者も知つてる事なれば、放蕩者に德行を守れと勸むるが如く、何等の益は無い、故に之が調理の任に當る人が能々心得てゐて、病人に何をしませうなど尋ねずに、手換へ品換へ、珍らしく旨しく料理して、舌鼓を鳴さすやう工夫せねばならぬ、粥の副食物としては、兒牛の細刻肉、牝雞、雀、鳩の肉脂肪の少き魚類の刺身、湯婆、麩、豆腐、梅干の皮を除きたる肉、百合、自然生、キャベツ或は菜の極めて嫩弱なる部分を極めて少量に與ふる等であるが、之を上手に厭の來ぬやう、料理せねばならぬ、『さア晩餐を召し上りませ、今日は妾が心盡しの御馳走オホヽヽ』『お皿は何だ雀を控き薄味噌を塗けて燒いたのか、香ばしくて旨しいのウ――、これは何だ、自然生のトロロか、マア鰹節の煎汁を絹で漉したとは、結構々々、今一杯貰ひたいものだが』『一度に澤山召し上るのは御惡いと存じ、其丈しか製へんでした』『さうか仕方が無い、明日又貰はう』右の樣にして注意すれば必ず養生出來るものである、鷄卵の半熟も唯湯を注いだのでは、ダブ／＼量が多くなるから病人は好まぬ、故に卵を其

僅暫時熱湯に浸し、之を破つて甚だ少量の食鹽を入るれば、正身丈の牛熱であるから、食べられぬ事は無い、牛乳も幾分の珈琲でも入れて臭氣を防ぐとか、兎に角眞心籠めて介抱するが肝要だ。食物の時間も整然と守らねばならぬ、必ず〳〵食と食との間は六時間を隔つ可き事を忘れてはなりませぬ。次に精神も可成愉快に保たしむるやう取計ふが夫人の夫人たる所以だ、運動も徜徉散歩位は可いが、學校へ奉職して居らるゝとなれば病人には其位で澤山だ、全快の上はドン〳〵爲るが宜からう。入浴は毎晩爲しむるを可とす、精神も爽快になり、血液の循環を促がし、食物消化の上にも宜い。

▲消化不良の療法之は勿論御地の御醫者も行うてゐらるゝだらうが、御參考の爲め、聊か記しておかう。酸性消化不良には是非共セルチル水を適宜に服用せしむることは肝要である。次に便秘との事なれば、

人工加爾々斯泉鹽 五・〇 を水 五〇・〇に溶解して

毎朝與へ、左の處方を服用せしめたいものだ、

ケンチヤナ根浸 (三・〇)一〇〇・〇單舍八・〇

右一日三回食前(三十分時)分服

含糖百弗聖 三・〇 マルチチ 〇・三 撒酸〇・一

乳糖 適宜

右分三包一日三回食後一包宛

【坐骨神經痛の療法】問 (1)は坐骨神經痛の療法(2)麥飯と粟飯との比較(3)健康體に牛乳を用ゐるの利害(4)饂飩は消化し易きものなるか、(5)干餅の消化力は如何右御教示下され度。(福岡縣大字夜明區やす)

答 斯の如く數問を列記せらるゝと、單簡に答へればならぬ、單簡に答へれば不得要領になるものであるから、貴女に限らず何人も一問宛尋ねて下さい(1)は原因を究めて療治するが肝要である、例へば痔疾の爲ならば、痔疾を療治し、貧血より來るものとすれば貧血の療治をするやうな譯である、一般に下肢を安靜となし、水浴温浴を實行し、電氣按摩も施すなど色々手を盡しても効無き時は神經を切斷せねばならぬこともある、藥用は其の原因に依て異なれば、並に列記するの暇は無い。(2)麥飯の方可なり。(3)不可。(4)饂飩其物は消化惡しき物では無いが、ズベ〳〵と嚙まずに嚥み込めば消化し難し。(5)は健康體の人には消化し易き者である、病體には干餅に限らず醱酵物は凡て宜しく無い。

【肺病初期の徴候等】問 肺病初期の徴候は如何なる工合になるものに候や、又初期ならば治癒致しませうか、御示し下され度御願申

上候。（能登の鈴子等）

答　肺病の初期は極めて徐々に發するもので、大抵の病氣に出る徴候と殆んど同じければ、素人の力が生中知つてると、感冒を引いたのも肺病で無いかと恐れ、爲に無益の結果眞に肺病を招くことがある、故に正直な醫師の診察を乞ふが何より肝要だ、然れど折角の御尋なれば聊か述べておきませう。返すくも拘泥してはなりませぬ。

▲肺病初期の徴候―一種特別な體質を呈はし肩の骨や胸の骨が露れ出で、面色は蒼白くなつて、頬に少し赤味を帶ぶ、齒も薄氣味悪いほど白くなる。顳顬や眼の上が凹み、髪の毛が薄くなり、それで身體中に贅毛が生えて頸が自然と細長くなる、故に醫者の眼から見れば何となく結核患者であることが斷定せらるゝのである、偖本病に罹れば極めて徐々に痩せ次第々々に貧血となり、食慾も段々減り、これは胃病でないかしらと自分から氣がつき、醫者に診て貰へば醫者でさへも餘程丁寧に診ないと、慢性胃加答兒などゝ誤診する。そこで胃病の療治をしてゐると呼吸が短かくて數多くなり、聲が嘶嗄、胸が痛み頑固な乾た咳嗽が出で、痰も從つて多くなる。續いて汗盜が出たり、又は日哺熱とて午後四時頃から徴熱が起り、病漸く進めば痰中に血液を帶ぶるやうになる。斯うなると素人でも結核ぢやなあと氣が附くものである。此位知つて居られたら澤山でせう。此位の中ならば先月の本誌で述べたる療法を施せば大抵治る。

雜部

（油と白粉）問　髪毛に塗ける油は何が宜しいでせうか及び無鉛白粉は何と申すのが衛生上差支ありませぬか御教示を乞ふ。（安藝新島女）（新横のサミシヨン女）（長野の八岳生）等

答　和製コスメチツク、丹頂油、パントレン、梅花香等は髪毛の油として皮膚を補ふ。白粉は御園の露、水晶白粉、千代用白粉、御園の雪などは無鉛であると、衛生試驗所で分析したる上の報告である。

（有功なる化粧水）問　化粧水の種類は澤山ありますが、何れも肌の質を濃かくするとか、色が白くなるとかの自慢ばかり竝べ立てゝ廣告してありますが、何を買ひ求めて宜敷か惑ひますが、御同情に富める糸先生よ、願くは最も有効なる化粧水を敎へ玉はれたし。（安藝廣島GG女）

答　小生とても知り申さず、然れば其製法を敎へて上げませう、乃ち硼酸二瓦を温蒸餾水中合に溶し、之に薔薇油二三滴を注ぎ、能く攪拌せ

冷えてから、之を以て頭なり顔なりを洗へば皮膚病を豫防し、且つ香氣馥郁たるものである。

（蚊と蚤との驅除法）問　蚊や蚤の來らぬやうな工夫は到底不可能のもので せうか、御教示を乞ふ。（本郷千駄木の寐られぬ嬢）

答　近邊の樹木を伐り水溜及び溝へは石油を流し、床下疊の下家の周圍に石灰を播く等の法も有れど、最も簡單なるは除蟲菊を粉末にし燻せば蚊を追ふことになるし、夜具の周圍に播けば蚤來らず。

（著書に就いて）問　左近女史の御著しになつたる衛生書は何と申すのが有之候や、御教示を乞ふ。（安房の濱邊女）

答　私は女では有りませぬ、唯ひ醫武者です、私如き者の著書碌な物も無之候へ共、左記致しておきませう。

通俗治療法　日本橋區本町博文館發行
家庭衛生講話　神田區今川小路壹丁目五番地金刺書店發行
素人診斷學　同　斷
素人藥物學　正續二冊　日本橋青物町敬文館

右の外に尙數卷あれども通俗的ならず候。

（鼻病に就いて）問　鼻は常に臭氣を感じ呼吸する每に鼻中は幾分痛み、朝起き出でたる時などは殊に咽頭までに痛みを感じます、何卒良き療法を敎へ下されたし。（但馬のつまり女）

答　診察の上ならでは何とも答へ兼ますが、兎に角劇しく鼻汁をかまぬことゝし、イヒチオールを鼻中に塗り、石炭酸と依的兒とを一と四との割合に混ぜ之を瓶中に入れ、鼻内へ嗅ぎ入ることを試みられよ。

質問心得

一　書體は、楷書假名は變體を用ゐられぬ事。

一　姓名年齡病狀（可成詳數を要す）記入せられたき事。

一　葉書に一人一問たる可き事。

一　郵券封入或は往復葉書を以て返書を乞はるゝも必ず應ぜぬ事。

一　匿名は異稱なるを選ばれたし「女學世界愛讀者」「懸賴女」等の名は多く有つて甚だ混らはしき事。

一　男子の質問固より差支無れども、男子生殖器に關する事は答へざる事。

一　面白半分の問と認むるものは必ず沒書にする事。

一　科目を分けて順々に答へますから、問に依ては三ヶ月後に廻るかも知れぬ事。

一　質問書は東京市本郷區森川町一番地表北裏七十八號糸左近へ必ず宛てらるゝ事。

一　日曜日ならば午前午後共に診察の御依頼に應じても宜敷事、但し開業してゐませぬから處方箋を差上る丈なることを御承知おき下されたし。

一　森川町一番地は四百何十戸ありますから、御訪問下さる際に必ず表北裏七十八號を御忘れなさらぬ事。

一　小生に本名を明せとの手紙が往々參りますれど、糸は本姓で左近は本名であります、雅號では有りませぬ。

婦人に必要なる齒の衛生

ドクトル　志村誠磨

△月經と齒の養生

婦人は月經時になると、口の中迄も影響がある。第一齒根が充血する。齒が浮いて來る。或は咽喉がはれる。のみならず其の分泌する唾液は甚く酸性を帶びて來る。從て此時は口中は勿論不潔になり易い、又其の酸性の唾液の爲に齒の腐蝕を助けるので、兎角齲齒が出來易いものである。故に婦人は月經時に於ては屢々含嗽法を行つて口中を十分清潔にすることを力めると共に、若し齒が腐蝕しかけたならば成るべく速かに之を塡充しなければならない。

又女子は十四五歲、男子は十五六歲、所謂靑春の時期になると、身體諸機關に頗る劇しい變動を來すが、此時矢張り口の中迄變調を來して、常には消毒的の効能ある唾液が、此際には著しく其作用を減じて、右月經時に於けると同じ結果を見るから、此時も右と同一の手當をして齒を十分に保護しなければならぬ。尤も此際は齒の腐蝕に對する抵抗力が非常に弱くなつてゐるから、齲齒を塡充ても直ぐに不可なくなるけれ共去ればと言つて放任つて置けばいよ〳〵不可なくなる譯だから、恁う云ふ際には特に塡充ることが必要である。

今一つ注意すべきは姙娠中である。婦人は姙娠中は從來自分の身體の爲に取つて居た石灰分の一部を割いて胎兒の骨や齒を作る爲に供給せねばならぬから、齒は非常に弱くなつて來る。そして痛み出すと何程藥を附けても癒らない、而も姙娠中は拔齒のやうな甚ひ刺戟を與へる手術は大の禁物であるから、之れが治療は甚だ困るのだ、故に齒の惡い婦人は成るべく注意して姙娠前に十分手當をして置くことが肝腎である。

△子供の歯と母體の營養

一體歯を本統に健全にするには我々が胎内に居る間から母たる者が注意しなければならないのである。

或人が或教育家に向つて子供の教育は何時より始むべきかと聞いた所が、其の子の生れる前二十年位より始めよと答へたと云ふ話があるが、歯のことも殆んど其れと同じである。即ち胎兒は姙娠後七週日位より歯の發生を始めるから、少くとも其頃より母は食物を選擇して胎兒の爲に歯の滋養分を十分供給しなければ、迚も健全な歯は出來ないのである。歯の滋養分と言へば即ち石灰分であるが、其れを取るには如何なる食物が宜いかと言ふに、肉類は穀類よりも通常石灰分は多いけれ共、其の分量は僅に一プロセントにも當らないので殆んどお話にならぬ。其の分量の多いものは先づ海草であらう。鹿尾菜、荒布、昆布、海苔などは一向滋養にならぬもののやうに言はれてゐるが、歯や骨の爲には實に大なる効能がある。海濱に住む人の歯の強健なのは全く之を食つてゐるからである。薇、蕨或は名古屋の切干大根なども石灰分の多い方で、孰れも三十プロセント位を含んでゐる。其他雲丹、海鼠膓、目刺なども却々分量の多い方である。此等は平生食つて居ても勿論爲になるが、姙娠中は特に其の必要がある

――西洋人は平生恁う云ふものを食はずして、野菜、肉類、小麥、粟、玉蜀黍等石灰分の極めて少ないもののみを食つてゐるから、從つて歯は弱い方であるが、併し彼等とても姙娠中は之を食ふことを奬勵するので、骨や歯の滋養物として缺くべからざるものなることは十分之を認めてゐるのである。

△子供の齲歯を豫防する法

扨て軈て子供が生れて歯が生へて來たならば今度は其れを腐蝕させない手當が必要である。それには、子供の乳歯が一二枚でも生え出したら、其時分から、指先に「ガーゼ」或は脫脂棉を巻き附け、之を硼酸水に浸して、其れを以て歯や口内の上顎や下顎などを清潔に拭つて遣らねばならぬ。若し之を遣らないと、親の乳や牛乳の口内に附着してゐるやつが乳酸といつて非常

に劇烈な酸類に變化して琺瑯質を溶解せしめる恐れがあるので、其れが爲に可惜眞珠のやうな美しい齒を醜い味噌つ齒にして仕舞ふヿがある。加之年齡なら僅か三歳位の子供が齒根に膿を有つのなども全く之を怠るからであるが、之れは甚だ危險なもので、其の膿中に居る黴菌が咳をする時などにやゝもすると咽喉から耳へ通じてゐる管――ヨースタキー氏管――へ這入つて行つて中耳炎といつて耳から膿の出るやうな病に罹るヿもあれば、或は又其の黴菌が下顎にある唾液の出る管――ステノニー氏管――へ這入つて行つて頰の腫れるやうなヿもあるから、右の清潔法は是非とも勵行したいと思ふのである。而して子供が四歳位になると齒が皆生え揃ふから、そこでそれ姉さんも爲ますからお遣りなさいと云ふやうにして齒楊子を使ふヿを敎へれば、子供は喜んで之を遣るから、それからは自分で掃除をさせるやうに躾けたら可いと思ふ。

△齒の交替期の注意

子供が六歳になると六年臼齒が奥の方に生えて來る之れは永久替らない。それから七歳になると他の乳齒はそろ〳〵永久齒と交替を始める。此時には、乳齒を餘り早く拔いても不可ぬし、又遲く拔いても不可ぬから、之を適當の時期に拔く爲に成るべく齒科醫に監督せしむるやうに致したいものである。之を適當の時期に拔かなければ、第一齒並が惡くなつて容貌に大關係があるし、又齒並の惡い爲に掃除を爲惡い所から兎角齲齒に罹り易い、さうなると又十分咀嚼も出來ないと言つたやうな譯で、非常に大なる影響がある。故に親たる人々は何うか子供の七歳位から十二歳位迄の齒の交替期間中は每月一回位は必ず齒科醫の檢査を受けさせるやうにして欲しいものである。西洋などは此に至ると却々感心なもので、每月一定の時期に子供を引卒れて必ず齒科醫の許へ行くのである。

△齒を强健にする法

齒に就ての大體の注意は右の如しとして、進んで齒を强くするには子供でも大人でも尙は食物に就ての注意が必要である。此頃中流以上の人々は、齒を大切に

する爲に固い食物を排斥してゐる傾があるが、あれは大なる誤解で、私は寧ろ固い食物を御勸め申したい蓋し能く使用するものは發達し、然らざるものは萎縮するのが造化の大原則であるから、歯の如きも折々固い食物を取つて之れに或る勞働を與へなければ強くなるわけは無いのである。一方の歯のみで物を噛む者は他方の歯がぶら〳〵動くのが何よりの證據である。東京の子供の歯の弱いのは全く軟かいものゝみを食はせて置くからであらう。去れば子供のお菓子を撰擇するにも、餡パンとかカステイラとか云ふ軟かいものゝみを取らずして、消化の爲易いものでさへあれば成るべく固いものを取るが宜からうと思ふ。子供でも大人でも餘り軟かいものゝみを食つてゐると遂には西洋人の歯のやうに鯣一枚噛めないやうな情け無いものになるとは知れたことである。

△歯楊子の使用法

それから今一ツ大切なことは歯楊子の使用法と其の始末方である。之れに就ては私は是迄色々考へて見たので、其の結果一種の歯楊子と楊子入とを案出して此頃新橋の資生堂から出してゐるが、之を作つた動機は恁うである、一體今日は何人も歯を横に磨いてゐるが、之れは徒に歯を磨耗せしむる恐れがあるから、歯は成るべく縦に磨かなければならぬのであるが、其れにしては今日の楊子では毛が歯と歯の間へ屆かず從つて十分掃除が能ぬから、仍で私は毛に凹凸を作つて此の欠點を補ふことにしたのが一つである。又歯楊子の始末に就ては今日は使つたのを何處へでも打棄つて置くか或は一つの箱の中へ一家全體が一緒に入れて置くと云ふ有様であるが、衛生眼から見ると之れは甚だ危險な話で、我國に肺病患者の多いのは或は恁う云ふことも一原因であらうと思はれる、故に私は茲に又一種の歯楊子入を案出した。それは長き硝子瓶にて製り、下方に區劃を設けて、其處へ浄剤フウマリンを投じてあるので、使つた歯楊子を中へ入れて上から蓋をして置けば楊子は自然に消毒せられ且つ何處へ置いても黴菌の附着する憂ひの無いやうに出來てゐる。此種のものは傳

染病患者は病氣を他へ染さぬ爲に、又健全な者は傳染を豫防する爲に大に必要であらうと思ふ。

△齒牙と美貌の關係

終りに尚ほ齒と容貌の關係及び顏の格好を直す事に就て一言しやう。何時ぞや私の許へ七歳位の女の子が一人遣つて來て、母親の話を聞くと前齒が惡いので始終上唇で隱さう〳〵として居た爲に上唇丈がずつと長く延びて來たので誠に醜くて困ると云ふ。見れば成る程延びてゐる。で私は其處へ金の義齒を入れて遣つたが、それから唇は追々直つたので、母親は十圓や二十圓には換えられないと言つて大變に喜んで居たヿがある。之れで見ると齒と容貌とは非常に密接なる關係のあるヿが解るであらうが、併し玆に注意すべきヿは、右のやうなものも子供の間こそは譯なく癒るが年齡を取つては容易に癒らないと云ふヿである。尚ほ他の例を言へば反齒で醜いのや上唇の飛び出して醜いのなどを直すヿはまだ世間に廣く知られて居らぬが、之れはケース博士(ウヱスターンリザーブ)大學教授が遣り出してから有名なもので、私も親しく講演を聞いたし、又現に私の宅でも二人ばかり施手を受けて居る者があるが、之なども十三四歳位迄の間は二三ヶ月もかゝれば大抵癒るが、其れを過ぎると却々直し惡い。直らないでは無いが年を取れば取る程直すのに時間がかゝる。だから恁う云ふヿに就ては親達に於て成るべく子供の間に癒すやうに注意されたいものである。

志村氏は日本橋區吳服町に開業さるゝ齒科の專門家です。

眞清水

和歌山　村田清子

奥山の細谷川をチロ〳〵と流れ出で、わが足下をさゝやくごとく、うたふが如く水のみ神が小鈴を振れるごとく、涼しき音を殘して流れゆく。あゝ此眞清水、深く夏草に包まれくむ人もなき山の井に湧き出づるならん。殘んの星かげに汀の白百合に置きならべたるその露の玉はらはらとこぼれて流れ來りしならん。岩間にせかれて別れ別れてはまた合ふ内、たきゞとる賤の男の手にむすばれたることもあらん、青き淵となりて色濃きつゝじに映じたる事もあらん、春の名殘の花びらを此里に誘ひて、今やそも何處にか去る、あゝ清き水。われ知らず兩手にむすびぬ。

新婦日記

上

小波

八月五日　晴

今日で丁度一ト月になる。(私が此の家に來てから。)新婚旅行や、里歸りや、お披露やで、一ト月はまるで夢の中に過ぎてしまつた。

まだ暑いのに、良人は休暇を先に取つてしまつたから、今では毎日出勤なさる。私もうか〳〵しては居られない。今では一家の妻である。實家でも父によく云はれた、云はゞ内務大臣である。——その新生涯に入つた今日の日から、ためしに日記をつけて見よう。

良人は胃の爲めだと云つて、朝は牛乳とパンより上らない。私にもさうせいと仰有るので、旅行中はおつきあひしても見たが、何だか却つて胸に閊へる樣だから、家では御免蒙つて、私だけは矢はり味噌汁で御飯。

この頃の濕氣に、とても我慢は出來ないから、良人を送り出したあとで、お湯を涌かさせて髪を洗つた。さつぱりして好い心地だこと！　良人は歸つて來て、直ぐと私の頭に目をつけ、

『思つたより濃い毛だなア。この次は當分束髪にしておけ。あんな重い物かつがれるものでない。時節がら氣の毒だ。お前にやア束髪の方が似合うぜ。』

なんて、なか〳〵お口が巧い。

今日は魚屋が鮎を持つて來たから、夕飯の時、初めて自分でフライにして出したら、良人は二箸ほど喰べて見て、何だかお椀の蓋に吐き出した。私はひやッとしてその譯を聞くと、

『何だか苦かつた。腸がよく取つてないんだ。』

『それは不調法で御座いました。』

とは云つたが、實は私の所爲では無い、これは魚屋が麁忽のだ。

夕飯後、一所に散歩に出たが、生憎風があつたので、洗髪が一層亂れて仕樣が無い。家へ歸つて來たら、まるでお化の樣。矢ばり髷に結はうと思つた。

同　六日　晴

此間寫した寫眞が、やつと出來て來た。そんなに付けた氣では無いのに、お白粉が面を被つた樣に見えて、それに手の大き過ぎることと！　良人の方は、少し瘦せて寫つてるが、髭は正物よりずつと立派にこしらへてあつた。ほんとにあの寫眞屋は、男の贔屓ばかりするのか知ら？　きよ（下女の名）が見せてくれつて云ふから、仕方が無いから見せてやつたら、

『まア大層好く寫つとりますことと！　そつくりで御座いますよ。まるでお雛樣、オホヽヽヽ！』

だなんて、おべッかにも程があるから、直ぐ引たぐつて形づけてしまつた。

良人が歸つてからも、直ぐ出して見せる勇氣は無かつたが、でも見せない譯には行かないので、

『私が變に寫つてますから、笑つて下さいますな。』

と、念を押してから出して見せたら、

『フヽン……』

とばかり、妙な顏して笑つて居る。

『ねエ變ぢやありませんか。』と云へば、

『なアに、結構さ！　丸木は巧いものだ。』

と、御自分がよく寫つてるもんだから、人には同情が少しも無いの。

晩に時田さん（良人の友人）が入らしつた、奥でビールをあけて居ると、止せばよいのに良人が、今日出來て來た許りの寫眞を、もう見せびらかして居る。

私は側に居て顏を赤くして居ると、時田さんもお人が惡い、ヂロ／＼その顏を寫眞と見くらべて、

『これは一枚貰へるんだらうねエ。』

と云ふ。良人はニコ／＼しながら、

『いづれ燒增してから獻じるよ。』

と云ふと、時田さんでは、

『イヤ、燒增より、この寫眞は確に割增もんだネ。お廉くないよ。そのつもりで奥さんお酌を願ひませう。』

と、コップを出す。

催促されて狼狽へて、急いでお酌をしたら、つい泡が溢れるまで注いでしまつた。

「何だ、そんなお酌の仕様があるか！」

と、良人には叱られる。

急いでハンケチで疊を拭いて、

『御免遊ばせ！』

とは云つたもの〻、何だか其場に居た〻まれなくなつて、ごまかして臺所の方へ來てしまつて、代りにきよを出しておくと、きよは又しても引かへして來て、

「奥様、旦那様が……」

と云ふ。

行つて見れば別に用でも無く、

『お酌が逃げてしまつちやいかん。』

と又叱られる。そればかりならい〻が、時田さんまでが一所に成つて、

『何か伺ひ度いもんですなア。大層お琴がお上手ださうで……』

なぞと、人をまるで藝妓の様に思つてる。

男と云ふものは、斯うも女を玩具にしたい者かと思つたら、私は變な氣に成つて、只さへ愛想の無いのが、一層無口に成つてしまつた。

此晩は何だか侮辱された様に思つて、時田さんが歸つて、からも私は始終默つて居た。良人はまたそれに反して、聞きもしない事まで喋り出して、大そうはしやいで居たが、私が默つてるのを氣にかけて、側へよつて來ては機嫌を取らうとする。私はほんとに、何所まで馬鹿にされるものだらう。

同　七日　曇

昨夜は宵の事が根に成つたと見えて、二時頃まで眠られなかつた。尤も寐苦しい晩ではあつたが……

今朝出勤するとき、良人は念の爲め云ひ殘して行つた。『今夜は會があるから、歸宅は遲く成るよ』と。

魚屋が車海老の新しいのがあると云つたが、お留守だから取りもしなかつた。

昨夜の眠が足らないので、午後は眠くて〳〵たまらなかつた。けれども、午睡なぞして居る所を、若し親類にでも見つかつては大變。さうで無くても、書生や下女の手前もあるから、ちつと辛抱して居る苦しさ。

斯う云ふ時こそは、小說でもあつたらと思ふのに、生憎良人は文學趣味が無いので、本箱をのぞいて見ても、ちつとも面白さうな本が無い。こんな事なら、少し持つて來ればよかつた。

午後葭子さんから郵便が來た。明けて見たら逗子に避暑中だと云つて、相變らずのんきな事ばかり書いてある。獨身の人は羨ましいなど〻、ついこんな氣も出て見たが、それは直ぐ取り消してしまつた。

段々考へて見るのに、昨夜の事は何でも無い話だ。時田さんは氣さくな方だ。だから遠慮無しにいろんな事を仰有る。良人は客あしらひの好い人だ。だからその客の爲めには、可愛い(?)妻でも叱つて見せる。――又妻の身としては、良人の友人に酌をしたり、出來るものならその前で、覺えの藝を演奏するのに、少しも遠慮は入らない話だ。それが昨夜は何う云ふもので、私の氣にさわつたのだらう? よく〱虫の居所が惡かつたに相違無い。

あ〻惡かつた〱、昨夜はほんとに惡かつた。折角遊びに來て下だすつた時田さんに、無愛想な顏を見せて歸へした。折角機嫌を取らうとしてくれた良人に、厭さうな顏をして見せた。それ許りか、下らない事を根にもつて、遲くまで約らない癇を立て〻居た。ほんとに私は、何と云ふ氣隨者だらう?……定めしあの時田さんは、失禮な細君だと思つたらう、乾度良人は、生意氣な女だと思つたらう。あ〻ほんとに惡い事をした。と思ふとさア氣に成つて〱、今日の良人の歸宅の遲いのも、またそれと連關して、意味のある事の樣にも思はれ、それからそれと氣は廻つて、胸は段々閉がつて來る樣に感じた。

夕飯も少しも進まなかつた。きよが心配して、氣分でも惡いかと聞いてくれたが、い〻えと頭は振つたもの〻、その頭はそろ〱痛くなつて居た。

風呂に入つてもさつぱりとはせず、緣側で涼んでも氣は晴れない。只何が無しに、良人の身の上が氣に成つて、はやく歸つて來てほしい、はやくその顏が見たいと思ふばかり。

所へ車の音がしたから、それと思つて走つて出たら、それはお隣の家であつた。居眠をして居た新山（書生の名）が、私の足音に驚いて、慌てゝランプを持ち出して來て、もう少しで衝突る所だつた。

十時頃に良人は歸つて來た。が、思つたより酒臭くも無く、

『別に用も無かつたか？』

と、云ふ聲も至つて素面で、私の顏色を氣にしながら、

『何うした？……腹でも痛いのか？』

と、さも優しく尋ねてくれた時は、まるで清心丹でも飮まされた樣に、胸が一時にスーツと開いて、初めて重荷を卸した樣な氣がした。

同　八日　晴

朝から大へん氣持の好い日だ。

正午まではミシンを動かして、良人のシャツやズボン下の繕ひをしたが、それが又何となく樂みで、暑いのも何も忘れてしまつた。

午後良人の乳母だつたと云ふ婆さんが、暑中見舞だと云つて、玉子の折を持つて來てくれた。私は初めて會ふのだが、良人に乳を飮ませた人かと思ふと、何となく懷しいので、居間まで通して話をして見るのに、至つて質朴な質の中に、さばけた所のある女で、私が尋ねもしないのに、良人の子供の時の話をして、さんざ私を笑はせて行つた。

『夕方にはお歸りになるから、それまでゆつくり遊んでおいで！』

と云つたが、まだ他へもまはるとか云つて、暑いのに三時頃歸つた。

歸る時、別にこれぞと云ふ物も無かつたので、壹圓包んで玉子のおうつりに遣つた。斯う云ふ人には斯うするものだと云ふ事は、兼て實家の阿母さんに聞いて居たけれど、さて其場に望んで見ると、やつて善いのやら惡いのやら……人に物を與へると云ふ事も、氣骨の折れるものだと思つた。

良人が歸つてから、乳母の話をしたら、これも大さう喜んで居た。今日は良人も機嫌がよい樣だから、晝

の乳母に聞いた昔話を云ひ出すと、良人も興に入つて、
『入らん事を素破抜く婆さんだなア。今度來たら叱つてやらう。』
とは云ひながら、悪い心持でも無いらしい。

同　九日　雨

　雨の所爲か急に涼しくなつた。昨日繕つて置いた物が、丁度役に立つたので、良人にも褒められて、ほんとに嬉しかつた。働いておけば、きつとそれ丈の酬があるとは、こんな小さな事でも解る。

　午後二葉屋（呉服屋）が浴衣地を持つて來た。別に欲しいものも無いが、是非見てくれと云ふから、取りよせて見るのに、大方贅澤物ばかりで、どれを見ても悪いと思ふものは無かつた。

　けれどもさし當り要る物では無いから、中で目ぼしいのを二三反預つておいて、良人が歸つてから相談すると、良人は無造作に、
『一反宛取つておいたらよからう。』
と云ふ。
『私には解りませんから、貴君見立てゝ下さい！』
と云ふと、二三度見くらべた後、自分には細い格子、私には中形の品の好いのを選つてくれた。それがまた、私の内々それと思つて居たものばかり。斯うも嗜好が合ふものかと思つたら、又嬉しくて〳〵ならない。

同　十日　晴

　お天氣に成つたら、又暑くなつた。
早速昨日の浴衣を縫ひにかゝる。裁つのは兩方とも自分でしたが、縫ふのは良人のを自分でして、自分のはきよに云ひつけた。

　さア競爭だよと云つたら、きよも一生懸命に成つて、夕方には兩方とも出來上つてしまつた。

　それで褒められるつもりであつたら、
『そんな事は當然だ。』
と云はれて……その癖腹も立たなかつた。

　夜は二人ともその浴衣を着て、銀座まで散歩に行つた。資生堂でソーダ水を飲んで居る時、同じ會社に出

て居らつしやる、松倉さんとか云ふ方にお目に掛る。良人は直ぐ私を紹介した。他の客や店の者が、皆して私を見る。今飲んだ許りの水が、皆汗に成つてしまつた。ほんとにこんな事ならば、せめて透綾でも着て出ればよかつたと、思つたけれども仕方が無い。

同　十一日　晴

良人は朝から會社の用で千葉へ行つた。留守に實家の母が來た。

母は立つたり居たりして、家中を見まはつてくれる。何かアラを見つけて、小言を云はうと思つたのだらう。又私の側へ來ては、何だか聞き度さうにして居る。若し此時に、私がこの家に居る感じを、小聲で訴へる事が出來たら、きつと熱心に聞いてくれたのだらう。然し私にはそれが出來ない。又、出來ても仕度くない。

母は手持無沙汰さうに、夕方歸つてしまつた。尤も其時に、此間の寫眞を持つて行つてしまつた。私は『不出來だ〳〵』と云ふのに、母は『なアに好いよ、好よ』と云つて、一旦しまつた者を又出しては見い〳〵して居た。けれども實家へ持つて行つたら、きつと兄さんが惡口云ふのだらう。

夜に成つて千葉から電報が來た、

コンヤ　トマル　アスカヘル

△清國婦人の研學

目下清國上海の外國人居留地に在る清國婦人は總數六萬五千人と註されて居るが、就中敎會學校で文明の敎育を受けつゝあるは、僅に一千人を超えず、他の三萬人は女工、爾餘は醜業婦が大半だとある。

△世界第一のタイプライター

從來タイプライターは女子の特技なるが如き觀をなし、何の國でも其技術者は主に女子であるのだが、英國ニユーカツスルのジエームス、ライトといふ人は、此の位の事を女に負てはとの敵愾心を起してか、熱心なる練習の結果、遂に一分間百五語を記す迄に進步し、大いに世人を驚かした。



狂句に現はれたる女性（中）

菊雨

高砂もばゝアの方は熊手なり
うねくッて飛ぶ人魂は姑婆

目出度がらるゝ高砂の姥も、こゝではばゝアと呼び立てられて、持ち物の熊手さへ、恐ろしい道具の樣にされて居るに、死んで迄尙ほうねくつてと、意地惡る相にいはるゝが此の姑、姑小姑の句作は此の外にもまだ澤山にある。

落葉かくなる迄姑いぢめる氣
丸いほど猶腹の立つ火打石
苧と嫁と一口交にひねつてる
なふ嫁女おれは息子の何ぢやいの
雌すゝめと姑故事をいひ
お隣りの甚太の嫁を姑ほめ

戸障子の開閉から、箸の倒れた事にさへ難癖付て、落ち葉といふ末始終、息あるまでは苛める氣とは、あら恐しの姑かな、かくても嫁女の物優しく、角張つた事は露ほどもなく、撫恤呉れゝば呉れる程、猶腹の立つ火打石、火入れの灰の向うに坐させて、麻苧一口、嫁一いびり、じやりこ〳〵と捻りながら、俺は子息の何ンじやいの、現在腹を痛めた子の、自分一己で生育ッた樣に、今日此の頃の仕打といへば、獨身で居た頃の樣子とはガラリと變つて、生殘つた此の親をあるかなし、雌すゝめて雄とは、昔の人のよくぞ言はれた、是れに付けても先立たれた、亡夫が寧そお懷しいが、夫れは歸らぬ繰り言と斷念ても、アヽア出來る事なら此度の世には、貧乏であらうと隣りの樣な、アヽいふ家へ生れて來て、嫁にも優しくして貰はう、と甚太が嫁の瓢輕が、却つて大いに褒めそやされる。

生れても抱きはしないと姑婆

初孫の力姑の角を折

抱かぬとは生れぬ前の陰の口、孫は子よりも可愛いものと、世の諺にもいはれて居れば、おぎやアくと泣き立てられては、よもや心の鬼の角も、次第くに無く成つて仕舞う。

小姑に世辭で半袖縫ひ負ける

小姑は鬼千疋といふ譬があり、若しや機嫌を損じてはと差しかゝつて急を要する裁縫を、相對座してする場合に、態と半袖縫ひまけてやる、嫁の才覺おもしろや。

小姑も芝居願いはぐるになり

これが亦大の芝居好き、此時ばかりはねエ姉さんと優しく出て、兄なる婿殿を嬉がらせる術で行くなり。

いぶされて嫁蚊のすねの樣にやせ

連れて來た下女ばかり嫁叱る也

素まんまを喰べさせ候と里へ文

すりこ木でぶち參らせと里へ文

姑は何故か萬事に痴たい仕打せつなや、無情やの思ひに明かし暮して、いつしか蚊の脚ほどに瘦せ細りて、唯神經のみ興奮すれば、叱からるゝは叱つていゝ、實家から連れた下女ばかり、すまんまを喰べさせられたといふ次には、亭主が擂木で打擲したと、母へ音信をしたのである。

花嫁を水に活けたる田植時

泣かしやるな姑は嫁の古狸

紅い襷の十文字、早苗取る手の所作らしさも、やがては馴れて仕舞うであらうに、何を苦にして泣く事か、姑といへども以前は嫁、今の苦患を仕上て來たのだ。

簞笥までつらを拭ふは二度目也

不緣で戻つて二度目の緣組、簞笥の疵は剝るに易きも、心の疵は治するに期なし。

細引の足らぬは嫁の手柄也

外聞のよい奉公と婿おもひ

三日かゝりで虫干しても、尙ほ細引の足りない程に、衣裳の澤山殘つて居るは、嫁女が手柄と姑が褒めれば、

姑も先から外聞のよい、孝公だと諦めて居る。

風呂敷で流しへかゝる新世帯

わたしのせいに成ると嫁焼初め

別居して、勝手元の立働きに、前掛もない新世帯、夫婦二人、水入らずの樂みの中から、夫が此の頃の夜歩き、風邪でも引いて御覧じろ、私の孝公が足らない故と、御両親様に叱られますと、焜爐の下からそろ〳〵と嫉妬の薪を焼きかける。

だらうといふに嫁いゝへ〳〵

おはぐろを付けて



仕舞へとばゝア來る

冬瓜から西瓜にかはる耻かしさ

羽二重の腹を木綿で六月すれ

間に合はぬばゝア目出度叱られる

轉んだを安産の後話すなり

胎つただらうといふに羞澁むで、いゝへ〳〵と言い淀めど、産婆は鐵漿を勸めに來て冬瓜の種の白い歯が、西瓜の種の黒と成り、はや五月の岩田帯、羽二重肌に緊り結むでやがて産み月の其の朝、取上げ婆も間に合はぬほど安々と産み落したは少女、夫は男が

欲しかりしといへども、母は一姫、これがよいのだと、喜び勇むで母子の介抱、實は六月で轉むだがと、無事な我が子を傍に寢せて、今更嫁が懺悔も目出度し。

御新造の出嫁い實はこれがなし
よい小袖着ると内儀はろくろ首

衣裳がないので出嫁いに成つたのと、よい小袖着て首筋長くツン延ばすのと、あはれはいづれ、可笑さはいづれ。

もし降らば芝居にしなと重へ詰
二三町出てから夫婦つれになり
仲人へ不沙汰夫婦の睦ましさ
夫婦別有り箸箱の二せん入
おまはんとわたいで内が納らず
浮氣と悋氣去氣だのゐぬ氣だの

花時雨多し、若し降らば芝居の事と、昨夜から仕度した重詰、せずともの遠慮に、夫は二三町先に待ち合せて、其處から連れ立つ睦しさ、仲人にはモウ用事が無いが、夫婦の別は箸箱の仕切り、日々に三度宛之れを教えて、禮ある中が樂しみとしてあるに、馴れるは易く、おまはんと呼び、わたいと名乘つて、互に其處に隔といふもの無くなれば、男の放埒、女の嫉妬、最早私を去る氣だか、去られるまではゐぬ氣だと、是れより家内に濤風騷ぐ。

おかしさは夫婦喧嘩を狆が吠へ
せき込むで四くだり半に亭主書
中直り元の女房の聲になり

犬も喰はぬとある夫婦喧嘩も、罵る、怒る、泣く、叫喚くと成つては、今まで次の間にゴロ〳〵と咽喉を鳴らして居た狆も、喧と共に起上つて、障子の外から吠へ立てれど、内では爭論いよ〳〵酣に、行き懸り上書かねば成らなくなつた去り狀、是れは又いかな事、古法といふ三行半を、一行殖して仕舞うた慌てさ加減、可笑や、ま一度書き改むる間に、互の心落付いて、何方が惡かりしとも無く治まつた中直り、女房は即ち女房らしい聲に成つて、缺け硯を取り片付ける。

糸を捲く向うに亭主おどつて居

見當を聞いて糠味噌亭主出し

家賃より高い染賃着る女房

働きのない、性度のない、甚だ厄坐な男と見えて、女房か浴衣縫う敷紙の向うに座して、ウム〳〵俺が懸けてやらうと、兩手へ一把の木綿糸、手振り、首振り、身體まで踊りの樣に振りながら、妻が操る糸捲の手傳、其れもよし〳〵と時分過ぎの膳立、右か、左か、手前かと、糠味噌樽を掻きまわして、新漬の胡瓜を捜す體裁なさ、されば女房はよい〳〵と附け上がつて、流行の小紋、絽の夏帶、露芝好みで染代は、家賃の二ヶ月三ヶ月分にも上つて居る。

走智惠男の智惠の上を行き

俄雨女房梨の花を出し



見ともなき亭主かきのけ罷出る

壁と見て亭主の面へ泥をぬり

女房の無筆を貰ふ紙屑屋

女の走り智惠は、七重八重處か、何んの一重の思案もなくて、簑も傘も梨の花とは、手折つて持つて出るにも及ばぬ儀、是れを以て、何時が日も亭主を後に掻き退けて、薄い唇喋々と差出でる其の嗚呼がましさ、俄雨の雨宿りに、酌むで出した澁茶一碗、其れまでは先づ上出來だつたが、宇治は茶處山吹の名處と、勘違ひが良人を壁かの樣に心得て、別段害に成らずとしても、泥渾の泥コテ〳〵と、目をも耳をも、鼻をも口をも、

塗り塞いで仕舞うに到つては、言語に絕した振舞である、されば發明な紙屑屋は、文字ある女を嫁にして、一枚々々讀むで居られては、根つから埒が明く話しでないと、てんで無筆を撰ぶとかや。

こわい顏したとて高が女房なり

其の面で辛子をかけと亭主いひ

我が儘が通らぬからの腹立、面ふくらして恐らしい形相をして見せられたからとて、高が女房のする仕業、怒つてかけば辛子の利きがよいからとは、此の男中々うまい味を心得たものでおざる。

珍客に女房御用の耳に口

香の物ほどにさし身をかゝア切

盃は夫の顏を見て受ける

是れは〳〵お珍しやと、挨拶して居る其の最中へ、折よくも來た酒屋の御用聞き、急いで五合計りといひ付けて、先刻魚屋が置いて行つた鮪の切り身を、早速の氣轉と薄刄でじよ〳〵賽の目なりに切り刻むで、山葵代りに根生薑とはよ、御內儀先づマア失禮だがと、さゝれた盃受け取る前、流石に夫の顏を見る。

勘付いて女房麁服を出して置き

誘引人に女房からむだ事をいひ

花を見る面かと女房過言なり

二つとは戸は叩かせず恩にきせ

珍客として對遇したも道理、日頃良人が御噂を申してと、側ら去らずに取り持つて居る話の中に、何うやら解せぬ節だらけなのに、扨はと勘付いた是れは夫の遊蕩仲間、やうやく此の中少時の間、夫の尻の落付いたので、相手欲さの花見に托けて、能くも〳〵誘ひにうせ居つたナ、客も客なら夫も夫、よし〳〵思ひ知らせて呉れやうと、態と取り出したは洗ひ晒しの木綿服、いゝ土堤は嵐のお寒い處、花見に何んの衣裳好み、マア〳〵緩りと御遊樂、家內や子供は何うでもいゝと、自分計りか、代人にまで迷惑させて、其れが可笑い、面白いとは、隨分變つた御性分と、搦むだ當て付けいつて退けても、未だ中々に腹が癒ず、出て行く後から聞えよがしに、一體花見る面構へかとは、思ひ切つた

る其の過言、更けて歸へるを待ち設けて、一體貴君は何と思ふて、……能くマア思うて見なさるが宜い、三度喰ふ米屋へは後二ケ月からの無勘定、家主へも其の通り、最早半年近くの店賃溜めては、遲く戻つて露次の戸を叩かれまいと、今か今かと寐ずに待てば、自然と無駄に油も減、それ〱宵にも油屋が坐り込むで皮肉の催促、洋燈がなければ御家は闇暗と、其れ程までに苦勞をさせて、貴君は何ういふ氣がなさると、一ついひ、二ついひ、果てはお定まりの擾み合ひが始まるので、

雨降り初手は煤掃だと思ひ
一くだり半は隣りへ先づ預け
女房は小言で洗ふ泥まぶれ

夜夜中からドタバタ騷ぎ、隣は實に手廻しがよいと、



雨降りで初手は煤掃だと思うたも尤も、擂木と擂鉢、膳椀茶碗も座敷に散亂して、片膚拔いだ其の亭主、散し髮の其の女房、先づマア近處の顏に恥じてと、去り狀の一行半は左右に預つて、膳の壞れは塗師屋が直す、中一日置いて、本當にハヤ此れだもの、絹物など着せて出されたものではないと、

醉ひどれの泥土を洗ふ妻。
そこら迄いつて我金女房貸し
ほまちの無盡より金の帶を買ひ
お內儀の手をおんのける鰯賣

無くては濟まぬと靑息吐息、五色の息をつく〲と、困じ果てたる夫の顏色、已に之れをと、取り出さうとはしたもの丶、其種は女房大事に構へて、心當りがな

いでもないと、日頃懇意の二三軒、頼むで見やうと見せ掛けて、尋ねて行つても四方山話、持參の干菓子は久方無沙汰の申譯、オホ、、、唯モウホンの、是れは良人の懷中から……とはいはれもせねど、從容と大樣に、浮世の風は何處を吹くか、と、いつ見えても莞爾な、福々しい氣樂な女、世帶の繰りまわしも定めて上手に、彼樣のを持つた亭主こそ大仕合せと、嬉しがられて喜ばれて、送り出された歸り途、入用丈の金子を別に、紙入から窃と帶の間に挾み込むで、外ならぬお頼みと早速の承引、其れは心持よく借りて參りました、此の上は約束の日限違變のないが何によりの御禮、隨分心に懸けましてやと、現在我が所持の金に、一層の光りを添えて其處へ出せば、女房よくした有難い辱いと、蘇生た樣な夫の元氣、是れを資本と奮發すれば、商賣は骨折り次第、忽ち利に利が重つて、今では立派に仕出した繁昌、家内安泰に治つて、例の女房が忠實しさ、空俵、はづし繩、紙屑までも堪念に始末して、賣り上げた代金は其のほまち、遊ばして置くよりはと、頼まれた頼母子無盡、花籤は毎度々々三回目かに當籤を引いても、差當り入用も御座らぬといふを、是非にと望まれて、譲つて遣つたが二割の得、其れを度々繰り返へして居れば、半分先は懸金入らず、いざ滿會といふ其の間際に及むで、三百兩の外四百二十何兩に太つて來る、より金の帶を買うても殘りは澤山、大した内儀に成り濟ましても、三度の菜は人に任かせず、振り賣りの鰯賣呼び込むで、十で幾何と値切つた上、成る可くは大きいのをと、手づから其れを選擇すれば、其奴は酷えと鰯賣、鱗の其の手でおん退ける。



臺所胸算用

佐倉桃子

先づ一家の中で衣服を司るところは納戸で、食物を司るところは臺所であります。されば從つて一家の日常經濟はこの納戸と臺所から生れるので、殊に臺所は納戸よりもより多く必要の支拂があり、またより多く雜費もかゝる、それは衣食足つて禮節を知るとは申ながら、食あつての衣であるから、衣には多少の辛抱が出來ますが、食には何人も打勝てぬので、お米と鹽とが無かつたら、それこそ人間生きて居る事が出來ないからです。

▲人は米を一年に若干食べるか

そこで臺所經濟の中、何が尤も必要な支途であるかと申しますと、云ふまでもない米で西洋では麺麭、日本では萬事が米の問題に歸着して居ります。そこでこの米の相場と申すものは御承知の通り猫の眼のやうに變るもので、またさもないところが、土地の豐凶や時運の盛衰、年の吉凶にもよりまして種々と變りますが、先づ日本中の米を擧げて見ますと、兩羽米、三陸米、北陸米、江州米、東海道米、山陰米、山陽米、四國米、九州米、磐城米、地廻米とありまして、地廻米と云ふのは東京近在に出來る米であります。で、今此米を假りに三等米一圓に四升五合と致してお話をしますれば、人間一日を四合宛としますと一圓のお米は十一日餘に食べてしまふので、一年には一石三斗六升强のお米を食べる事になり、臺所からこれに支拂ふお金は三拾六圓强に當ります。大勢の家になれば一人がかうは食べませんが、先づ三拾六圓は入るものと思つて居れば間違はないでせう。

▲日本で最上の米は何處か

俗に鬼の金歯などと稱へる日本最上の米は何處から出るかと申しますと、昔は肥後米と申しまして、熊本縣のものを一番よろしいとしたものでしたが、今では糟壁の赤目と云ふのが第一の米になつて居ますので、畏れ多くも　天皇陛下は此お米を召食るさうであります。これは一に武州赤目と申しまして先づ一等米の最上になつて居ります。

▲米に如何にして蓄ふべきか

さて多勢の家でなくても、この米ばかりは平常多少の蓄へがなければなりませぬが、眞個に蟲がつき易いので、一旦蟲がついたとなると、米は赤味を帶びて、妙な臭が致すものですから、これが保存には充分の注意を要します。けれどもいくら大切に米櫃の中へしまつてお置きになりましても、梅雨の時候とか乃至は暑い盛りには兎角蟲のつき易いものですから、かう云ふ時には水甕を明けて、水氣のないやうに能く拭き取り、これへお米を入れて蓋をして置けば、決して蟲のつくやうな事はございません。

▲米の惡いのを食べれば什麼なるか

そこで此お米は毎日乾度要るものですから誰れでも廉いお米を食べたい、それは一等米と五等米とでは味も違ひますが、別段一等米だからと云つて一膳でお腹は張りませんし、五等米だからと云つて十膳も二十膳も食べなければお腹が張らぬと限つた譯でもありませんから、先づ人情廉い米――即ち惡い米を食べて我慢すると云ふ事になりますが、經濟は別としてこれは頗る考へ物であらうと思ひます。何故と申せば、ある醫學博士のお說によりましても、日本で脚氣の流行するのは多く米からで、而も惡い米に原因するさうであります。それでなくとも惡い米は脂肪が尠く、滋養分に乏しいから健康を保持する上に何の效果もないと云つてよろしいのであります。第二に經濟上から申しましても、惡い米は炊いて炊減がすると云ふ勘定ですから、一等の米を一合炊くところならば、五等米ならば一合五勺炊かなければ間に合ない事になるのであります。脚氣や水腫を起すのは多く此惡い米として見ますと、

病氣になつて高價い藥代を拂ふよりも、平常上等の米を食べて居た方が餘程德用ではありますまいか!

▲東京では何處の鹽を多く使ふか

米鹽とさへ云ひますから、これに支拂ふ金高は極渺いものですが、臺所算用に米の後へつゞくものは先づ鹽でございませう。鹽は昔から播州赤穗を本塲として、赤穗鹽は年々淺野家から幕府へ獻上になつたさうですが、今では官鹽となつて全國へ捌かれて居ります。そこで東京へ輸入される鹽はと申と、赤穗本濟、安房、撫養、尾の道、阪出の各鹽務局から、大抵等分に參ますので、日本全國の製造高は先づ六百萬斤!けれどもこれ等鹽田で製造された鹽が東京の人の口へ入るかと申ますと、これ等は一旦東京へ輸入されますと直ぐにまた全國へ流出してしまふので滅多に東京の人の口へは入りません。そんなら何處の鹽が主に市内の需用を盈して居るかと申ますと、それは千葉鹽務局の行德出張所から參る食鹽で、酒屋さんから鹽笊へ入れて持つて來るのは、皆この行德の鹽田で出來る鹽であります。



△一年に一人が若干の鹽を舐めるか

鹽を甜めると云ふと可笑しいやうに聞えますが、甚麼儉約な人だからと云つて、其逆に御飯に鹽ばかりかけて食べてる譯もありません、鹽は御承知の通り、其原形のまゝ人間の食料にする塲合は尠いとして、香の物にせよ梅干にせよ、凡て此鹽がなければ食べる事が出來ませぬから、自然人間は米と鹽とで生きて居るやうなもので、先づ一人一年に甜める料は一斗六升と云ふのが當つて居るやうです。尤も鹽務局の調査によりますと一口一年の消費力は十七斤と記されて居ますがこれは極尠なく見積つた勘定で、斤數にして二十五斤は小供でも甜めると云つてよろしいでせう、ですから一人一日の鹽の消費量は先づ四勺强と云ふのであります。

▲鹽は如何して保存し得べきか

凡そ食料品の中で鹽程保存のしにくいものはありますまい、何故と申せば日本の鹽は一體に粗製ですから、獨逸鹽や乃至は外國鹽のやうに長時間の保存に堪ず、直ぐに溶解して滷汁になつてしまふ性質を帶びて居ますから、酒屋の鹽笊にあるものすら、梅雨から夏へかけては二割乃至三割の滷汁が出る、これを普通の家で保存するには什麼したらいゝか、多くは壺の中に蓄へられて居るやうですが、底から四寸ばかりのところへ亞鉛の網を張り、其上へ鹽を盛つて密閉して置けば、多少の溶解を免れる事が出來ます。これは鹽から漏れた滷汁と鹽と相混ずると、什麼しても早く溶解する譯ですから、これを防ぐ爲めに網を張るのですが、同じ金屬でも鐵や鐵葉のやうに鹽の爲めに腐蝕するものは不可ません。

△醬油は何を使ふべきか

さて今度は醬油の番ですが、これがまた食膳に缺く事の出來ないもので、隨分其品に高下があり、また其高下が烏渡際立つて判らないところで廉いもの〳〵と手を出したがる方もありますが、これは頗る考へ物だらうと思ひます。

そこで醬油の釀造はと申せで、矢張關東が本塲で、其中でも千葉のものが一番上等としてあります。これ

は利根川沿岸の地味が醬油釀造に適して居るからで、野田、銚子の醬油と來たら、それこそ世界一品と申してよろしいのです。此他水戶、宇都宮、高崎、長野からも隨分と出ますが、これは地物と稱へて、問屋の方でも、野田や銚子の物から見るとづッと下等のものにしてあります。醬油は何を使ふべきか、これは云ふまでもない、上等の醬油、即ち「山サ」とか「龜甲萬」とか云ふのを使へばこれに越したものはありませんがそれでは經濟が許さないとなら、先で地物の上等を使ふがいゝのであります。今假に其相場を記して見ませうか、龜甲萬は一石に就いて平均が三十五圓六十五錢



と云ふのですが、地物の上等となれば平均二十五圓と云ふ相場、何故また下等の醬油を使ふのは損かと申しますと第一鹽分に乏しいから利が惡く、煮物をすれば物が不味し、香の物にかければ餘計要ると云ふものですから反つて損が立つのです、醬油は上等を少し宛使ふが尤も德用だらうと思ひます。

▲一人一日若干の醬油を食ふか

これも眞逆に醬油を飲む人はありますまいが、汁にしたり、煮物に使つたり、乃至は香の物に懸けたりして、一日一人の口に入る醬油が何の位なものであらうと云ふと、先づ平均一合六勺弱で、三

度の食事に割つて見ますと、一食に五勺强となるのであります。成程醬油を其儘では香の物へ懸けるばかりで、誰が一度に五勺の醬油を飲むものがあらうかとのお疑ひもあるでせうが、先づ雜菜を煮るにしても直ぐに一合や二合の醬油は消費されますので、佃煮などゝ來ては、僅か一疋の鯊にどれ程醬油が消費されて居るか解りません。

▲醬油の黴は什麽して防ぐか

さて梅雨から夏へかけて、蓄への醬油が黴びるので困りますが、此黴を防ぐについても禁厭のやうな事もあり、藥劑の力を假りる事などもありますが、それ等は衞生上から見ても餘り好もしくない事で、醬油の黴を防ぐには山椒の實もよろしうございますし、只小出しの黴を防ぐなら、其容器を絶へず好く洗ひ、水分を切つた後醬油を注せば、決して黴が容器から溢れ出るやうな事はございません。樽にしても不潔にして置くから、自然飲口から黴つくので、決して底から黴るものではございませんから、一度出したら直ぐに能く拭つて置くか、或は斜面を爲した臺を造り、これに醬油樽を載せて置いて、飲口を下にして置けば黴る氣遣はありません、これも臺所改良の一つだらうと思ひます。

まだ臺所で使用すべき主なるものには砂糖、酒、味噌などゝ可也澤山ありますが、先づ此三問題を鳥渡研究しましたから、[illegible]と[illegible]の方へお据別けをいたしました。

簞笥の撰び方

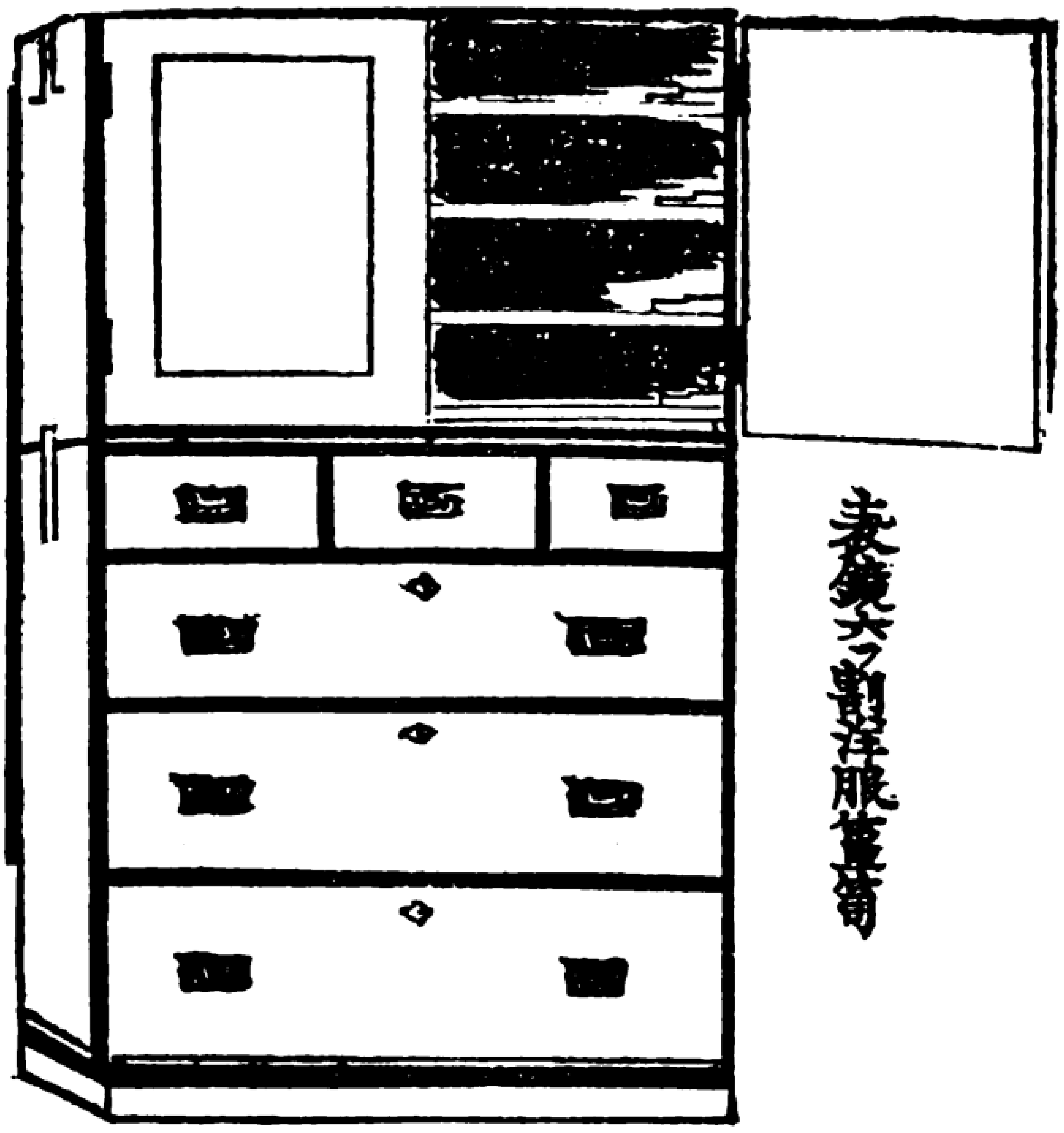
近藤蕉雨

簞笥は結婚の調度として必要なる許りでなく、何處の家でも一世帶張らうとする場合には、甚麽しても無くてはならない品です此簞笥には種類と、製作の巧拙、流行廢り、木地の良否等注意すべきことが澤山ございますから、簞笥を求める人の參考に其重なるものを三つ四つ記して置きます。

▲簞笥の種類と原料

簞笥には洋服簞笥と建戸附重ね簞笥、普通重ね簞笥の三種ございます、而して其重ね簞笥の中に、二つ重

ねと三つ重ねとの二通りございまして、二つ重ねよりは三つ重ねの方が無論丈は高いのです、例へば二つ重ねが四尺五寸のものでしたなら、三つ重ねは五尺五寸位はあると思へば間違ひはありますまい、次は原料ですが、之は昔から一般に桐を以て製することにしてございます、此桐の箪笥にも總柾、前柾、前左右柾、白地拔、白地交り、前桐などといふ種類があるのです、總柾は讀んで字の如く總體柾を以て製るのですが、此柾にも小柾と疎柾とあります、前柾は前の見える所だけに柾を用ひたもの、前左右は正面と左右とに柾を用ひたもので俗に三方桐と唱へる箪笥です、白地拔、白地交りとは木の性を言つたもので、前桐とは正面のみに桐を用ゐて、左右と後に他の木をつかつたのです。



姿鏡入り觀洋服箪笥

▲流行の箪笥とは如何なるものか

以前の箪笥には女箪笥、男箪笥の區別がございまして、男箪笥は大抵四つ抽斗で、金物も必要な場所にのみ打てありましたが、女箪笥は抽斗の數多く、重ねの上を觀音開きとし是にコテコテと金物を打ち、中央に定紋を打出すのを通例としたものです、けれども近來は夫んな箪笥は一向に流行らす、何れも男箪笥のやうに淡泊と製り高尚な金物を打ちましたものが一般に用ひられて居ります、就中洋服箪笥といつて重ねの上を觀音開きとし、中に棚を設けて、之へ洋服を載せまするのが至極調法で、且布地を損傷る虞がないとて、今では洋服ばかりでなく女の衣類を入れるに宜しい爲め

衣類の出入の劇しい貴婦人や商賣人などは、此洋服簞笥を調法に思つて非常に持囃して居りますので、簞笥屋でも此製造に苦心する結果、近頃では種々意匠を加へました立派なものが出來まして、倍々流行するやうです、夫で此簞笥には地出來と山出來の二通りありまして、地出來とは東京の簞笥屋が自ら製したもの、山出來とは埼玉縣の粕壁、川越邊りの箱屋が製造して東京へ持込み、東京の簞笥屋が仕入て之に磨きを掛け、金物を打て商ふものを言ふのです、地出來は勿論山出來よりは宜しいに極つては居りまするが、山出來にも幾通りもございまして、中には東京の簞笥屋が見て感心する程によく出來居る流行向の品もあるさうです。

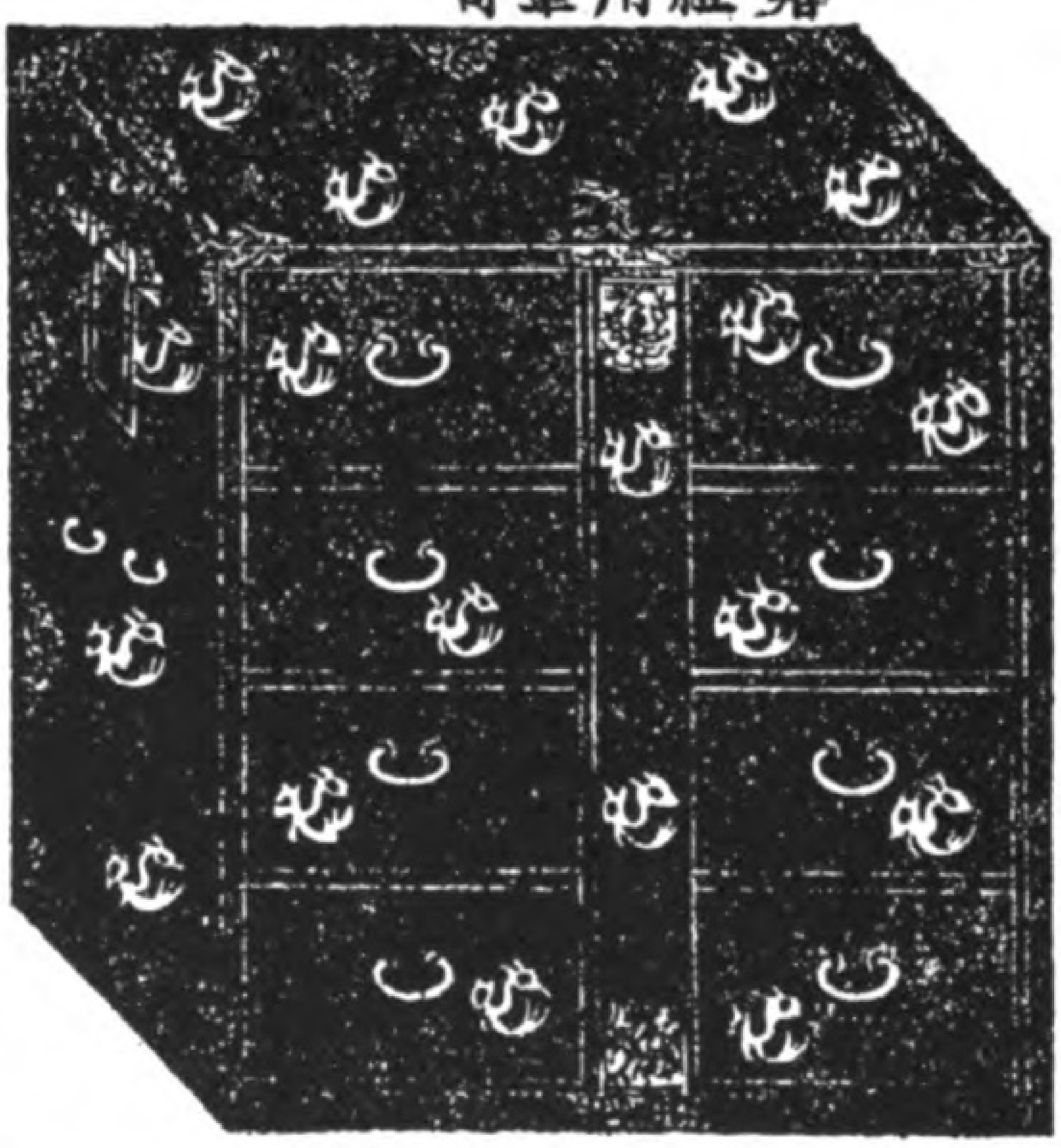
▲簞笥の金物は何が宜しきか

簞笥の金物は先づ金銀、銅、眞鍮、鐵などで、之にも本磨き、半磨き、燻し又は彫刻を施したものなど種種ございまするが、普通の簞笥に用ひまする金物と申せば、先づ鐵に限つて居るやうです、けれど上物には餘り鐵は用ひません、尤も之は客の好みに依るのですから、一概には申されませんが、銅臺に藥をつかつて色を出した絕、靑赤、朱色などが見るから高尙な爲め歡迎されて居るやうです、其中でも絕は頗る上品で、恰と赤銅に磨きを掛たといふ鹽梅にいゝ光澤が出て居ります、又眞鍮を臺にした茶色といふ金物も大分用ひられて居るやうですが、之は商賣人仲間では茶眞鍮と稱へて居ります、鐵は多く鍛冶屋の手に成るのですが、前記の絕、茶眞鍮等の上物になりますと、錺屋の手にかゝつて、製作にも自然念を入れてあるさうです、鐵金物にも又種種ありまして、鑢磨き、砥磨きなどと變つた磨きやうもありますし、其磨きにも本磨き、半磨きなどと區別した者もあるさうです。又綿色と申して金物を烈火に掛けて熱く燒き、其上を眞綿で擦り、綿が焦げて其脂肪の煮える處で黑く色を出すといふ仕方もありますし、又錆色といつて、わざと錆を持たせ、其錆を磨き出すといふ仕方もあります、何れも島渡上品なものですから、中物以上に能く用ひられてあります。

▲簞笥に蟲のつく譯

安くて體裁のよい簞笥には兎角蟲がついて其内外へ恰も錐揉をしたやうな穴を明け、折角丹精した上等の衣裳にポツ〱と穴を明けられることがあります、之は白地交りの簞笥に限つてあるのですから、求めまする時に注意して白地拔のものを撰ぶのが肝腎です、原料の桐は立木を切て板に挽き、之を簞笥に製する迄には充分枯らして置いて用ひるのですから蟲の附く憂ひはなさゝうに思はれませうが、此白地と申す所は、皮と本木理との間にある厚い白い柔かな部分で、牛や豚などの肉でいへば脂肪味とも申すべきもので、桐は平素之に因て水分を吸收し、之に滋養分を貯へて成長するのですから、自然甘味と脂肪氣を保て居る爲め、何程枯しても此部分許りは全く枯るといふ譯に行ず、夫れ故何時となく蟲が生て漸次と木理の中へ食込み、箱の中へ蟲糞を殘すはまだしも、大切な衣服に迄も損害を與へられますから、價は少し高くとも白地を切除いて眞の木地許りで製した白地拔といふのを撰んで用ひまする と蟲の附く氣遣は無いのです。

婚禮用簞笥



▲簞笥の出來の良否を見分る法

同じ木口に同じ寸法で同じ品を製作へても、職人の腕の良否と、刄物の利鈍如何に依て其出來榮に格段な違ひが出來るのです、腕の冴た職人の持つ刄物は勿論良いから上等の品が出來る譯です、例へば箱の小口を見ても、臍に組んだ横の小口の鉋の跡が、下手に當たのは白ツボく見えまするが、上手に當たのは水を含んだやうに透徹つて見えます、從つて下手の作つた箱は抽斗の抽さしがフワリと行かず、上手なのは寸分違はずシ

●●●ツクリと合ひますから、丁度眞綿の上に坐るやうに和らかに行くのです、此抽斗にも箱出來と箱出來でないのと二通りあります、箱出來とは抽斗の上も下も前も横も同じ厚さの板を以て製しましたので、箱出來でないのは上の見える所を厚くし、下の方は薄い板を用ひてあるのです、數ある簞笥の中には、體裁を飾る爲に縁に黒柿を用ひたり、木地の惡いのを瞞着す手段に金物のみよくした格安の品がありますから、體裁に迷はず木地と抽斗の工合に注意することが最も必要です、近年は簞笥の下に臺を置く事が流行て居りますが、之は簞笥の保存上又取扱上誠によいことです、何故ならば簞笥を直接に疊へ置いて、之に衣類を一杯入れますると、重量が次第に加つて疊を押す爲め、疊の中が膨脹て簞笥の底を押上ます、夫れ故自然狂が出て抽斗の拔差が重くなるさうです、所が此臺がありまするど夫んな憂ひがございませんので、中以上の簞笥には大概臺が附屬て居ります。

▲簞笥の價格

簞笥の價は木地と手間と金物との三つに因て左右さるゝものですから、木地の相場如何によつて變動のあることは勿論、製作に念を入れ金物をよくしまするど價は自然高くなる道理ですが、雪輪形若くは棗形の錠前に月形彫込、軍配丸座の引手金物を附た總桐製で並物十二圓以上三十圓内外、中通りの所で十八九圓以上四十圓前後、上物は五十圓、七十圓乃至百圓以上種々ありまするが、前左右に桐を用ひた三方桐の價は、總桐の三割乃至五割方安く、前桐製は五圓以上十八九圓迄其種類に依て區々です、中以上の品でも金物を少し落しまするど三四圓は違ひます、白地拔の簞笥も二十二三圓で求める人もあれば、三十圓以上出して白地交りを買ふ人もあるなど世はさま〴〵ですが、京橋金六町の鷲塚箪笥店と、日本橋小傳馬町の長谷川箪笥店には高等優美の簞笥が澤山出來て居ります。

夏向の翫具

秦塘

夏中子供は兩親に伴はれて、近縣の海水浴とか別莊地とかへ出かけて淸涼の慰みに、日を消すと云ふ人々には、敢て銷夏に適する流行遊戯具の必要も認めぬであらう、けれども、恁う云ふ贅澤な避暑旅行を望まぬ家庭の爲めに兒童へ、慰みを與ふ可き、遊戯具の嶄新なるものを紹介致さん。

△新　玩　具

玩具の中には、舶來の輸入品が多いが、家庭の嗜好は年々向上となり、玩具も日に増し發展して行くのである、夫に昨年迄は舶來模造の金屬玩具が、非常に流行し、博覽會出品中の金屬具玩で畏あたりの、お買上となつた物品もあるが昨今では、自動車、電車、汽車等である。

◎自動車は二人乘三人乘……最下等が一人乘で、螺旋を捻ればガラ／＼と愉快に奔走る。其の代價は三十五錢より一圓位迄で、之は和裝の模造品ではあれど、舶來玩具を凌ぐ程、巧みな模造である。

◎電車、汽車は軌道着が流行で、之は軌道が目下研究中だが、模造品は舶來のやうに輕妙に走らぬ、模造品で軌道着一個一圓三十錢位、舶來品だと一圓五十錢より五六圓位迄あるが、舶來品の軌道にはポイントの裝置まで、悉皆出來て居るのである、



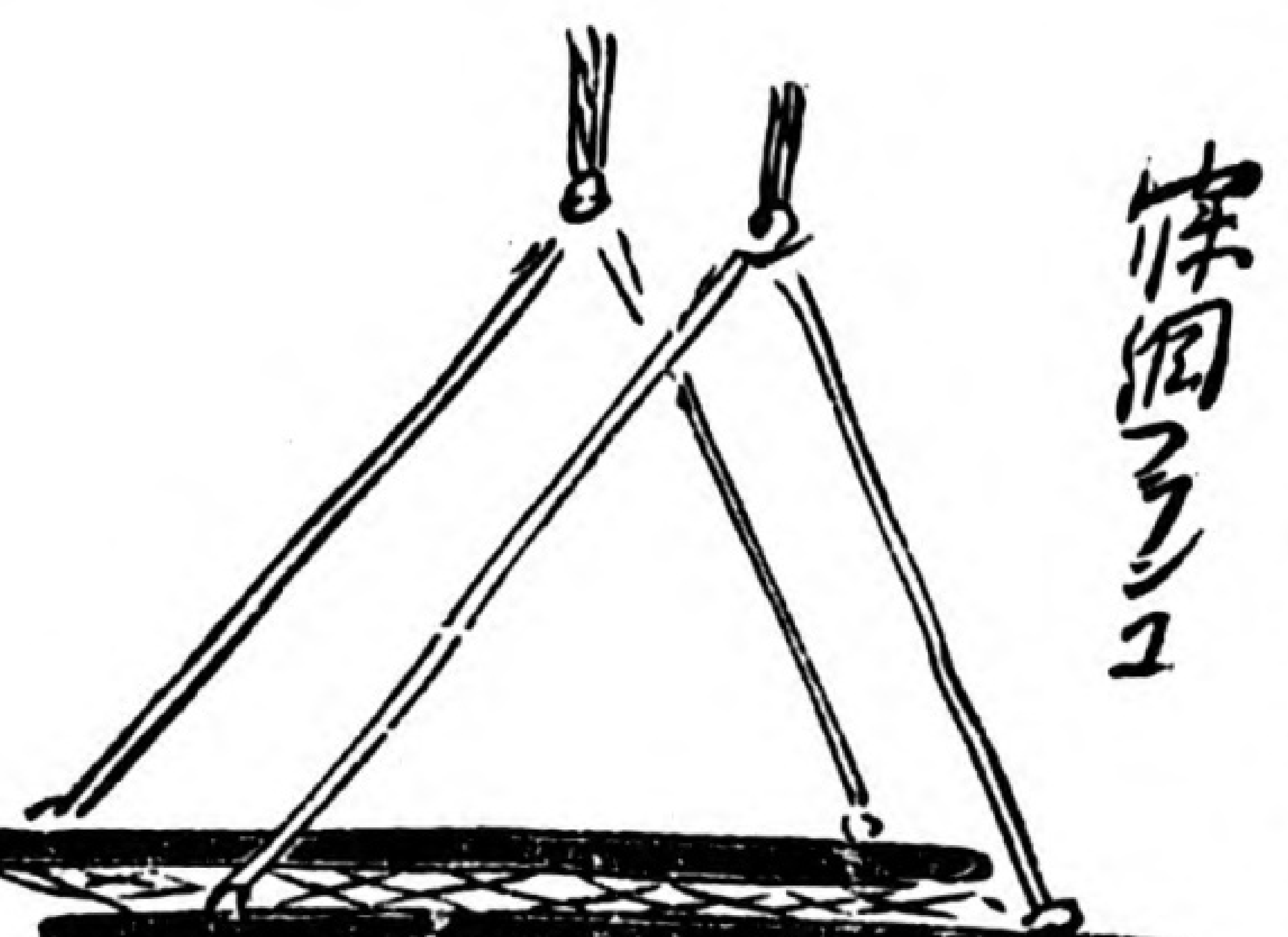
電車や汽車は幼稚な兒童よりは、稍年長した少年が多い、夫から自動玩具の側であるが。

◎自動玩具は過半舶來品のポンチ人形、動物の類で、孰れも發徑機で活動するのだ、横濱の商館へ輸入す

る時には、番號で玩具の名稱を附してないから、玩具問屋では已なく物體に由つて、種類分をしてあるとやら、ポンチ中で樂器を携へて居るのは樂隊人形、鯱立をして居るのを逆立人形、動物は猿、猫、鼠なぞと云つて居るが、同じ動物でも玉虫の事を、同業者は單に螺と符牒して居る。



◎此自動玩具は一個一圓四十錢、併し動物の蟬の如きは僅に四五十錢、之を和製の模造品としたら、緋鯉……水鳥等で一個十錢内外、だが緋鯉……水鳥は廉價で、平民的の玩具には妙だ、先づ盥に水を漲せて置き、其の中へ螺旋を卷て放せば玩具は永中を游泳するのだ、其他水中の遊戲玩具としては。

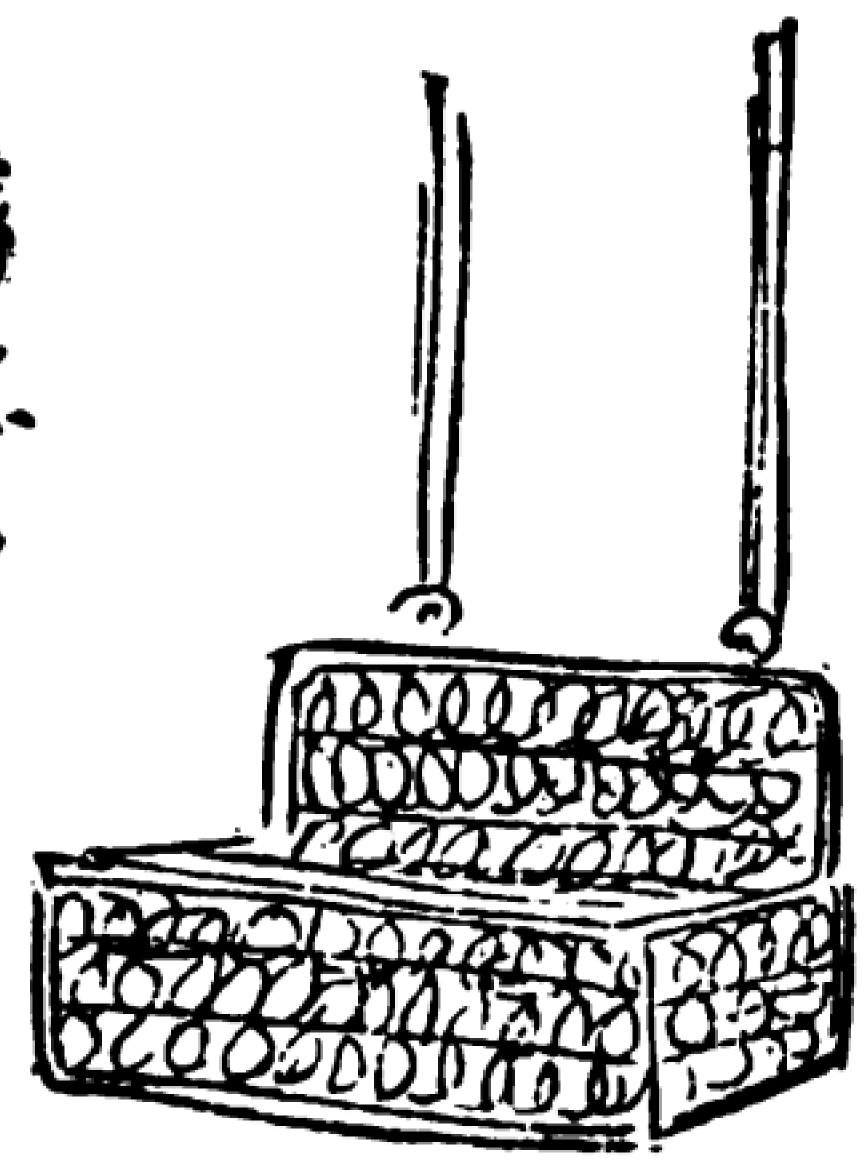


△汽船……水雷艇……和船等が尤もよい、汽船や水雷艇は舶來品で種々のが輸入して居る、普通の西洋小間物店などにも、店頭へ陳列してある、けれど舶來の汽船や水雷艇は酒精で、機械を運轉させるのだから、奈何しても油煙で燻りがちとなるが、模造品は螺旋で水中を運轉させるのだから、油煙で手を汚したり、玩具を燻らするの憂ひがない。

◎而已ず舶來の汽船は、一斑に商船を模してあるが、模造品は之に反して軍艦を模擬し、孰れも勇壯に躍如して居るのであるから、海國の小國民の玩具には適當

だ先づ園內の小池に浮べ戰爭して娛樂に宛い、夫に舶來品と模造品とは、價格の權衡が甚しいので、奈何でも模造品へ軍配が揚るのださうな、價格は一個和製が一圓、舶來品であつたら二圓から三圓位。

◎併し水雷艇や短艇は舶來品でも、一圓より一圓五十錢內外である、和船は純然たる日本玩具で木製、上等品となれば五反帆擬ひの親船もあれど普通は猪牙船荷足船が多い、價格は一個十五錢より六十錢位まで、此和船の事を同業者間では、一般に木船を稱して居るさうだが之は金屬製の船の玩具と混交しない爲である。



梓干ブラシユ

◎水弄びに尤も適して居るのは、喞筒と消火器の二種だとやらで、喞筒も上製には水管が備へてあるから、水弄びの玩具には廉價で宛い、喞筒の上製は三十五錢內外、普通品であつたら十錢、消火器は一個十二錢位だ、夫から玩具界で光彩を放つて居るのは。

◎船滑りの玩具である、博覽會の船滑りを模造した玩具で、三種程出來て居るのだが、最上等品でないと旨く船が滑らず、滑つた所で下等品は盤陀着が惡いので、船が水中へ滑り込むと同時に、船の中へ浸水して沈沒するのだ、其の上等品と云つた所で四十錢內外、此船滑りの玩具は小い掌の喝采なぞで、家庭へ言ふべからざる趣味を添るものだ。

◎此船滑りと倶に出來た、博覽會當込みの玩具は、觀覽車と探海燈であるが船滑りのやうに自然でないから、餘り歡迎されないのである、如上述たは男兒向き玩具のやうな傾向だが、元來幼年向の玩具には男女の區別がない、尋常小學卒業近くの時代となり、男兒は喇叭、女兒は風琴などと云ふ、樂器を嗜好するやうになるのだ、けれど女兒は幼年から人形を愛翫して居る、其の人形も西洋の眠り人形を好むとやら。

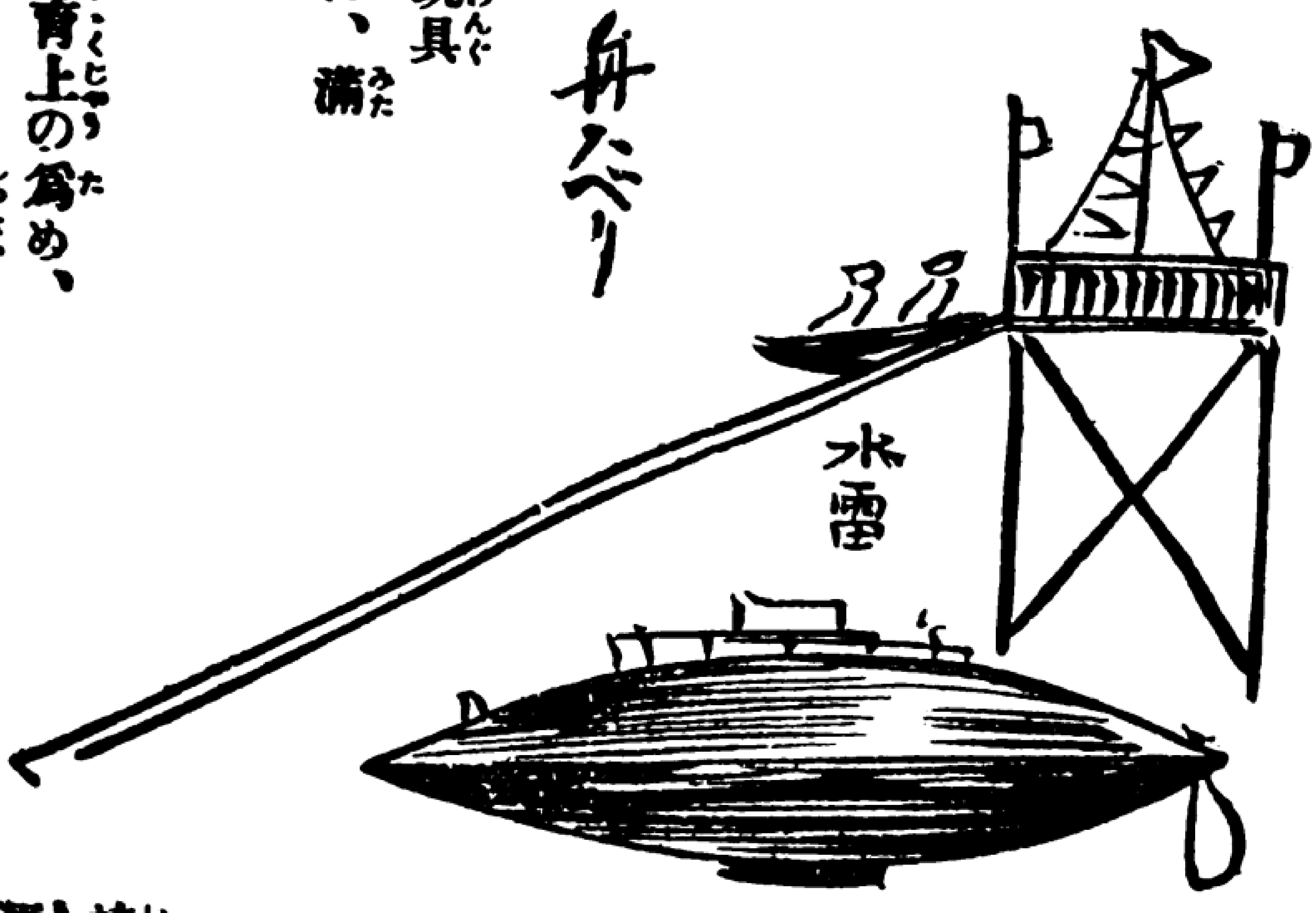
△容易なる樂器

兒童の翫ぶに簡易なる樂器は、風琴と銀笛が多いさうだが、此風琴にも舶來と和製があつて、舶來は最下等品で二圓以上、之が和製となると、別製飛切で二圓内外、普通品だつたら一圓位からある、乃で和製も舶來の笛を用ゆるから、音色と樂譜に就ては舶來と異ならない。

◎銀笛も舶來品の上等は一圓内外の價格、和製は二三十錢より五十錢位だが、舶來品を凌ぐやうな優等品もある、されど和製は悲しい事に、清音が出ないと云ふ話し、併し兒童の玩具としては、風琴も銀笛も和製で需用に、滿す事か出來ぬ。

△室内の運動器械

玩具は座上遊戯に過がないから、體育上の爲め、室内運動を申し上げやう、其の運動器械には、室内テニスや闘球盤もあらうが、幼稚な兒童の智識では不可能



である、然ば室内運動器械として、簡易に要領を得べきものを記すとしやう。

◎安價で危險のない物は寐網である室内でも樹木の間でも容易に吊され涼がてらの運動が出來る、小兒用なら僅に三十五錢位から、だが、今日では寐網のみでは趣味がないとて、ブランコの踏棒へ網寐を装飾る向もある、其の價格は寐網着二圓五十錢ブランコの踏棒ばかりは、五十錢より一圓十錢迄あつて、紐を環で鴨居へ掛るやうになつて居る。

◎此ブランコに類似した、椅子ブランコと云ふのが專賣となつた、籐で椅子のやうな腰掛臺を造り、安全に運動の出來得る事になつて居るが、寐網着ブランコより體裁がよい、價格は八九十錢より一圓位迄であるさうな。

京都土產 舌きり餅

荒川羽山

高いもの〻譬で有名な京の淸水堂に登れば、例の舞臺に至る途中に、こゝ京都八萬戶を一眸の中に收め得べき高臺があつて其處に數軒の茶見世が竝んである。

往き來るさの數知れぬ客に對し、例の都めかしい京都式の音調で、負けじ劣らじと客を招ぶ處、苟も京都に遊んだ事のある人、一度でも此名所を訪れた事のある者は、必ず此に憩まぬは無からう、或は憩まぬはあつても數軒の茶見世何れも之も「名物義餅」の看板を懸けてあるのに氣付かずに通り過ぐる者は決してあるまい。

此「義餅」の看板に氣の付く位ならば、勿論此茶見世中取り分けて好位置を占めた一軒が「義士舌きり餅」と一風變つた標札を掲げてあるにも氣の付かぬ事は無からうと思ふ、併し何故此茶見世のみが他の「義餅」と變つて「舌きり餅」と云ふか、別して他が名物と割書してあるに反し此は義士と割書してあるか、此事に就ては、惜しい事には昔から幾何萬の來觀者も遂に究めずに通り過ぎて居るらしい。

＊　＊　＊　＊

偖て「義士舌きり餅」とは究めて見れば、世にも褒むべき勤王美談、實に之こそは隱れたる一篇の歷史談である。

茶見世の主人公は、年の頃二十一二とも見ゆる愛くるしく、そして何處となく眞面目の表情に充ちた婦人であつた、其名は民子と云つたやうに覺えて居る、雨の日にも風の日にも必ず妹と共に此に出て、客を迎へ、迎へ入れた客には屹度件の「舌きり餅」を饗するのである。

詳はしく話すならば盡き難い興はあるが、其要領だけを摘說して見れば、「舌きり餅」の來歷と云ふのはこうである。

＊　＊　＊　＊

人も知る通り、安政五年霜月十七日に

大君のためには何か惜しからん
さつまの瀨戶に身は沈むとも。

と云ふ忠義古今に絕して、燦然耻づる處の無い一片の和歌を殘し、彼の南洲翁と相擁いて薩摩潟に投じあへなくなつた月照上人は、此音羽山淸水寺の住職であつて信海、獨一の兩人と名を等ふして、當時の智識と呼ばれて居つた藏海上人の三弟子であつたのだ。

月照上人の事は今此に事々しく詳說する迄も無く、何人も之を知つて居るが、同上人が勤王の說を唱へ東奔西走して居る間、上人に毫も內顧の憂をかけずに能く其運動を助けて居つたのは、實に前記三弟子の一人なる獨一其人であつたと云ふ事は未だに多の人に知られて居らない。

三弟子は前にも申す通り、藏海上人から親しく敎化を受けた者であつた、月照上人の薩摩潟の死や、信海上人の

西の海、あづまのそらと變れども、

こゝろは同じ君が代のため

と遠く月照上人の薩摩潟の最後を弔つて安政六年の三月十八日に、江戸の獄中で從容死に就いた事や、何れも壯烈、悲慘を極めたものであるが、獨一が獄中で自ら其舌を咬み切つて憤死した一條に至つては一層人をして感動せしむるものが多いのである。

＊　＊　＊　＊　＊

獨一は元來丹波國南桑田郡山本村栗山瀬平の子であつて、幼少の時から清水寺に入り十二歳で藏海上人から除髮の禮を受けた者で、後の近藤正愼は即ち獨一である。

獨一の一生は單に勤王の烈士であつたと云ふに止まらず、其四十年間の波瀾中には起伏變替極めて多く、殊に一時女性の爲めに身を誤り藏海上人からは逐はれ、月照上人とは別れて放浪の身となつた一事の如きは之か世に云ふ多情多恨で、彼が一生を最も趣味深く彩つてゐる。

此女性問題と云ふのは他の儀にあらず、獨一が清水寺に衲道堅固に修業して居る時に、恰も、今ある茶見世のやうに伊勢屋とて參詣人に粟餅を商つて居る茶屋があつて、其處におつるとて其頃近所に美人の評判非常に高かつた一人娘があつた。獨一は不覺にも此おつると相愛し合ふ事になつたのである。

此兩人間の事情は、此に深く討究して說明する要は無い、兎に角獨一は緇衣五百戒中最も嚴しき女性の禁を破つたのであるから、慈愛深い藏海上人も泣いて獨一を逐ふに至り、獨一も已む無く十數年間苦業精進の地を後にして一時放浪の身とならざるを得ない事になつたのである。斯て程經てから兩人は伊勢屋夫婦の快諾を得ておつるを女房に娶り、全く還俗して近藤正愼と名乘り樂しき家庭を形つくるに至つた。

其時は月照上人が藏海上人の後を繼いで清水寺の住職となつて居つたから以前の友誼を重んじ正愼を寺の表役人に雇入れ飽く迄も面倒を見て呉れたのである、獨一が、後日月照上人の運動を助け上人の爲めに獄に繋がれ遂に獄吏を罵り、幕府を怒り、舌を切つて自殺するに至つたと云ふのも、此時の深厚な友誼が大に原因して居る事と思はれる。

閑話休題、月照上人が勤王說を唱へ出して以來は、幕吏の追究が殊に嚴しく最早や京都の地に居る事が叶はなくなつた時に、正愼に寺務一切を托して身は何れとも無く落ち延びる事とし、粟田口から京都を去つたが、幾多の辛慘を經盡して遂に薩摩潟に海中の藻屑となつたのである、然るに一方月照上人の落ち延びた後は、凡ての嫌疑が正愼の身上にかゝり、直ちに幕吏に捕へられ、獄に投じられし時の老中間部から、手をかへ、法をかへて上人の行衞を訊れられたが、正愼は只知らずと答へる許りで何言も云はない、幕吏は有ゆる方法で拷問すれど如何にしても要領を得ぬのみか、却て幕府の弊政を罵り、毫も屈する色が無いには幕吏も殆んど責めあぐんだと云ふ仕末であつたが、當時の拷問であるから如何に殘酷であつたかは、今から想像し及ぶ處では無い、正愼は幕吏の前には毫も屈する色を見せずとも心の中では只々管の下に死ぬる日の一日でも早い事を願つて居つたのである。

此に一寸加て置くが、之より以前正愼は戀女房のつる女に病死され其後きぬ女とてつる女の異父妹に當て居のを娶て子迄あつたのである。

斯くて正愼は死ぬる日をのみ待つて居る時に、女房のきぬ女から平生之を好んで居られたからと云つて態々砂糖を差入れて來たのである其時正愼は入獄以來一粒の米も一滴の湯水も口にせずに意地張つて居つたのだから、女房からの差入れ物とあつては、取る手遲しと心の中に思つた程であつたらうが、ツクヽヽ其砂糖をながめ、女房の眞心を思ひ果ては子を思ひ、身の上を思ひ、過去の事を思ふては、何とはなし一時にセキ上げて前なる砂糖を獄内一杯に蹴散らかし、遂に自ら舌を切つて死んでしまつたのである。

ア、彼が一生は情一片で貫いて居る、其意氣、其行動一として壯快で且つ悲慘ならざるは無い。

＊　＊　＊　＊　＊

此事件は彼か入獄後二十一日目の出來事で、其間身體は死人同樣に衰弱して居つたゝめ、血さへ多く出でずに往生したと傳へられて、ある、斯くて死骸は其翌日妻子に引き渡された、始めは牢死と知らされずに放免になつたのであると云はれて居つたから九天の上に登つたやうに喜んだのが、實は世にも悲慘極まる死樣であつたので、擬き込まれた死骸を見た時には全く望みも何も無い九地の下にツキ落されたやうに悲しんで、其光景は今から想像し得べきもので無い。

正愼が死んでから今日は早くも五十年目である、當時のきぬ女は本年七十四歳の高齡に達し、息正平氏に養はれ、正平氏は本年五十四歳現に清水寺々務所に書記として働き多くの男女小供を養育して居る清水寺境内の茶見世は前述せるやうな關係上、特に其筋にて許可を與へ正愼の獄死に因み、永く義士仁人の遺芳を傳ふる爲めに此「舌きり餅」を賣らして居るのである。

ア、此隱れたる義士、世より遠く忘れ去られて居つたのが三十六年田中宮相が近畿巡遊の砌り此事を聞き知り改めて天聽に入れ翌年畏くも從五位を贈られたのである。

人若し京都に遊び、清水寺を訪ふならば、「舌きり餅」を食した後更に歩を移して同境内老杉鬱蒼として居る處、青苔深く

近藤君義重維新之前與月照師盡力國事爲幕吏所捕安政五年十月
二十五日終嚙舌殁于獄年四十有三

の碑文を誦すべきである、之は明治二十一年九月清水成就院住職園部忍慶師が、植田樂齋とて安政年間の志士であつたが幸に幕吏の毒手を逃れ今は柄津に閑居して居る有志と共に、近藤正愼の忠魂義膽を永へに傳んが爲建設した者で正愼の功績を説明して餘りある者ではあるまいか。

＊　＊　＊　＊　＊

「舌きり餅」の由來は之である、記者は歷史の事實を物語りせんとするのでないから盡さゞる處が多い、讀む人或は少なからむ飽き足らず思ふ事であらう、併し此記事に依つて、清水寺に詣づる人、彼の高臺の「舌きり餅」茶屋に憩み、民子が指し示して呉れる石碑の下に至つて五十年前の義士を弔ふ者あるを致さば記者の望は其れで充分である。

和歌

塚越停春選

(天) 朝顔を見て　山梨　笹舟

たのまれぬ色と知りつも朝がほの
なほ露のまをさきほこるかな

評。滔々たる麗兒、多くは皆是れ。同じ人の偶詠に、
月清しうの花白し風青し山郭公一聲もがな。

(地) 杜若　敦賀　島萬壽子

かきつばた浴後の人があなたむきの
立ち姿ともたとへてましを

評。着想面白し。

(人) 蓮　河内　竹内敬子

色香めで、天つ女神のくちつけし
うるほひならむ白蓮の露

評。天つ女神のくちつけしとは、何等の奇想ぞ



秀逸

○○○題知らず　陸奥　佐々木愛子

夕顔は戀する人の瞳して卯月瑞葉の間を覗きぬ

戀する人の瞳とは、珍らしき觀察と謂ふべし。

○○○新竹　佐賀　吉岡小芳

若竹の姿めでたし久方の天津み空をさすばかりにて

新竹を詠じて其天を刺すの趣を詠じたるは、意自ら新。

○○○失題　牛込　平塚いと

色あせし緋房ゆらぎて鳴もせぬうぐひす籠に櫻の實散る

君嫁してはや五つ年の昔なり結びしまゝに柳あれども

○○月　磐城　猪股としな

まどかなる月のかゞみにむかひても恥しからぬ心ともかな

斯る心掛は誰もあらま欲しきことなり

○○氷室風　麹町　土田ひさ子

氷むろ山跡なきあとを訪ひくれば涼しさ殘るみれの松風

用語巧妙。

、○○百合　大阪　觀ひさ

舞姫が鏡に羞ろさま見えて泉にうつる紅百合の花。

、○○○五月雨　大和　富枝子

宿ながらわびしきものを旅の子の夢路やいかに五月雨のころ

、○○七夕　美作　みどり女

七夕のとしに一夜の逢瀬をばなどみじかよにさだめそめけむ

着想面白し。

、○○五月雨　伊豆　永井政子

讀經の聲はとだえて五月雨のふるにまかする山の古寺

閑寂の狀想ふべし。

、○○題知らず　岡山　田上濱子

笠とりて西に旅する畷や野末に淡く朝の月あり

、○○螢　四坂島　渡邊梅子

これやこの焦す思のあかしには螢を取て君に見せなむ

「あかし」とは面白し。

、○○失題　越後　坪井わか子

うつりやすき人の心をよそにしてなど紫陽花をうしと見つらん

、○○逸題　東京　今井とし子

夕雨に空かくして春はゆきぬちるやまぶきにかれひゞく鐘

好什

、○○螢　播磨　三澤きぬ子

われもまたほたるあつめてふみよみつなれか光を身にやうけまし

、○○夏月　熊本　安田文子

ゆあみして肌こゝちよきかたびらの袖に涼しき夏の夜の月

涼味可掬

、○○失題　美作　性金みれ代

あだし世に涙と笑の跡のこし夢より夢へ消ゆるうき身か

、○○逸題　下總　岩瀬不二野

たちよれば小雨に萩はこぼれけり小町が墓の秋の夕ぐれ

佳作

、○○題知らず　姫路　柳田白百合

蚊遣たつ夕がほ棚に月すみて琴の音もるゝ青簾の宿

○○橋上の納涼　高輪　高木きん子

ふけわたる小川の水に月すみていよゝ涼しき橋の上かな

、○○失題　甲斐　百瀬美代子

逍遙ひの野に戀人とほゝ笑みの瞳交はして合歡の花折る

佳調

○　伊賀　服部うた子

手遊びの子犬いだきていつしかもすや〳〵れむるいとしおさな子

○　埼玉　東てい子

傾きし樓の丹塗の欄に夕日流れて公孫樹葉の散る

○　下野　新井琴子

御座船は滿帆あげて淡路より朝の明石の濱に上りぬ

○　岡山　熊澤靜枝

星ふる夜夏の女神のみつくろひの袖のしづくか白百合の花

○　長岡　岸房江子

繪扇に歌をと乞ひし舞姫の肩にも似たる初夏の月

夕立　埼玉　宮倉仙子

色どりの橋を雲間にかけそめてはれわたれゆく夕立のそら

○　姫路　柳田白百合子

山の井のよき朝月のくだけゝり百合に宿りし露ぞと散りて

納涼　埼玉　宮倉いれ子
さかしまに富士が影うつす箱根路やあしの湖邊は夏としもなし

渡邊雪子の君をいたみて　伊賀　服部春江子
昔の春もながめつくさではかなくも消えにし君のすく世をぞおもふ

○　神田　松本さかえ子
遠の海今黒潮と熱風とならび走りぬ眞夏ひる時

失題　新のゐ　山崎玉子
ほとゝぎす聲の絶え間に月さえて立花かほる夕暮れの窓

○　伊勢　佐々木らく子
初音まつ友もあるべきを時鳥月の今宵は都路になけ

雨聲似人來　京都　さだ子
隣分て人もやくると出てみればをりどにそゝぐ雨のあし音

浦蚊遣火　弘前　佐藤廣子
夕ざれは磯山松に風たちてあまが浦わにもゆるかやり火

○　伊賀　山村すみれ
琴のちり拂へど彈かんすべもなし戀しき君の逝きませし秋

○　伊賀　服部春江子
かすかなる己が光をたのみつゝやみを得顔に飛ぶ螢哉

○　伊賀　山村りやう
ふりかへりまたふりかへり見送りぬ君によく似し人とわかれて

○　駿河　喜代子
雨はれて夕日てりそふ花園につゆ重たげに姫百合のさく

○　下野　染谷縫子
御屏風に桃色御衣美しき若藺宜見ゆれ夏の夜の殿

○　福井　片山千里
雨の夜を風の遠聲聞きながら歩む心地す君と別かれて

○　河内　陸山靄子
天つ女の神のいとしご撫子がおくや露の露ぞ玉ちる

友を慕ふ　大阪　美川文子
駿河路や志太の深山に入りてより花うると云ふ音がとも戀し

○　滋賀　ひさ子
水清く月もすみ田の川上に何をくひなのひとりなくらん

○　播磨　森の人
そのあした瑠璃もてするよ天平の御堂雨して緑燃ゆるに

夏月　神田　鶴岡とく子
軒の端の露に露を宿しつゝ風も涼しき夏の夜の月

○　麻布　わかくさ
忍び音に君が教へし歌誦して夏野の三里ひとりゆくかな

○　相模　文子
濱風にこめし朝霧消えそめて紫匂ふ沖つ島山

○　伊勢　山路くに子
朝明を霞の里より霞の里へ僧二人行く紅衣と紫衣と

○　下野　戸田藻花
水鶏うく沼のゆふひを背にうけて雲をながむる風母戀しも

○　佐渡　桂月子
卯の花の深き詩興を秘めなして闇のさ中に白くも匂へる

夏山家　名古屋　清水みさを
すむやたれ軒端は萩のまがきして流れにそへる川づらの家

○　大阪　須磨子
五月雨のそぼふる里の夕暮になくや蛙の聲もしめりて

○　青森　三浦愛子
新製の肩掛はしき姉君が初の島田におもはゆげなる

蚊遣火　大和　みゆき
蚊遣火の煙細りてあめの夜は昔語りに更けにけるかな

○　伊豫　山崎くま子
音も立てゝもゆる螢の風にはきえゆくつゆやたつきなるらん

薔薇　相州　大井松子
まだ知らぬあるじにこひてえつるかなゆかしくさけるさうび一花

○　鹿兒島　近藤すゑ
あなさびし夢と云ふまぼろしも幾日ながめず人とわかれて

○　越後　みつゑ
黄昏や南の方に雲走る吾をのこして我が故郷へ

○　横濱　吉川香都子
涼風は青簾をうしてうたゝねの美しき人吹きぬ初夏の窓

野遊びの折　駿河　かつら子
名をきゝてしばし折る手のたゆたひぬ我居る野邊なかざるなに百合

動物園の虎を見て　熊本　安田文子
千里行く望は絶えて檻の中にねむれる虎のいとゞ果敢なき

○　青森　三浦愛子
匂ふ香は闇にも其れと知られけり色にほこらぬ白百合の花

閑居　伊豫　佐伯友枝
柴の戸に偲ぶ昔を訪ふものは枕涼しき月の小夜風

不如歸　駿河　菊池武子
雨ぐもり庭鳥ねむる背戸の口ぶどふの棚に青がへる鳴く

不如歸　駿河　菊池武子

窓こしに見へし野面の一つ松霞みにきへて小雨そぼ降る

船遊び　北海道　中村小百合
たそがるゝ島の彼方の磯めぐり幸ちある舟は月をやどして

亡母を思ひて　飛驒　鹽武子
今もなほその面かげの目に見へて忘れもやれぬ母そばのこと

○　岩代　岸野常子
若かへで圍むがなかに春びきの繭煮る人のおもをわすれじ

○　武藏　多ま子
ひとり居のさびしき夕邊物思ひそと出し見る姉がうつしえ

楓葉　若州　山中露子
雨やみて雫滴たる楓葉の葉裏に小さき蝸這ふ

○　京城　原野みきえ
一夏を自然の友にしたしむと雨のつれづれ友旅立ちぬ

病の床にありて友人の見舞をうけし折に　筑後　野本辰子
たれこめしとこ夏くさのあわれさになさけの露のかゝるうれしさ

○　遠江　寺岡靜子
人知らぬ谷間に咲きし百合の花小蝶のほかに知るよしもなし

海邊にきて　肥前　赤井かめよ子
かたらはん友だになくてもしほやく浦の煙の幸うすき身よ

雨中の唐橋　紀伊　佐田柳子
そことしも見えあがぬまで霧とぢて雨のみ渡る勢田の唐橋

○　京都　波多野松枝
馴れ染みし海人にはあれど曙の潮風心地涼しかるらん

○　備中　高草てい子

梅雨晴や白衣の美女を垣間みし朝なおもひぬ卯の花のいへ
○　豐後　菅原よし子
ちさき船いくつ浮かべて梅雨晴れの海は黄色く夕日てるかな
博覧會　芝區　飯田岑子
すむ月の影なき池の水の面に星かとばかりうつるともしび
○　伊賀　服部うた子
暗の夜を一人し行けば面のあたりあらため顔に飛ぶ螢哉
初幟　備前　兒島常子
吹きおぐろ竿の緋鯉のいや高き譽れを祈る初幟哉
常盤御前　神戸　足立あさ子
白雪のかゝる歎きの折にしもこずゑ花咲く春や待けむ
紫陽花　赤坂　かほる
けふはまた淡むらさきになりにけり日ごとにかわる紫陽花のはな
浦風　芝區　新野壽枝子
舟歌も千どりなく音もたへはてゝ月に磨ける玉津島かな
○　大分　加納豐子
夕顔は人なつかしうさみだれてつはめとひかふふるさとの家
○　香取　木内貞子
あるはきえあるはきこえて松風のしらべ涼しき夏の夜半かな
○　福井　福岡　內
端近ふそへ乳し居れば幼子のかしらに蝶の來てはむつるゝ
池上月　京都　砂川澄子
そよ／＼とおしまを渡る夕風によれてぞ浮ぶ池の面の月
夏知らず　竹原　堂面幸子
流し行くごぜの姿もたそがれて鐘に暮れゆく下嵯峨の里

螢　名古屋　とな
風ふけば露とみだれてはら／＼とみえみみえづにとぶ螢かな
○　福井　井田美子
西の空夕雲立ちぬ紫の御衣纏ひし女人の様に
○　大阪　上原絲子
若草に朝露のころ小牧原羊じ群れゐぬ朝の日照りて
夏月　伊豫　佐伯友枝
村雲はあとなく晴て松か枝に涼しく清める夏の夜の月
螢　尾張　けい子
風そよぐ清き小川の草の上を玉とみだれてとぶ螢かな
○　岩代　菅野廣子
夕虹の名殘や惜しき露散りて夏野七色花みだれ咲く
螢　本郷　つる子
小夜ふけて月は入にりし川よとにのころ光はほたるなりけり
人の別に　山口　酒向とし子
かなしさに心ややがて消えはてんわかるゝ今はうつゝなれとも
友　長門　稲谷さち子
憂きにつけ嬉しきにつけへだてなき友ぞこゝろの力なりける
蛙　安房　堀　嶺仙羅雀草
今日も又雨にかならん池のもの浮葉の上に蛙なくなり
蓮　臼倉てい子
諸人のかゝみなるらん池水のにごりにしまてさけるはちすは
五月雨　埼玉　井上千代子
小やみなくしと／＼とふる五月雨のさびしき空にほとゝきすなく
五月雨　相模　諸星てい子
けふ幾日ふる河柳水こえてさみだれ鮎や游ふとすらん

短文

清き泉

下野　關口和歌子

さゝやかなる木立の中一脉の石隙より湧き出づる清泉あり古りたる石滑かに青苔を生ず涓々と滴りては夏草つたひ流れ、其處に美しき鏡の如き泉を自然と形造れり杉樅檜なんど茂り生ひて天然の緑門を成し射し込む日光金銀の征矢の如く泉の底までも射込みて愈々氣崇く邊りに蓬々たる夏草は泉の神聖を守れるが如し默示の中に過去の歴史を語るものに似たり泉の靈氣に打れたる妾は瞳乎と湖心に眺め入り或る一種の感想な心の裡に描きぬ洞願せずや五星霜我未だ小學の校舍に通ふとき初めて泉を見出せしより朝な夕なに必ず訪づれたりき春風駘蕩として四山翠の衣を着け滿野烟霞に酔ひ芳草萋々一路斜めに林に通じ泉に到るの邊り匂ふや詐の菫花名も懐しき母子草聞くも嬉しき蓮花草さては蒲英公紫草餘りの美しさに我れは泉の水を掬びて撒き與へしこともありしよそは我れ等が摘む可く清かれとの心なりき果女瓶を提げて柳影に蛙聲を掬むてふ水無月の夕まぐれ誰れも汲まざるこの泉を獨り掬びて甘露に酔ひしも幾そ度或るは泉の神に乞ひ得て溢るゝ水を盞にうけ笑みて歸りて書きたりし繪反古紙反古歌百千卷今猶脊筺深く秘藏つ。感想種々として盡きもやらず胸あたりに目を注げば それよ其處に常時の紀念は殘れり幼な心に能くも氣付げん圓き石に「神泉」と筆太に記して水の滴る邊りに多くの石を積みつ 祠の意にて据へ置きしなり そは我が歌に幸あれよとの 意なりし爾來長き五星霜 猾れて見るに由なく草蓬々の中に石祠倒れんとして漸く支へられ アハレ昔の儘なる面影を止めぬ、ふと飾を顧れば其れよ優しき姫百合二三本我れ思はず瞻せ暫りて接吻せんと清き盞に向ひし刹那我が心に輝きぬ そは人の世のものにはあらで天の樂園に咲き誇る可き花なりき我が汚れたる身躰の觸るゝ事の如何に恐ろしき事よと 我れは一歩飛退き瞑目して思ひぬ 泉の神が懐籍の衣として此の仙境に隱れ植へられしに あらざるか 若し己が花に觸れたらんには如何に眞心に苛責られしならんを愛に充ちたる神は我れに敎へ給ひしなり 神泉の靈香に酔ひ懐古の念に驅られ アハレ一日み泉のほとりに辿りつさらばよ 泉幸あれや永劫に盡きず 濁らず世の塵を避けよや我は去て再び俗塵に捨れんいざさらば。

弟のいたづら

芝　新野春枝

たのまれもせぬのに今朝は早くから庭の手入 亡き母が秘藏の梅も大分實を結んでどうやら來年あたりは梅干が一樽ほど取れそう何うかそうなれば母も滿足であらうと何とはなしに考がへて居る後から弟が何時の間にやら腰紐に繩を結び付けていきなりワン〳〵立たんかこん畜生杉の木の傍ではまことの犬が逃路を失なつてうろ〳〵。

思ひ出

青森　三浦愛子

父上の御丹精でよう〳〵李ぐらいの大きさになつた林檎の實を玩具の籠に一つぱいもぎとつて隣の千勢さんが買ひ手私は商人で「林檎買ひませぬか」と云ふて遊んで居る所を父上に見付ひられ大層叱られたのは最早十年の昔となりました。あゝ私は今一度あの時の樣な無邪氣に踏へ

りたいと林檎見る度に思ふのです。

○　　　　大阪　磯　政

女の髪の格好は鶏に能く似て居ります前髪が嘴で鬢は翼で髷は背、そして髱は尾でせう、髪の黒いのを能く烏の濡羽色と形容しますが、あれは形の似通てるのも意味するらしい、お饒舌は鳥が囀づる様なと言ふ事もありますから、何でも鳥の様にお饒舌しては不可ぬと借ては斯う言ふ格好に選んだのだと妾は思ひますが什麽でせうか?。

笠

岐阜　渡會よし子

彼方に見ゆるは作中の一家内、此融しい暑さに、何故妾は一人笠冠らざるかと思ひ、やがて近寄れば、笠は路傍千草の蔭に、安らけく眠れる乳兒の日除になつて居たのであつた。(愛情可掬)

夕暮の雲

臺灣　大橋眞雪

終日燒く様な太陽も今や西に沒せんとして居るので私しは讀書を止め書齋の窓を開いて見るとオレンヂ色の雲がぱーつと西に棚曳いて其れが絶へず動いて居る散つては寄り寄ては散りつゝかゝるかと見るとやがて一群一團堂々隊を組で南に走つ行く此雲が去つた後は空は更に美しい青と赤との二色で綺麗に彩色された間を白雲が丁度波の様になつて南に行く稍薄くなりふはり〳〵とやつて居る私は暮つた天上には美跡が語られて毎日此の模樣をかへて私等を慰めて下さるのか知らんとやがて今迄での雲は又何處へか消へて終つた後は單純な淡墨色嗚呼實に變化の早い事驚くばかりである折から夕暮を知らせる鐘の音に迎へられて夜の跡は晝の跡から後を受け取てそろ〳〵暗い幕を下し始める。

都の友に

安東縣　竹本園子

都の空にば、互に、樂しとほゝ笑みつゝ語られし事も皆東の間の夢と過ぎぬ、あゝ、なつかしき靜子の君よ、御身とみづからとは、姉妹の如くなりと、いはれ給ひしをも、御身は、忘れ、給はじ其折取かわせし御笑し面影朝な夕なに拜して異郷の空にて月日を送りぬ、みづからは忘れ給はず、よくな手紙を送り給ふ故、いつかは歸朝する程に、まちませやよ靜子の君よ。

夕涼

和歌山　島田千代子

夕立の名殘とゞめて庭の木立は一葉ごとに露をおびてさやけき月の光にきらきらと輝き緣の色もとけて流れさうであるそが木陰におりたちて置石を自然の涼み臺にと湯あがりの身をもたせ涼んでゐると月の光は丁度青い雨かと思はれるばかり葉の間から洩れてくる折しも涼しい風がさつと若葉をそよいで白銀の雫はら〳〵とこぼれわが顔へも冷やりと其一滴がおちたあゝ何といふ氣持だらう畫の閑も洗ひさられて。…

小鮎釣

相模　諸星てい子

チルの單衣に襦袢を誘ふ河風涼しく翌日も日和の夕柴の茜の雲に身を染なして兄の鮎釣に毎夕行きて七八尾より十二三尾位釣來らるゝを不審み密に跡を追ひ見え隠れに相模川の岸に佇めば兄さんは振り返りて

只見て居るは無益だ斯うして居るならおまへも釣りな要らぬ害もなからうにこゝに釣竿に似た篠ありと兄さんは掛替の鈎を附て呉ました河の上にも下にも三人五人釣人居れば恥かしきやうなれども兄さんの手つきに眞似て二十分斗り經つと手應して小さなのが釣れし時のうれしさ獨笑まれつゝ又十分斗りにして浮が沈む又釣れましたといへば兄さんは聲を發ては如何よと叱られてもうれしく凡一時間そら又釣れたも口の内丁度五尾に成りし時いつしか日は暮れて里々の夕餉の烟りも淡し歸路は宵闇にて澤の螢の飛交ふ影もむに添はず兄の袂にすがらん斗り附添ふて鮎は女にも釣れるれといへば兄さんはそら歷史にあるだらう神功皇后樣が新羅を御征伐の時其成敗を占問はんと肥前板浦の鯀玉島の小川に釣を垂れたまひしにかゝりし魚は鮎なりしと其の緣か今も此里にては女子が鮎をつれはよく獲るとかいふなどゝ咄しに紛れ閑路の寂しさも打忘れし間に灯火輝やく我家の門に入りしと不盧獲物ありしとの嬉しさの儘をしるす

我が里

肥前　永野朝子

廣々とした肥筑の平野を悠々と流るゝ千歳の川を朝夕眺めて親子姉妹
睦しく氣をそろへて働いてゐる
米も作れば野菜も出來る着物も織る
住めば都で別に不自由も感じない
前の川に魚が躍れば後の森に鳥が鳴く三越や歌舞技座は夢にも見られ
ぬ我が里もくめばつきせぬ樂しみが満てゐる

夏菊

神田　鶴岡傳子

思ひ返せば去年の今日であつた「私が大きくなるまでにこの花がどんなに殖へるでしやうね」と妹の照ちやんが心を籠めて植へた夏菊は時節が來て今年も相變らず美しく咲いた、妹も肥れば花も去年より餘程殖へた……一羽の黄い蝶々が此間から毎日來ては此花に戯れて居たが、どふした事やらこの四五日は更に姿が見へない、大方餘所へ遊びに行つたのか知らんと思つて居ると哀や花の下には蝶の片羽……照ちやんに逢つたら此花の傾りをよく告げて頂戴よと、よく言ひ含めて此片羽を夏菊の下へ葬つた……附木に書いた胡蝶塚……

あさがほ

牛込　平塚白百合

亡くなつた姉さまは大の〳〵の朝顔好き、お彼岸にまかれたのか小さい嘗ができましたので毎日〳〵まちましたら今朝それは姉さまの御命日に御盆の樣な花が一つ、早速取つて佛壇にさし上げると今年ばかりははなく〳〵と母さまがあとは何やら涙にくれて居られる、あゝ姉さまは何とおしやるかしら。

雨後

岩代　岸野常子

思ひ出したやうに時々雨垂れの音がする。向ふの霧に包まれた松の木の方へ、鳥が啼きながら飛んで行く。紫陽花は露を帶びて一層凉しう美しく見え、植木棚の石竹も露を飾つて得意げに美を誇つてゐる。半ば熟した李が水溜りの中へ落ちた。蟇がつはぶきの下から殊勝らしい顔を出す。蝸牛はまだ動かずに、無花果の枝にくつついてゐる。

紹介

△奈落　德田秋聲著

櫻花一朝の夢にあこがれて見事失敗せし成金黨の家庭を描きしものなり、流石に秋聲は現時嘱望されつゝある作家だけに這般の消息を寫すに用意周到の趣ありといふべし。價七十錢文淵堂

△不知火　大倉桃郎著

陸軍の將官にして古武士の面影ある人の子息に前途有望の士官あり、旅順の戰に戰死したる後、其未亡人と、他の負傷して不具の人となりし好青年との間の戀を描きたるものなり、文章輕妙。價六十錢文淵堂

△植物と人生　石原純著

早稻田大學通俗講話の第十二編なり、通俗の人にはあまり感興を惹かぬ植物學上の事柄を尤も平易に且つ趣味深く説明し、殊に科學と人生との關係を極めておもしろく解説したれば家庭の童蒙婦女子をして樂しんで之を讀過する間に智識を養はしむる樣講述に工風したるところ又本書の特色といふべし。定價六十錢

△理想の母　内外出版協會版

威武も屈する能はず、富貴も淫する能はざる底の理想高き、人格ある婦人の思想を顯はしたるものなり、世の母たる人の一讀すべきものなり。價二十五錢

△支那思想論　日韓文明論　山路愛山著

五千年の歴史を有し、東洋文明史の本宗たる支那思想界の沿革を述べたるものなり、上は儒教、老、佛より下は宋明に至つて王陽明、朱熹各家の思想の梗概に及べり、著者が經學に於ける造詣の深淺は別としてこゝに一種獨特の眼識を以て自家の論旨を立つるところ頗る讀者の快感を促がすものあり、森を設くる縱横自在、旨を立つる斬新奇拔、眞に近來の快著なり。價四十五錢文淵堂

△四季飲料混成法　櫻井五郎編

飲料は互の生命なり、水、茶、麥湯、乃至はラムネ、サイダビール若しくは各種の酒類尤も多く飲まざるを得ざるは夏の季節にして而かも一度び其の適用を誤まれば惹いて健康上に至大の影響を受くべし、されば如何なる飲料を取り、如何にしてこれを供すべきかは夏の家庭の一問題なり、此書は必らずしも家庭向の飲料のみを撰びて其製法を説きたるものにあらざれども、中に就て無酒精飲料混成法十種を説きたれば家庭向としても又好參考となるべし。但し本文は專ら混成酒を造らんと欲する人の爲めに記述したるものなり　定價六十錢有隣堂版

謎々　◎印は入賞

「ビール」とかけて

非常事件出來と解く、心はあわた喰ふ　大阪　櫻　政

動物園と解く、心はキリンが評判　横濱　河原　光

◎福神の避暑と解く、心はサッポロにエビスあり　信濃　宮本　靜枝

嚴父の訓戒と解く、心は苦い中に味がある　大阪　倉賀　愛子

馴れぬ汽車旅行と解く、心は着く(注ぐ)とあわてる(泡出る)　京都　佐野ますゑ

てんかん病者と解く、心はよく泡をふく　東京　市村　たか

江の島の旅館と解く、心は惠比須が一番　下總　谷口　こま

饑饉と解く、心は泡(粟)を食ふ　河内　陰山れい子

各國々旗較べと解く、心は朝日が一等　京都　波多野松枝

「イルミチーション」とかけて

◎幽靈と解く、心は闇に形をあらはす　京都　藤田　靜枝

親族會議と解く、心は電燈(禿頭)の寄合　京都　佐野ますゑ

狐の化物と解く、心は野干(夜間)の美形(美景)　長門　藤谷さち子

運動場と解く、心はたまける人もある　河内　陰山れい子

◎古今貞女かゞみと解く、心は多くの傳記(電氣)でうつくしくかゞやく　越後　古市よし子

「美人の午睡」とかけて

嵐山の秋景と解く、心は淋しい風情が見へる　熊本　甲田　唯子

名所古跡と解く、心は繪で見る方がいゝ　京都　佐野ますゑ

見合の娵と解く、心はうちわに顔かくす　越後　坪井わか子

七月の朝風と解く、心は白萩(白歴)がこぼれる　京都　藤田　靜枝

來月の新題

△水族館　△生命保險　とかけて
△朝　顔　△長壽法

一口噺　◎印は入賞

△棒と鉢　下谷　幸　子

下女「奥樣先日の御着物のおくみは棒に致しませうか鍬にいたしましようか

奥樣「何をお云ひだへ棒より鍬の方が丈夫ではないか

◎大な注文　大阪　田村　重子

妻君「コレ〳〵魚屋さん今日は多勢の御客が有るのだが大きな魚が欲しいのですが一體何が有りますか

魚屋「ヘエー今日鯨ばかりですよ――

妻君「それぢや其れを四五本おいてつておくれ

△猫　足　同　人

小供「お母さん此茶熱いからうめて

母「お前猫舌やな、小供「ソンナラ此間お母さんは風呂が熱いと言ふて、うめたなア

母「フンうめたよ　小供「ソンナラお母さんは猫足やがナアー

△上流婦人　備前　靜　子

妹「姉さん上流婦人にはいつ頃實がなるのでしよう

姉「アラマア文ちやんなにいふの上流婦人は桃や梨ではあるまいしナンデ實がなる者でせう

妹「デモ今頃上流婦人を交際塲裡の花といつておるではありませんか

◎　京都　砂川　澄子

息子「おとうさん昔は雷樣のやうにお月樣が地に落ちたのですか

父親「馬鹿をいへなんぼ昔かつてそんな事があるものか

息子「でも此木には月をふんで歸ると書いてありますよ

△大臣は一ツ　東京　池田ゆり子

奥様「わー竹内の坊やの寝坊にも困りきるよ…さあ坊や早く御起き大陽が大變上つたよ
竹「あら奥様嘘ばかり大陽わたつた一ツきり上つてやしませんわ

△猿も木から　京都　藤田婦枝

甲「お隣りの婦さんは氣立ての能くない人でしたがとう〱追ひ出されましたとれ
乙「だから去るも氣からと申すんでしょう

△立板に水　岡　人

○「アノ洗濯婆さんは能く喋りますことれ
△「お前實桐立板に水なんでしょう

△林の字　秋田　河村房

或學校の習字の先生が一人の生徒に向ひ「お前の林の字は偏が大きく、旁が小さくて、釣合惡いではないか、
生徒「でも林の中には大きい木も少さい木もありますもの

△無邪氣な答　福井　片千　山里

教師「諸嬢さんの衣服はどうして拵ろ者です？
一生徒暫く考へて「お母あさんの古いのを仕立直して拵へるものであります。」

△空腹と空頭　北海道　工藤すゑ子

五才の少女「母アちやん私お腹がいたいの
母「そりやお腹が空になつたから痛いのです何かおあがりなさい
所へ家庭教師が來合して少々頭が痛みますので今日は休みますからと云ふと
少女「先生、それじや先生のお頭の中が空になつたのでしょう、何かお入れなさいナ。

△　三重　神田清子

コレ〱小僧湯を沸かして置いたか、イエ水を沸かして置きました

萬物智慧くらべ

小樽　久々津さん

統計表——暦日
華厳の瀧——哲學
避暑——夏休
朝顔の花——つるべ
螢——卒業式

東京　布村映枝

華厳瀧——青年の空氣、煩悶の道、詩人の寝床
避暑——蟻穴、百姓の祭、實業屋の悲慇
朝顔の花——姉の理想、老人の心配、下女の眠き釣瓶の束縛

四谷　加藤あい子

統計表——金庫
華厳瀧——天の川
避暑——ハンモック
朝顔の花——逆さ富士
螢——電氣燈

新潟　石黒利由子

朝顔の花——笑顔
螢——古人の燈、電氣
華厳の瀧——學生身投、白絹綴
避暑——松の下蔭、山海

徳島　中川龍子

統計表——八百屋、官報
華厳瀧——藤村操、失戀、人を飲む器
避暑——乳、濱寺、湯治
朝顔の花——茶碗、藤坊の樂
螢——苦學、戀のほむら

横濱　齋藤いと子

統計表——地理書
華厳瀧——藤村操
避暑——箱根
朝顔——早起
螢——蛇の目

大阪　櫻　畝

統計表——〃記附錄
華厳の瀧——不可解、人眞似、悟り
避暑——出來星、病人
朝顔の花——哀、釣瓶
螢——夢、見ぬ戀

伯州　長田ふみ子

避暑——新夫婦、かうもり傘、木陰
螢——流星、古の勉強家
朝顔の花——媒時代

▲人事活斷▼

石龍子

△香林清子へ‖高貴に形而上の高貴と、形而下の高貴とあり、形而上の高貴とは縦ひ身に襤を纏ふも、心に天章燦爛たる趣有るを云ひ、形而下の高貴とは縦ひ身に錦を着けてゐても、品性劣等の人を云ふ、而して貴女若し形而上の高貴を願はるゝ心にならるれば、從つて形而下の高貴も亦之に伴ふなり、然るに唯形而下の高貴に嫁せんと望まるれば、三年を出ずして臍を噛むの悔ある可し。

△琴女へ‖鸞鳳の虚空に舞ふが如き象あり、故に二年の中に良人と同棲して好運次第に向ひ、男女兒三四人ある可し。

△備中の苦しみ女へ‖英語勉強の目的甚だ可なれども、渡米の志望は恰かも好んで煩悶の苦中に投ずるが如し、故に向ふ五年の中内地に在りて獨立不羈の精神を以て撓まず屈せず勉學されなば、幸運次第に來り、母上と共に末樂しかる可きなり。

△心配多き清子へ‖之を物に譬ふれば、貴女は白銀にして、一方の情婦は眞鍮に鍍金せるが如し、而して良人は之を悟らざるなり、故に貴女は益々其の品性を磨きて潔白なる德を養はるれば向ふ二年を出でして、鍍金が剝げ眞鍮の眞鍮たる所が現はるゝと共に圓滿なる家庭となるや明かなり更に憂ふるに足らず。

△陸前二十二女へ‖燕雀の群がる中に孤鴻の翅を張れるが如き卦なり、而して貴女は其の孤鴻なり、然れば貴女の思望にて徹さるゝこと甚だ宜し、何ぞ燕雀の言を用ゐるに足らんや。

△仙臺乙女へ‖甲乙の二虎相闘ひ、乙虎敗れて丙虎の助勢を借らんとすれども、丙虎之に應せざるの卦なり、然れば貴女今の目的を換へ、他方面の人に嫁ぎ、前者を更に意に介せざるを最も可とす、此心になられば幸運繼々として來るの兆あり。

△和泉の春海女へ‖前者即ち父を有せる人の方へ嫁がるゝを可とす、琴瑟相和し、家庭圓滿疑ひ無きな

り。

△神山女へ＝＝貴女の福運は期待する所に無くして期待せざる所に在り、故に従兄及び大學生共に不可なり、今二年を待ちて大學卒業以上の學者と結婚せらる可し、必ず以て急ぐ可からず。

△白菊女へ＝＝柔能く剛を制する場合に、剛に非ずんば剛を壓する能はざる時と有り、貴女現時の位置は飽まで剛を以て德とし、自ら正當なる婚を求め、堂々と繼父の冷淡を說破するを可とす。

△南天子へ＝＝長者家を相續し、幼者家を出るは我國古今の通則、又天理の然らしむる所なり、故に先づ妹を他へ嫁せしめ、貴女は悠々時を待たる可し、心焦れば焦る程禍來るなり。

△北越の百合子へ＝＝撰べは撰ぶ程益々善を郤くるの象あり、貴女は此象あるを知らずして、昨年以來多くの善を郤けたるなり、故に今度新に來る緣談は必ず之を郤けずして天の良媒なりと心得らる可し、此の心懸あれば日を經月を累ぬるに從ひ福運次第に來るの卦有り。

△大阪すみれ生へ＝＝水魚の交末必ず目出度し、至急良媒を求めて、正々堂々と結婚せらるゝが何よりの得策、然るに躊躇時を移せば好機再び來らず。

△山陰の泣菫女へ＝＝養家の貴女を求むるは貴女の身を求むるに非ずして、貴女に附隨する或物を求むるなり、貴女の御両親が貴女を幼少の折養女に出したるは先方を信じたるに非ずして爲にする所有りたればなり、故に今や雙方に於て葛藤の生せんとするは天理の然らしむる所、然れど既往は追ふ可からず、今後赤誠を籠めて先方へ談判し、離籍の上他家へ嫁せらる可し、是れ雙方の幸福なり。

△困迷女史へ＝＝時熟して福運來れる象あれば一刻も早く其求婚に應ぜらる可し。

△兵庫縣の病人女へ＝＝離れんと欲すれば益々離る可からざる趣有り、故に滿二年の間互に別居し、互に靜養して再び相逢はる可し、以前に倍して家庭圓滿末樂しきこと疑ひ無し。

△みにくき思ひ子へ‖容貌の美なるは花なり、品性の美なるは實なり、然れば御身は其の實の熟するまで即ち今五六年の間、技藝を習ひ德行を養ひ、以て良緣を求められれば容貌の如何更に憂ふるに足らず。

△うの花女へ‖軍人たると法學士たると乃至は田夫野人たるとは更に問ふ必要無し、唯々沈着寡言の人に仕へ、貞節を盡されれば綢繆纏綿の情互に樂しかる可し、これ特に貴女に勸め申すなり。

△京都在の迷子へ‖京都なる敎育家の人に嫁せらる可し、敎育家ならば小學敎員たると大學敎員たるとを問ふ所に非ず。

△東京にての花子へ‖美術學校卒業の上にて悠々婚を求めらるゝも敢て年齡の遲れたりといふ程に非ず、之れ父兄の命に背くが如くなれども將來却つて孝道を盡さるゝの基なりと知らる可し。

△姉おもいの孤兒へ‖耳中へ蟲の飛び入りたるが如き姿にて之を急に取らんとすれば益々深く入り込むの憂あり、宜しく他人に依賴し方法を用ゐて靜かに之を除かざる可からず、姉御の身上も亦之と同じく、何事も相當なる人に打委せ、決して自動的の行爲を取らざれば二年の中に幸運續々來るの兆有り。

△愛知縣の田舍女へ‖末長く家に止り、獨身生活をなさる積りにて、家の爲に、又兄上の爲に力を盡さる可し、此の心懸になられれば四五年の中に幸福向ひ來るなり。

△府下心配娘へ‖良人は多情なるが爲に、斯の如き始末になるので、敢て貴女を捨つるの意有るに非ず、然れば此際貴女は忍んで婉柔以て之に對し、良人をして本心に耻づる所あらしむ可し、日ならずして圓滿の結果に至るなり、然るに事茲に出ずして憤怒以て之に對せば益々自暴自棄の精神を起さしめ、不測の惡結果を來すや明かなり。

△松浪女子へ‖貴女の心を先方は解せざるの趣あり、故に之を棄ておかば遂に其の目的を達する能はず、早々正當なる媒妁人を以て婚約を結ばる可し、時遲るれば遲るゝ程事面白からざるなり。

△廣山野心生へ＝小舟に棹して大洋を渡らんとすの卦有り、目的を達する能はざるのみならず不測の災害竝び至る可し。

△初めて伺生へ＝子は引取り飽まで愛を以て盡さるゝを吉とすれども、之を嫡子とするは凶なり、貴女にして既往を咎めず、益々良人を敬愛せらるれば、男女二人の子ある可し、夢々隔意有る可からず。

△神戸の郷美子へ＝雌雄の禽鳥久しく籠中に在るの卦なり、然れば之を大空に放ちて一時別居せしめ、然る後相逢はゞ精力復活す可し、貴女も良人とも亦此卦に從はるれば三人の男女子生れ和氣藹々堂に滿つ可きなり。

△沖の小舟女へ＝慈悲忍耐の德を養うて世に處せらる可し、四五年の中に良家に再婚するを得、福祿次第に來るの象あり。

△〇進んで取るは凶、退いて守るは吉なるの卦見ゆ、故に在米國の青年との結婚面白からず、宜しく貴家と同業なる人と結婚せらる可し。

△長門の桂女へ＝大風起つて落花紛々たるの象有り大風の止む頃は花既に散りたる後なり、然れば御身が濡衣の乾く頃は先方既に獨身たらざるなり、宜しく早實業家に嫁せらるゝを得策とす。

△長崎すまい女へ＝姉上の志望に任せて裁縫敎師たらしむること甚だ可なり、何をか躊躇し何をか悶えんや。

△風鈴女史へ＝血族結婚は易道は言ふに及ばず、法律上道德上衞生上悉く不可なり、何ぞ改めて占ふの必要あらんや、斷然之を退けて他家へ嫁せらる可し、是れ孝なり是れ貞なり。

△浪しま女へ＝雜草叢生して靈草を蔽ふが如きの象あり、故に貴女は愼重の態度を以て婚を撰び、惡緣を退け、良緣を見落さぬやう注意せざる可からず、來年の春頃官海の人に良緣ある可し。

△夏の白糸女子へ＝貴女も良人も共に春秋に富めるの身、然れば共に奮發して學校の敎員とならる可し、是れ天の與ふる職にして聊か他心ある可からず。

△横濱の姫百合子へ＝前途悠々十年の間家に在りて母上及び弟妹に盡さんとの御心は實に尊きことゝ天も感じ玉ふ可し、其心だに撓まずば將來の福運期して待たる可きなり。

△豐前の白梅女へ＝職業は何職業に限らず神聖なるものなり、總理大臣敢て尊からず、土百姓敢て卑しからず、各々其職分を守りて務むるを尊しとす、然れば貴女も其の家業を神聖視して大に盡す心に改めらるれば、姑との間柄も圓滿に纏りて末益々目出度し、若し貴女にして此家を去り、他家に再縁せらるゝとせば、人と結婚するに非ずして職業と結婚するなり、天何ぞ幸福を與へんや、天何ぞ幸福を與へんや。

△青森縣すゞえ女へ＝貴女も亦前者と同じく、人と結婚せずして職業と結婚せんとし玉ふなり、斯の如き心を以て、縦ひ目的通りの人と結婚せらるゝとも、末必ず目出度からず、然れば高等師範卒業生は天の與へ玉ふ良人なりと心得らる可きなり。

△長崎縣の迷婦人へ＝滿二年の間獨身生活せらる可し、父上は必ず前者を迎ふる心にならるゝと同時に、前者も亦も面目を改めたる人となり、和氣藹々たる結果を來す可きなり。

△靜岡縣哀願女へ＝四敵だとか四惑だとかといふが如きは易道の本分を解せざる者の言なり、專科卒業生との婚を占ふに、琴瑟相合の卦なり、早々婚を結ばる可し。

△磯うき藻女へ＝上京甚だ面白からず、來年中に良縁來る可ければ家に在りて父母に孝養を盡さる可し更に憂うる所に非ず。

△山口縣むつ子へ＝忠臣は孝子の門より出づとは動かす可からざる金言なり、此の道理より推せば正妻に冷淡なれば他婦に對しても後日亦冷淡となるや明かなり、而して貴女は其の正妻あるを知ずして結婚せしは輕忽の罪の致す所とは言へ、既往は追ふ可からず、斷然離縁を請求して、善後の策を講せらる可し。

△いろは生へ＝眞に過を悔るは既に善良の人となれるなり、既に善良の人となれる上は母様の言に從ひ、堂々たる教育者となりて前過を償はる可し、自暴自棄は過を重ぬることになれば既往を忘れて益々勉勵せらるゝこと肝要なり。

福引當籤氏名披露（第二回）

六月廿七日より七月廿五日までの分

壹等

△懐中時計　福岡縣田川郡彦山村　高瀬キシ
△金帶止　伊豆伊東町　小島俊子
△節糸織　北海道根室町　成田ナル
△同　上　北海道根室町　大畑きく
△絹セル　栃木縣上都賀郡柏尾村　小杉さだ
△懐中時計　横濱青木町　高木定吉
△節糸織　福島縣相馬郡原町　山田數馬

貳等

△帶止　伊豫新居郡新居濱村　吉田榮子
△小柳繻子　伊豫宇和島町　樋口靜子
△新御召　廣島山口町　森カヨ
△絹張洋傘　佐賀縣藤津郡八本木村　光武きま子
△手風琴　門司高等小學校　小倉久代
△絹張洋傘　岡山縣都窪郡中庄村　森末喜惠

參等

靜岡　木村きわ▲東京　古川雅子▲東京　藤田テイ▲筑前　飯田梅▲靜岡　大山豐三▲三重　木村てふ▲根室　勝見二郎▲根室　中村のぶ▲芝罘　岩城糸枝▲大阪　鐵のぶ

四等

門司　堤ひさ子▲久留米　黑岩梅子▲仙臺　勝又みさほ▲新潟　品田ミヤ▲隱岐　小室シマ▲福岡　角ロリ▲佐賀　中村〆ケ▲愛媛　淺井男子

五等

▲京都　永島てふ▲京橋　平野ミヨ▲東京　阿部爲彌▲奈良　松田藤枝▲兵庫　先田みさを▲天鹽　平野千代子▲甲府　進藤清▲栃木　刑部チチ子▲茨木　菊地國三郎▲高知　淺井由卯

六等

大阪　上原フジ▲和歌山　楠山▲小樽　松山なみ▲釜山　池田寛逸▲山口　八谷ヒサ▲横濱　片岡みち▲神奈川　代田くに子▲豊科　横澤キン▲埼玉　飯野くに▲新潟　五十嵐たか▲上海　師富政記▲群馬　下城正子▲岡山　樋口八千代▲兵庫　若松昌夫▲羽後　榊田繁治▲群馬　小林榮太郎▲相模　成田保子▲廣島　朝倉節子▲茨城　渡邊ふく子

七等

東京　坂本セイ▲兵庫　今井多賀子▲旭川　渡邊英子▲大阪　橋本あい▲三重　伊藤久子▲山口　天野柳子▲伊勢　奥山サク▲大分　藤井ハナ▲大分　片切ツル▲島根　池本智海▲京都　鹽田紀久代▲岩手　奥野まき▲栃木　福田ふく▲岡山　森かと▲鳥取　坂本いゑ子▲北見　福井ゑい▲三重　水野まさ▲臺灣　宇野英福▲福岡　桑原かよ▲福岡　石橋キク▲高知　土居繁猪▲鹿兒島　中原カツ

八等

山口　細迫ミユキ▲岡山　神屋はま子▲石狩　山田切いし▲徳島　須見クスノ▲廣島　中野民子▲新潟　五十嵐▲若松　澤野ゆき▲羽州　上田キミ▲臺灣　松本松子▲宮崎　松本榮留子▲福岡　鵜飼テイ▲福岡　伊藤かつ子▲奈良　淺井鍬子▲新潟　新田久世



小説　何故

大塚楠緒子

一

おばあさんは、お春の連れて、今日一日博覽會を見物して來て、草臥れたので、戸締を嚴重にして、例よりも早く寢る事にした。

斯うして置く方が、泥棒の用心も火の用心も好いと言ふおばあさんが、例の通り、枕元の洋燈を、ふつと吹き消して仕舞ふと、六疊の部屋は眞暗に成つて、途端に厭な石油の臭が暗い中を這ひ廻る。

床を并べて寢るお春は、毎晩おばあさんが、ふつと火を消して仕舞ふ其時程、厭な事は無いと思ふ、襖の松かさの模樣も、十三あると、平常數へて置く天井板も、柱に張つてある煤けたお稻荷樣のお札も、隅の方の酉の町の熊手も、いちどきに、見馴れた座敷中の物品が、はつと思ふ間に見えなく成つて仕舞ふと同時に、息がふさがる樣に思ふ。

もし、生きた儘、棺桶に詰められたら、やつぱり此樣に暗くつて、此樣に息がふさがつて、斯ういふ心持が爲るだらうと思ふと、顏まで被さつて居る夜着が、棺桶の蓋のやうに思はれて、神經が興奮ると、氣味が惡くて、ぢつとしては居られぬので、夜着を除けて、暗がりの中へ顏を出すと、辛と、心細い薄明が目付かる、緣側の上の方から射す薄月の光が、薄く淡く障子

を白く見せてゐるのである。

身を延ばして洋燈を吹き消したおばあさんは、暮れゆく春の未だ冷々とする宵を、再び布團の中へ引きくるまりながら。

「お春ちやん、草臥れたかい。」と聲をかける。

「えゝ、隨分くたびれたわ。」とお春は、やつぱり障子の方を見て居る、その内に暗がりの怖い事は、いつか忘れて仕舞つて、見て來た博覽會を一心に考へ始める。辨天樣ん處へ橋が懸つて、辨天樣がちよつと何處だか分らなく成つた事や、水族館の人魚の、思つたより詰らなかつた事、觀覽車に乘つたら怖さうな事、白木屋の評判の美人、三越の元祿の着物、思ひ出せば種々ある中に。

「ねえ、おばあさん。」と呼ぶ。

「何だい。」と返事を爲ると。

「好かつたわねえ。」といふ。

「何がよ。」

「あの、お嫁樣の人形。」

「お嫁樣の人形。」と、おばあさんは、何氣なく只、口まねを爲る。

「高島屋から、出品したつていふ……そら、電氣がついて居たじや有りませんか、そら、ね、好かつたわねえ……」とお春は感心し切つたやうに。

「むゝ、むゝ。」とおばあさんは、好い加減な返事を爲て、千五百圓とあつた佛壇の事を考へる、金だか銀だか、ぴか／＼して、彼樣いふ中へ入る佛樣は、それこそ阿彌陀樣の側へ行かずとも極樂だ、生きて居る内は、何でも物好みの結構好きであつた、家の佛樣も彼樣いふ佛壇を買つて入れて上げたら、嘸かしお喜びだらうが、ちつとやそつと、貯金が有るにしたつても、まさか千五百圓じや、買つて上げる譯にも行かない、然れども彼樣いふ佛壇へ佛樣を入れて、朝晩にお線香を上げたりお花を上げたりしたら、嘸、後世が好いことだらう、と自分勝手な事を考へる。

お春は、又催促を爲る。

「ねえつてば、おばあさん。」

「何だよ、」

「あの人形よ、好かつたじや有りませんか、お嫁様の人形……」

「むゝ、むゝ、好かつたねえ、」と、口許りで、あの佛壇を誰れが買ふだらう、彼れを買ふんじや、餘程のお金持でなくつちや……とおばあさんは、佛壇の事ばかり。

「私、博覧會の内で、いちばん、あれが氣に入ッつちやつたわ、縮緬でせうか、好い着物を着て居たわね、何處かの家から、お嫁に來た處でせう、つのかくしつて物をして、裾を引いて……だけど、



此方の方で、御案内を爲てゐる人形も好かつたわねえ、何うぞ、此方へ、とか何とか言つて……好かつたわ、」お春の目の前には人形が並ぶ、擬たまゝ手を動かして、暗がりの中で、手まねを爲て語るのである。

おばあさんは耳だけ貸して心の中では、未だ佛壇の事を考へ續ける、千五百圓じや、隨分大した金額だと數へてみる。

「ねえ、おばあさん、好かつたわ、」

「むゝ、むゝ、好かつたねえ、」

「お嫁様といふものは、好いはねえ、彼様な好い着物を着て……ねえ、おばあさん、私もお嫁様てものに成

つて見たいわ、」
『お嫁さんてものに成つて見たい……』
不意と耳に入つたお春の言葉に、おばあさんは、はつと爲たので、お春の方へ寢返つたが、暗いからお春の顔は見えぬ。
『お前、お嫁さんに成りたいかへ、』
『え丶、だつても……』と、おばあさんの聲が、突然強く響いたので、何か惡い事でも言つたのかと、お春は無邪氣な聲を小さく。
『だつても……彼樣な着物が着て見たいわ、』
『お嫁なんぞに行かずとも、彼樣な着物なら、いくらでも今に拵へてあげる、』
『あら、さう、必定拵らへて下さいよ、』と叱られるのでもないと、嬉しく安心して。
『私の母樣も、あんな風をして、お嫁に往つたかしら、』とお春は獨言のやうに言つたが、おばあさんは返事を爲ぬ。
『好いわねえ、あの人形、好いわよ、ねえ、ほんとに、』と繰り返す聲が、だん／＼小さく消えて、お春はいつか、すや／＼と眠りに入る、その顔が見えたら、何樣にか罪の無い愛らしい美しい寢顔をしてゐたらう、お春は未だ十四である。
おばあさんは、千五百圓の佛壇の事も忘れて、可愛いお春の語つた言葉を繰返して、俄に胸安からぬ一夜を、悶え明した。

二

お春は髪結の家から髪を結つて歸つて來る、片手に櫛だとふを包んだ小さい風呂敷を持つて、蝶を匹田に出した紅地モスリンと、紫繻子との腹合せの帶を、きつちんと結んで細そりした肩には、未だ肩上が取つて有る、荒い縞の銘仙の綿入へ黑繻子の襟をかけて、黑に重なつて緋縮緬の襦袢の襟、その赤い襟から眞白な頸筋が拔け出て、髱も鬢も格好よく、膨脹んで、白たけ長の懸つた桃割れが、奇麗に結ひ上つて居る、顔は面長で生際の好い、眼元がぱつちりとした無邪氣なだ

けに、人形の樣にいつそ可愛らしい、おばあさんの手一つに育てられて奔走兒で、十四とは見えぬ程、姿は大きいが、全然で未だ子供氣で滿ちてゐる、あれで、子供氣が拔けたら、迷はさずとも、何樣にか人が迷はふと、世間の口は今から煩さい。

お春は、步き步き、ちよつと首を振つて見て。

「今日は根が少し下り過ぎたようだよ、あの髮結さんは、手が定まらないんだもの。」と考へながら、手を擧げては髷へ觸つて見、髱を弄つて見る、往來の人は、目に立つ美しい娘の通るのを、見詰め見返り爲て往くのを、髷でも不揃に成つて居るんじやないかしらと、お春は、きまり惡さうに、其度每に、袖で口を蓋ふては、打俯いて仕舞ふが、遣り過すと、又そつと手を擧げて、髷を弄つて見る。

向ふから奧樣と女中の二人連れが來る、摺れ違ひさま、女中は奧樣の袖を引つ張る、奧樣は點いて、お春を熟と見詰める、お春は。

「厭な人だ、必定、私の惡口を言ふんだよ、」と、忌々しげに遣り過して、振り返ると、奧樣の方でも、此方を振り返つて居るので、眞赤に成つて、もう髮の事も構はずに、小走りに急ぎ後から、驅けて來て不意に肩を敲く者がある、吃驚して、胸をどつきり爲せて、振り返つて見ると。

「お春ちやん、何處往つたの、」と朋友のお重が笑つて居る、お春はお重よりは三つ歲上で、老せて氣取つた樣子を爲る娘である。

「あら、お重さん、まあ、吃驚したじや有りませんか、强いわ、突然に……」

「だつてもさ、好い話が有るのよ……おや、お春ちやん、髮を結つて來たの、どれ、其方を向いて御覽なさい、やつぱり、新道のお信さん……」と、後を向かせて、ためつすがめつ色白の平顏を傾げて莞爾と、

「まあよく、出來たこと、」

お春は、手でちよつと髷を觸つて、

「好くはないわ、根が下つて氣味が惡いのよ、髷が片ちんばじや無くつて、」

「いゝえ、ちつとも然うじやあないわ、又貴女の事だもの、些少位、髷が何うだつて、人一倍好く見えるんだもの……もう、そりやあ、眞實に、好く似合つてるわ、容色の好い人は徳だわねえ、憎らしい、」と、並んで行くお春の脊中を輕く打つ。

お春は、何時でもお重さんは、其樣な事ばかり言ふと、煩さゝうな顔をして。

「厭よ、お重さんは、いつでも其樣なこと許り言つて……」

「それは然うと、ねえ、お春ちやん、今日是から歌舞伎座へ行かなくつて、勸進帳が好いつて言ふわ……今、貴女の家へ誘ひに行くところだつたのよ、」と、島田の髷の、つッと出て居る頸を延して、お重は、ちよつと衣紋をつくる。

「歌舞伎座……まあ、往きたいわねえ、」とお春は飛び立つやうに思ふ。

「だから、いらつしやいな、是から家へ歸つて、支度をして、然うして私の家へいらつしやいな、」

「是から、家へ歸つて、支度をして……」と、お春は考へてゐたが、おばあさんの許を受けなければ成らぬ事を思つて。

「だつても、おばあさんに聽いて見なくつちや、」

「おばあさんだつて、必定、好いと仰しやるに極まつてゐるわ、然うして紀之助さんも一緒よ……」と横を向いたお重の頰は、少し赤くなる。

「え、紀之助さんも一緒……」とお春は勇んで、『紀之助さんは、眞實に面白い方だわね、全體、男の方は、淡白して居て、私、好きだわ、」と威勢の好い、大きな聲を爲る。人通りの少ない横町へ入つたから、いゝ樣なものゝ、と、年上のお重は、後を振り返つて。

「お春ちやん、もつと小さい聲をなさいよ、人に聽かれると笑はれるじや有りませんか、」と言ふと。

「然う、」と、お春は首を縮める。

三

氣は歌舞伎座の舞臺に飛んで、拍子木が鳴る、幕が

明く、その勸進帳は何樣で有らうと、お重に別れて、

お春は、息を切らして、大急ぎで家へ歸つて來ると、

おばあさんは、小さいおばこの頭を搖つて、眼鏡を懸けて、明るい緣側に猫脊を曝して、お春の着古しのお召縮緬に、繼を當て居る。

只今、と聲をかけながら、お春は突然、おばあさんの正面へ廻つて、日の蔭を拵えて坐ると、おばあさんは首を上げて。

『是れ、お前さん、其處へ坐つちや暗いじやありませんか、』と言はれる、お春は早速橫の方へ膝りながら。



『ねえ、おばあさん、』と黑目勝の眼を輝かして、深い笑靨を入れて莞爾する、勝手から三毛の小猫が出て來て、にやあをと、お春の膝へ上がる。

『何ですよ、』とおばあさんは、結つて來たお春の髮の出來具合を眺める。

『途中でね、お重さんに逢つたのよ、』と小猫の咽を撫でながら。

『然うかい、』

『それでね、お重さんが、是から、歌舞伎座へ一緒に往らつしやいな、つて言ふの……』

『何うしませう……』と態と飛び立つ樣には言はず、

温順しく聴くと、おばあさんは存外氣受好く、つやつやと出來上つたお春の鬢の格好を、とみかうみ。

「鬢は好いが、前髪が少し、つまつた樣だね。」

と、熟と見守る。

お春は、前髪よりは勸進帳が氣になつて。

「ねえ、おばあさん、往つてもよくつて、」

と、おばあさんの顔を見る。

「お連れは、お重さんと……それから、何方……、」

と、おばあさんは悠々と問ふ。

「紀之助さんが往くんですつて……」と、お春は何氣なく答へると。

「紀之助さん……」と、おばあさんの眉は忽ち蹙つて、何か種々考へる樣子であつたが。

「まあ、お斷りを、お爲なさい、」と言はれる。

「あら、」と許可の出る事とばかり思つて居たお春は。頓に落膽して、膝から、猫も何も投り出して。

「でも、おばあさん、往きたいわ、勸進帳が好いつて言ふんですもの……」と身を捻る。

「勸進帳が好いつたつて何だつて……まあ、今度は止めにおし……」

と、おばあさんは、聴き入れさうにもなく、判然言つて、打俯いて、知らん顔を爲て、又繼物を始める。

お春は、常にない、おばあさんの無慈悲が怪しく怨めしく。

「おばあさん、何故よ、」と聴くと。

「お前も、もう、成長く成つたんだから、男の方なんぞと、お連にお成りで無い方が好い、」と靜かに言ふ。

「あら……」とお春は合點が行かぬ。

もう、お前も大きく成たんだから、男の方なんぞとは、お連れにお成りで無い方が好いつだつて、つひ十日ばかり前にも紀之助さんと淺草へ往つたんだのに、其時は、おばあさんは何とも言はなかつた癖に、十日許の内に、私が、然う俄に大きく成りはしまひし、私は、辛と未だ十四、又、成長くなると、何故紀の助さんと連れに成つては惡いので有らうと。

「じやあ、おばあさん、もう、是から、何處へも紀之助さんとは遊びに往つちや不可いの、」

「あゝ、不可ません、紀之助さんに限らず、もう、男の方とはお連れにお成りで無いが好い、」

と、おばあさんは、落ち付いて、言ひ放つ。

お春は、口惜しく腹が立つて、胸が詰つて涙が充滿、眼に溜る。

彼様見えても、紀之助さんと言ふ人は、剽輕な面白い人で、お朋友同士でお花見に往つたつても、紀之助さんが一緒で無い時は、面白く無い位なんだもの、彼樣な善い人を、何故、おばあさんは、其樣な事を言ふんであらうと。

『おばあさん、何故、男の方とお連れに成つちや不可ないの、』と、最一遍聴いて見る。

『何故でも、』とおばあさんは、せつせと針を動かす、猫は切りに勝色の御召縮緬の擴がつて居るおばあさんの膝に、ちよつかいを出す。

『何故でもたつて、何故よ、』とお春は自棄に成つて又聴くと。

『何故でもですよ、』と、煩さゝうに、おばあさんの聲は、鋭く、平生は眼尻に皺の寄る優しい眼を、少し怖く見張つて、眼鏡越に睨まれたので、飴をしやぶらされる樣なおばあさんも、立腹ると、それは〳〵怖いと言ふ事を知つてゐるお春は、縮み上つて、默つて仕舞つた。その内、おばあさんの命令で、女中が使に成つて、お重の家へ、歌舞伎座を斷りに往つて仕舞ふ。

お春は、長い袂を啣えて悄然と、自分の部屋へ泣きに行く、その裾へ戯れながら三毛もちよこ〳〵と従いて行く。

＊　＊　＊　＊　＊

お春は、其時から、何故、もう、是から男とは遊ばれないので有らうと、其疑が苦に成つて、苦に成つて、疑を解かう、解かうと、小さい胸で單獨で企だて始めた。

其度毎に、窓に寄りかゝつたり、柱へ凭つたり、今迄に無い擧動をして、茫然と、何か考へ込むのであつて、おばあさんは、お春の擧動を見るに付けて、花の蕾が、温かい春風に、一片一片と解れて往くやうに、日増に美しく美しく目に立つて行く容色好のお春を自慢さうに、それで滅多には、もう、男には奪はれまいと、一生懸命に守るのである。

おばあさんの娘で、お春の母のお妙といふ女は、身分違ひの華族の殿樣に戀はれて、若いとは言ひ條、寡婦のくせに、其時三歳のお春を、おばあさんの側へ、置いてきぼりに爲て、秘密と、自分勝手に嫁入をして、遠い殿樣の御國元へ、往つて仕舞つたのである。(完)



壽子の日記

鈴栄女史

若葉を辷る初夏の雨を含んだ夜風が冷々と吹くと、セルの單衣では寒いので、其上に御召のあらい羽織を引かけて、茫然と一人机の前に、不性らしい頰杖をつき意味も無くぢつと床の間の繪を見詰めて居る。今しがた九時を打つた許りだのに今夜に限つていやに物淋しい、丸で秋の夜とでも云ひたいやうな心地、皆んなは早寢したので恐らく私の部屋と女部屋位が起きて居るのだらうと思ふ。咳拂の聲さへ聞えないのである。

私の部屋と云ふのは二階の六疊で、床の間には父樣から拜借した歌麻呂の浮世繪。兄樣が何日も被入つては「露さんの部屋に歌麻呂の繪なんて勿體無くつて掛けちやア居られないよ、だから僕の方のと御交換へ」つて仰在つちやア屹度山水のいやな軸を持つて被入るから、私は拔からず、「否夫れには及びませんから」と斷然お斷りする。其度びに「露さんは馬鹿だなア、未だ繪に目が無いから氣の毒だよ。」なんて憎まれ口を叩いては、悄々と部屋に御歸りなさる時の後姿が私には又無く可笑しいので、屹度笑ひ崩れて了ふのでした。兄樣は餘程歌麻呂の畵が御好きで、何日かも父樣にお願ひなすつたらば、「お前のやうな書生の居間に那麼掛物を掛けて何になる？」つて仰在つたさうな、夫れを私がお願ひしたら一も二も無く、「ウム、よし〳〵」と仰在つたので、兄樣は內心一方ならず不平に思つて被在るとか、之は母樣が內密で私に話して下さつたので。だから兄樣は無論御存じない。御存じないから今でもこりずに私を釣らうとかゝつては、被在るけれども、私だつてさうですわ、兄樣に負けちやおらない、とまア威張つて居るのです。

床の間の左の壁に杜を掛けた十三絃が立てかけて、

掛花活には卯の花を投げ挿しにしてある。私は一體どつちかと云へば、古風な方が好きで、髪は高島田か桃割れ、音樂なら琴とか鼓と云ふ風なものが好きです。床の間に向つて、坐つて居る右手に本箱が二つ、中には、源氏、枕草子、伊勢。徒然草、と云ふ順序に、歌集や中には小說も二三冊は交つて居ます。

一體に古風な部屋の作りだと、何日も入る時に嬉しいやうな感じがする。本箱の上に寫眞立てが置いて有つて、夫れには、二十三四の氣取つた束髮の、紋御召の袷に繻珍の華派な帶をしめた、瘦せぎすの目鏡をかけた、一寸クリスチヤンとでも云ひたいやうな女の七分身が入れて有る。

壽子さんと云つてこれは私が姉さんのやうに思つて居た女ですよ。

風景畫の額が其上に掛つて居るのは、不調和のやうに感じる人もありませうが、これが亡き壽子さんの手に爲つた作と思へば、別に可笑しいなどと云ふ考へは起りません。

何日もは左から光線を取るやうにしてあつたのを、今日は少し向きを變へて、左に床の間、右に油畫と云ふ風に、窓に向つて坐つてみました。

机の上には書きかけの手紙の反古が散らかつて、その左手には空氣洋燈がアカ〱と目眩しい位です。友禪の坐蒲團に橫坐りした、私の影が、恰度後ろの派手な襖に斜めに大きく島田が映つて居ます。何の氣も無く、惡戲書きをした反古に目をつけると、「戀」と云ふ字許り書いてあるので自分乍ら恥かしくなりました。「まあ、厭だ。」と口に出して云つて、墨をつけるが早いか、滅茶〱に其上を塗つて了ふ。何をするのも氣乘がしなくつて、つまらないし、夫れかと云つて眠むたくもない。今夜のやうな時には死くなる前に、壽子さんが私に丈下すつた日記を讀んで見やうと思つて、卷繪の手箱から取り出しました。

逝なられてから今日で十四日目になる。早から此の日記を讀まうと思つてましたが、つい〱何だか見るのが勿體ないやうな、惜しいやうな氣がして今夜迄見

ずに居ましたのが、急に見たくなつて手にとりあげました。

初め壽子さんが私に手渡された時は可成厚かつたのを何かしら考へ乍ら、ビリ／＼と破かれたのが半分の餘もあつたので、今は大分薄くなり、而してその破りかけは何卒私の見て居る處で燒いて終つて下さい。と切に賴まれたので、惜しいとは思ひ乍らも燒いて了ひました。併し別に何處と云つて定めて破いたのでは無く、たゞ手當り次第に破いたので、大方中程だらうと思はれる。

亂次なく坐つて居たのが急にきちんと坐り直して、洋燈の傍近くで、開けてみる。

初めつから讀まずに、たゞ處々をパラ／＼と開けました。

と、其前にもう一度壽子さんの樣子を思ひ出さうと目を瞑つて見ました。纖細の娉婷とした、中丈で貌色は肺病だけに透き通る程白かつた。髮の毛の多い、大抵は束髮にして、目鏡越しに凝然と人の顏を見詰める時の目が私は一番氣に入つて居ました。

平生も乾度左の藥指に紅寶石の大きい指輪を嵌た。

私が行くとよく書室に獨り何にもせず、茫然と室を眺めて居られる事も少なくはなかつた。而して私を見ると乾度其眞白な顏を颯と赧くして、

「オヤ露子さん何日被在つて？」

と仰在るのに極つて居た。併し大抵は熱心に畵筆を持つて居られた。

年が若くつて、あの位有望な、而して奇麗な女が私を妹のやうに思つて下さるのは、私にとつて何より嬉しい事で有つたのです。

＊　＊　＊　＊　＊

二月十九日

「凡そ世の中に私程不滿らない身の上の者が又と有らうか。と考へる。世間では私を羨やむ人が有るかも知れない。夫れは私には優しい母樣が有る。家には多少の財産も有る。併し財産などは何になるのだらう。私は今迄全く唯名譽や位置にのみ憧がれて居たので、而

して自分は人生の若い歴史を彩る愛に缺けた、その淋しいもの、まあ色で云へば葡萄とでも云いたいやうな、じみな半生涯を送つて來たのである。

私の今迄と云ふ物は畫の外には何物も無かつた、而うして畫許りを熱心に學んで得た結果は、位置や空しき名許りである。何だか自分には高價な或る物を犠牲に供して此の不滿らぬ名を得たとしか思はれない。今日はからずも初子さんの御宅へ上つてつく〴〵然う感じた。初子さんは奇麗な夫人となられたのである。

亘(初子の良人)さんが種々と畫の話をなさつたが私は殆んど上の空で御返事をしてゐたら、お妹さん達の強いてのお望みで蓄音機が初まつた。

中でも私は「米山甚句」を甚麼に面白くきいたらう。好い聲で、私は身内の血が一時に凍つて了ふかと思ふ位に、息もつまるのかしらと自分でも疑ふ程に。暫くの間は身動もせずに聞いて居た。而うして夫れが終ると私は涙をハラ〳〵と膝に零した。

「何故お泣きなさるの?」

と氣遣かはしげに初子さんがきかれる。

「まア、何て云ふ事で御座いませう。私は餘程泣虫なんで御座いますよ、餘りいゝもんでしたからつひ、何日でも私然うなんで御座います、夫れに今日は別して……。」

「あら、那麼にお氣に召しまして?」

可愛らしい顔を傾けて被仰る。

「えゝ、もう。」と私は目を拭つた。すると亘さんが、

「一體、畫家、詩人と云ふ者は得てそう云ふ情に脆いと云ふのかも知らんがよく泣いたり笑つたりするんさ、人一倍感じが強いのでせう。はゝゝゝゝ。」

半分冷やかすやうな調子で云はれる。

「豈夫、那麼事は、ねえ壽子さん御氣に遊ばさないで下さい。良人の云ふ事なんぞお聞き遊ばすな、眞實に何を云ふか知れませんから。」

「何さ、別に惡い事はないぢやア無いか。」

と亘工學士はすましたもの。

「何でもよう御座います。」

昂然として見せた儘私の方を向いて、
「彼方へ參りませう、壽子さん、」
「はゝゝ到頭負けたものんだから逃げたな。」
「否、負けたんぢやア有りませんよ。」
と云ひ乍ら初子さんは立つて庭の敷石を飛び乍ら、離室の方へ被在る。奈何しても二十三とは見えぬ若々しさ。

私は匆々に宅へ歸つた。而うして畫室に入つてから畫かけの畫も何も破いて了ひたいやうな、何と無く胸が切なかつた。

肩掛を外すなり長椅子に倚つて凝然と考へると知らず〳〵涙がポロリ〳〵と零れる。

先刻の「米山甚句」は佳かつた。何て佳い聲だらうとつく〳〵考へる。私も寧ろあゝ云ふ者になれば好かつたと思ふ。生中に這麼畫なんか初めたので實に不滿らない。弱い體をして、（夫れに此頃は又少し不快いやうに思ふ。）夫れよりも此の短かい五十年を面白く唄つて暮す唄女の身が羨やましいやうに、自分も何故唄女にならなかつたかと口惜しく思ふ。

奈うせ一度は死ぬ身に、何の名譽が入るだらう、死んで了へば夫れ限りなもの、夫れよりも同じ暮して行くのなら、何も無い、唯本能を滿足させて夫れで事たるあゝ云ふ社會の人となりたかつた、と染々思つた。

而うして唯に淋しい氣が部屋中に滿ちたやうに覺えた。今度は何もする氣が出ないので、氣を紛らす爲に之から詩集を見やうと思ふ。』

まア這麼事を壽子さんは思つて被在つたのかしら、と思ひ乍ら又パラ〳〵と好い加減な處を開けて見ました。

二月卅日

『此の十日餘りは比較的快い方で、氣分もせい〳〵する。とつひ畫筆を取つて見たくなる。自分で自分が分らないと云ふのは今日此頃の私の心で……或る時は謙二さんを思つて堪らない程に胸苦しくなる。謙二さんは一體私に對して奈何云ふ考へを持つて居るのだらう。男としては氣の小さい方だから私が彼を愛して居

る事も知つて居やう。併し夫うかと云つて、敢て自分には或る愛人が有ると云ふ事も云ひ断れずに居るが、私は外の人から聞いた、謙二さんには戀人が有る。名を八重子と云つて私より五つ下の謙二さんにも五つ違ふ二十で、顔こそ見ないが大方美人だらうと想像する。何故だか自分にも分らないが、又美人で有つて欲しいやうな氣がする。

其癖時折謙二さんの話に夫れとなく八重子と云ふ人の事が出ると、私は奈何云ふものか、

「あゝ止さう、止さう、私は馬鹿だ。」



と思ふ心が湧く。然うすると自然に挙動が冷やかになるものと見えて、謙二さんは乾度心配して奈何したんです。病氣ですかと云つて夫れは〳〵氣を揉む。と私は、

「否、奈何もしやアしませんから、私には御心配なく何卒。」と突慳貪に云ひ切つて了ふ。するど謙二さんは

「貴女何かお氣に觸つたんですか。」と云ふ。私はさも輕蔑んだやうな語調で、

「否、何にも、何にも氣にさわるなんて、そんな事、何日も無いぢやア有りませんか。ほゝゝゝゝ」

燥いだ調子で笑ふと、

「那麼らいゝんですけれども……。」と默る。後では何故あゝ自分の心を見透かされるやうな事を云つたかと後悔するが其時はつひムラ〳〵として慳貪に云ふ癖が有る。爾うして長椅子に身を凭せて目をつぶつて了ふ。其間に謙さんは氣の毒な程悄氣返つて默つて、卓子の面を片手で頭を支へ乍ら見て居る。よく見ると泣いて居る事も度々ある。私は急に、

「謙さん何故那麼に厭な顏をして居るんです。サア私かヴアイオリンを彈くから貴方は貴方で勝手にお好きな尺八でもお吹きなさいナ。」

と云ふと術なげに振り仰いで。

「壽子さん貴女今夜は奈何なすつたんです。今頃からヴアイオリンなんぞお彈きなすつたら御宅の方が吃驚りなさるでせう。僕だつて尺八は持つてませんしゝますから。」

和めるやうに云ふ。

「貴方がお厭ならお止しなさい。私は私で好きですから勝手に彈んです。」

と止めるのも關はずにヴアイオリンを取つて矢鱈に彈いて見る。稍あつて、謙さんは立ち上つて、

「ヤ、大變に御邪魔致しました。貴女ももうお寐みになる時刻でせうから小母さんには御挨拶なしに歸ります。何れ又二三日内にお伺ひ致しますから。」

「……………」

私はヴアイオリンに餘念も無い樣を粧ふ。

「では失敬します。」

とすご〳〵角帽を持つて其儘一寸首を下げて扉を開け乍ら、一寸振り返つて暫く佇立んで居たが又思ひ返したらしく、靜かに閉めて軈て上草履の音も靜かに歸つて行く。

私は見ない振をして頻りに彈いて居たが、謙さんが歸つたと思ふ頃、突然に、イヤッと云ふ程にヴアイオリンの弓を床に叩きつけると、其儘椅子に身を埋めて思ふ樣泣いた。何の爲めの淚か……自分にも恐らく分らない。

一時間程經つたら、お寐みなすつた筈の母樣が被來

つて。

「壽さんや、もうお休みか。」

と扉をホト〳〵とおたゝきなさるので、

「否。未だで御座います。何卒御入り遊ばして。」と云つて居る内に、香水を濡めした半帕で一寸顔の邊りを拭ふて、亂れた着物を直す。

「ま、大變に洋燈が明い。壽さんは奈何かおしかえ。もう十一時近くでせうが。」

「つひ種々の事を考へてたもんですから。母様未だお寢み遊ばしませんの?」話を外す。

「寢かけたがね。お前の部屋で急にヴアイオリンの音がしたからつひ來て見たんだが。何かえ、謙さんはもうお歸りかえ。」

「はア先刻。母様はもうお寢み遊ばしたらうと申して御挨拶なしに歸りました。」

成丈母さまとは顔を合せないやうにして居る。

「オヤ〳〵弓が這麼處に落ちて。」

拾ひ乍らお笑ひなさる。私は極が惡いのでつひ、

「あら恐れ入ります。何日落ちたんだらう。」

後は口の内で云つて胡麻化して見る。

「今夜はもうお前お寢みがいゝよ。え壽さん。何日もより顔が大變に赧いよ。逆上せてやしないかい?」

「否、左程には思いませんが那麼で御座いますか、ちやア私も寢みますから母様もお寢み遊ばして……。」

「あゝ寢ますからね、お前もおやすみ。」

「は、直ぐに。」

と片付けに掛る。母様は夫れとは仰在らないが乾度私の樣子を變に思召しめして被在たのだらうと思ふと、極が惡いやら、つまらぬ事で母様に御心配を掛けた事を思ふと何となく濟まないやうな氣がして堪らない。

「ではお休みよ。」

と優しいお言葉を殘して彼方へ御立ちになる。後で私は淋しい灯火の下で之を認めた。

縱ひ一時にせよ、這麼事で母様に御心配を掛けたのは惡かつたとつく〳〵思ふ。

今夜のやうな氣が昂ぶつた時はなか〳〵に寢られな

い。併し母樣の御情けを思つて、床を延べる。」

日記の中程からパラリと一通の手紙が出た、封袋にも入れてなく、處々に消しが有つて、書は達筆で一寸男らしく見えるが、壽子さんの手蹟にまぎれもない。併し平生の壽子さんにしては筆も亂れ勝ちで、文も餘り整つては居ない。ざつと讀んで見る。

『涙に目の閉づる事多かりしため亂れし筆は御許し下され度し女氣の餘りに淺間しく狹きを御許し下さらば此文御覽の上何卒御燒き捨て下され度願ひ上げ候

今迄は斯る事申上ぐるは餘りに無禮なりと存じて扣へ居り候が今日はからずも母より御許樣を宅の養子にと申されしまゝこゝに一筆かき參らす次第にて候

一日の話より不圖御許樣と私との境遇似よりたりしため夫れよりは兄弟と申すも恥かしからぬ程に親しく日曜毎に御出で遊ばさるゝ其の日のみ待遠しく覺えて人に褒められしよりも御許樣の一言の方遙かに喜しく存じ候も今は仇となりて……——これ皆私の罪にては候が……御許樣の清き御心に對して私の心の卑しきを……私は最早永久に清き心には歸りがたく覺え候

御許樣私へは御話し遊ばされず候とも私は存じ居り候八重子樣の事何卒〳〵何日迄も變らずにと陰乍ら祈り居り候母の話に私も一時は嬉しさに胸躍り候らへども……何卒此事は御心配なきやう

たゞ〳〵に情無く覺ゆるは我母にて幼き時より母の手一つに育てられ今に至る迄母の心を安ぜし事なき私は不孝の子にて候

御許樣の事を申時の私の答へに母の樣子を思へばそゞろに涙ぐまれ申候

あゝ世にも不幸なるは我が母と私にて候御許樣も定めし御存じの事ならん私は此頃になりて彌彌病重く相成しよし醫師の言葉にて候去れど養生次第との事なれば之より成丈養生は致す考へなれ

ど……つく〴〵に此頃は世の味氣なさを考られ候暫く養生かた〴〵母と共に逗子邊りにても參る心組み故何卒夫れ迄に今一度御目に萴りたくと存じ候らへども最早や斯かる病にかゝりては誰も取り合ふ者之無きは當然の事にて候まゝ御許樣もお厭とならば強いてとは申さず私は最早や御許樣の友として交る程に清き心の者にては御座なく御許樣御いやとならば何日迄も御交際下されたしとは強いて申すにはあらず候まゝ何卒右のことよく御含み下さるやう御願ひ致し候亂筆御宥し下さることと存じ候

かしこ

三月廿三日

壽子

雨降る夜認む

謙二樣

くる〳〵と手紙を卷き納めて又日記を開く。

四月十三日

「可笑しい程に此頃は氣がいら〳〵して、物によく感じ易く激し易いと思ふ。況して今夜は猶更、蒸暑い晩なので、私は衝と立つて窓を啓け、椅子を持つて行つて片肱を窓に凭せて空を眺める。

今年は一體に櫻花が早く、昨日迄美事に咲いて居たのが、今夜は丸で雪のやうに絶間無く散る。上氣した顔には快い心地なので飽かずに空を見詰めて居ると、ボンヤリとした七日許りの月が向ふの松の間から弱い光りを投げて居る。星も情無さそうに瞬いて、何處からとも無しに佳い花の薫りがする。大方沈丁花が之も散り際の匂ひを此處迄送つて居るのだらうと思ふ。

春の風が雨でも呼ぶやうに少し烈しく吹くと、花は又パラ〳〵と何とも云へぬ風情に落花する。

「あゝもう花も散りて春も行つて……而して私も――何日かは死ぬんだらう……此世に於て唯一人の優しい母には何の樂もさせずに、唯、謙さんを思つて〳〵思ひ詰めて、限りない恨みを抱いて私は死んで行くのだらう……。」と思ふと恨めしいやうな、果敢ないや

うな、染々我身が厭になつて、馬鹿らしくなつて、堪へられなくなる。

　双の目には無論涙があつたらう。謙さんの寫眞をと思つて立ち上つた時には、手に冷たい雫がハラ〳〵とかゝつた。

　私は力が拔けたやうにヒヨロ〳〵と立つて、手箱の中から大切にした寫眞を取り出して見る。襟にSの字の着いた制服に制帽、總體に引締つた顔立の中に、一種人を引付けるやうな優みが有る。私は謙さんの性質も何も好い人だと思ふ程に却て腹立たしく覺えて、猶更に堪らなくなる。終ひには寫眞を床に投つて、突伏して了つた。而して、

「もしも私が此の苦しみを謙さんに囁やいたならば、彼は奈何するだらう……？無論煩悶するだらう。煩悶して〳〵上句の答へは、今迄の事に對して、あの氣の弱い人だもの、屹度承知するだらう。併し私は八重子さんの事を思へば何故だか厭な氣がして云い度くなくなる。八重子さんと云ふ人が有ると知り乍ら云ふとは餘りに淺間しい、而して却て煩悶させる許りだから、それよりは自分が一人で煩悶して居れば事は穏かに行くのだもの、ただ自分獨りの胸に秘して、決つして語るまい。」と此處迄考へたら何だか氣が遠くなつたやうな氣がした。

　稍や有つて何處からとも無しに尺八の音が、此靜かな春の夜の寂寞を破つて幽かに響いて來る。私は顔を上げてぢつと耳をすます。夢ではないかと思ふ。尺八の音は聞いて居る私の心を掻き亂す爲めに吹いてでも居るかのやうに、彌よ聞けと云はない許りに佳い音が冴えて聞えて來る。

　私はもう居ても立つても居られないやうに身悶しては突伏したり空を仰いだりして、幾度びか吐息を吐いて涙を零した。

　花吹雪が又さつと窓を打つて、私の肩や袖に止まるのも關はず、唯々此の身が此儘遠く〳〵誰も居ない島へでも運こばれゝば、甚麼に嬉しいだらう、などゝ取り止めもない思ひに頭が亂れて其儘何だかボウッとな

りたやうな氣がした。暫くして、

「壽子さん、もうお休みですか。」

と云つて扉を叩く人の聲に、私は丸で蘇生つた人のやうに俄に欣々して、

「否、」

と冴えた調子で答へて、其處に投つた寫眞を急いで懐へ入れて、散らかした部屋を片付けやうとする。

「ヤ、久濶く、相變らず御勉强ですね。恐れ入つたものだ。はゝゝゝ今度は何をお書きなさるのです？」

書きかけの木炭畫を覗かうとするので、

「不可ませんよ、之は眞の一寸慰みに書いて見た許りですから。」



自分にも可笑しい程語調が若返る。」

「いや結構ですね、貴女のやうに御熱心になすつたら、此の秋の展覽會には又評判になるでせう。」

と一寸お世辭を云はれたと思つても別に惡い氣持ではないから、

「又謙さんが……貴方はなか〳〵媚動てるのがお上手だから私のやうなお人好はつひ迂つかりと乘せられて了ひますから、何卒御手柔らかに。」と云つて首を下げて見せる。

「否、冗談ぢや無い。」

存外眞面目に云つて、何だか私の顔をちろ〳〵心配そ

うに見て居たが、
「壽子さんは今夜奈何かなさいましたか……大變にお目が赤いんです。泣いて被在つたんでは無いですか。」
「私が泣くつて？　まア那麽事誰がするもんですか。」
「併し實際目が眞赤ですよ。お陰しなすつても無益です。僕に出來る事なら何でも致ますから仰在つて御差支が無いのならば仰在つて下さいませんか。」
「云ひ度くつても無いものを……云ふ事が出來ないぢやア有りませんか。」
「眞實に……?!」
「噓言を云つて何になります？　貴方も無理な事を仰在いますね。」
私は強いて陰さうと思ふし、心の底では大にお世話とでも云つて遣りたい程に氣がいら〳〵して居るので語調もつい昂つて來る。
「でなければ結構ですが……。」
「まだ疑つて居るんですか。」
「否、決つして然う云ふ譯ぢやア無いんですが……。」

と云ひ乍ら卓子の上に置いて有つた、尺八を取り上げる。私は今迄氣がつかなかつたが少し窶れたやうに思はれる。
「オヤ持つて被在つたの、些少も知なかつた。」
「はゝゝ僕も此頃は大分精を出しますから少しは聞けるやうになつて來たんです。奈何です。え、斯うやつて今日のやうな晩に花の下を吹いて歩くなんてたしかに時的ですね。はゝゝ僕が現に然う云ふ事をやつて來たんで。此處等邊迄來たら貴女に御目に蒐りたくなつたもんですから這麽に更けたのに關はず上つたんです。」
云ひ譯らしく云つて尺八を半帕で丁寧に拭く。
「ちやア此邊を……？」
「え　然うです。」
「貴方ですか。私はまア佳いと思つて伺つてました、誰が風流男のすさびをぞと。」
「いや驚ろきますね。はゝゝ貴女に然う襃めて頂けば名譽です。」

と笑つては居るものゝ、内心何だか非常な落付かないやうな風が見える。乾度八重子さんとの結婚の申込みを、先方から酷く斷られたので斯う窶れたのだらう。併し私には丸で陰して有るので夫れを成丈見せまいとして、強いて可笑しくも無いのに無暗と笑つて紛らすのだ。と思ふと私は可哀想と云ふ念は何處へか行つて了つて、馬鹿らしいやうな氣になる。

「ぢやア一つ伺ひませうか。」

と云つた私の顏には恐らく冷やゝかな影が仄見えて居たのだらう。

「は？」

と云つた儘餘り氣乘のしない顏をして居る。

「貴方は何だか大變にお窶れなさつたぢやア有りませんか、お體でもお不快かつたんですか。」

一寸諷刺つて見る。

「え……?!」

と云つた謙さんの顏には僅かな紅が見えたが、直ぐに元の蒼白い色に返る、私の顏は乾度嫉妬で燃えて居たらうと恥かしくなる。謙さんは一寸狼狽しながら。

「體は丈夫なんですが、那麼に痩せましたか。」

と術無さうに云ふ。私は故意と、

「えゝ私は貴方が那麼お顏をして被在ると眞實に御病氣ぢやア無いかと氣になりますよ。」

「え、病氣つて云ふ程でも無いんですが。」

「ぢやア矢張りお惡いんですね？」

と意地惡くきく。

「併し御心配下さる程ぢやア無いんですから。」

「然う？　なら結構ですが。ぢやア尺八をお吹きなさいな。私は琴でも彈きますからね。」

「…………」

答へるのさへ苦しさうに下を向くので、私も一寸氣の毒に感じたから、言葉を切つて、前に女中が置いて行つた、珈琲の冷えたのをぐつと呑み干して優しく出る。

「此間からお話致さうと存じて居りましたがつい申上げませんでした。此度ね、私逗子の方に參りませうと思つて……。」

「貴女が逗子へ？　寫生にですか。」

と暢氣な事を云ふ。

「否、」と言葉を落して、

「體が段々衰弱する許りですから少し養生を致さうと思ふんです。夫れには却て這麼東京よりも逗子邊りの方が佳いと存じまして、奈何しても東京に居りますと種々な事が多う御座いましてね。少しの間でも向ふに參らうと思ひます。併し考へてみると奈うせ私のやうな者は生きてたつて死んだつて――別にさして惜しいと云ふ人も無いでせうし。奈うせ……。」

と云ひ掛けたが口を噤んで了つた。謙さんは何時か涙を含んで居たが、軈て、

「僕、何だか貴女が今夜は初めつから奈何かなさつたんだらうと思つて居たんです。平生の貴女の優しい處が無いんです。何日もの貴女とは大變な違ひです。何日もは畫の話をして下さるか、でなければもつと愉快な――那麼死ぬなんてとは仰在つたとも無いぢやア有りませんか。僕は貴女が那麼、死ぬなんて事を仰在ると實際奈何していゝか分らなくなります。何日もの貴女は希望に滿ちた活々したお顏をして被在るのに、今日は泣いて被在つたのでせう。幾等泣かないと仰在つても僕は疑ふんです。僕は失禮乍ら貴女を姉として貴んで而して誇として居るんです。併し貴女は僕のやうな者は、夫れは飽足らない處も多いでせうから何卒仰在つて、而して何日迄もお交際ひ下さい。」

と云つて半帕で目を押えた。

先は清い友情を以て私に對して居るのに、私はまア何と云ふ賤しい心になつたのかと、寧ろ恥かしくなつたので一寸其答に詰つたが。

「這麼つまらない私の樣なものでも夫う迄に思召めして下さるかと思ふと寧ろ勿體ないやうな、氣が致します。」

と負惜みらしく云つたが、何だか馬鹿げた調子で云つたと思ふと可笑しくなつて、くす〳〵と笑つた。謙さんは無論眞面目で聞いて居た。私は心の苦しみを紛らす爲めに故意と茶化すやうな語調で云つて見たが、心

苦しいので座に居ても立つても居られないやうな、もう私の心は凡ての望みを失つて了つて、茫然と椅子に倚つて居た。

「壽子さん貴女實際然う思つて下さるのならば僕は滿足です。何卒何日迄も御交際ひ下さるのでせう？併し何だか今日のやうな御様子をなさると僕は堪らない程に情無く感じるのです。而うすると僕はもう貴女に見捨てられやしないかと思ふんです。」

「奈何致しまして、見捨てるなんて仰在つちやァ困ります。」堅苦しく云つて吐息を吐いた。



「屹度ですね。」

「はア、死ぬ迄は……。」と云つて目元で笑つて見せる。

謙さんは一寸心細と云つた風に俯向いて居る。奈何みても大學で理科なぞをやつて居るとは見えない。高々新體詩でも少し噛つて居る氣の弱い到底今のやうな生存競爭の烈しい時代には生きても居られなさゝうな、人に見える。一體が女性的な男だからでも有らうが、私から見ると平生の調子が妙に哀れつぽく可哀想に見えて堪らないんだ、而うし

て亦更らつく〲と謙さんの顏や樣子に目を付けると可憐らしくつて、何卒して私が一生懸命にして八重子さんとの間も旨く行くやうに、此人を喜ばせて遣り度いやうな感じが胸をついて湧いて來る。而して此刹那私が彼を見た目の内には、恐らく優しみが滿ちて居たらうと考へる。

「僕は今夜程氣持の佳い晩は無いんです。」

と云つて活々した目付を私に向ける。

「私だつて……。」と私の心は實際自分でも神々しい心で、決して穢い野心の無いのを誇るのであつた。

「では餘り遲くなりますから。」と立ち上る。

「ぢやアあの私が逗子へ參ります前にもう一度御目に蒐れないでせうか。」

「何日頃お出でになるんです？」

「大抵二十日過ぎに。」

「では乾度御邪魔に出ます。」

「ぢやあ御待ち致してますから——併し何だかもう御目に蒐れないやうな氣がして……之が御別れになるのぢや無いかと思はれます。まア何卒御體を御大切に。私は譬ひ離れて居りましても貴方の御幸福許りを祈つて居ります。又夫れより外に樂しみのない體で御座いますから……。」

鬪子が自ら沈むのを強いて笑顏に直して、

「誠に失禮しました。又何卒。」

「は、近日内に伺います。」

と云つて別れを告げた。

後で私は一人長椅子に倚つて居たら、何となく胸苦しくなつたので、水でもと思つて、衝と立ち上ると、其儘又椅子の上に倒れた。

程經て母樣が被在つたら、私は夥だしく略血して、氣絶して居たと云ふ。

此日記は稍や心地快くなつてから床の中で認めたので。二日かゝつた」

四月廿二日

「白馬會の秋季展覽會が展かれてから凡そ十日程の後或る新聞が大變に私の作を褒めて呉れたので、夫れか

らと人が傳へて可成の好評で有つた某る日の事。露子さんが被在つて是非一緒にと勸められたので止むを得ず、行くと、私の畫の前に許り人が大勢居るので、私は厚面しいやうに覺えたので、露子さんの手を取つた儘立ち竦んで居ると、突然に後から肩を叩かれたので振り返ると謙さんが立つて居る。其後ろには八重子さんも居る。私ははつとして俯向くと思ふと、途端に襖の開く音がして、私は夢から醒めた。入つて來たのは露子さんで、其美しい瞳は物思はしげに私に注そがれて居た。

「些少も知らなかつて、よく寐てたでせう。」

「えゝよくお寢んで被在つたからお起しするのも惡いと思つて。」

と蒲團に近くすり寄る。冷たいやうな香水の薫りが芬とする。

「御氣分は如何？」

「えゝ難有う。皆様に御心配をおかけする許りで、自分では早く〳〵と思つて居るんですが何だか些少も捗捗しく行かなくつて嫌になつて了ひますよ。」

「那麼にあせつちやア不可ないわ。貴女が餘りいらいらなさるからよ、もつと氣長く遊ばさなければ不可ませんよ。」

「私ね、今馬鹿な夢みて……。」と力無く云つて片手を蒲團の上へ乘せて見て、

「痩せてねえ。露子さん」

「元から貴女は然うよ、私なんか貴女のやうになりたいわ。眞白で奇麗よ。」

私の手をぢつと握つて莞爾なさる。

「靑いんですわ。丸で幽靈のやうよ。」

「厭だ……。」と美しい眉を顰める。

「此處迄書きかけたれども氣分惡いために筆を止む」

五月三日

『宵の内の洋燈が有明行燈に變つて、白衣の看護婦は少し居座を崩して、雜誌を顔にあてたまゝ、壁に倚りかゝつてゐた。

私は不圖目覺めると、寂しい靜かな丸で雪の降る夜の

やうな氣がした。斯う云ふ晩は私の一番恐ろしく思ふので、わけても恐ろしく感ずる妄想が容赦なく攻めて來る。

自分は一體何日死ぬのだらう……？と考へ出した。屹度近い内に死ぬに違ひない。もしも自分が此儘死んだらば……と思ふとつく／＼「死」と云ふ事が空恐ろしく感じる。

「奈何しても死にたくない。」と口に出して迄云つた。併し奈何しても自分は屹度近い内に死ぬのだらう。

謙さんは自分が床についてから、五度びとか見舞に來たが、一度も逢はなかつた。

何故逢はなかつたのだらう……？と考へて見る。母樣が斷はられたのかしら？　又私の部屋に入るのが厭で唯門迄見舞として來たのだらうか、奈何して逢へなかつたのだらう、と口惜しく思ふ。

凝然と上向きに寢て、種々な形になつて居る天井の雨漏を見るとも無く目をつけて居ると、氣のせいかしら、何處からとも無く笛の音が聞える。私は染々謙さんに一目でいゝから逢ひたいと思つた。

逢つて……逢つて死に度いと思つた。奈うせ近い内に死ぬ身の……あゝ何故あの花の夜に死なゝかつたらうと思ふ。奈何せ死ぬならば時候の佳い時に死にたいと考へる。

時は夏の――夜に限る。涼しい風に木の葉の神秘的な囁やきを聞き乍ら、月は春の朧月のやうな、星の光も弱い方がいゝ、露けく靜かに更けて行く夜に、花の薫りが何處からとも無く通ふ。花は百合に限る。

地虫の聲が幽かに聞える外は寂然とした時に、宅の人は一人として咳さへしないやうな靜かな時に、其寂寞を破りて、幽かに／＼尺八の音が有つて欲しい。而して私は其音をきゝ乍ら、母樣と露子さんとの手を取つて、笑ひ乍ら息を引取つたら甚麽にいゝだらう。嬉しからうと思つた。何卒然うしたい。而して其尺八は謙さんに吹いて貰ひたい。私が此の世に於て唯一つの望みとならば豈夫に辭みもしまい。私は夫れを聞きつつ私の書室で永い眠りにつく。と考へて見ると何とな

く淋しい——と云ふよりは寒いと云ひたいやうな情ない感じが染々身に迫るのを覺えた。而して唯譯も無く涙が止度なく零れるのを禁め得なかつた。』

日記は此處に筆を擱いて、其れよりは醫師が筆持つ事を許さなかつたとして、「完」と書いてあつた。

一代の天才畫家として人々に惜まれた壽子さんの身にも斯う云ふ哀史が有らうとは私も夢にだに想像しなかつた事だ。

讀み終つて私は唯譯も無く涙が零れた。私は前の窓を啓けて、中空にかゝつた幽かな月の光を浴びる。見下す庭も唯夢のやうに淡い。私は凝と動かずに居ると尺八の音が幽かに聞える。

壽子さんがお死りなさる時に、想像したやうな初夏の夜では無かつたが……時は八時頃とかきく。謙二さんが尺八を吹いて聞かしたであらうか。私は壽子さんの姿を心に描いて、月を見詰める。尺八の音は今度明瞭と聞えて來る。

豈夫に謙二さんの慰びでも有るまいが……。（完）

八月號記事概要

九月五日發行

來月の誌上には奇拔な懸賞の繪さがしがあります

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内｛定刊數……十二册　增刊四回…一、四、七、十月價格同一

郵税　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	五十八錢	五十錢	四十二錢
半頁（十二行）	二十圓	十七圓	十四圓五十錢	十二圓
一頁（六十四行）	四十圓	三十三圓	二十八圓	二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●諸目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十年八月五日發行　第七卷第拾壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

香油

八千代油

煉すれ油

油 びん付

本舗

東京市日本橋區堀留町

井筒屋香油店

夏季衛生

衣服の清潔は

登録商標



代價は……貳錢五厘より拾五錢まで

玉川は（殺菌力に富むでゐます衛生上最必要の品です

玉川は（經濟上德用です些少の粉で何枚も洗へます

玉川は（絹毛織物綿布等を洗つて地質がいたみません

玉川は（手があれさゝくれの出來る心配がありません

玉川は（石鹸こ違ひておちがよいから汚が遲ふございます

玉川は（洗ふに容易で奇麗になり手間がかゝりません

東京日本橋區本町三丁目（電本一七九四）

發賣元 合名會社 玉屋商店支店

黴菌の豫防也

女（後付の一）

文學士林森太郎著

日本文學史

總說
第一期……太古の文學
◎總說◎歌謠◎散文
第二期……奈良朝の文學
◎總說◎歌謠◎散文◎古事記、風土記付氏文、宣命
第三期……平安朝の文學
◎總說◎歌謠◎六歌仙、勅撰集、神樂歌、催馬樂歌、朗詠、今樣◎散文◎物語、紀行、日記草紙、雜史
第四期……鎌倉時代の文學
◎總說◎歌謠◎勅撰集、歌道の門閥、謠ひ物◎散文◎軍記、雜誌、紀行、日記、隨筆、物語
第五期……室町時代の文學
◎總說◎歌謠◎和歌、連歌、謠曲、狂言◎散文◎隨筆、軍記、雜史、御伽草紙、舞の詞
第六期……江戶時代の文學
◎總說◎歌謠◎和歌、狂歌、俳諧、狂句、戯曲、脚本◎散文◎和漢混淆文、雅文、俳文、狂文、小說

文學士橋本忠夫著

世界文學史

第一編 太古文學
第一章……東洋文學◎太古文學の槪觀◎支那文學◎印度文學ライン民族の文學◎希伯來文學
第二章 歐羅巴文學◎希臘文學◎羅馬文學
第二編 中世文學
第一章……中世人文と基督教◎民族移轉と基督教の傳播◎僧侶の詩歌◎非基督教的神話及傳說◎宗教劇の發達◎亞剌比亞人文の影響
第二章……騎士と詩歌◎騎士文學の發生◎プロヴンス文學◎西班牙騎士の詩歌◎北方佛蘭西の詩歌◎獨逸騎士の詩歌◎騎士詩歌の衰頽
第三編 近世文學
第一章……新舊人文の對峙
第二章……十五世紀の各國文學◎以、獨、佛、英
第三章……宗教革命時代◎文藝復興と宗教革命◎以、獨、佛、西、英、文學スラヴ文學
第四章……反宗教革命時代◎教會派の反革命運動◎以、西、衛、文學◎佛蘭英文學と反革命
第五章……啓蒙時代◎科學の勃興、文學の衰頽◎以太利亞文學◎獨逸文學◎和蘭陀文學◎英國文學

文學士栗原基 文學士藤澤周次 共編

英國文學史

第一編…上古文學…◎アングロサクソン人種◎ノルマン征服以前の文學◎ノルマン征服以後の文學
第二編ミチヨーサー及び其時代…◎ジエツフレーチヨーサー及び同時代の詩歌◎チヨーサー時代の散文◎戯曲の起源
第三編…十五世紀の文學…◎製糸術印刷術并びに文藝復興◎十五世紀の散文◎蘇格蘭土の文學、
第四編…エリザベス朝の文學…◎エリサベス朝の準備時代◎エリザベス時代の散文◎エリザベス時代の詩歌◎エリザベス朝の戯曲一、沙翁以前
第五編…◎十七世紀の文學…◎內亂時代の詩歌◎內亂時代の散文◎復位期の詩歌及び戯曲◎復位朝の散文
第六編…十八世紀の文學…◎尙古時代の詩歌◎尙古時代の散文◎ジヨンソン博士時代の散文◎新派小說の發達◎ジヨンソン時代の詩歌
第七編…十九世紀の文學…◎總論◎ヴヰクトリア朝以前の詩歌◎ヴヰクトリア朝の詩歌◎十九世紀の散文◎十九世紀の小說

文學士笹川種郎著

支那文學史

總說
第一期 春秋以前の文學
第二期 春秋戰國時代の文學
第三期 兩漢文學
第四期 魏晉及南北朝の文學
第五期 唐朝文學
第六期 宋朝文學
第七期 金元の文學
第八期 明朝文學
第九期 清朝文學

文學士大町桂月著

日本文章史

第一 總論
文章と人格以下日本國民性情の美迄十三項

第二 上古の文章
上古の日本國民以下耳に訴ふる文迄卅五項

第三 平安朝の文章
平安朝の文章の種類以下平安朝の末の文章迄四十一項

第四 鎌倉時代の文章
殺闘世と文章以下日蓮の文章迄卅九項

第五 室町時代の文章
五山文學以下蓮如上人の御文章迄廿項

第六 江戸時代の文章
江戸前半の漢字者より以下江戸見氣象と文章迄六十三項

第七 結論
明治の前半以下教育勅語迄廿七項

文學士久保得二著

日本儒學史

第一編……漢學講習時代
●應神以來漢籍傳來の有無●漢學講習初期の概況●隋唐の交通●大寶以後學政の一班●奈良朝の儒家●吉備眞備●王朝學風の盛衰●菅氏●江家●清原賴業●

第二編……宋學輸入時代(上)……五山時代
●五山時代の學風●朱子學の傳來●(上)山内●虎關●中巖●玄慧●夢窓●義堂●夢巖●岐陽●一慶●惟肖●景徐●蘭坡●桂悟●(下)山外●朝廷儒者●金澤文庫●足利學校●

第三編……宋學輸入時代(下)……戰國時代
●戰國時代の學風●桂庵●桂門の英俊●(上)日薩儒學●舜田●島津日新齋●月渚●一翁●黃友賢●文之●如竹●藤原惺窩の南航●(下)南學●南村梅軒●南軒門下及び三叟●谷時中●南學の流布及び革造

餘論 慶長の文藝復興と朝府學術の一班

附錄 五山戰國儒學傳統略表

文學士岡田正美編

日本文典

上下全二冊(各冊定價同し)

上卷

第一章 言語
第二章 聲音韻
第三章 文字
第四章 音便
第五章 假名遣
第六章 單語
第七章 構造、本原、由來、
第八章 名詞
第九章 代名詞
第十章 數詞
第十一章 用言

下卷

第十二章 第十三章 第十四章 第十五章 第十六章 第十七章 第十八章 第十九章 第二十章 第廿一章 第廿二章 第廿三章 第廿四章 第廿五章 第廿六章 第廿七章

助動詞 弖爾遠波 副詞 接續詞 感動詞 語 單語其他 文 主語其他 主節屬節其他 聯構文挿入 文 單文復文其他 正序法其他 冠辭枕詞 序詞 解剖法 文法語法修辭法

文學士鈴木暢幸著

日本口語文典

總說

第一篇 聲音
▲母韻▲子音▲拗音▲濁音▲撥音▲促音▲擊音 轉訛

第二篇 單語
▲名詞▲代名詞▲數詞▲形容詞▲動詞▲助動詞▲副詞▲接續詞▲感歎詞▲辭

第三篇 文章
▲主部▲述部▲復文▲重文▲要部以外の助辭▲獨立部▲各部各語の順序▲各部の轉換▲各部の省略▲文章の品位

女(後付の三)

文學博士 高山林次郎編著

近世美學

上編……美學史一斑

第一章……緒言
美學の名稱、外五項

第二章……美學史の概見
希臘人の美學思想、外十三項

下編……近世美學

第三章……キルヒマン氏の美學
美の概念、外五項

第四章……ハルトマン氏の美學
●第一節美的假象論
●第二節美の具象階級
●第三節美の種類
●第四節人生及び宇宙に於ける美の位置
●第五節ハルトマン氏の假象論の由來

第五章……スペンセル氏及びグラントアルレン氏
●第一節スペンセル氏の進化論的美學
●第二節グラントアルレン氏の生理的美學

第六章……マーシャル氏の快樂論的美學
序言及び古來學說の短評外四項

文學士 太田善男

文學概論

第一章……藝術とは何ぞや

第二章……藝術の組成

第三章……文學の解說
△文學の意義△文學の特質△文學の要素△描寫と其の態度△文學と科學との交涉△文學の分類

第四章……詩とは何ぞや
△詩の意義△詩想論△詩形論△律格論△詩の分類

第五章……吟式詩
△叙事詩△抒情詩△劇詩

第六章……讀式詩
△叙事文△抒情文△小說

第七章……雜文學

博士マクス、ミユラー原著
文學博士金澤庄三郎
後藤朝太郎譯

言語學

上下全二册（各册定價同じ）

上卷

第一章 言語學の形而下學的方面
第二章 言語の發達に矛盾せる諸說
第三章 經驗期
第四章 分類期
第五章 梵語の發見
第六章 印度以外に知られたる梵語資料
第七章 言語の系統的分類

下卷

第八章 セミテイック語族
第九章 言語の分解
第十章 形態的分類
第十一章 ウラル・アルタイック語族
第十二章 雜種の言語
第十三章 言語同一起源論
第十四章 理論期

文學士 有馬祐政譯

藝術論

第一章……緒論
第二章……藝術の問題
第三章……美
第四章……藝術と美との區劃
第五章……藝術の本務
第六章……眞藝術
第七章……僞藝術
第八章……精選せられたる藝術
第九章……藝術癈頽の結果、其一藝術材料の減退
第十章……藝術癈頽の結果、其二難解文の賞翫
第十一章……藝術癈頽の結果、其三藝術の贋造
第十二章……職業的藝術批評及び藝術教育、藝術贋造の上に及ぼす此等の勢力
第十三章……藝術贋造の完全なる典型たるワグチルの作品
第十四章……眞藝術と其贋造より判別するの困難
第十五章……藝術の普及、眞藝術の標徵
第十六章……善藝術と惡藝術
第十七章……藝術惡趣の結果
第十八章……藝術革正の可能
第十九章……當に來るべき藝術
第二十章……結論

女（後の付四）

文學士 小川銀次郎 著

世界美術史

上下全二册（各册定價同し）

上卷

下卷

文學士 小川銀次郎 編

近世美術史

文學士 石倉小三郎 著

西洋音樂史

仙臺醫學專門學校教授 須田勝三郎 著

衛生化學

女（後付の五）

理學士　龜高德平君著

有機化學

總論　有機化合物ノ成分及ビ分析法◎分析結果ヨリ實驗式ノ計算◎分子量ノ測定◎有機化合物ノ構造◎有機化合物ノ分類

第一編　脂肪族化合物

飽和炭化水素◎構造及異性體◎あるこーる類◎あるこーるノ異性體及其命名法◎酸類◎脂肪酸◎誘導體◎脂肪族ノ二鹽基性ノおきし酸(外百數十項)

第二編　芳香族化合物

◎石炭たーるノ蒸溜及ビべんぜん◎芳香族化合物ノ特性◎石炭酸◎えーてる類◎あみん類◎鹽基類◎安息酸及ビ其同族體◎多鹽基性酸類◎縮合べんぜん環チ有スル化合物◎雜環狀化合物◎べんぜん核ト雜環狀核トノ縮合體◎あるかろいど類◎てるぺん類及ビ樟腦類◎外百數十項

附錄　有機化合物ノ物理的性質ト其成分及構造トノ關係

理學士　眞島利行著

無機化學

第一編　化學通論　第一章緒論
第二章　化學量の定律、化合量
第三章　氣體の法則及其比重
第四章　氣體化合の定律規定量と化合量の關係
第五章　固體の比熱の定律　第六章溶液
第七章　變則蒸氣比重及鹽類水溶液の特性
第八章　化合物の理論　第九章週期律
第十章　熱化學　第十一章化學力學
第十二章　電離

第二編　無機化學
第一章　元素其分類並に單體の一般製法
第二章　單體の製法并に性質
第三章　無機化合物の分類一般製法
第四章　ハロゲンと他の元素との化合物
第五章　酸化物及硫化物(同續き)
第六章　酸化物及硫化物(續き)第七章(同續き)
第八章　(同續き)第九章硼化物、炭化物及硅化物
シヤン化物—窒化物燐化物、砒化物及アムチモン化物—合金アマルガム
第十章　光化學

理學士　福井政一編

普通物理學

上卷

總論●第一編　運動學及質點力學……第一章質點の運動◎第二章運動の原前◎第三章重力◎第四章求心運動○第二編　剛體力學……第一章剛體の回轉運動○第二章剛體に働く力○第三章器械○第四章仕事○第五章振子○第六章球體間の引力●第三編　物體論……第一章物體の性質及組識○第二章彈性○第三章固體の分子現象○第四章液體の分子現象○第五章氣作の分子現象●第四編　流體力學……第一章壓力の傳達○第二章アルサメブスノ原理第三章密度の測定○第四章氣體の壓力○第五章ポンプ●第五編　波動論……●第六編　光學論……第一章總論○第二章光の反射及鏡○第三章屈折○第四章光學上の諸器械○第五章光の干涉○第七章復屈折○第八章光の吸收及分散○第九章偏り○第十章偏光の干涉○第十一章回轉偏り

理學士　福井政一編

普通物理學

下卷

●第六編　音響學……第一章音響學總論○第二章諸物體の振動○第三章空氣の振動○第四章液體及固體の振動○第五章音樂に關する定理○第六章音響に關する機械●第七編　磁氣學……第一章磁石の性質○第二章磁氣に關する諸量○第三章磁氣ジエル○第四章磁氣の感應○第五章磁氣の測定及諸器械○第六章地球の磁氣●第八編　靜電氣學……第一章摩擦電氣と感應電氣○第二章電氣に關する諸法則○第三章傳導體に關する理論○第四章放電の種類○第五章空氣に於ける電氣○第六章氣に要する諸器械●第九編　動電氣學……○第一章緒論○第二章抵抗及抵抗により生ずる熱量○第三章接觸電動力及熱電流○第四章化學的作用に依れる電流○第五章傳導體に於ける傳導○第六章抵抗電動力等の測定●第十編　電磁氣學……第一章電流を作る磁場○第二章電流相互の關係○第三章電磁氣に於ける誘導器械○第四章電流感應○第五章應用の諸器械●第十一編　電氣波動論……○第一章電氣の單位○第二章電氣量のヂメンション○第三章光の電磁氣論及電氣の振動○第四章電體中の放電●第十二編　熱學……○第一章概論第二章膨脹

特製五十五錢 郵税拾錢 **博文館發行 帝國百科全書中理科書類** 並製四拾錢 郵税八錢

理學士 岡田武松著

近世氣象學

緒論

第一編 ▲氣温▲地温▲水温

第一章太陽、土地及び空氣の輻射●第二章氣温▲第三章地温▲第四章水温

第二編 ▲氣壓及び風

第一章氣壓▲第二章風

第三編 ▲濕氣

第一章蒸發及び濕度▲第二章降水

第四編 ▲光の現象

第一章天空の色▲第二章光環及び暈▲第三章虹

第五編 ▲空中電氣

第六編 ▲天氣

第一章序說▲第二章低氣壓及び高氣壓▲第三章雷雨▲第四章龍卷及「トルチード」▲第五章颪▲第六章天氣豫報●附錄二十三頁

理學士 一戸直藏著

高等天文學

第一章 星の日週運動及坐標

第二章 球面三角法

第三章 坐標間の關係

第四章 地球の形狀及大さ

第五章 視差

第六章 濛氣差

第七章

第八章 太陽の黄道運動

第九章 太陽の隋圓運動

第十章 地球の運動及之に伴ふ諸現象

第十一章 時

第十二章 惑星(其一)

第十三章 惑星(其二)

第十四章 月

第十五章 太陽

第十六章 食

第十七章 萬有引力

第十八章 歲差及章動

第十九章 光行差及年通視差

第二十章 太陽の距離

第廿一章 天體暦

第二十二章 時の測定法

第二十三章 緯度の測定法

第二十四章 經度の測定法

第二十五章 方位角の測定法

理學士 須藤傳治郎著

星學

第一篇 緒論

第一章 天體と地球の關係 第二章 地球の天に對する關係 第三章 星學上に必要なる諸器械 第四章 地球の運動 第五章 諸惑星の運動論 第六章 月の運動を論ず 第七章 月蝕及び日蝕 第八章 時を論ず 第九章 地球より各天體に至る距離の測法 第十章 天體の比重及び質量 第十一章 光の屈折反射及び「アベラション」及び其他必要なる誤差率

第二篇

第一章 太陽系統の構造を論ず 第二章 太陽 第三章 内惑星(水星金星)を論ず 第四章 地球 第五章 月 第六章 火星 第七章 小惑星 第八章 木星及び其衛星 第九章 土星及び其系統 第十章 天王星及其衛星 第十一章 海王星 第十二章 流星 第十三章 彗星 總論 第一章 星宿及等級 第二章 變光星及一時の恒星 第三章 二重星及多重星の性質 第四章 星色を論ず 第五章 固有運動 第六章 星群 第七章 火雲星 第八章 恒星及火雲星の分光的研究 第九章 火雲星說

仙臺醫學專門學校教授 須田勝三郎著

應用定量分拆

●第一章 總論 化學用天秤及琺瑯◎比重檢定法◎溶融檢定法◎沸騰點檢定法◎固體溶解度の檢定◎分析試料の準備◎乾燥及水分定量◎溶解◎蒸發◎割温蒸餾◎沈澱◎傾寫及濾過◎沈澱の織的◎定量濾紙の灰分檢定◎白金坩堝及白金皿の使用に關する注意◎分析操作に關する一般の注意●第二章 重量分析法◎陽イオン◎鐵◎加爾叟謨◎拔留謨◎銀◎鉛◎亞鉛◎アルミニウム◎クローム◎満俺◎麻倔涅叟謨◎銅◎水銀◎安知門◎蒼鉛◎錫◎ニツケル◎コバルト◎加僂謨◎安母尼亞◎陰イオン◎クロール◎ブローム及沃度◎硫酸◎燐酸◎亞砒酸◎硅酸◎硝酸◎炭酸◎第三章 容量分析法◎ビユーレツト◎ピペツト◎液量器◎測定液及定規液◎標本藥◎飽和法◎酸化法及還元法◎沈澱法●第四章 分離操作を要する定量●第五章 特別分析法 鑛物分析◎合金類分析法◎硝子分析法◎粘土◎灌漑用水◎肥料●附錄○第一表 原子量表○第二表 分析計算用因數表○第三表 種々、氣壓下に於ける水の沸騰點○第四表 種々の温度に於ける水の密度及容積○第五表 ビユーレト内液體容積改正表 試驗藥摘要

女(後付の八)

女學世界
第七卷第拾壹號
(明治四十年八月五日發行
毎月一回五日發行)
(明治卅三年十二月廿五日
第三種郵便物認可)



(定價金貳拾錢)